明治三十五年三月五日發行
毎月一回五日發行

女學世界

第二巻第三號

明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

口繪



女學世界第貳卷第參號目次

二八水

は肌を白く
きめをよく
つやをだし
◎にきび
◎あせも
◎肌のあれ
◎おしろい下に用ゐて尤もよし

又芳香馥郁として貴孃紳士の愛すべき佳品なり



花王石鹸

品質ノ善良ト衛生ニ經濟ヲ旨トシテ製煉シタル佳品ナリ

●賣捌所ハ全國到ル所ニアリ

登錄商標



本品縮圖

發賣本舖

東京馬喰町二丁目 長瀬富郎 （特電話浪花九二二）

關西代理店 （大坂安土町 電話東五一） 大崎組商會

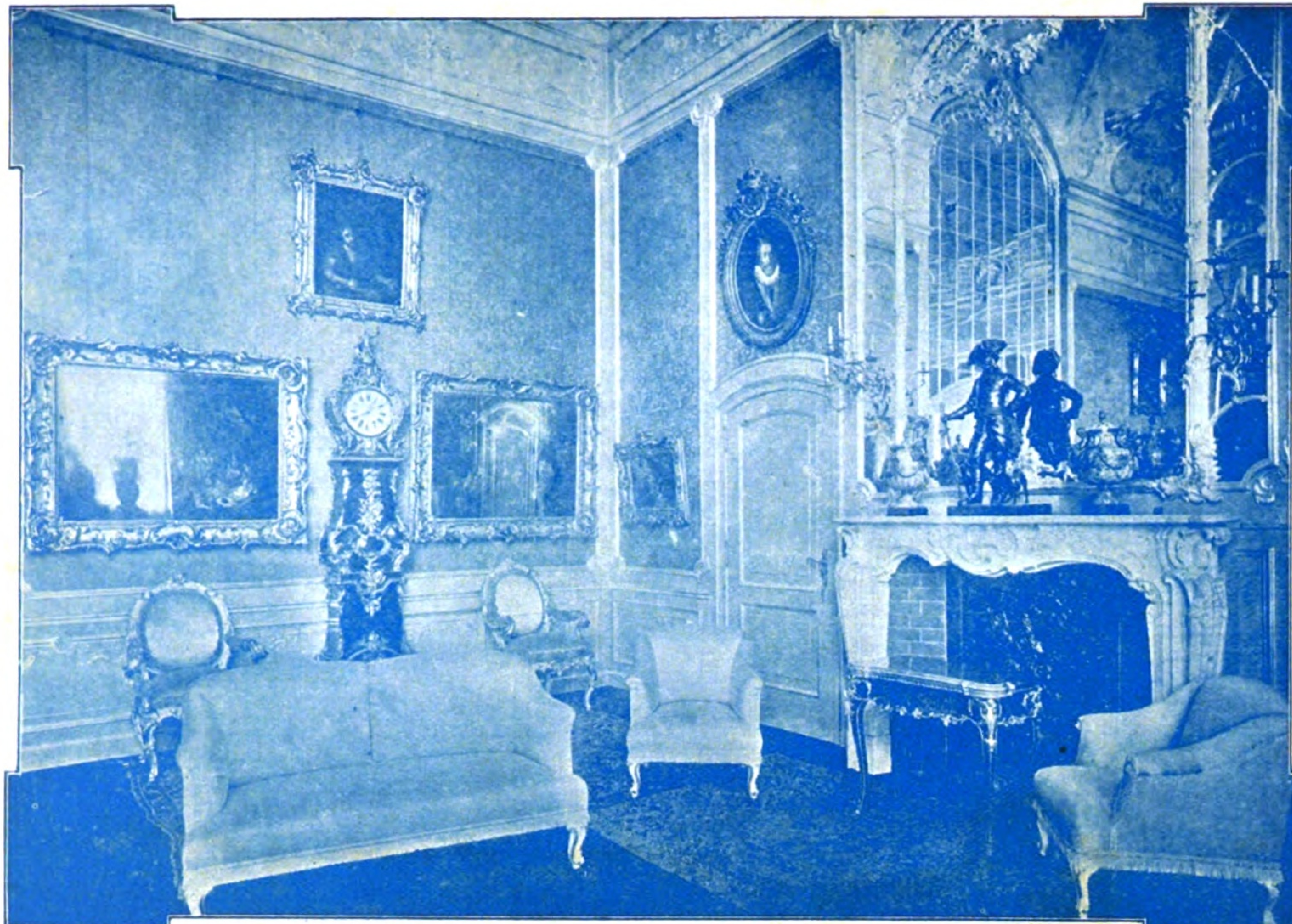
初節句



（武内桂舟君）

小川一眞製版印刷

泰西の室内装飾



獨逸貴族の應接間

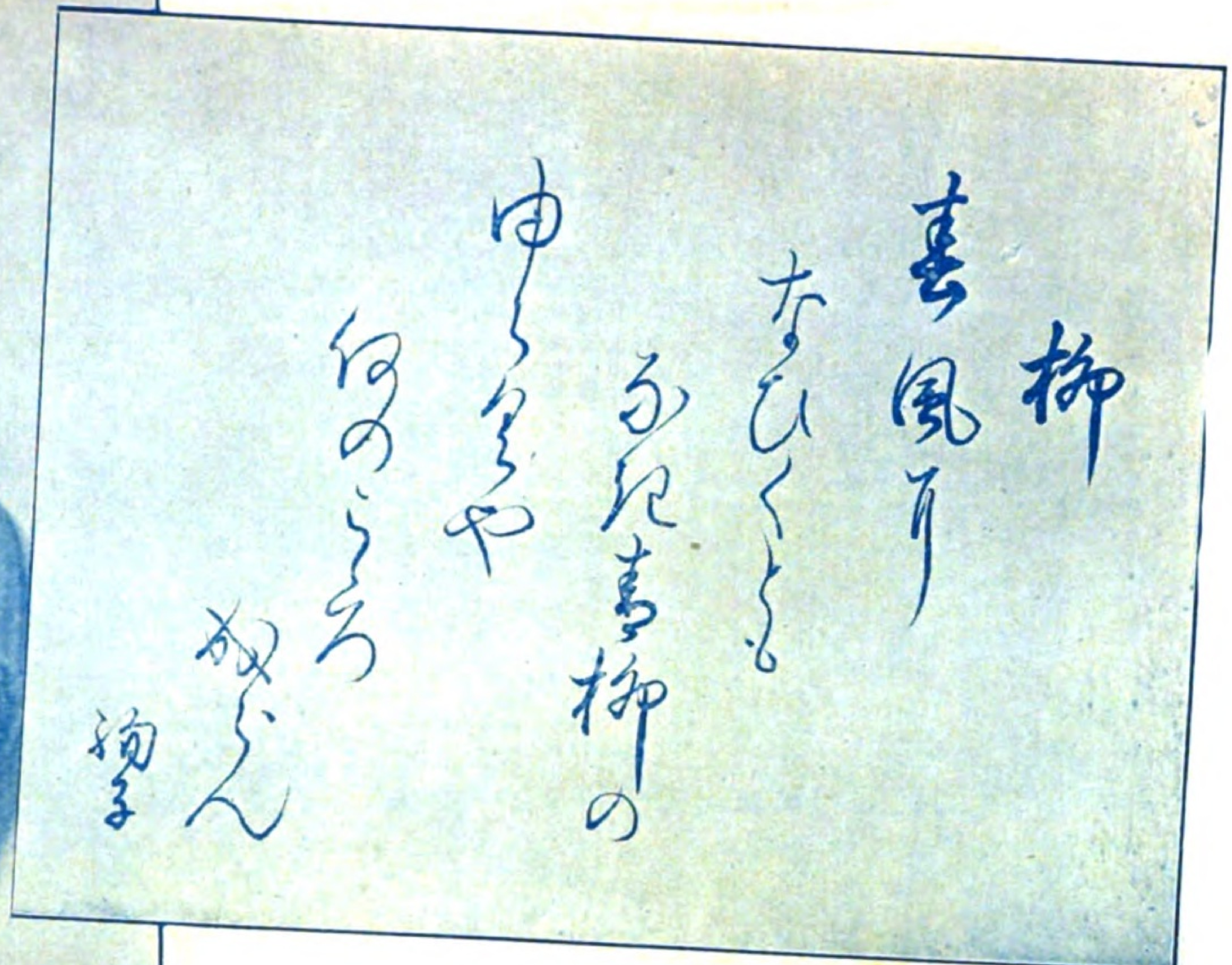


（久邇宮殿下の妹君）

子爵夫人織田純子



棚橋絢子刀自



(甲の二)

●會長伯爵澤宣量●學監三輪田眞佐子 棚橋絢子●賛助貴顯夫人 博士大家

女子學藝講習會

通信教授 會員募集

●本會は輕佻の風を戒め女子の淑徳を増し家政を理め家庭を齊ふべき貞節の德風を養成せんが爲めに日常必須の實用向の學科のみを選みて專門大家を講師と爲し最新の通信教授法により懇切平易に講述し僅少の學資と最短の期日とを以て修了せしむ

●**學科**及**講師**◀▶**修身**(諸大家)家庭訓話◀▶**禮法**女禮式(國分みさ子)西洋禮式(ミセスケジー)◀▶**家事**家政學(下田歌子)家庭衛生(藤井靜子)家計簿記(下田歌子)日用法律心得(磯部武者五郎)◀▶**割烹**日本料理(赤堀峯吉)西洋料理(山崎武八郎)◀▶**技藝**裁縫(井上松野子)編物西村はや子)點茶(松浦伯爵)造花(太田富子)刺繡(長谷川岩吉加藤木の芽子)絵書(倉石袈裟吉上村百代子)圖案(岡田秋嶺)挿花(龜井まき子)遊戯(小野泉太郎)◀▶**學事**家庭算術(龜井まき子)女子用文(師岡すが子)作文法、和歌作法(戶川安宅)習字(小野鵞堂)◀▶科外講義雑錄其他種々

●▲講習期は一ヶ年にて全部卒業▲證書を授く▲質問に答へ文章和歌の添删に應ず▲講義錄毎月二回づゝ發行▲一冊紙數百二十頁▲入會金貳拾錢▲會費一ヶ月分參拾錢▲一ヶ年(全期)分參圓參拾錢▲三月より講習開始す▲講義錄第壹卷三月一日發行

●詳細の**規則**書は郵券貳錢にて進呈す

●東京神田區三崎町三丁目一番地 **女子學藝講習會**

紙面大改良

第貳卷 第參號 三月十日發兌

學生筆戰之友

秀才文壇

毎號名家肖像眞筆風景寫眞 口繪 數葉挿入

◎貳卷壹號より紙數增加 毎號普通文、漢詩、新体詩、和歌、俳句、を**募集**し當選者の肖像或は筆蹟を次號に紹介又**大家の名文數**篇を揭載す、一讀有益なるもの多し、第貳卷より年四回大懸賞募る ◎逐號材料益豐富

定價 數紙百頁 一册拾錢 ◎六册五十七錢前金 ◎十二册壹圓前金送料外 ◎郵税一册に壹錢 ◉郵券代用壹割增 ◎毎月壹回發行

東京小石川區指ヶ谷町百卅三

文光堂發行

賣捌 ◎東京神田表神保町東京堂 ◎大阪東區備後町盛々館外全國書店

紙數增加

公務員必讀書

京都市助役法學士 大槻龍治氏著 ◎京都市參事會藏版

伯林市行政ノ既往及現在 全一册

洋裝美製總クロース 菊版形用紙舶來上質 紙數二百餘頁 定價上製金一圓 同並製本金八十錢 郵税一册各金八錢 郵券代用一割增の事

◉寫眞銅版四拾八個 石版圖畫數葉挿入

本書は一昨明治卅三年佛國巴里市に開設せる萬國大博覽會及歐米市行政視察の任務を帶び渡航せられたる京都市助役法學士大槻龍治君歐洲中我が國の參考として最有益と認められたる伯林市に就き其經營に係る各種の事業は其根源に溯り其經過より現今の狀況を綿密に調査せられたるものにして我が國市町村將來の書策を資料として最も必要の報告書也依て今般京都市參事會の許可を得て是を印刷に附し汎く希望者に頒つ

發賣元 東京日本橋區本町 博文館

發兌元 京都市佛光寺通烏丸東へ入 東枝律書房

▲賣捌所は全國各書林にあり○賣捌なき地は本館へ御注文を乞ふ

(甲の六)

銀行事務員養成所

女子ニ實地應用ノ簿記計算事務ヲ敎授シ家計貯金銀行郵便爲替貯金女工積立金等ヲ取扱ハシムルハ適當シ國家經濟上今後最モ必用ナランホ所ハ四月一日ヨリ女子部ヲ設ケ三十名限養成ス志望ノ婦女來リ學バラレヨ

東京市神田區裏猿樂町四番地

私立 銀行事務員養成所

本館出版圖書總目錄は昨年十二月改訂せしものにして最近の出版書は總て揭載せられざるなし御入用の方は郵劵四錢御送附あれば御發送申上候

博文館小賣係

耳鼻咽喉科 診察每日 午前宅診 午後往診

東京京橋區木挽町二丁目十三番地

酒井好

生徒募集

科目、裁縫、刺繡、編物、修身、國語、作文、習字、算術、家政、

入學志望の者は本校に就て聞き合すべし

日本橋區蠣殼町三丁目十一番地商品取引所跡

私立 修齊女學校

博文館諸雜誌

廣告取次

東京神田千代田町 博報堂

東京銀座尾張町 弘報堂

東京日本橋區上槇町 萬年社

大阪東區北久太郎町 三星社

大阪東區備後町 盛文館

皇太子殿下每號 御上覽

總裁一條公爵 議長本多男爵

青少年議事錄 筆戰場

入會金十錢 會費一ヶ月九錢 半ヶ年五十錢 一ヶ年九十五錢

每月一回 十日發行

見本 郵劵十錢

作文和歌俳句漢詩等各課專門の師擔任す

本號には本會獨特の議院制方法詳細あり

本會の支會支部は全國到る處に設置あり

東京神田千代田町二 電話本局(一四四)

帝國少年議會

(甲の七)

（甲の八）

矢嶋楫子刀自



潮田千勢子女史





日本女子大學校



女子大學家政科寮生

帝國法衙

(東京名所)



(大審院、控訴院、地方裁判所)

露伴叢書

明治文壇の老雄幸田露伴先生其述作にかゝる小說を蒐集し精密に校訂を加へられて本館に附與せらる其小說の目次左の如し

全壹册洋裝
菊判形美本
紙數凡千頁
三月中出版

露伴叢書概目

- 二日物語(八回)
- 緣の絲(三回)
- ひげ男(廿回)
- 和合集(短編)
- 緣外編(三回)
- 醉鄉記(短編)
- 夢日記(短編)
- 封じ文(短編)
- 春の夜 秋の夜話(短編)
- あやしやな(十一回)

- 夜の雪(三回)
- 休暇傳(十回)
- 新博士(短編)
- 川舟(卅六回)
- 夢がたり(六回)
- 冷干氷(廿五回)
- 露團々(二十回)
- 自繩自縛(四十回)
- 艷魔傳(短編)
- 箱根草(短編)

- 僥倖(三回)
- 毒牛唇(短編)
- 迷霧(三回)
- 犬珍話(廿三回)
- 是は〳〵(三回)
- 新浦島(廿一回)
- 鐵三鍛(三回)
- 椀久物語(七回)
- 蹄鐵(七回)
- 銃獵孝行(九回)

此外新作漫筆小說雜話等あり尨然たる廣卷近來無比也

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

(乙の四)

三月一日發行



中學世界春期增刊　花香鳥韵

第五卷第三號
正價金二十錢
郵稅二錢

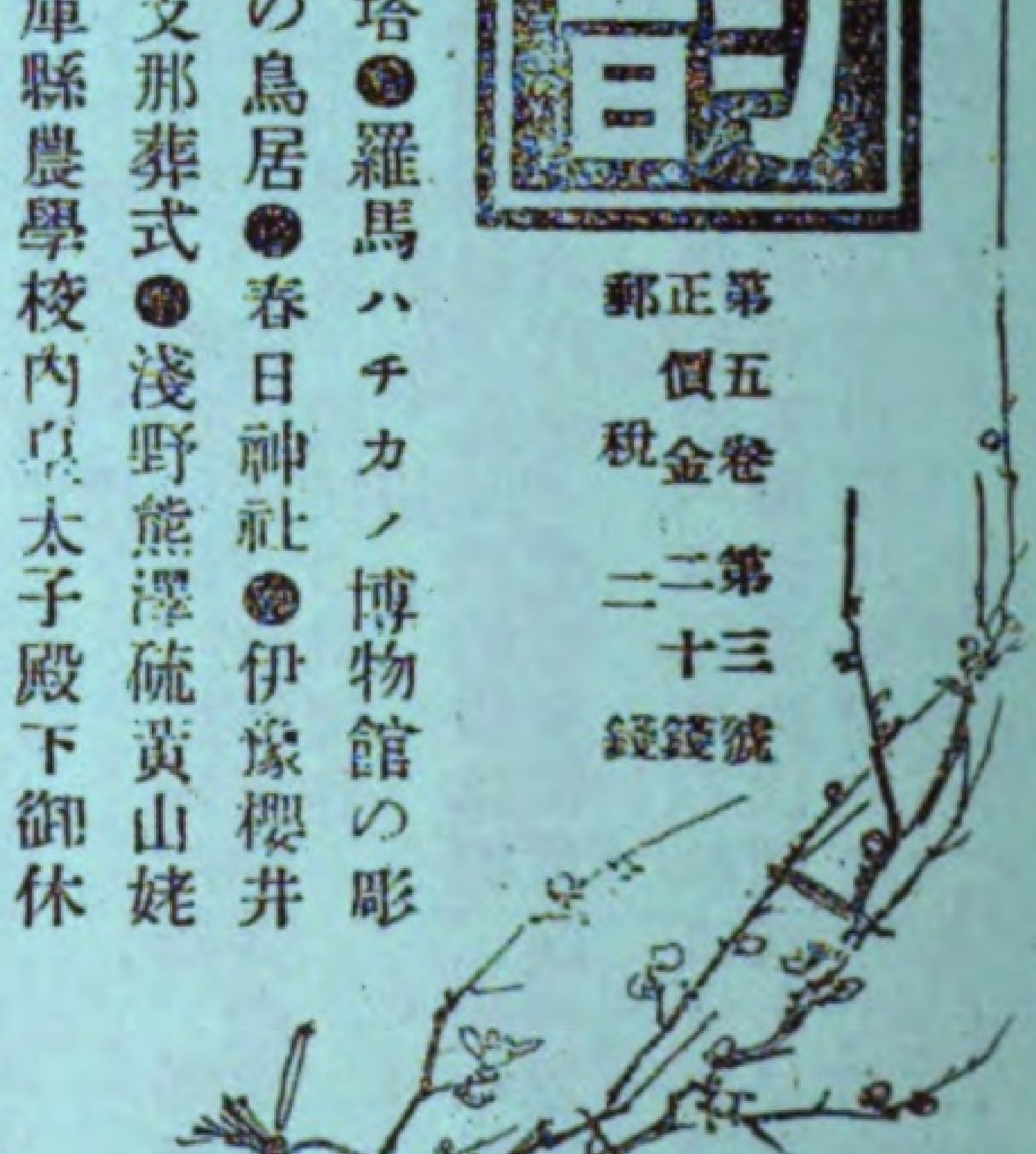
寫眞銅版

●滿洲哈爾濱マチゴ露國寺院●多武峰十三重塔●羅馬ハチカノ博物館の彫刻●米國シヤートル附近の森林●春日神社一の鳥居●春日神社●伊豫櫻井驛綱天滿宮本社●仝繪馬殿●山口鎮の一家●支那葬式●淺野熊澤硫黃山姥谷地鐵索停車場の景●仝製煉場●仝湯沼●兵庫縣農學校內皇太子殿下御休息所●淸國福建省派遣觀操武官勳二等孫覺仁●朝鮮の儒者●朝鮮の樂器

天下青年秀才の投書に係る小說、論文、叙事文、抒情文、書簡文、英文、新躰詩、漢詩、和歌、俳句の懸賞當選披露にして大町桂月中内二一、高橋捨太、江見水蔭、岸上操の諸氏の選評を經たるもの附錄として收むるものは左の二大文章なり

●關城の風雨……文學士　笹川種郞君

●靑年修養論……文學士　横山健堂君



發兌元　東京本町　博文館

(乙の五)

医学博士北里柴三郎君序
ドクドル佐伯理一郎君著

普通看病学

（総ふりがな附き）（挿圖百五十九個）（訂正第七版）

全一冊

◉正價金六十八錢　郵税金十錢

本書第七版に於てはビルロート氏最近の原著看病書に依り補訂する尠なからず加之新に繃帯、食物調理の二篇を設け簡潔の文字を以て其要を説き傳染病篇亦改訂を行ひ圖書を増す百有余紙數を増す百有余頁

下平文柳君纂著（總ふりがな附挿圖三十個）

私宅看病法

全一冊

◉正價金五十錢　郵税金六錢

是れ著者が見習ひ看護婦の爲に讀ましめんか爲に著せるものにして歐西の學理を本邦の實狀に應用し殊に私宅看病時に於ける特殊の注意を述ぶるや細を指し微を摘み字々句々皆可言可行ものゝみを羅列したり

下平文柳君纂述（總ふりがな附挿圖六十一個）

看病法修業用 人體之解剖及生理

（訂正第六版）

全一冊

◉正價金三十五錢　郵税金四錢

發行所　東京市本郷龍岡町　電話本局一六七二　吐鳳堂書店



禿頭病豫防の一具（特許出願中）

改良すき毛

半ダース金廿一錢
郵便切手代用にてもよろし

改良すき毛の長所

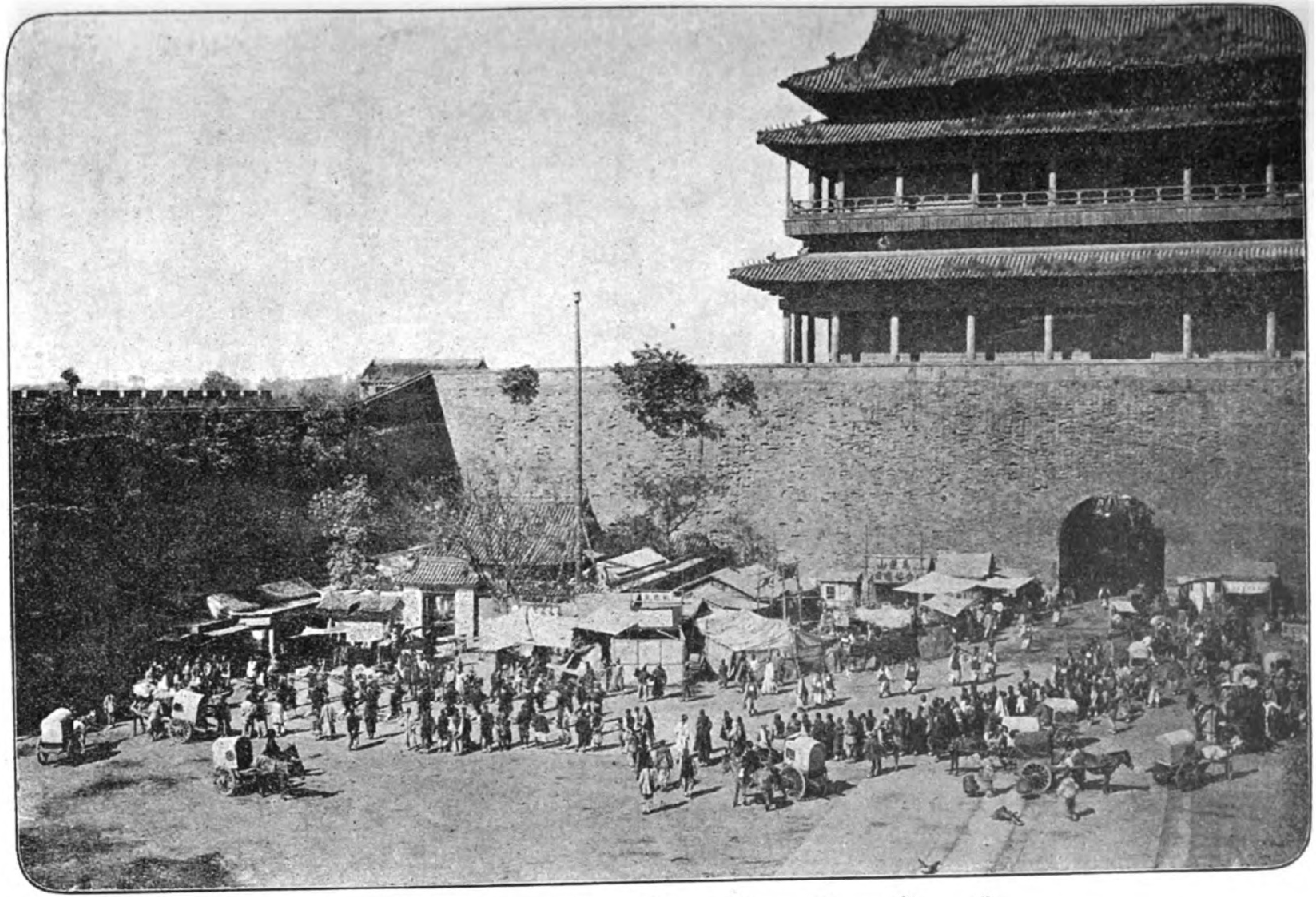
是迄のすき毛の體裁あしく且不潔にして毛髪の衛生に害あるとをなけきて新に發明したるものにして第一清潔の良き毛をえり揃えたると第二あつき曹達水につけて洗ふ時は幾度も使用し得且消毒に適ふと第三深く櫛の歯に雑入し垢膩及雲脂のよくとるゝと第四體裁の宜しきと等にして貴夫人淑女方の鏡臺に女髪結方の荷物中に加へらるゝも實に申分なき珍品なれば衛生を重んせらるゝ婦人諸君は是非共使用を希ふ

●到る處の小間物店にて一つ賣をします

◉本舗　東京市神田區豊島町拾五番地　諸かもじ製造業　田中金三郎

特約店　東京日本橋區横山町一　天野源七

北京の風物



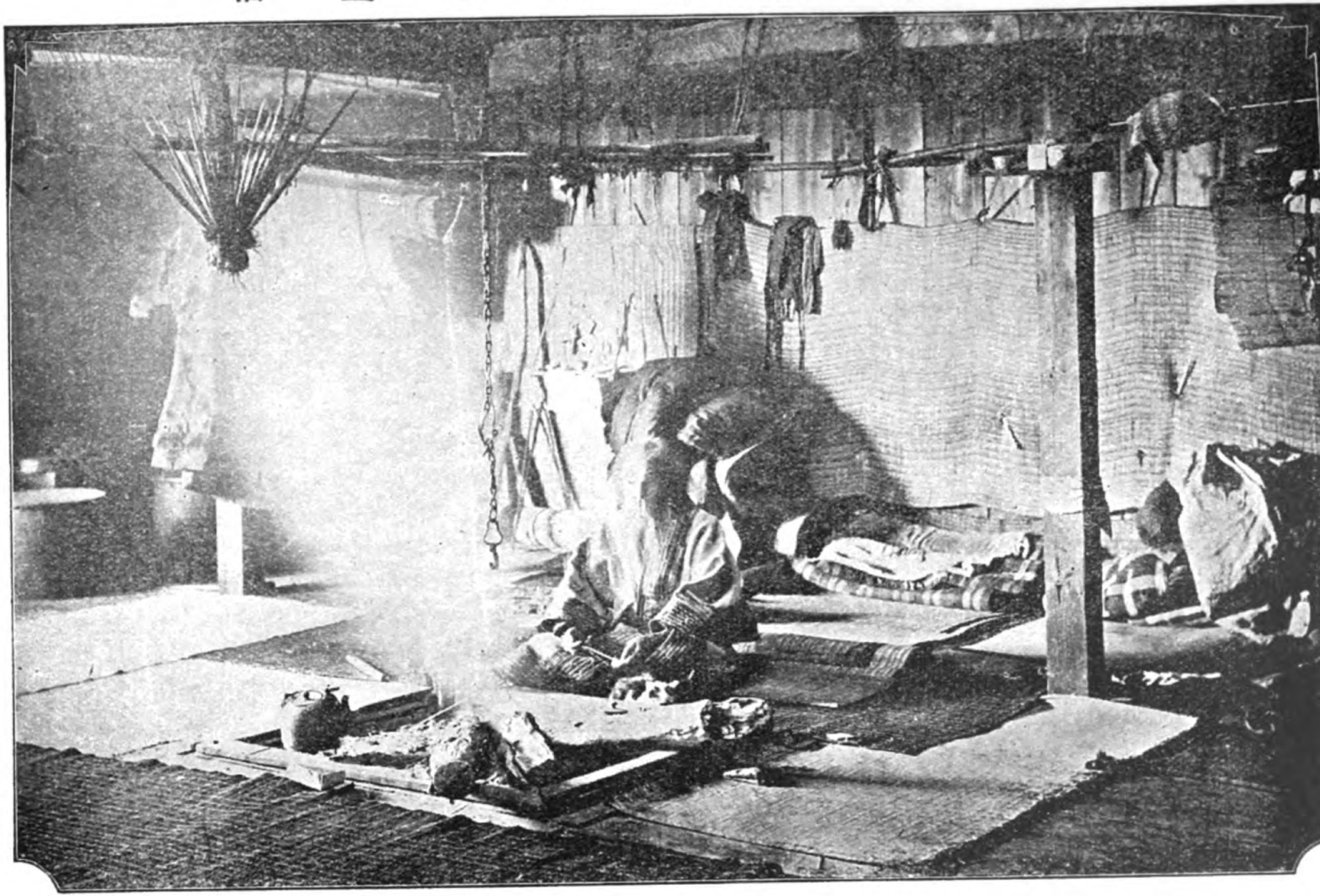
北京正陽門外の市場

山陽の名邑



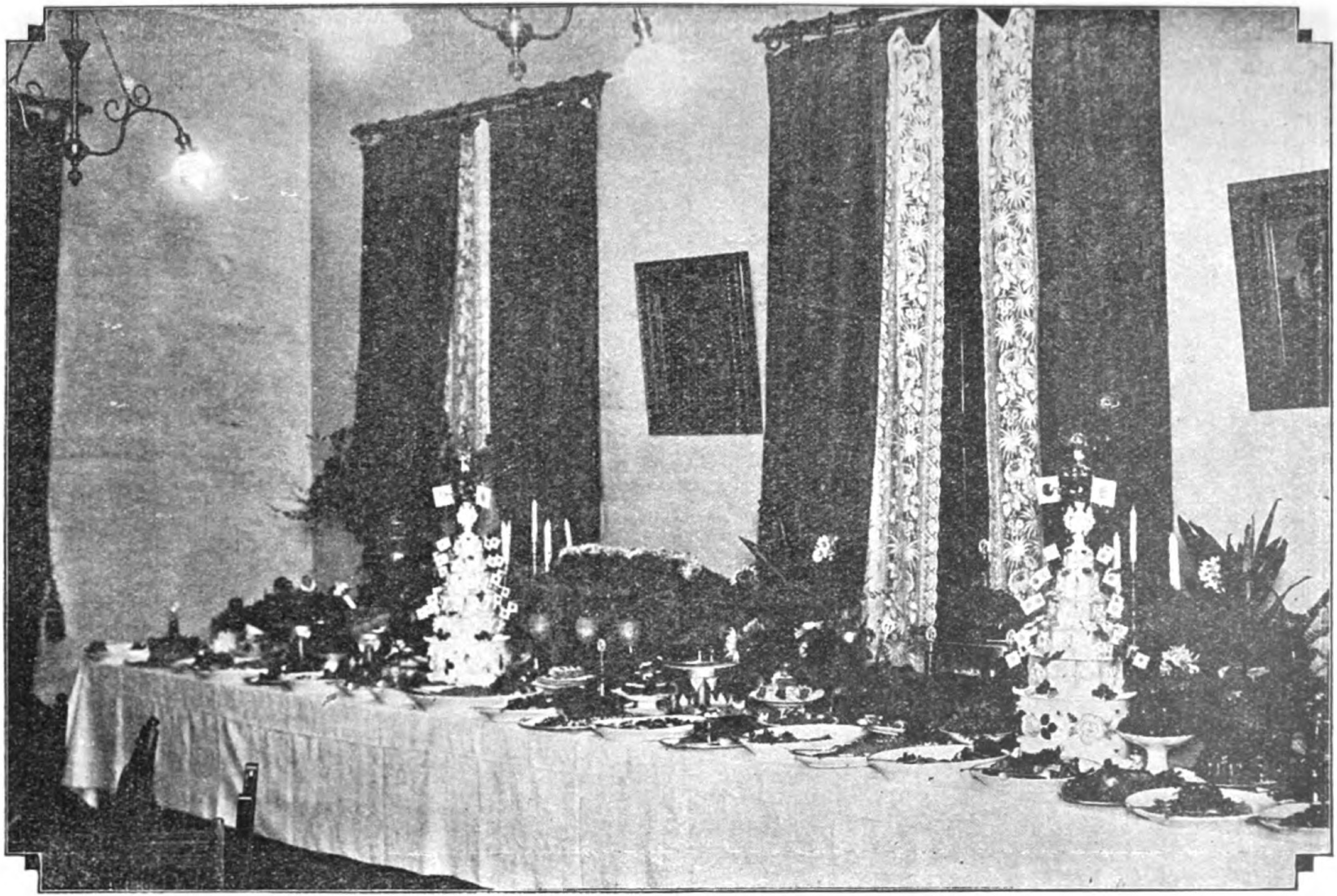
備後尾道市街の全景

北海道土人の生活



（石狩土人の冬営）

（雑報参照）



立食場の設備

東京帝國大學醫科大學教授醫學博士片山國嘉先生校閲
東京帝國大學醫科大學助手　門脇眞枝先生著

精神病看護學

（新刊）

全壹冊洋裝上製
總クロース背皮
金文字入美本紙
數二百五十餘頁
正價金五十錢
郵稅八錢

近時我邦看護學書の出版さるゝもの多し獨り精神病看護學に至りては未だ曾て有らざる處なり其之れあるは本書を以て嚆矢とす本書は多年東京帝國醫科大學精神病學教室及東京府巣鴨病院に於て硏究治療に從事し且つ醫科大學高等看護法講習科講師たりし門脇先生の手に成りしものにして彼の乾燥無味なる一班醫書とは大に趣きを異にし流暢なる國文を以て記されたれば讀み易く解し易く之を教科書として參考書としても從來其比を見ず今や監護法新に實施され精神病院各處に起る本書の貢献蓋し少からざるべし大方醫家衛生家看護人諸君は是非一本を購はれたし

醫學士石原弘君著　●醫學新書 藥物學　正價金二圓　小包送八百匁

醫學士三島通良君著　●學校衛生學　正價金七拾五錢　郵稅金拾錢

藥學得業士金澤巖君著　●通俗治療救急法　正價金三拾錢　郵稅金四錢

醫學士高橋金一郎君著　●通俗看病法　正價金拾五錢　郵稅金四錢

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（丙の三）

（丙の四）

少年工藝文庫

每月一回發行每編寫眞
西洋木版數十面挿入

石井研堂君著

定價 一冊十五錢六冊前金八拾五錢十二冊前金一圓六十錢郵税一冊金四錢御注文着金次第送本す

第一編 鐵道の卷

此書は學理を骨とし實際を肉とする內外國の鐵道談にし記述の趣向は著者獨得の新機軸を出し挿畫は多く實地撮影の寫眞を應用したれば文明の智識を得んと欲する少年の讀まざるべからざる好本なり

全一冊洋裝菊判
定價金拾五錢
郵税金四錢

第二編 水道の卷

本書は都市膨脹の父母なる『水道』の河湖水又は雨水が人工にて水晶の淨水となるより文明的都市に噴上して衛生防火の二大効を致す迄の實際と學理を內外古今の例に照し數十の繪書を加へて解説せしものなれば請ふ一讀して現今の物理工業の大奇觀を窺ひ給へかし殊に四頁八圖の口繪は皆是れ臥遊娯神の好材料

全一冊洋裝菊判
定價金拾五錢
郵税金四錢

續刊目次

第三編 瓦斯の卷
第五編 電氣の卷
第七編 紡績の卷
第九編 滊船の卷
第十一編 銅山の卷

第四編 寫眞の卷
第六編 硝子の卷
第八編 活版の卷
第十編 製紙の卷
第十二編 電氣の卷

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（丙の五）

(丙の六)

業務擴張

弊堂義聖代の餘澤と四方各位の御眷顧に依り追年業務の隆昌と共に從來の店舖手狹に相成り業務上困難を極め差支へ不尠候に付今般隣家(左隣り)買入れ修繕を加へ小賣部を移し一層奮勵業務を擴張し書籍雜誌は何れの出版を問はず廣く取次地方各位の御便利を專一に價格は無比の低廉に發送は敏活迅速に取扱は誠實懇切に卸小賣とも勉強販賣仕候間多少に不拘續々御注文希上候

副白 地方同業者諸君にして御取引御望みの方は御申越次第諸雜誌原價表送附可仕候

弊堂本店博文館出版圖書雜誌は價格發送とも同館同樣特約御便宜を計り可申候

東京堂發賣 **書籍雜誌總目錄**

二月改正 御望みの方は郵券二錢御送附あれ呈送す

委託販賣部 (書籍雜誌を御發行の御方にして一手販賣方を弊堂へ御委托相成候へば諸事御便利に獨特の擴張法を以て賣捌方勉強可仕候間御委托相成候方は御發行前に御申込被下度懇篤に御相談可仕候)

諸雜誌大販賣

東京神田表神保町 **東京堂書店**

◉發電畧號 ○ト ◉電話(特)本局二百四十八番

商家之秘畧

高等商業學校卒業

濱田四郎君著

實用廣告法

南貨庫中に充つて顧客の來るを待つとも廣告を利用して商品と商號とを江湖人士に熟知せしむるにあらずんば華客自ら至るの理あらんや本書は著者獨得の卓見と豐富なる資料とにより骨子を歐米の廣告法に採り之を本邦の事實に徵し學理實際廿三章に詳說して其秘訣を明示し運用の術を論ず實に是れ商家の六韜三畧なり

全壹冊 正價 二十五錢 郵稅 四錢

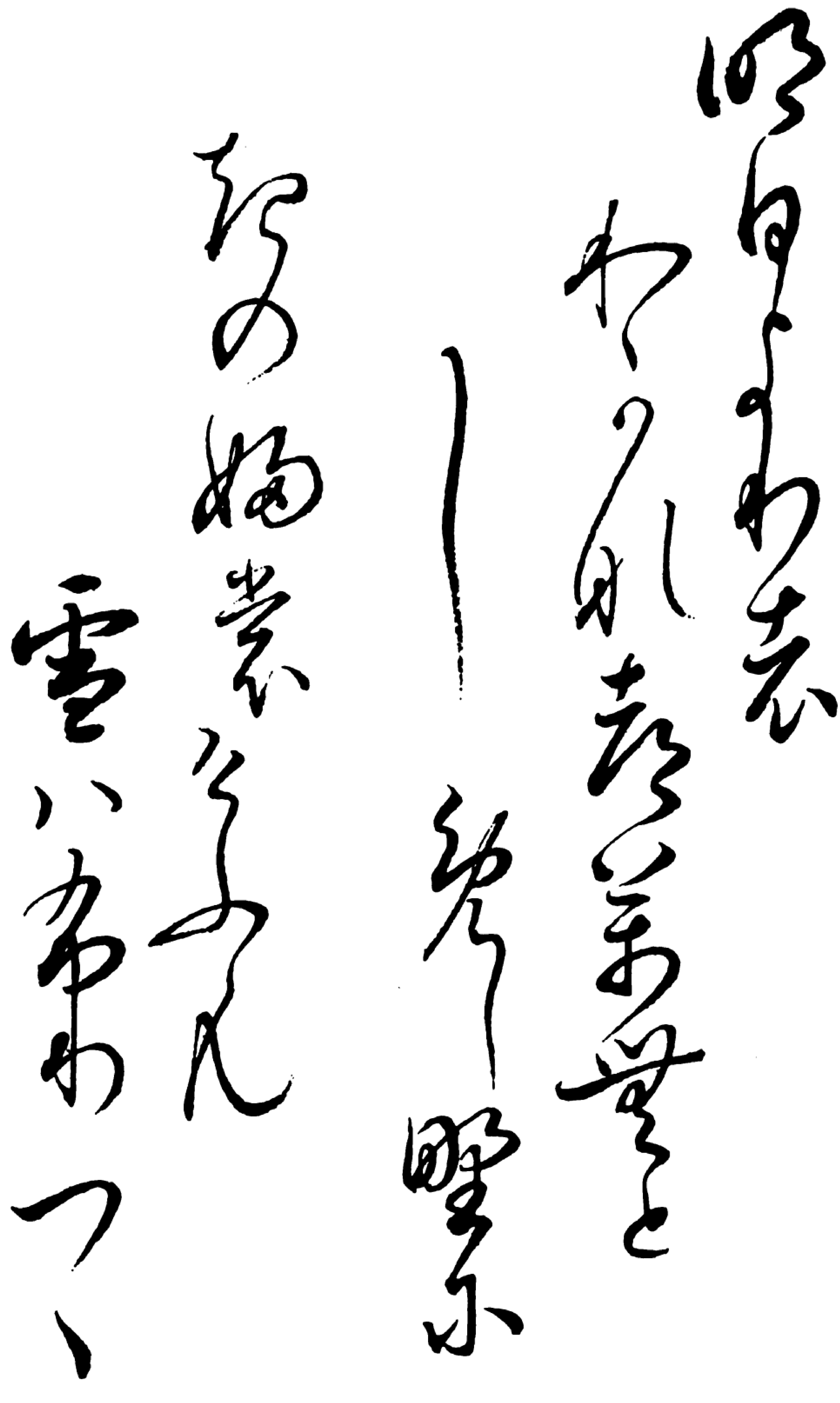
(丙の七)

多田親愛先生筆

久しく御無音にうちすぎさ
ぞあやしく存し
さはつを先そし御物来
の伊勢ものかたり拝借
いたしたく使をもてかくは

昔しかも君呂とい
けるのく渡しおもふれ
ある人あるまものゝ持
えしゆれあるな
る
し

坂正臣先生筆



坂正臣先生筆

わくも東の梅さくまつかと
[illegible]やはらちかなり
[illegible]
すめろきの御代さかえむとあつまなる陸奥
やまに[illegible]黄金花さく

溪澗春蘭



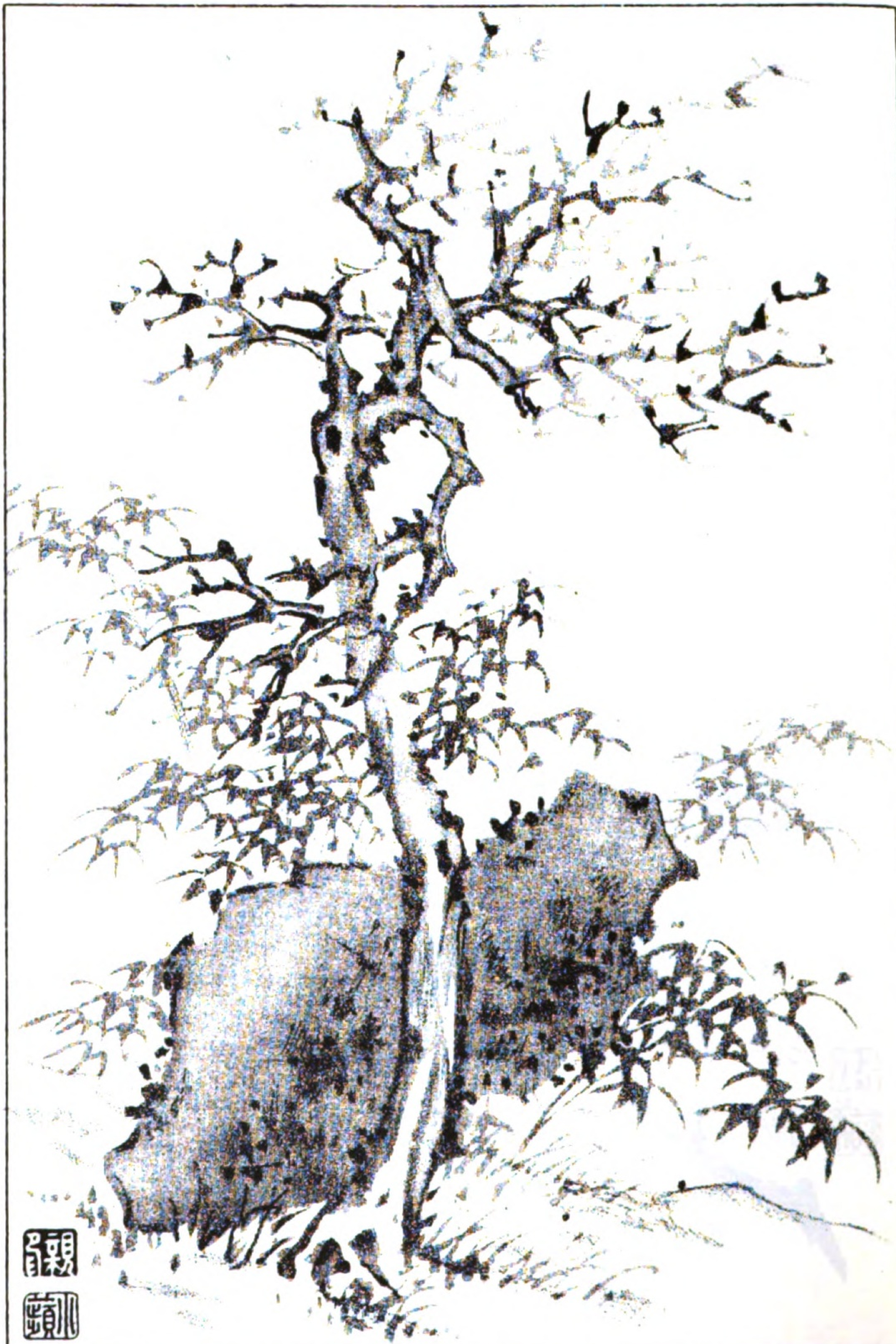
野口小蘋女史筆

桃　柳



野口小蘋女史筆

枯木竹石



野口小蘋女史筆

瑞香

野口小蘋女史筆



女學世界

明治三十五年三月五日發行

第貳巻 第參號

紀元二千五百六十二年 西暦一千九百〇二年（壬寅）

論説

女子の手に歸すべき職業

文學博士 上田萬年

女子教育盛に行はれて、女子の智識技能愈進み、女子の社會に於ける位置、漸次高まり行くと仝時に、在來男子の專有せる職業にして、女子の專有に歸すべきもの よし專有に歸せずとも、少くとも男女の共有となるべきもの、決して少しとせざるべし。假令は十九世紀の英國に於て、小説家にしてのヂョーヂエリヨットの如き、歌人としてのバレットブラウニングの如き、或は史學家としてのグリーン夫人の如き、理學者としてのソマヒル夫人の如き、直に男性の諸大家に比して毫も遜色なきが如し。之を明治年間に我邦の婦人社會に徵するに、故税所篤子女史の和歌に於ける、故樋口一葉女史の小説に於ける、或は幸田姉妹女史の音樂に於ける、能く有髯の男兒をして後に瞠若たらしむるの觀あり。畢竟するに、女子にして善き教育を受け、能く訓練せらる時は、決して男子に劣るものにあらざる事は、今や爭ひがたき事實となれり。これは單に以上の如き天才的女性の上にのみ止まらず、普通に教育を受けたる、普通の

女子が社會に立つ上に於ても、亦然らざるを得ざるなり。

予輩は茲に英國が郵便電信事務の上に於て、女子を以て男子にかへたる一實例を報告すべし。

英國の郵便電信局にては、二十四五年前より貯金事務、爲替事務、電信事務に女子を使用せり。而して千八百八十年に於て、貯金部には百二十人、爲替部には約五十人、電信部には千六百七十五人の女子あり。右の中、貯金部及爲替部に入らんとするものは、習字、假名遣、文法、作文、算術(分數迄)及び地理の競爭試驗に合格したるものにして、初めは二等技手として毎年四十ポンド(約四百圓)の俸給を得、漸次七ポンド半つゝの年額增加を經て、七十五ポンド(約七百五十圓)まで昇給す。而してもし上級者に缺員ある時は、一等技手に進むことを得て、年額八十ポンドより百ポンドまで昇級す。猶此中より拔擢せられて技手長となる場合には、年額百十ポンドより百五十ポンドまでの俸給を下賜せらるるなり。

次に電信部にて使用せらるゝ千六百七十五人の年少婦人の中、千八人は倫敦市に於て、三百六十人は英國及ウヰルスに於て、百六十一人は愛蘭に於て、百四十六人は蘇蘭に於て職務に從事し、其勤務時間は毎日八時間にして、其以上勤むる場合には特別增俸あり。右千六百七十五人中、千六百人は電信機械を取扱ふ所謂普通技手にして、此中監督者と見るべき技手は、年俸七十五ポンドより二百磅(約二千圓)までを得、其他は平均一週八シリング(約四圓)より、三十シリング(約十五圓)までの間を得るなり。此外殘りたる七十五人は、倫敦市、エヂンベラ市、及ダブリン市にて、電信爲替事務に從事し、年俸三十ポンドより、百五十ポンドまでを支給せらるゝなり。

此電信部になる女子は、右の如く多數なれども、一般に

好成績にして、健康にも左したる害なく、一年間には二週乃至三週間の臨時休暇を與へ、特に倫敦市の局にては道徳上の監督を嚴にし、監督者を置き、運動場、讀書室等をも設け、又別に食堂をも廳内に置きたり。

右の女子は大約十四歳より十八歳までのものにして、豫備試験に合格し、躰格檢査に及第し、然る後電信學校に入り、其技術を傳習するものなり。其期間は凡三ヶ月にして、一ヶ月の授業後、或は其後と雖も、電信技手の資格なきことと認定せらるゝ場合には、除名せらるゝを例とす。たゞし此授業期間は別段の給與もなきかはり、授業料をも納めざるなり。

以上は予輩が英國に於ける一好例として聞き知る處、しかも移して以て我國に用ふべしと信ずる所のものなり。現に日本橋郵便局には女子を使用せり、日本銀行にても女子を使用せり、印刷局には猶一層前より女子を使用せり、比較的後に設けられたる電話交換局にても女子を使用せり、貯金事務に於て、電信事務に於て、普通郵便事務に於て、女子を使用しあたはざる理由何處にありや。勿論予輩と雖も、女子は初より此等事業に慣熟し、堪能なるものとはいはず、これを教育し訓練するにあらざる以上は、好結果の期しがたき事、固より喋々を要せざるなり。

Laborare est orare ＝勞働は祈禱なり、かせげよや、かせげよや、眞正なる勞働には、健康やどり幸福やどる。婦人三從の時代は既に業に去りぬ。勉めよや、學べよや、かせげよや、而して自ら治めよや。女子は男子に頼らずとも、其幸福を享有し得べきなり。

（完）

學校教育の習弊

靜女塾長　平尾光子

女子教育が盛んになりましたと同時は大に注意をせね

ばならぬ事がいろ／＼ありますが、私共の考へまするのに、今日のやうな普通一般の學科的敎育ではとても完全な女子を造る事は出來ますまい、主婦として一家を修める事は覺束なからうとおもひます。今日の學科敎育が實際の役に立たぬ次第は毎度申して置きましたが、一例を擧げていへば學問上の敎育こそはないが昔時の御殿女中など立居振舞の敏捷さ、或は氣象のしつかりした所ろなど迚も今日の女學生あがりなどの及ぶ所ではありません。

今日の女學生のやうな心の空つぽな者に學科上の智識ばかりを詰め込んでも仕方がありません、それよりは寧ろ學科を少くして其の代り德望のある人物を聘して其の感化を受けさせるのが第一肝要であらうとおもひます。女が嫁入てからは將來何でもやらねばなりません、それ故今日の學科は無論やらねばならない、けれども、唯學科ばかり無意味に詰込んだからといつて、それが實際の役に立つものではありせん。時代の異つた姑に處するの法。嫁入つては良人の家、其の家には昔しから有來りの家風といふものがある其の家風に應じて處して行くの法、こんな事は迚も今日の學科敎育で學ぶ事は出來ません。まづ今日の娘の地位はどうであるか。學校では頻りに學問／＼といふて文明流の敎育をやる、家に歸へると德川時代の母親が居て、舊時代を仕込ふとする。それから嫁ッて行けば其の良人は矢張り今日の人で文明流に進まねばならない。其の姑はどういふ人かといふのにそれが又德川時代の保守主義と來てゐる其の中間に立つ嫁であるから、家に處するのがなか／＼困難であります。それで此の節折り／＼耳にするのは姑の小言で「私共の嫁は學問はあるさうですが、家の事にかけては一向埒があきません。御膳がろくに焚けない。洗濯が一つ出來ない。拭き掃除をさせても肝要な塵芥が逃げない。あれてはどうも仕様が、

ありません』。とそれは成程そうかも知れません。今日の女學生上りは理想とか何とか兎角高尚な事ばかり中しましても實際の役には立ません第一今日の女學生はヒヽや霜焼の苦しみといふものを知らない。母親が湯巻の洗濯までして學校にやッて卒業させたやうなのが多い。成程學校にやる主意は至つてよろしいが、唯學校にやつたばかりでそれで母親の義務が濟む譯のものてない。であるから今日の姑に言はすれば、女學生上りを嫁に貰ふよりも、いつそ田舍の無學な娘を貰つた方が一家團欒が出來得ると言ふやうな譯であります、

斯樣な次第でありますから、今日の學校のやうに唯空學問空智識をのみ敎へた處が一向に駄目です　それよりは十分經驗のある且つ實踐道德に富んだ婦人の敎育家を聘して、家事向の事を實際的に敎へて行きましたらば生徒は自然に其の薫陶を受けませう其の方が遙かに効力があらうとおもひます。一躰どんな發明な女でも男子の心を汲取るといふ事は出來ない。それと同じく又男子が如何なる博識なお方でも女子の心を汲み取る事はどうしても出來ない、それ故文部省あたりでも十分其邊にお目を注けられまして今の敎育の仕方に就て篤と御勘考ありたいものとおもひます。

それから私の兼ての持論を申しますると年頃の女子になれば、斷然試驗を廢するのがよろしい。何故かなれば、成程試驗を行へば一方では勵みになりませうが、一方では嫉妬心を起す、試驗をしたからそれて學力が定まつたと思ふのは大違ひ、決してそんな事で生涯の利方になるものではない。それよりは一層生徒が日々の成績を調べて置いてそれに依つて進級をさせて行つた方が十分効能があらう。併しこれは多少敎師の方で手數かも知れませんが、苟くも敎育家として生徒に臨む以上はそれ位の心掛がなくてはなりません。そうす

れば自然と實際上の薫陶を受ける譯になります。古今の英雄豪傑と言はれた人達が多くの門人を率ゐられたのは皆薫陶の力であります、決して試驗だの何だのとそんな器械的な事でやつたのではありません。生徒の性質。心狀の高下を教師先生の腹の中にちやんと附け留めて置いたものであります。一體教育といふものは其人の性質に從つて教育して行かねばならぬものである。古語に『率レ性之謂レ道』とあります。是の言葉は實に教育の本尊である。其譯を申すと孔子が多勢の弟子を教へましたのに其の性質によツて孝の道の說き方が銘々に異つてゐました、是れは生徒の足らぬ所ろ、拔けてゐる處ろを先生が一々補ふて行く、それであるから生徒が皆人物になりました、教育の眼目は必竟茲にあるのです、然るに今日の學校先生と生徒との間はどうであるか、双方の間にむかしの師弟の親密といふものがない。それゆゑ、眞との親切な女も出來ねば役に立つ母親も出來ないのは尤な次第である。それをやらうとすればどうしても學科を少くして德望のある先生に薫陶して貰ひたい、そうして其の教師を父の如く姉の如くに生徒が仰くやうでなければ完全な女は出來ません。それでその教師は文部省あたりで責任を以て造り出して貰ひたい。、けれども今日のやうな教育の組織ては容易にそんな人が出ますまいから、今の組織を改めて將來立派な教師が出て來るやうにしたいものです。併し唯今の所ではこの責任を(即ち家事教育の責任)を母親に讓ツてをります。けれども母親が悉くこれを擔任して行かるゝものかどうかは考へ物であります。それには時勢の變遷といふ事があツて舊時代の母親に任せられない塲合がある。それ故學校の方で十分教師たるべき人に考へて貰はねばなりません。

家庭

理想と實際

(高尙なる心、鄙近なる手)

成女學校講師　嘉悅孝子

「博く愛する之を仁といひ、行ふて之を宜しくする之を義といひ、之に由て之く之を道といひ、已に足りて外に待つなき之を德といふ」と、古への聖人はこれを人の守るべきもの丶專一として說て居られましたが、ことに之は家政をとる上に於て大に服すべき言で、家庭は信實也、又愛也、慰藉也、興奮劑也(前々號大町學士の)などのお望みの係るのも茲にあるので、此心たにありたらんには、前の愛なり、慰藉なりの御希望も慥かに滿足させる事が出來、且つ女そのものも如何に心安らかに長閑に世を送る事が出來るだろうと思ひます、一家を樂しくせんには博く愛する仁こそ第一に必要なので義ありて內に怨むものなく、道ありて擧家其職を樂しみ、安樂利益生命の關門などに臨みても踏み迷ふなどの事もなく、一家を融和し氣品を高うするは德ならでは成りかたく、之を修めて茲に初て完全なる家庭の形が出來ませう。



▲當時世は道義のなきを慨き、家は德高き賢き夫人を俟つ事が久しいのです、ところが道義なきの果は如何です、昨年のごとき、全國に於ける離婚の數は十萬にのぼつたと云ふてはありませんか、聞くに耳蔽はるゝ事で、これはつまり男子は妻を娶るに最初より、おのれの玩具か何かの積りで盛り短かき花よりも果なき容色只夫のみを愛でゝ、之を迎へ、僅かに高等女學校卒業

位の肩書を以て滿足して居ました處がこんな人に限り皆そうではありませんが、多くは書籍の上ばかりで學びたる家政學によりて蛋白質の有無多少に喋々するも其如何にして家人の嗜好を滿たし、榮養に適せしむるかの手段を知らず、胸に畫がける理想の家庭は新婚旅行の滊車の內に、さなくば衣服の競進會におくれをとらぬやうにとか云ふ位が其經綸で、學文と臺所は共に立つべからざるものとし、いやしくも文明の教育を受けたる我等は庖厨などの卑しき業を何とてなすべき、そのために下婢あり、我は我が文學を以て良人を助けん、などいふやうな有樣、男子またかゝる夫人を得て一時に得々だる樣子であつたのだが遂には實際がゆるさないので、かやうな不面目な離婚の多き現象が形はれ來つたのです。七日を俟たぬ花なる容色が、どうして永久の愛を保ちませうぞ、しかし美は吾も人も共に喜ぶ所ですから、出來得る限りは美はしくしたいのです只其美をして表面のみに止らず、內之に協はせたいのです、內之に協はせんには、教育程度に大に高きを加ふると共にますく卑近なるながし下の清潔法に至るまでの研究をしたいのです。

▲偖て女子に高等教育を授くるの可否は世間或は非難する人もありませうが、是は事實を見れば議論に及びますまい。彼の女子の高等教育を受くる事を許されなかつた獨逸婦人の有樣が、在來の東洋婦人に大に似たる處がありますまいか、之に反して、男子と均しき程度迄學ぶ事の自由を得たる英國婦人はどうてす。地位は高くはありませんが、また其結果一け割合に自國の膨脹を見ざるも他は日と共に版圖の擴まるてはありませんか。是を見ましたら誰か高等教育を非としませう、ことに德の光は磨くによりてますく發輝するを見ましたら、古語に謂ひます『富は家を潤し德は躰を潤し心廣く體胖なり』と。

尚且つ焦眉の急務として私どもの思ふのは女子の氣品を高める事を務めたいので、氣品の學がらぬはつまり仁なく德なきからで、これは一家の主婦と共に、德を養ふべき學校に於て所謂教鞭を執る吾々女教師に於て大

に覺悟せねばならぬ處であらうと思ふのです。我等未來の相續者なる彼等少女の曇りなき胸の鏡に正しく寫りて深く刻まれ永くその手本となるものは、實に母親と共に教育者其人ですから母親及教育者の氣品の高下が延て社會に及ぼす事は少々ではありません。さるを若しも母親にして之を念はず、教育者にして玆に意を注めず、教育を以て已が世渡り口すぎの爲のものとし、俸給のために教員商買をなすといふが如き考がありもせんには、何として氣品ある人が出來ませうぞ。半錢たりとも利のためには路行く人も獲んと猛る事虎の如き世であるとも、未來の英才賢母を養ふ、母親たり、教育者たる人だけは、浮世の塵を高く離れて廣く道を探り、孔子迄には行かなくも、孟子たり、ソクラテスたる心を以て行きたいものと思ふのです。それに母親たり教育者たる人にして此觀念に缺くる時は、引て及ぼす家庭に於て、清き樂しきまとひはとても



出來ますまい。

▲私は私の知れる一小女の一日其母親にむかつてつぶやくのを聞きましたに、「母様某先生によくお目にかゝります、あの先生はいやですね、いつでも穢いねんねこで赤ちゃんおぶつてお守して」といつて居ました。すべて普通の人情として、榮利を厭ふ者はなく、幸福を望まぬ者はありますまい、働くも勉むるも其最終の目的は幸福を得んとの望に外ありません。ことに子供心の如き、名高き人を聞きては、おのれも之に倣ひすぐれ人と云ふ榮を得ん事をのぞんで勉め、德ある人を衆の敬ふを見ては、身も之を願ひて業を勵むものですに、其師と尊ぶ人にして前の小女のいへるやうな氣品なき卑しき様子を爲て居ましたら、必らず物學ぶ心などは消え去りませう。とはいへ人各幸あり不幸ありてすから惡い運命のめぐり合せて、いかに身は教師の氣品を保たんと願ふも炊事の業

をなさゞるを得ない時節もありませう。豆腐屋に走るの止を得ない場合もありませう。子供の守もせねばならぬ事あるでせう。炊事決してはるいでなく、是非我が手を下してやりたい事です。殊に子守は最も大切で子供の揺床を動かせし彼女の手世界を動かせしといふナポレオンの故事もあるやうに、子守實に結構です。又貧の苦しみは貧其者よりは却て高慢なる心と空虚なる財布との間の煩悶で、その貧を蔽はんとするにある事も私はよく知るので、それを強て富裕なる装ひせよと云ふではなく、只其貧に處しても氣品を失はぬやうにしたいと云ふので、蓮の清廉を稱へられ、牡丹の百花の王と崇めらるゝも、皆其氣品の凛たる處にあるのだと思はれますから、前の某先生の如きも、ことさらにねんねこを着て路頭に遊ぶといふが如き卑しき風を眞似ないでも、高尚な遊びを室内になすとも、又は庭園に於てするとも、庭園なく戸外の運動を要するならば暖かなる日を撰びて伴ひ出るといふやうにしたら、かやうな評も受けますまい。

▲又これは或る處の夫人から、かふいふ事を聞きました。『あまり女中と一處に働くものだから、よく女中と間違へられて』と。これまた實に其己に氣品のなき事をあらはす言て、一家の主婦ともいはるべき身が如何に麁服を纒へばとて、我が召使ふ下女と同一視せらるゝやうの事があるべきものでなく、若しありとせば、これは全く其身に氣品のあがらざる故です。人の品格は一見忽ち眉目の間に見とめらるゝものと信じますに、下女と間違へらるゝなどゝは、實に不面目も極りたる事で、身に德なく識なきの誠に生きたる證據です。然し見渡す處、これはまた世の中に隨分ある事で、髪を束ねるに、兵庫とか櫛卷とかいふやうな、いきなる野鄙なるものにし、或は衣服などを子供のために汚されて、さながら漆にても塗りたらんもののやうなるも、なほ洗ふ事をしないで、夫は雨雪を冒かして其日の勤めに出たる跡妻は炬燵に小說本を見てくらすといふ風で、まるで世の中に遊びに出たやうな心得、夫の厄介者たるをわれから甘んじて居るやうな樣子の人を往々見受ける

のです、これでは如何に考ふるも氣品の高まる道理がないのです。

そこで私は思ふのです、德あり識ある高貴の令夫人がたをして家政の餘暇の僅かの時間を割きて、各學校の敎師となり、生徒をして尙き氣品高き德に濡ひ化せしめ、やがてはその幸なる家庭の樣をも見せしめて、來たらん世に幸ある樂しき家庭を作る實材に培ひおかるゝ事を願つたら、女子の進歩も著しく、交際の上に於ける社會もいよ〳〵、氣高く淸く愉快となり、淸き高き交際術の進めるを誇る泰西婦人を後に瞠若たらしめて、玆に世界に活動するに至らば、如何に樂しき事であろうかと思ひます。

かやうに世のすべてが氣品を想ひ德に就き、おのれをおのれて制裁するやうになりましたら、小女に眉をひそめらるゝやうな事も起らず、下女と間違へらるゝなどは素より炬燵で小說などの暇はなか〳〵ないやうになり、そんな時間が若しあつたら思想を海外までも廣める爲の研究でもするやうになり、一家の整理など勞せずして其功を奏し夫人の地位は着々進むを信じます

（完）



家庭實務

▲嬰兒の傳母

黃菜女史

完全なる此の道の敎育を受けたる傳母をして嬰兒を守らしむるを得ば更らに異論はなし、上流の社會は云はじ中等以下に在りては未だ我國にて適當なる者なくて殆んど嬰兒の委棄せられたるは慨かはしき事なり假令其程の素養はなくとも兎も角くも其母親をして之を守らしむるは誤ち少なかるべし、子の可愛さに水も漏さぬ親の撫育は嬰兒をして危險に陷らしむると少なければなり。されど子供の次第に多く、家庭

の事務の繁くして舅姑にさへ奉ずる身なりせば、やがて一人の嬰兒にのみ周旋し得可きに非ず。必ずや之れを托すべき他人の力を藉らざる可らず。然るに世の多くは此の委托者の重任を無視して間に合せの守子を用ゐるの傾きあり。彼等の中には己の世話だに届かぬがちの年少者もあれば、老過ぎて足腰不自由の廢者もあり、甚しきは幼主の親の前のみ粧ふ酷薄なる者ありて、傅母と言はんよりは狂犬に偏するに至るは必ずしも勵言には非ざるべし。彼等は已に可き人質を取たり烟たき主人の前にあらんよりは成るべく自由の利く處を希ひ、常に子守に托して戸外に出づるなり。主家を出てたる後の事は多く言ふまでもなし、嬰兒が種々の病を獲、種々の風習に感じ間々生れも付かぬ不具者となるとあるは甚だ珍らしき事にはあらず、親たる人が折角良き子を産みて人よりも健康に人よりも佳良に其成い立を祈りたる願ひ今は詮なし、故に若し傅母を撰ぶ時來らば才走つたる者よりは、寧ろ柔順に若きものよりは寧ろ老たるを用ゐる可し恐くは其の過も尠しと知るべし。

▲小供の獨遊び

稍や長して未だ幼稚園に行くには早く、さりとて獨り遊びの出來得るやうになりし時は亦一層の注意を要すべきなり。何れの社會にも悪しき仲間はあり、子供一度門を出れば夫婦喧嘩に習れたる子供人の物を掠めたる親の子、あらゆる厭はしき友達は其所に群集せり、蜜の如き家庭に桐の芽の如く直に育ちつゝある兒童も、此等に觸着すれば知覺過敏にして有りのまゝを映せる子供は黴菌の如き仲間の悪風を受け驚くべき速力を以て感染するなり。彼等は何時しか砂埃の間に坐して砂糖賣る所爲を爲し、おでん屋飴屋の屋臺を圍みて立ち手を差し伸へて立食を爲し、悪口を覺へ厭いしき所作をも爲すに至る。三ッ子の心百までやがて成長せし時の大なる傷ともなりぬべし又門に來る雜多の物賣りより物買ふて小供に取らせる習慣を着るは苦々し、一度び子供の前にて此を行へば物賣の來る度毎に必ず買

與へらるゝ者と心得て日課の如く務めるなり。遇々叱嘖することあるも未だ是非の辨なき小供は叱嘖の効なくして徒らに性質を捻じけたるものとならしむ。それも可し何者とも知れぬが怪しき息入れて拵らへたる飴細工若しくは鉋屑にて製し口付けて吹きつゝ賣る喇叭の如き其の唾、其籠れる息、よし恐るべき黴菌の含まれずとするも其穢らはしきおもひ知るべし。

▲裁縫十二戒

(一)薄地の衣服は古服等を縫ふときは猥りに針こぎすべからず。

(二)裁物庖刀又は鋏の利鈍を試みたる後ならでは裁切るべからず。

(三)入用より餘分の糸を針に通して糸の切れ端を捨つるは裁縫に未熟の者と心得べし。

(四)衣服の上に裁物庖刀や鋏等の類を載せ置かば誤つて衣服を傷くるの恐ありと知るべし。



(五)汗染みたる手やあぶら手を拭はず衣服を取扱ふは不可なり。

(六)白地の品物衣服等に色糸にてしつけを掛くべからず。

(七)衣服のほころびを繕ろはずして捨て置くべからず。

(八)待針、留針等を等閑にさし置くべからず。

(九)入用より餘分の糊を製し腐敗せしめざるやう心を用ゆべし

(十)有り丈けの反物を裁つときには所々にて餘分の小切を出すべからず。

(十一)傷又は破れの修繕となるべき小切を猥りに放棄すべからず。

(十二)裁ちたる反物を亂雜にかさね置又は皺等を生せしむべからす。

▲火の用愼心得方

火事の恐ろしきは皆人の知る處なり、故に火の用心は殊更注意いたすべきものなり、まづ第一每夜家内の者の眠りたる後家の隅より隅までよく注意し、火鉢或は爐の最寄に燃へ易き物なきや否やを改めて後眠るやうにすべし。又日中に用ふたる火鉢は夜分に至り火を必らず消壺の中に入れ、火鉢の中に紙や炭の殘らぬやうにすべし、又煙艸盆を用ゐたる儘、棚或は低き所などに置くは甚た危險なるものなり、故に用ゐたる後には、必らず火を火鉢に返しよく掃除して元の處ろに置くべし扨又竈を壁の近くに置くは世間一般の習慣なれどもこれは宜しからず、なるべく壁より四五寸か、或はなるべく一尺位は壁より離し置くをよしとす又竈の周圍には燃へ易き焚附或は芥などを多く積らせざるやう大抵毎日掃除すべし而して又竈の近傍に蜘蛛の巣などのあるを其儘置き、竈の下の板に透間穴などのある時は緊しく塞ぎ置くやう注意し、又竈を用ゐたる時は其の殘の火を竈の前の方に止むべからず、田舍などにては炬燵の中に布團或は襁褓などを入れて火事を出す事多ければ炬燵の火夜中爐の中に置かざるやう心掛くべし。而して煙艸の吹殼や寸燐の燃しかすを必らず外に捨つべからず。又壁の近くにて寸燐をともすべからず又夜中物置などにて之を用ゐ、或は裸蠟燭などをともして入るべからず、田舍にありて殊に然りとす、而して風の吹く時分は殊更風呂場の跡は注意に注意を加へて火を消し猶其の最寄に燃へ易きものを置くべからず、總して火は一度之れをあやまたんか、己れの家宅を灰燼にするは勿論延いて近傍幾十百軒の家々を烏有に歸せしめ家財什器幾百萬圓の價あるものを一時に喪ひ、人々をして幾その不幸に陷らしめ幾何の歎きを懸くるにあれば愼みの上にも愼むべきは火の取扱にぞある。古人言あり、世帶の第一火に掛ちよぞ、旨言なるかな。

▲ランプの取扱ひ

火事を出して大なる損害を招くは大概ランプの扱ひ方

を誤りたるに出るなり。ランプは實にあぶなきものにて之れを粗略に取扱ひて自分の大切なる身體を傷ふ事すら間々あるものなり、故に其取扱方は必らず左の通りにすべし。まづランプに火を點す時はランプを釣るし置きし後に點ずべし、而して又降す時も火を先に消しておろすべし。斯くする時は若し取扱中に過失ちありてランプを下に落して破る事あるも大事なるあやまちに至らざるべし。又亂暴な小兒などある家にてはなるべく柱ランプ（反射鏡のつきたるものにて柱に打附置くもの）にすべし。

又臺ランプは客坐舗書齋の外はなるべく置かざるをよしとす。且又不斷ランプの置所と石油の置所とは區別するをよしとす。これ間々過ちて石油に火の移る事ありて大事に及ぶものなれば注意すべし。



▲炊烹の心得

炊水の業は婦人の職務中最も緊要の事なるが就中飯は食物中尤も至要なるものなれば上手に炊くべし、若し飯の不出來なる時は菜の物如何に味ありと雖も其の食事の旨き味あらざるなり、まづ上手に飯を焚かんと欲せば米一升に水一升の割合にて焚くべし。（尤も前日涵したる米にて）又旨き飯を焚くには決して釜の蓋をとるべからず、又火を竈より除きて後十分間蒸し然る後櫃にうつすべし。●赤飯を焚くには赤小豆をまづ小鍋て煮、後これを米にまぜ、赤豆の煮汁を水に加へて焚き始むべし。●茶飯を焚くには始めに茶を煎じ、其汁にて炊くべし。●麥飯を炊くには麥を茹て水に涵し置き、飯を焚くに先ちてこれを米にまぜ合せて焚るべし。又栗茸、筍、芋等の飯を炊かんと欲せば其の材料を砂糖

と鰹魚節と、味淋醬油にて鹽小辛らく小鍋にて煮て置き而して普通の飯を焚き其の竈の火を引く時分釜の蓋を取りて先に煮たる小鍋の物を其中に入れ又再び蓋をなし、而して十二三分蒸して後ちこれをめし櫃にうつすべし。而してよくこれを混ぜ合せて食すべし。(以上飯焚きやうの心得)

すべて物を煮るには、味淋、砂糖、鹽、醬油等の加減、鹽梅によりて其味をよくし、又あしくするものなれば其の品物の性質に叶ふやうこれを加減すべし。又煮過したり或は煮不足にて火を引きたりする時は其味又よろしからず、筍、大根、午房、にんじんの如き堅きものは永く煮るべし茄子、葱、青菜、豆腐の如きは一たび煮たてにこれを食し得るなり。(以上煮者の心得)

▲季節徳用漬物十種

●獨活の味噌漬　自然生の獨活の太き物を日陰にて干し柔かになるを度として赤味噌に漬け三ヶ月ほど經て出し食すればよし

●蕪の味噌漬　蕪の大なるものを菜を去りて蔭干とし是を糠味噌に漬て澤庵漬の如くして能くつかりたる時取出し能く洗ひ水氣を拭とり半日程蔭干にして赤味噌か又は白味噌に漬くべし

●牛蒡の味噌漬　牛蒡を庖刀にて土氣をこさぎ取り五六寸程に切りサッと湯煮て能く冷し水氣を取て味噌へ漬け一年程經て出し食すべし

●土筆粕漬　土筆の穗ばかり取りて能く洗ひ水氣を去り酒の粕に漬けるなり

●山葵の粕漬　山葵の皮を去り竪に薄く切りて鹽にて壓し一夜置て水氣を取り壺か桶に酒粕を入て漬け其器の口を密封すべし

●昆布の粕漬　昆布の佳品を選び一夜水を侵し砂氣を洗て日に乾し水氣を去りたる時粕に漬るなり又味噌に漬るも佳なり

●松茸の味噌漬　松茸の蕾の少きもの生根を庖刀にて去り能く洗ひ鹽湯にてサッと湯煮て水に移し能く乾して水氣をとり味噌へ漬るなり

●三葉芹溜り漬　三葉芹の莖ばかり取りて少しづゝ竹の皮の細くさきたる物にて縛り味噌溜りへ二三日漬けて食するなり

●大豆の梅酢漬　大粒の大豆を赤梅酢の中へ久しく漬け置く時は大豆膨れ眞赤になりて肴のあしらいなどに用ゐてよし

●隱元さゝげの青漬　隱元さゝげを取て豆腐滓を絞りて能く水氣を去り鹽を等分に混合せて是にて隱元さゝげを桶に漬け置くべし何時までも色青し用ゆる時は鹽出をすべし

●人參の味噌漬　人參の葉を去り根のあとさきを切り風すき宜しき所へ五六日置き甘鹽にして一ヶ月ほど漬け取出して日に一日干して味噌へ漬けなり



日用惣菜料理

春江女史

▲烏賊の味噌あへ

先づ烏賊を常の如く腹より開き能く腸などを取り去り(但し腸は餘程味よきものなれば餌袋だけを捨て餘は總て入れてよし)背筋のところより縱に二ツに割り之を小口より厚サと幅と同じ樣(即ち紐皮饂飩の如く細長き角形)に切り鍋にて油熬にし)好に因てはパター或は豚の油なども宜し)葱及び大根の銀杏切抔を加へ別に味噌をよく擂り味淋にて程能く溶き(柚子など少し加ふるもよし)火に掛けながら右の味噌と入れ箸にて能くかきまぜるなり之を冷えざる内に食す

▲雞飯の炊やう

此飯を炊くには先づ鷄の毛を去り腸を出し嘴及び肛部を去り水にて能く洗ひ肉を殺ぎ取り宜しきに切り鍋にて湯煮し(鷄の大骨を去り其他よく敲き小さく丸め交ぜ入るもよし)其煮たちたるところへ鷄卵の白身を入れ掻廻せばあくは上に之を掬ひ捨て充分淪て丶後ち毛篩にて裏漉となし其汁に鹽を少し入れ以て飯を炊くなり(水加減は常の飯を炊くに異ならず此煮汁と水とを以て水加減とす)而して淪であげたる鷄肉等は別に木茸のせん抔を混淆して醤油酒等を以てよき味に煮揚げ偖飯の炊けたるとき飯櫃に移すに飯を一段煮上の鷄を一段と段々に移し交ぜ又黒胡麻を散布して蓋をし　暫らくおき椀に飾ふときよく攪ぜて盛るべし味ひ尤も佳なり但し　筍及び蕨等を交ぜ入るもよろし

▲煮豆の拵やう

煮豆は種々ありその一二をあぐれば隠元、ぶんどう、大豆等にいたる迄を煮染るものにて通常の仕方は豆を能洗ひて虫喰、きたなき物の交らぬ様に撰び鍋或は釜に入て水にて充分よくにる

▲蛤のむきみ吸物

はまぐりのむきみを手の内にて少し汁を絞りすて酒と水と等分にして酒の香なくなるまで煮て燒鹽仕立にするなり

▲蛤　飯

小なる蛤の身を湯煮し水にてざつと洗ひ布きんにて水氣をしたしとり其後飯の火を引んとするとき上におき炊き上げかけ汁は前同樣の仕立にして出すか又は味噌汁にてもよろし加料は

｜さんせう｜小しそ｜ねぎ小切口｜たうがらし｜こせう抔なり

右の外馬刀貝、あさり、あはび、魁蛤、いづれも仕やう大躰同じ

▲德用炊飯法

鐵火箸二本を竈の上口の右と均に亙し其上に釜のつばをのせて竈と釜の間にすきをこしらへて火を炊けば一升の飯に凡そ百二三十目位の薪(百二三十目は細き薪二本位の物なり其薪の長さを七八寸にすれば頗る德用なり)にて時間も早く出きるものなり此法にてたきたる

飯は米つぶにつやを含ち味うまくして臭氣などなく其上腹に入りてこなれよければ身上持は云ふ迄もなく養生の道にもかなひて至極德用の法なり但し飯ばかりにかぎらず湯茶などわかす時にも此法によれば常のたき方より薪は五割餘も德用なり

▲大阪切漬の仕様

大根と蕪と等分に葉及び莖ともに刻み鹽をよき加減に揉み合せつよく押て漬るなり尤醬油樽に漬るなれば鹽を減じてよろし十餘日を經て取り出しざつと洗ひかたく絞り鉢に入置き食するとき小皿に分け醬油をかけて食するなり味ひ淡薄にして風味佳なり

▲同淺漬の仕様

細き大根を洗ひ葉ともに先づ四斗樽位に漬るものとすれば鹽一升はかりを加へ壓を強くして漬るなり水あがりて廿日程經て取出し遣ふなりこれも右切り漬けと同様ざつと洗ひかたく絞り刻みて醬油をかけ食するなり



凡そ淺漬の仕様は先づ太き大根をえらみ能く洗ひ水氣を乾かし酒の空樽（酒のあきたてをよろしとす）に漬くるをよしとす大根五十本なれば花麴一枚鹽一升麴と鹽とよくもみ合せ一段〳〵に撒りて其間毎に新葉を一本並べ位にしき漬込むなり終りに上へ鹽を二タ掴みほどまき押蓋をして壓を能く強くかけおくなり、水十分あがりて廿日程過ぎたるが加減よろし又風味よきは十餘日の內なり尤此漬物は長く蓄ふるものにあらざれば日を經ぬ內に遣ひきるがよろし昔は江戸二丁町の茶屋にて漬くるを殊更風味よしと一日數十樽を得意に配りしといへり

新葉を敷くは色のよきために用うるものなり

▲かぶの淺漬

蕪菁の皮を剝き其儘薄く切り（形を崩しては惡し）鹽を摻り醋と砂糖とに漬くる朝漬けて晩に食する此は中々

好き醃菜なり蕃椒を加れてもよし

▲沽陽魚の料理やう

頭と腸を切り去り沙鍋にてよく煎り手にて揉み粉を去りて遣ふなり先づ粗饌の硯蓋杯の盛合にするには味淋と醬油をよき鹽梅に調合して充分煮詰めさめたるとき右のごまめを入てかきまずるなり

▲獨活の胡桃拌

獨活をよく洗ひ一寸六七分位に切り二ッ割(大なるものは三ッ或は四ッ割)にして湯煮し又胡桃を擂り鹽と砂糖をよろしき程入れよく擂り右の獨活を拌へるなり但胡桃の皮を去るには一日程水に浸しおきあげて水氣をふきとり火に炙ればよく口の開くものなり

▲獨活味噌かけ料理

ずゐぶん太きうどを一寸程づゝに切り皮をとりよく湯煮し器物へ入れ上よりきのめみそ、さんせうみそ、わさびみそ、たうがらしみそ、胡麻味噌、砂糖もろみ等の中にて見合せてつかふべし

▲同生酢漬の仕やう

是はあまり太からぬうどを一寸程づゝに切り皮をとりざつと湯煮してよく水氣をとり生酢に漬け置き組さかな、引さかな杯のあしらひに遣ふべし、又紅粉を酢にてとき漬置き同じく組肴などに遣ふは甚だ奇麗なるべし梅酢に漬くる抔は普ねく人の知るところなりとす

▲同味噌煮料理

前の如く一寸程に切り皮を去りよく湯煮し味噌を酒にてのばし其中にて隨分よく煮て出すなり又山葵さんせう、こせう抔の中にて見合せ味噌に合てつかふべし

▲同ひたしもの料理

是も太きうどの皮をとり隨分うすくたんざくのごとく割み湯煮してさんせう醬油上よりかけ出ずべし

▲同吸物仕立方

薄くず、すまし、薄みそ、赤みそ、鹽仕立、右の中にて見合せすい物にすべし大根おろしともに一所に鍋へ仕かけ鹽にてかげんして前のごとく一寸程に切てまむるきにしたるをよく湯煮して入れ木耳などあしらひ吸ものにすべし尤よきものなり

▲鰯の酢つけ

程能き鰯を撰び篩に盛りて水分を去り、湯を沸し之に投し暫時煮て後ち掬ひ壺に入れ置き又別に酢少々に丁子、胡椒、肉桂等の香味を加へたるものに浸したる汁のみを右の壺に注き尚冷き酢を充分鰯の隱るまで注ぎ入るべし凡廿四時間許其儘になし置きて後食すべし

▲芥子味噌ぬた拌

龍鰕（伊勢鰕とも云）を生のまゝ皮をむき五六分位に切り之に獨活木耳等を入れ交ぜ芥子味噌のぬた拌にするなり酒を好む人には至極妙なり

納豆汁の拵へ方

割烹學校創立者　石井泰次郎

納豆汁の仕立方には、一寸五通りもありまして、皆手がるに出來ます、其種類は



○第一　納豆いれてつくるもの、納豆を一度煮てつかふもの

○第二　同　納豆をすぐに入るるもの

○第三　同　かつをだしにてとくもの

○第四　納豆もどきとて、納豆を入れずに仕立つるもの

○第五　同

▲第一のつくりかた　納豆を、多少見はからひて、ごみなどなき様にとりわけておき、さて味噌汁を仕立て、其納豆を、仕立た汁の中へ入れて煮こむのです、一寸一ぺん煮まして、又汁の中から取あげて、擂盆へいれ、れん木てすりますとやわらかになります、それを再度汁の中へ入れて煮てみます、あまりながく煮てはいけませ

ん、一度煮たてばよいのです、

○中の實は、賽形の豆腐、菜のくきの細麵です、此切方と、味噌の分量や、割合や、汁のたてかたや、實のいれ方は、第五だんめの條にわける事といたします、

▲第二の作方　是は納豆を直に擂盆に入れてやわらかになし、味噌汁を仕立て其中に入れて、共に煮たてまして、一度煮て、上の泡をすくひとりまして、其こさ、うさのあぢをとゝろみまして、こければ水をまして、今一度煮ます、此時に水の煮えます時分に、中の實を入れまして、一度煮たてるのであります、

○第三の作方　納豆をも、味噌汁をも、かつをだしにてときてつくる、まづ味噌を擂盆にてすり、馬尾篩にてうらごしゝて、鍋に入れてとく時に、かつそのだしを少しづゝ入れて、とく、

納豆も擂盆てすり松魚汁を、とき、右の味噌汁へ合せ、それから煮たて、其あたゝまる時に、濃淡をして、煮立てから、味を見て、中の麩を入れ、一度煮たてゝすぐに椀にもる

○第四の作方　是は豆腐を擂盆にてすりまして、味噌汁のたてた中へ入れて煮ますので、中の實の入れやうは變りません、が豆腐がはいりますから、中の實の方へはさえ形豆腐をつかひませんて、鳥の肉を、たゝいて丸めたのをつかふ、

○第五の作方　前の四通りのつくりかたを心得ますのには、此作方を、能く覺えるのが肝要です、

白味噌　百五十匁

並あま味噌　八十匁

右の割合て、まづ白味噌を、擂盆ですりまして、次に並のをすり、白を先へ馬尾篩でこして、次に並のをこす

さてそれから、白を鍋へ入れて、次に並のをもいれる

○すゐのうの漉しかたに、木杓子を平らに一度しまして、味噌をおしつけ、又立にしまして、味噌をこきますやうに一度一度とつかひわけてこすのです、馬尾篩の目なりに、つかひましては、目

が片よりまして直につかはれなくなります、それですから、すじかひにつかふのです、

味噌の上から、水を少しづゝかげんをして入れます、此時に多く入れますと、うすくなつて仕方がなくなります、こければあとで何様でもなります、そして木のお玉杓子で、味噌をおしてとくのです、鍋は火の上へのけおきながら少し煮えてまいり、味噌がのこらずとけてから、水をまして、濃淡は心次第、此時に程を斗らつて水の多少がきまるのですから、水のかさは別に記しません、味噌の分量では二十五杯ぐらゐにはなりませう、二十杯はたしかになります、そのつぎに一度煮たつた時に、上へうきます泡をすくいとるので　其つぎに實を入れるのです



▲實のつくりかたは

○菜の方は、小松菜で、まづ菜をあらゐ、ちくを切り、くきと葉を、こまかに切り、次に出刄庖丁でこまかにたゝき、みぢんにする、

實を入れてから、一度煮たてたら、すぐに椀にもるので長く煮ると、實もくずれ、汁もつまりて味をうしなひます、この時のあんばいがむづかしい、

○汁のつけ方は、椀を左の手にもちまして、鍋の上へあげぬやうに、鍋のふちより下にして、持てをりまして、右の方にて杓子にてすくふのですが、すぐすくつてはいけません、よくかきまはしてからすくふ

育兒實驗

ドクトル　川瀨元九郎

▲日本の母親は　無學の者のみならず、敎育ある中流

以上のものにして、一定の刻限なく授乳し、且二年でも三年でも殆んど期限なく、乳房を戯むれしむる者が澤山ある。而して再び小兒を生み落す時になりて乳離れと稱へて隨分一般の人々が困難するものである、然るに吾輩共の長女は滿一年前後に何時となしに乳を自然に忘れてしまつた、親の方では別段に乳を止める處置も取らなかつたのである、これは一は吾々が授乳時間を一定して居たことと小兒の身躰强壯であつたのと一は小兒が父親を母親と同樣に愛したから父親を愛して居る間母親を自然に忘れるからであるかと思ふ、一方には父親は恐ろしきものであるとの觀念を小兒に與へ、他方には小兒は母親を二倍して愛するのである、又母親も一定の時間なしに授乳したり終始乳房を以て戯れしむるから乳離れに困難するのである、それのみでなく之が爲め母親の威嚴は全く地に墜ち、小兒は一刻も母親を離さぬ樣になるのである、生長しては小兒の獨立の精神を失するに至るのである。

▲日常美衣美食に慣れて居るものは是れを有難いとも思はぬと同じ事で、小兒が親の愛を日夜引續きに受けて居ると小兒は親の愛を重んじない樣になる、それで平常は可成適當なる監督者に一任し置き毎日朝夕二回位づゝ小兒と共に遊び彼を敎訓し同時に彼と愛を交換するのである、母親が小兒と仝衾するは宜しからざる習慣である可及的改良せねばならぬ、然し此點は強く主張することの出來ない理由がある、西洋では家屋の構造の完美して居る上に上下をしなべて冬期中は暖室法を實行して居るから夜中何度起きても左程困難なことでないが日本では家屋の構造が不完全である其上に暖室法が設けてないから冬の寒き夜に二三度も起きるとは困難であり且小兒の寢付く迄小兒の床の傍に番をして居ては感冒に罹る樣なことがある、小兒三才以下にありては別の床又は別々の室に寢るとは冬期中は實行が出來難い、然し春夏及び秋の三候には差支はないが冬間の習慣を破るは容易の業でない

▲兩親は可及的己れらの愛を小兒に言行を以て示さねばならぬ、日本の風習上愛情を言行に現はすことは

ないのであるが宜しくない、それで親子、夫婦、兄弟、でも他人の樣に見へるのみならず感ずる樣になるから互に誤解を生ずるのである例せば主人が歸宅すると雇人は勿論妻子に至る迄玄關に平身低頭して恐れ入る丈けである、小兒は下女下男と同じく主人として玄關に親を迎へるので愛する親として歡迎するのでない、日本では何事も禮式に流れて宜くない、それで之を儀式的とせずして自然の愛情からして兒童が兩親を迎へる樣に仕付けねばならぬ、玄關に迎へた謝禮として親は愛を與へるが當然である即ち走て小兒を懷き上げるとか接吻するとか、或は安否を尋ねるとか、親の不在中如何に消光せしか等を聞き正して親が兒童に付て趣味を有して居ることを知らせねばならぬ。



▲愛を表示すると同時に親の愛ほど世界に尊きものはなしと云ふ觀念を兒童に持たせねばならぬ。古昔は我國には勘當と云ふことがあつたが吾輩の想像するに古昔の父親は威厳を保つことにのみ勉めて居つたから、放蕩息子も却て反目して居たであろうと思ふ、只彼れの閉口するのは家督を繼ぐことが出來ないのと生活の工夫に苦むと云ふことのみで親の愛を失ふことなどは平氣であつたであろう、兒童が親の愛を重んぜざるが爲め親子爭闘をする樣な不幸が起り來るのである。

▲親の愛は無償を以て得らるゝものでないことを知らしめねばならぬ、親は己れの愛の代償として兒童の愛を要求するのである、而して兒童が親を愛するの證據としては親の命令に服從し、親を尊敬せねばならぬ、親の命令に反するものは親を愛せぬのである、親を愛せぬものは親の愛を得ることは出來ぬ、世の中に於て最も大切なる親の愛なくして如何にせん、これぞ眞正の勘當である、茲に至りて始めて眞正の教訓をすることが出來るです親の威光

を以て壓制的に親の命令に服從せしめんとするは無益なるのみならず親に取りて最も不得策なる手段である兒童が何時か親を忘れて敵視するに至るものである、又親の現在にては從順を僞裝すと雖も親の不在の時は所以鬼の留守に洗濯となるのである、

▲兒童を取扱ふには一箇の完全なる人類と見做さねばならぬ、決して生命なき人形の樣に無情なる植木の樣に考へてはならぬ、小兒が何か話し掛けたらば必ず之に應答せ　ねばならぬ、又小兒の顏を見たらば必ず談話をなすか手近かな品物を示すか兎に角一個の成人に接對するが如くなせば宜いのである、兒童は吾人の想像するよりも理會力があるものであるから恐ろしき音聲を以て驚怖せしむることなく温柔と忍耐を以て童兒の理會力に訴へ且理會力の發達を誘導せねばならぬ、善行あらば適當に賞讃して之を奬勵し、惡事あらば十分に其惡き理由を說明するのである、言語を解せざる程の小兒でも温和に語れば命令を了解するものである

▲夫婦の關係も育兒上大關係がある、夫婦に限らぬ家族中に平和の空氣が充滿して居らなければならぬ、家族の狀態は兒童の精神に大なる影響を及ぼすものである牽て身躰の狀態にも變化を來たすものである、吾々の長女が滿一才に足らぬ頃であつたが或る日吾輩が何か熟慮して居たことがある、小兒と母親と共に吾輩の室に來りて吾輩の顏面を見て急に面想を變じて額に皺を寄せて吾輩の顏を打見やつて居た、而して吾輩が笑ひ顏を示すと同時は彼女は常の通り愛らしき笑を與へた、吾輩は一年に滿たざる小兒が斯く程の能力を持つて居るものなることを初めて學んだ、試に吾輩が妻或は家族のものを打つときは彼女は必ず仲裁に來る、之に依れば年中夫婦諍をして居る家族の兒童は顏面に心痛のある相を示して居る、又家族の樂しく平和なるときは「笑ふ門には福來る」と云ふ面相を呈するのである、又身躰の發育を害するものであるから注意せねばならぬ男尊女卑主義の行はれて居る家族では自然に兒童が母親を輕蔑する樣になる、育兒の主任者が兒童に尊敬を失ふては決して理想的に兒童を教訓するとは出來ない

夫婦は一躰であるから自躰の一部である妻を輕んずれば小兒は母親を輕んずるのみならず遂に父親も同様の運命に遭ふのである、斯様の夫婦であつては婦人は常に心平かでないから知らず識らずに主人に對する心情を雇人などに物語るのである、小兒は之を立聞することがある、甚しきに至りては母親は父親に對する不平を兒童に語るものもある、子供心に父親の不親切なることを惡む樣になる、自分の愛する母親に對して非道な人は自分にも非道な取扱をするならんとは小兒の理論の結着である、故に兒童をして己れを愛し心服せしめんと願はゞ先づ母親を重んじ大切にせねばならぬ、然らざれば母親は小兒に對して權威を保つことは出來ない。

母親が外出から歸宅した場合にも父親は嚀ばしき言語と顔付きを以て小兒を引立てゝ玄關に出迎ふがよい玄關で平身低頭するは宜しくない起立したまゝで、小兒をして母親の手を握らしめて共に迎へ入るがよい、決して父親の威嚴を損する樣なことはない、



夫婦の間に意見の衝突でもあつた時には小兒の居ない場所にて秘密に談合するがよい、決して小兒に兩親が不完全なものであることを知らせてはならぬ、寧ろ自分の兩親ほど善きものは世の中にない樣に思はせるがよい、吾輩が海外に留學して居つた頃に吾輩の時々訪問した一家族があつた、夫婦の間に十歳許の少女があつた、少女は何時も吾輩を歡迎した、少女一日下婢に語つて曰はく私は彼の人を最も好む何故ならば彼の人は私の父親の身長に等しく丁度格構がよい云々、彼女の父親は外人としは五尺二寸位では身長短小であるに拘らず父親を滿足なものと信するのみならず父親と等しき身長の吾輩を愛するのである。數月前のことであつたが六尺二寸も身長のある一英國婦人を新橋停車場に見送つた歸路、十歳

許りの英國人の少女と步行した、少女は曰へり、彼の二英人は身長餘りに高くて見惡し然し私の兩親は身長丁度宜しと、何れも自分の親ほど立派なものはないと信じて居る、親を愛せしめ命令に心服させる點に於て必要な注意であると思ふ。

▲日本人は槪して西洋人に比すれば交際が下手てある、其原因の一としては西洋人は幼少の頃から客に接する樣に仕付けるが、日本ては之に反して來客があれば兒童を退けるのである、會々兒童に客間に來ることを許すことありて兒童が玩具などを取出して客を接待せんとすれば「邪魔するな」と言はれて恐る恐る退くのである、又兒童が同輩と共に遊ぶ場合には兩親は更に關係しない、或る兒童は朋友の宅へ遊びに行て先方の親達が出て來ることを好まない、吾輩の考ては小兒は要談等の差支なき普通の來訪者のある時は客間に席列せしむるがよい、そうすれば客を饗すことを自然に習ふて主人が留守て客が待合せて居る場合などには客の相手となることが出來るのてある、又子供同士の遊ぶ時でも親が共に遊ぶ樣にすれば兒童は人を恐れぬ樣になるのである、兒童である頃から斯樣に仕付けて置けば自然に交際も上手になり且客に失禮をする樣なことはなくなるのである。

▲終りに兄弟姉妹の取扱に付て一言せんに兄姉でも弟妹でも同樣に取扱ひ、男女兒の區別を立てぬがよい、弟妹が生れたらば兄姉には兩親が皆差別なく同等に愛することゝ、兄姉は弟妹を兩親の如く愛すべきことを敎へ込むことが大切である、女兒であるから弟妹であるからとて兩親が之を輕ろんずれば男兒や兄姉は直ぐに親に準ふから注意して居らねば後に至りて兄弟爭鬪なぞをする、總て兩親を惡む樣なことになるのです。

▲育兒の要は夫婦協同して圓滿なる愛情を適當に表出することであると信ずるのてある。　（完）

婦女と健康

水原翠香

病なる物は其人の神經によりて增減する事又疑ふべか

らず常に勇氣有て俗に云病まけ爲ざる性質の人は大概壯健にして偶然病を得る事ありても速に癒て長引く事稀也過慮の人は少しき病も重くなりともすれば死にもやせむと氣遣ふより增々神經の刺擊するぞくなりて終には眞の危篤に陷入る事あり富貴の人に此事多し病は未然に豫防し少きに療せば大患に及ばざるの理は何人も知る處なれば假初の感冒にも醫を呼び服藥する人は決して大患は有まじき筈なるにも拘はらず右樣に爲る人却て種々の大患に罹り身に熱あり頭痛其他苦ある時もよく〳〵劇烈なるに非ざるよりは勉强て事務をとる貧窮人下男下婢等は多く自然に快復するが世の常なり〳〵是他なし常に醫を呼ぶ人は其說を聽覺えて自己も醫の如き心持と成不消化物は喰ふべからずとて三度の食をも朝は牛乳に鷄卵を用ゐて飯は廢止とし飯を用ゐる時には殆粥の如く和らかに羪ざれば意に適はず故にたまたま他にて尋常の飯を喫すれば忽に胸に痞ゆる樣に成日本は瑞穗の國の稱さへ有て代々美稻の米飯を以常食と爲來りしを其米飯が少しは强しとて何の害になる事やある人の胃は習慣次第にて伸縮する物也餘りに西洋說に心醉して常食迄も疑似すればこそ然有なれなか〳〵に飯は强きを好み野菜鹽物の麁品を大喫する者は壯健なるをみても知れたる事ならずや又滋養物とて肉類を多く食するも宜けれど每に座して人をのみ使ひ身躰を勞働せざる人は胃弱く食物何に拘らず停滯し易きに膏濃き肉食は滋養とはならずして却て腫物瘡等を發して苦む事あり其上に酒色に沈り夜を深しては朝寐午睡し口常に衞生論を喋々しながら不養生も又甚し斯の如くして病なき者あらむやは婦人の方は酒色に亂るゝ事は男子の如く多からねども其替りに又氣隨病多し近來は西洋主義流行して男子より婦人を厚遇優待する方に傾きたるを忝き仕合とは思はずして當然の事と一



咎附上りして我意を張人の言に隨はず物事耐忍する能はず些にても氣にくわぬ事あれば忽憤をたて泣連けて瞼を腫し飯を喫ず夜具引かづきて俄に大病人と成甚敷は癪癖發し眼を直視などする有一家大騷となりて醫者よ藥よと走り廻りいかなる大患かと思へばやがて癇沈り心靜りぬればケロ〳〵と機嫌直りて平日に異ならず或は些細の事をも過慮甚しく然もなき事を忖度して苦にし神經を亢らして自ら病勢を添へ終夜不眠となりて身鉢疲勞し終に眞に大患に陷入て名醫大國手を取替々々聘して莫大の金を掛少しく快方に趣きても猶轉地溫泉海水浴等有とあらゆる贅澤沙汰に費をいとはず手を盡して漸々回復せしかと思へば四季の移り更り氣候不順なる毎に當られて動すれば前條を操返し夏は避暑冬は暖地と年が年中衛生三昧に醫士の手を放れ得ぬ常病人となる者貴婦人令孃に尤多しとす高貴紳商ならずとも親の甘く育てたる女兒は嫁しても其夫が所謂好人物にて婦のいふが儘になれば此類の常病人と成もの也若又氣隨をさせぬ姑あるか又夫の性質嚴格なるに遇ては耐忍して仕ふる能はず親里へ悲苦を訴へ慘酷の爲に病などいへば親は其片言を聽て實情を察せず病には替がたしと離緣を申込始め歡迎せし者終に相疾視して別るゝに至る事世上一般の惡弊也正しき家庭に育ちて耐忍力に富たる女兒はいかなる家に嫁すとも克勤めて夫の家風に從ひ身を働かし物事を苦と爲ざるが故に病となる樣の事はなきもの也眞實に我兒の爲を思はゞ幼少より漸々とならして風雨寒暑共に堪らるゝ樣に體育を專らとし食物に嫌と云物なく普通人の喰ふ物は何にても喰しめ決して撰嫌をいはしむべからず苟も泣憤叩時は叱り且諭して物事に耐忍の習慣をつけ難事に遭ては反抗して打勝たむとするの勇氣を皷舞しそれを爲おふせたらば稱揚して賞品を與ふれば兒童は嬉しさにます〳〵勉勵して耐忍の英氣を勃興するもの也

○又一種僞病有近頃婦人社會に流行すそは他なし上流婦人に病身羸弱の人多きを見聞して無病壯健は下等人種に限ると誤解して自己幸ひにも壯健なるを悦ばず却而他より病身と認られむと勤め人も對話する每に胃病

留飲にて食を減ずとか又はリウマチにて疼痛ありとか其他種々サツタ病人らしき事を口實とし集會席などに主人が折角心を盡したる膳部を失敬にも蓋をさへとらず或は喰しても箸を觸たるばかりにてさし置辨當持參なれば雛道具の如き小器を携へてすべて小食を假粧ひ衣服を衿數多く重襲て猶寒がるを上品也と心得てか若一座に世間普通に食し殊に薄着の人あるを視ては吾儕はとてもなどゝ甞るが如く嘲るに似たる言を吐て其身の持病脆弱を示さゞればいかつがましく下等人種と人の思はむかと氣遣ふ物の如し抑人として身の壯健無病なる程世に幸福なる事はあらじを病なくては優しからずとする片僻解も又甚しからずや其上流に病多かる元を洗はば十中八九迄が氣隨我儘より發る也果して然らば病がちなるは氣隨者とやみられむと思ひて其の病有ても人には成べく隱すべき理なるを反對に壯健者が病身がるとは奇々怪々なる物好なる哉石が流て木葉が沈むとは斯在事をやいふならむかし



雛まつり

まさ子

雛まつりは女の節句として遠く王朝のいにしへより上は九重の雲高く錦の帷奥ふかう垂れ籠めたまふ、あて人より下は津々浦々の賤が伏屋に至るまて上下貴賤の差別なく戸々家々に之れを飾らずといふとなく、大八洲の國々千里山河は隔つるも、この風俗に異りなく、幾千年のいにしへより優美と長閑なるならはしを殘し來りぬ。實に雛かざりは夫婦の和合、一家の團欒を形の上に顯はしたるものにて、今の世にいふ家庭の教育、家庭の娛樂なる趣意にも自然に叶ふたるものといふべく、彼の徑寸の顏に美術の心を籠め、彼の徑尺の躰に手工の巧みをあらはしたるな

と、本朝特殊なる藝術の跡を見るにも足りなんかし。

今この雛祭りにつき、古へより傳はりたる古例を聞くに、三月三日を上巳といひ、また元三、重三、修禊、令辰、桃花節杯ともいひ、俗には桃の節供ともいふ、古へ朝廷にては曲水の宴を行ひ雛合の戯れをなし、北辰に御燈を獻るなどの公事ありき、徳川幕府の比は諸侯登城して、上巳の祝儀を申し、貴賤ともに雛祭をなし、艾餅、灼豆を供し、桃花酒及び白酒を飲む習俗なりき、此の日を上巳といふは古へ支那にて此の月の上の巳の日に、川邊に出でゝ、祓除をする事のありて其は此の月は辰の月なれば、巳を除日とし、不祥を除く意にて此の日を用ひたるなりといふ　魏、晉の頃より何後は、巳の日には拘はらず、常に三日を用ふるとゝなりたれども、名稱は猶舊によりて改めず、其儘上巳の禊といひならへるによりて、我國にて其名によりて同じく上巳といひ、俗にはシヤウミと唱へ來れるなり、さて此の日に行はせらるゝ曲水の宴といふは、文人ども、水の岸に並び居て、水上より盃を流しその盃の我が前を流れ過ぎざるさきに、詩を作りて、その盃をとり、酒をうけて飲みける事にて、羽觴を飛ばすなど云ふも此の事なるべし、此ももと支那の風を學べるものにて、彼の國にては周の世の前より始まりしが中頃久しく、絶へたりしを、魏の文帝の時に、官位の高き卑きを云はず、作れる詩の善惡遲速によりて、臣下の才を試みるために、再び興したるものなりと、我朝にては



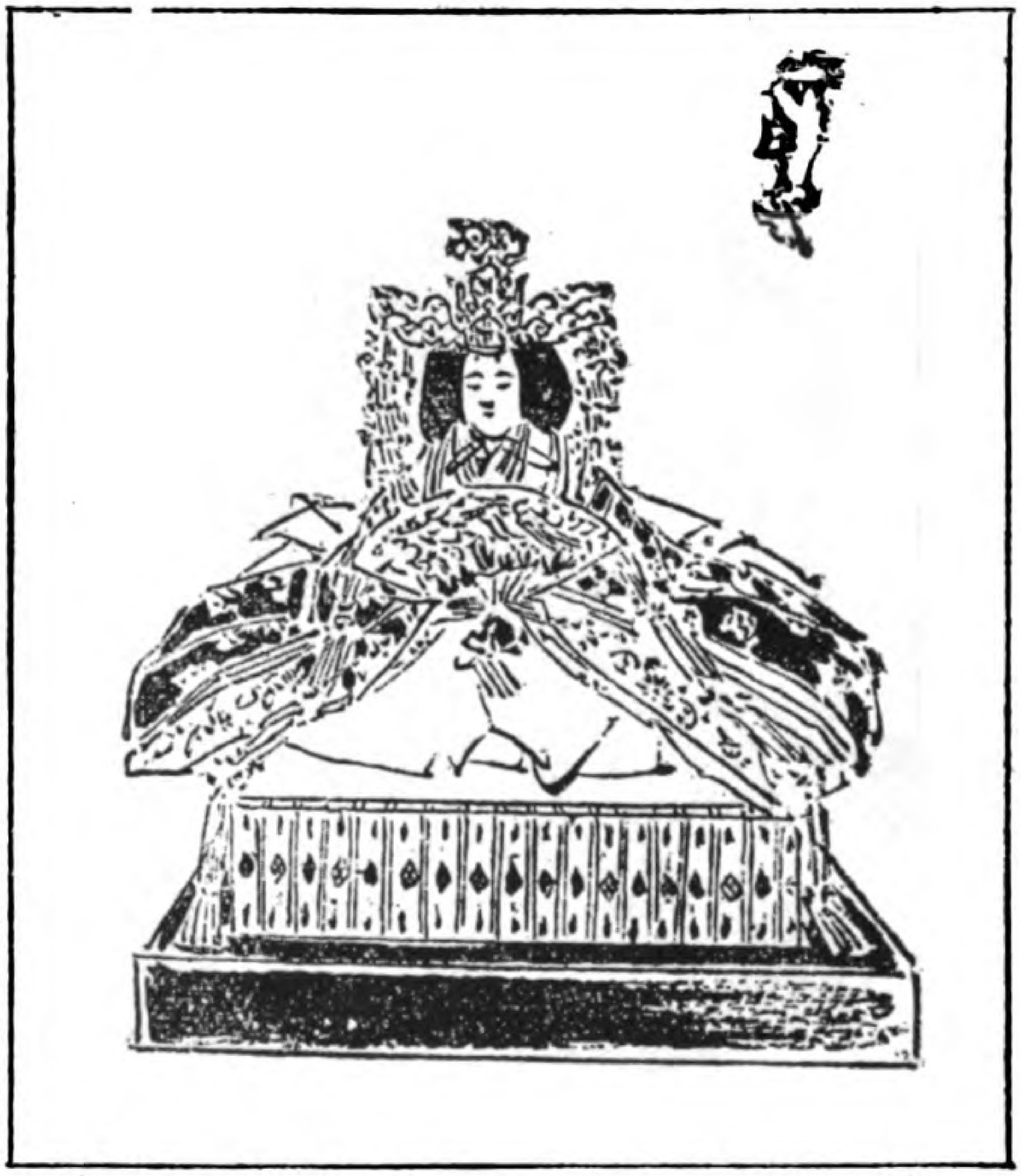
顯宗天皇の元年三月の上の巳の日に、後苑に行幸ましくて、曲水の宴を行はせ玉ひし事日本書紀に見ゆれば、此の御世より起りし事にもやあらんとおもはる、これより後は年毎に行はせ給へる事、代々の歴史に見え、また歌集にも曲水の宴をよめるものかれこれ見へたり、其一二を擧ぐれば新續古今集に、定家、

めぐりあふ今日や
　三月の御かは水
　名にながれたる
　　花のさかづき

六百番歌合せに定家

から人のあとを
　傳ふるさかづきの
　波にしたがふ今日も來にけり

など、これなり、然れども、必ずしも河に臨みて爲しゝ



に限らざりし事は、公事根源に「是はむかし玉卿など參りて御前にて、詩を作りて講ぜられけるにや」と見え、また新撰六帖に載せたる、衣笠内大臣の家良の歌に

から人の河瀨に
　流すさかつきの
　岩間にさはる
　　ほどの久しき

また夫木抄にのせたる爲家の歌に、

かき流す巴の
　水はあとたえて
　空のみ見る
　　春のさかづき

などあるにて知られたり、

雛祭りは、また雛遊ともいふ、二月の廿八日(勿論陰曆也)比より屋中に段を搆へて、雛人形を飾り、白酒、灼豆等を供へて之を祭り四日に蕎麥を供へて、後雛段を撤するを、近世の例とせり、此の

日は、女の節供といひて女兒の專ら喜びし節なり、故に當歲の女兒ある家にては、初の節句とて取り分け之を祝ふ例なりき、そも〳〵此の遊ひは敏達天皇の二年に始まるよし、ある書に見えたり、古へは紙雛とて、紙を人形に切りしものゝ由にて、いま六月の大祓に紙偶人を造りて贖物とし、祓除の具に用ふると同じく、もと祓除のわざより出でたる事にて、此の形代に罪穢を科せしむるために用ひしものならん、源氏物語の須磨の卷に、源氏の君、須磨へ左遷せられしをり、三月朔日巳の日なりければ浦邊に出て、祓除したまひ人形を舟にのせて流しやると見えて、その時の源氏の君の歌

　知らざりし大海原へ流れ來て
　　ひとがたにやは物の悲しき



と詠ませ玉へるは一方に人形をかけたるものにて當時上の巳の日に祓除するとのありし證なり、また當時女兒の雛遊びせし事は、同書紅葉の賀の卷などに見へにき、

また此の日に草餅を食するとは、荊楚歲時記に、三月三日、鼠麴の汁を取て、蜜に合せ、粉に和し、名けて龍舌餅といふ、これを食すれば時氣を壓すといふことあるによりてなるべし、其起原は拾芥抄に、「むかし周の幽王、淫亂にして、群臣愁ひ苦しみけるがある年、曲水の宴せさせ玉ひけるをりに、或人、草餅を作りて獻上ければ、幽王その味ひの美なる事を感じて、是は珍らしきものなり、宗廟に献上るべしと云ひけるが、これより、周の世大に治まりて、遂に太平を致しければ後人相傳へて、三月三日に草餅を

作りて宗廟に薦むる事となれり、これ草餅の始めなりといかにや、我國にては文德天皇實錄巻一に「田野に草あり、俗に母子䓵と名づく、二月に始めて生ず、莖葉白うして脆し、三月三日にあふ毎に、婦女之を採りて蒸し擣きて餻とし、傳へて歳事となす」と見えたれば、その頃、旣に此の日に草餅を作る習俗のありし事は、明らかなり、然れども、當時は鼠麴草を用ひしとなるに、何時の比より、鼠麴草を止めて艾草に替へたりけん、近代は專ら艾草をのみ用ひることとはなりにたり、さてその餅は菱餅とて、菱形に切りて供する例なれども、如何なる由あるにや、詳かならず、次に桃花酒を飮むことは、拾芥抄に、本草を引ひて、「三月三日桃花を取て酒にひたして、之を飮めば百病を除き、顏色を益す」とあり、



世諺問答には「ひとの國の事にや、太康年中に、山民避山、自然武陵といふ所にいたりて桃の花の水に流れしを飮みしより氣力さかんなりしかば、いのち三百餘歳に及べり、されば今の世に桃花を用ひ侍るとかや」云々と見へたり、これらによりてや、我國にも今日を桃花の節供とはいひはやせるなるべし、藏玉集に

けふごとに酒に浮べて
飮む人や
三千とせの名を
いはふなるらん

のむ人や千代をおくらん
御酒古草
かなふよはひの
こゝろなりせば

など見えたるは、いづれも桃の酒をいへるなり、藻鹽草に「御酒古草とは、三月三日、内裏にて御酒に入るゝ桃

なり」といへるにて知るべし、然かれども近代は桃花酒を飲む事は無くて專ら白酒を用ひるを例とせりと、ある博士の申されき。

仁愛の話（修身談）

野中千代子

總じて人となりては常に愛敬の心をもちてしばしも之を失ふてはなりませぬ、愛とは人をあはれむ心を申すので人をにくみうとむじないのであります、其まじはりのしたしき疎きによりて愛の厚薄品はかはりても、總て疎きも親しきも愛するといふことはなくてはなりませぬ、敬とは人をうやまふことを申すので人をあなどりかろんぜぬことを云ふのであります、其位の高き低き品によりて敬ふことの深淺はかはりても、總て敬ひてあなどりてはなりませぬ、愛といふことは親しみといふことからおこり、敬は貴きことより生ずるものであります、けれども疎きものをも愛し賤しきものをも敬するは眞の愛敬で御在ます、親疎貴賤すべて愛敬するは即ち仁であります、親疎貴賤の品によりて厚薄深淺あるは即ち義でありまして愛敬の二つは善心です、故に善をおこなふとは愛敬を行ふのでありまして是即ち人倫を親しむの道であつて又取も直さず天地につかふる道で御座ます。

富貴の人は其力に應じてひろく人をめぐみ助けねばなりませぬ、人生の樂は人の苦を救ふて人を樂しましむるにあるので、たとひ貧窮にして人を助くる力はなくとても、善をする志だにあるならば其功はきつとあると思ひます、たとへば人に善をすゝめ惡をやめさせ人の害をのぞき人の心を和らぐる等のことは必ずしも財を用ひずとも行はるゝことであります、若し餘財があらば無益のつひへをせずして人の艱難を救ふやうに致したいもので、それには財を惜みてはなりませぬ、古人か財を惜みては善を行ふてもなりがたしといはれしが眞に其通りに相違御在ませぬ、財は澤山あつても吝みて人を救はないのは不仁の人であつて善を行ふことはなりがたう御在ます。

道に志ある人は常に仁を以て心にたもちて日々人に利益ある善事をするやうにしたいもので御在ます、前にも云ふ通り善を行ふことは必ずしも財を用ゆることの多少にはよりませぬ、只人の難儀をすくへば其功は大きいのであります、財を多く費しても無益なことに用ゆれば少しも人の助けとはなりませぬ、全體善を行ひて人をすくふといふことは上は王公より下は乞丐にいたるまで行はれぬといふことは御在ませぬ、それには善を行ふべき時にあたりて心をつくさねばなりませぬ、貧しき賤しき人とても仁に志して行ふならば其身分に應じて日々人に利益あることが多いので御在ます、たとへば飢たものには一飯を與へ、渇ける者には湯水をあたへ、道路に、いばらからたち、はりある物、かどある



石、人の足をそこなふ物を取すて、溝の内の踏石を一つ二つ置かへ、小さな溝に小板をかくるほどのことは、いかなる貧乏人もしてできぬとは御在ませぬ、箇樣な些細なことすら人に益ある善行であります、まして富貴の人にして其志があれば人をすくふこと廣く其功も眞に大いなるものであります、貴きも賤しきも怠りなく之を久しく行へば善は積むこと限りなくて樂いことてはないかと存じます。

すべて世間普通耳目口腹の欲をほしいまゝにするのを樂といたすやうてあります、之をほしいまゝにせんければ大富貴を得ても其甲斐はないと思ふてをります、之はまことに小人の心で御在ましていやしむべき志で御在ます、箇樣ないやしき樂を志として酒食色慾を恣にする人は終には必

ず財つきて貧窮に苦しみ、人を妨げ、耻辱を取りて名をうしなひ、元氣へり病生じて命を失ふやうなことに成行くもので御在ます、まして禍となり富貴をうしなふに至らば實にかなしむべきことでこそあれ、なんで樂とすべきことて御在ませふや、道を行ひ人をすくひ分をやすんじ理にしたがふほどの樂の外に此世中に何が御在ませふや、貴きも賤しきも只之を樂とせねばなりませぬ、道を行ひ人を救ふを樂とせずして、あだなる世俗の樂をねがふのは、たとひ大富貴を得たとても其實は誠に不幸なる人といはねばなりません、富貴の人は殊さら身の慾をつゝしみて恣にせず、貧困なる者をあはれみほどこすことを樂しまねばなりませぬ、耳目口腹の慾をほしいまゝにすれば道にそむきて樂を失ひ却て禍なとります、大富貴の人といへどもかやうになりては財をついやしつくして困窮のうれへのがれませぬ、まして欲をほしいまゝにすれば名をけがし財祿を失ひ病を生じ身を苦しめて命をうしなふやうなことに成行ましては是より大なる禍は御在ませぬ。

食事の作法（上）

禮法講習會師範　田島秀子

▲本膳のつけ方　本膳には飯、汁、平椀、鱠、香の物を附くるが例で御座います。例へば客の左の前に飯、右の前に汁、その向うは煮物をおく、然し一汁五菜二汁五菜には本膳の煮物を二の膳へ附くる事あり。二の膳に附くる時は本膳には壺、椀、又は猪口の物など附けてよし。香の物は本膳の中央又は左の隅に薄板或は小皿に据えて附けおき、箸は杉箸を用ゆ引落しの附方、一汁五菜からは菜の數多くて本膳に附け難き故に、引落しといひて一段低き足打に菜を附けて持出づるもので引落しには献立の都合にも寄れど煮物椀、中皿の物などを附けてよし▲二の膳のつけ方　二の膳は二汁五菜以上の時に用ひ、本膳と同じ膳にて少し小形のもの、附け方は二の汁を前にその右の向うに煮物椀、左の向うに猪口、又は皿の物などをつけてよし、▲燒物のつけ方　二汁二三菜の時の燒物は別に臺にのせぬも差支なし、一

汁五菜以上は引落しの臺と同じ足打に燒物ばかりを附けてよし、二汁五菜以上は二三の膳と同じ膳に附けてよし▲飯鉢の事　飯鉢は棗形、太鼓形、何れもよろし但し飯鉢の臺は本膳の形と同じからず四方足をくりぬきたる形杓子と臺に同じく塗りたるを添へてよし▲湯桶の事　臺は飯鉢に同じ塗なるを用ひ湯は飯をたきたる釜にて沸し食鹽を加へて用ふ、

▲吸物の事　吸物膳に吸物ばかりつけ、箸を添へ、盃も打て出す事とあり盃は朱塗の引盃が本儀なれど略す時に瀬戸をも用ひて差支なし▲重引の事　正しくは取肴を重に入れ足打にのせ箸をそへて持ち出つるので外に臺引といへるものもあれど之れは餘り必要ては御座いません次に食し方を御話する前に御注意までに申おきます事▲食儀の作法之れは飯より食ひ始め飯にて止めるを例とし、又菜を食ひてすぐ菜に移る事なく必らす飯を食ひて他の菜を食す事箸は先を一寸より多



くよごれぬ樣にする事▲次は一汁三菜の食ひ樣、客の心得、より段々御話いたします始めに給仕の人膳を進めて禮をいたす時は兩手の指先きを膝の兩側に一寸つきて答禮し或は燒物出てゝ主人より禮あらば一膝後へ退き叮嚀に禮をなし時宜を見計らひ先づ飯椀の蓋を取り左の手をあしらひて持直し膳の右側に又は左におき次に汁椀の蓋を前の如くして取り飯椀の蓋の手前へ双べおき兩手にて飯椀を取り上げ左手に移し右の手にて箸を持ち前の如く左の指の間にて揃へ箸先きを汁椀の中にて一寸ぬらす、之れは飯つぶが附く故てあります、さうして飯を二口三口食し叮嚀にする時椀をおく毎に先づ箸をおくが例なれど箸を持ちたるまゝにて椀を取上ぐるもよし▲次に汁椀を取り上げ箸先にて汁の實を押へながら汁を吸ひ實を食し又汁を吸ひ次に飯椀を取り上げ食し飯汁、飯汁、と二三度右の樣にして食し飯にて箸を止め前に申た如く

して箸を膳のふちに寄せかけておく▲次に右の手先きの物を食すが習ひであれど鱠は手に取らず箸にてよき程挾み皿のふちにて聚を切りて食ひ又飯を取り上げ同じく二口三口食ひて箸を止め椀を兩手にて下におき右手にて平椀の蓋を取り右横におき兩手にて平椀を取り上げ左手に持ち右手に箸を取り中の煮物を食ひ椀を下におき又飯椀を取りて飯を食ひ箸を止め次に汁椀及び平椀の蓋をなし見合せ居る給仕人燒物を引き吸物を持出て進める時は會釋をなす此時又主人出でゝ中酒の禮わり其時も又前の如く答禮して前に申た樣に盃事あり給仕の人吸物を引き湯桶を持出で湯を進めなば兩手にて飯椀を取り上げ給仕へ渡し又兩手にて受取り膳の上におき飯椀を兩手にて取り上げ湯漬を食ひ香の物を食ひ箸を止め椀を下におく給仕再ひ湯を進めなば前の如くに湯を受けてよしさうして懷中紙を出だし一枚取り左横におき右手に箸を取りて飯椀の側に左手をそへながら箸先をすゝぎ左手にて紙を持ち箸先をぬぐひ右の手にて箸の中程を上より持ちて膳の中へ納め紙は挾へいれ兩手にて飯椀を取り上げ湯をのみ終り膳の上におき右手に蓋を取り左手をあしらひ又右手にて蓋をなす。

家庭の衞生

(肺病豫防の説)(一)

ペストや虎列拉や赤痢などの流行病は一つとして怖ろしくないものはありません、然し此等の病氣は極めて激烈ですから、流行し始まると丸て火事でも起つた樣に騷ざ立ましてそれ衞生、それ消毒と奔走するのは、丸て水よポンプよと火事場の騷きの無中になるのと同じいてす、その怖ろしい事は誰も知つて居て、それだけの豫防法を講じまするから、今更めて、いふにも及びませんが、爰に最も怖るべき、而かも世間では對岸の火事ほどにも見ない病があります、それは即ち肺病て、肺病患者自身は對岸の火事ドコロではなく、その周圍に居る人は肺病患者を觀るのに他の傳染病患者の樣に思ひません、肺病の怖しい事は茲に書かずとも誰しも御承

知でせうのに、その患者に對するのが何故今の樣に呑氣であるか、實に不思議の至りであります、それは何故かといふのに、一體肺病と申すものは、その素人に直ぐ分る樣に起るものではなく、何時の間にか傳染するのでありますから患者自身は何時何して感染したか、その時期と原因とを知る事が出來ません、從て傳染といふものを左程心に掛けないのだらうと思ひます。

之が虎列刺の樣に患者に接して皈宅したら、すぐ下痢が始まつて、翌日前の患者の跡を逐つて死で仕舞つたといふ樣に、明かにその原因結果が覺知さるれば、コンな事もなからうと思ひます、その實唯コレラは急で肺病は遲いといふだけに過ぎないのであります。

偖て此等の流行病と肺病を比較してドチラが恐ろしいかと申すに無論肺病が怖ろしいと答へねばなりません何故でありますか、虎列刺のやうな流行病患者は、病に



犯されたらば それ最後に自由の運動は出來ません、是非共床に就いて一定の場所に居なければ治療が出來ません、でありますからその病菌の傳播も極めて限られた部分で、之に消毒をし、その傳播を豫防するのも手數を要せず、而かも漏なく、十分に病菌を撲滅する事が出來ます、何よりの證據は虎列刺赤痢などは我國でも以前は國民の衞生思想が極めて幼稚なのに、その筋でもまた撲滅豫防の方法に馴れなかつた爲め一時は隨分恐ろしい流行を見たが、近年に至ては豫防消毒が行屆く樣になつたが爲め以前の如く甚しく流行を逞ふする事はない、先年病の王として震ひ上つて居たペスト病がやつて來たが、之も多數の患者を出さずにマヅ撲滅の姿である、さうして見れば此等の流行病は國民の衞生思想が發達し政府なり地方自治体なりの豫防の方法設備が整頓すればその猖獗を見るに至らずして撲滅するとが出來る、然るに肺病

患者は中々寢て居る所ではない、それ避寒だ轉地だ散歩だといつて却て健康者よりも多く動く、病が激しくならない限りは健康者と同じく業務も執り人にも接する、マヅ普通無病な人と違はない、世人も亦前にいつた樣に左のみ心に掛けない、颯々の病者と往來もし交際もする、虎列剌患者が飛び出したら世人は動物園から虎が逃げ出した樣に誰も寄りつく者はあるまいが、肺病患者が右の樣に普通人と同じく社會の表面に立働くのは實に少しも之と違はないので、此病者は絶えずその病菌を散布して居るのである、毒蛇が毒氣を吐いて歩く樣に、その毒氣を受けた者は棄てゝおけば何時かはその爲めに斃れて仕舞ふ、實に怖い事は何にも例へ樣がないのである。

さて之に付ては第一に注意せねばならぬのは患者自身第二に普通健康者である、その注意の方法手段はどうしたらば良いのであらうか。

肺病は治療し得るものなるや　此問題は第一に研究しなければならぬ、然るに我日本では此問題に付ては甚だ不幸なる考を持つて居る者が多い、肺病に罹た者はモー己は此病の爲めに斃れる者だと觀念して仕舞ひ、又周圍の者も既に病者は死神の手にその運命を握られたものとして、タヾ氣の毒がる許りである、コーいふ樣に肺病は多くの人に恰も不治の病である樣に考へられて居るから、その結果として多く醫師の語を賴りともせず、從て醫藥も餘り信じない、唯モー氣を腐らして死を待つ樣な有樣である、中には自棄を起しドーセ短い命と諦めて情慾に任せて色々な道樂をする、近親の者もその薄運を憐んで止める事も仕ない、時には親の情けの尙ほ更らいとしがつて、蹈込んで居る子女に夫れとなく思ふ存分の面白い事をせよと涙ながらに進めるのもある、右の樣な風であるから、コヽに「肺病は全治するものなり」と云ふ事を、その人達に知らせたいと思ふ、現今歐米各國では、肺病は治るものであると種々の學說經驗に依りて決められて居る、此に紹介する前記の第一等に當選した論文も、肺病は治療し得るやの問題に對しては決然「然り」と書いてある　（以下次號）

家庭時言

文學士　大町桂月

良人の選擇

◉男は女の美を愛し、女は男の勇氣を愛すとかや。蓋し女は男の力をからざれば、世に立ち難し。男の勇力を愛すべきは、自然の勢也。年少の女子、時に男子の美貌に迷ふものなしとせず。恐らくは、他日、君が一日の情の爲めに、妾が百年の身を誤るの悔あらむ。また世には財産に迷ふ女子少なしとせず。されど財産は失ひ易し。昨日の富豪も今日の乞食、錦をぼろに着かへて、さめてくやしき夢の心地することあるべし。男子は誰れも女の美貌を愛せざるものなけれど、とりわけて道樂したる男子殊に甚しく、妻を娶るにおもに容色の如何のみを問ふ。世に所謂器量好みなる者是也。番茶も出花、鬼も十八の娘盛り、一時の美を恃みて、器量好みに選び取らるゝ女こそ氣の毒なれ。既に器量を好む、色衰ふれば之を棄つるは自然の勢也。色衰へずとも即ち顔色改まらずとも、郎君の心既に改る。舊人豈に新人に如かざらむや。たゞ男は疊の新しきと共に、妻の新しきを喜び、女は常に秋の扇の恨をいだく。よしや富めりとも、權勢ありとも、浮氣者を夫とすること勿れ。

◉一見直に親しみ、あまり慣れ〳〵しく、しんせつげに見ゆる人は、却て眞情なく、見かけの愛想なきものに、却て眞情あるべし。一寸利口げに見えて、口先のうまき人は、案外に大なる智惠なく、働のなきが多しと知るべし。男子の氣合は、好き〳〵にて、其好む所を取るべけれど、要するに腕前ありて信實に、強くしてやさしく、智惠と感情と其よろしきを得たるを選ばゞ、大なる誤りなきに庶幾からむ。而して學者には學者らしき性格、軍人には軍人らしき性格、商人には商人らしき性格あり。今一々之を説かむも餘りくた〳〵し。多く人に交はる中には、自から之を悟るに至るべし。人を見るの明を得むには、多く人に接せざるべからず。日本の女子は社

交を杜絶せられて、所謂世間知らずのおぼこ娘、安んぞ自から正當に良人を選擇するの明あらむや。

女子の職業藝能

◉『人生婦人の身となること莫れ、百年の苦樂他人に由る』とは、白樂天の咏ぜし所也。婦人は夫を措いて、他にたよるべき人なし。夫榮ゆれば己れも榮え、夫零落すれば己れも零落す。苦も夫に由り、樂も夫に由る。夫を離れて獨立する能はざるが常也。されど、持參金あらば、夫の零落に伴はざるを得べし。されど、持參金は無盡藏に非ず。持參金つくれば如何すべき。女も妥りに人にのみたよらず、是非とも何か一つ自活するに足るべき藝能はありたきもの也。

學問にても可也、書畫にても可也、茶の湯可也、琴可也、また裁縫にても可也。女とても餘り嫁期を急がずば、何か一能一藝に達する餘裕は十分にある也。ほんの若き時の四五年の辛抱なり、晝遊びたきを怺へ、夜少しねむきを我慢すれば、身に何か藝能つくべし。藝能は人に安心立命を與へ、まさかの時には自活するに足り、閑な時には慰藉を得て退屈せず。藝能の德此の如し。女子も亦藝なかるべけんや。

器量自慢

◉世に器量自慢の女ばかり厄介なるものこそなけれ。おしなべて、女は器量を氣にするもの也。學問が出來ずと言はれても、さまで恥辱と思はず、仕事が出來ずと言はれても、また恥辱と思はざるも、器量が惡しと言はれては、非常の恥辱なりと思ふもの多し。其醜なるものは時に鏡に對して暗涙を催し、天道樣もうらめしや、我親もなぜ今少し格好よく生みつけ給はざりしぞ。此色何故に斯くは黑きぞ。この鼻筋なにゆゑに通らざるぞ。此口何故にかくは遠慮なく大なるぞなど愚痴をこぼせば、之に反して美なるは、鏡の前に自から鼻をうごめかし、逢ふ人毎に我をほめざるはなきに、益〻增長し、あはれ美しくも生れたるもの哉、われ一たび笑はゞ、城を傾くるに足らむ。氏なくして玉の輿に乘るを得むと、慢心

一たびきざしては、學問に精出さず、藝能を勉強せず、たしなみ、しつけ、女の心得べきもの一切がつさい心にとめず、氣隨氣まゝに人となり、日夕化粧にのみ忙しく、出てゝ人に見らるゝを喜ひ、花見の、芝居見物のと、常に出あるき、一旦人に嫁しても器量を鼻にかけて、威張つて見たく己れを恃むの餘り、往々夫の身分に滿足せず、我容貌を以てすれば、今一層貴く、富める、且つ名譽ある人を夫とし得べきにと、不足の心、中に起りて、自然に夫をあなどり、夫にいやな顏を見せ、子はうばに任かして、己は身の化粧に凝り、この姿色、徒に一室に鎖すべけんやと、外出を好むの果は、重きが上の小夜衣わがつまならぬつまを重ぬるとなしとも限らず。色美なるもの、多く浮氣者にして、學問藝能のすぐれたる者に顏の見苦しきが多し。古人曰く、美人多く薄命なりと。その薄命なるは天なる乎。抑も自から招く所なる乎。

親の心得

●器量よき子を生んで左團扇にて晝をやすく〳〵と送らむとするものこそ、不心得の最も甚しきものなれ。されど、これ下等社會の事なれば、なほ恕すべし。敎育ある中流以上の士にして、老後子の臑をかじり、己れは樂隱居とならむと思ふもの少なからず。かゝる弊風は一日も早く改良せざるべからず。

維新以前、世祿に衣食せし時代にありては、隱居して可なり。子の臑をかじりて可なり。されど、今や世祿なし。人は働いて衣食せざるべからず。死ぬるまでも働かざるべからず。早く隱居して子の臑をかじるはこれ社會の道德を破るもの也。

◉習慣の致す所、在來の親は致し方なきも、苟くも明治の新敎育をうけたるものは、子を當にするの陋習を脱せざるべからず。これ親たるもの、側より云ふ也。子の身としては、飽くまで親を養はざるべからず、親が養育の恩をわすれて、親をよそに、己れひとり樂をせむとするは、子の道を缺けるものと云ふべし。

儉約の意義

●一家を立てゆくに、最も必要なる條件は、儉約也。坐して食へば、山もまた空し。まして中等の程度にありて、收入さまで多からざるものをや。

衣食住の三者の中にて、いづれが最も大切なるかと云へば、先づ食物也。次は住居也。衣服は最も末也。然るに世人は通常衣を先にし、住を次にし、食を最も後にするが如し。人は虛飾の動物也。山高の帽子をかぶり金の目鏡をかけ、髯をはやし、二重外套を着、金の時計をぶらさげたるを見れば、堂々たる紳士也。吾妻コートの上に肩かけをかけて、コートの袖口より見ゆる衣服みなきらびやかなるを見れば、堂々たる貴婦人也。この紳士葉卷の烟草をくゆらし、この貴婦人をつれて、二臺の車を飛ばす。知らず、何處にか行かむとする。やがて車いときたなげなる狹き家の前にとゞまり、お歸りと車夫の云ふを聞けば我家なるべし。今の人はかく矮屋の中に住ふも、なほ衣服躰裁を美にせむとする也。時に職業上、交際上、所謂山師の玄關とて、身分不相應に立派なる家に住ふものも少なからず。されど日夕その膳に上るものは、澤庵、味噌汁の類に過ぎず。今の人衣服以外、住所の美を求むるも、なほ肝腎の食物を閑却する也。

●人間の生存に最も大切なるは、言ふまでもなく食物也。食物の良否は、人の活動に關し、また人生の幸福にも關す。財政の許す限りは、滋養物を食はざるべからず。されど、身躰健康にしてよく運動するものは、滋養物ならずとも、多く食すれば、多く食しても消化し得るだけの胃の力を有すれば、滋養物相當の滋養は得らるべし。たゞ餘り運動せぬ人、身躰のあまり强壯ならぬ人は、殊に食物に注意せざるべからず。

●胃に滋養物を要するが如く、肺には新鮮なる空氣を要す。家はさまで立派ならずとも、空氣の流通よく、また空氣の新鮮なる場所、飲用水のよき處、四邊の淸潔なる所を選んで生活すべし。衣服にいたりては、身分相當に、且つ垢つき居らず、さつぱりとせるを程度とすべ

し。

●要するに、身分相當にして節すべきを節する、これ儉約也。身分不相當の贅澤をなすと、もとより儉約に反するものなるが、さりとて、立てざるべからざる義理を缺き、節すべからざるを節するは、豈に眞の儉約ならんや。

女子の交際

●我國の貴婦人、令孃の、西洋のに比して、大に純潔なるは、要するに西洋の如く、社交の盛ならざるによるべし。されど、人間は元來社交的動物也。社交によりて、知識もひらけ、わけがわかり、眼識も進み、さとりも出來るものなれば、人は男女を問はず、社交を盛にすべきもの也。娘を所謂箱入娘にし、奥樣をその名の如く奥にのみとぢ込むるは、これ人間の自然に反するものにて、且つ人を教育する所以に非ず。

●唯其れ日本の女子は交際せず、故に私情に偏し易く知識同じく、眼識絶えてなく、話柄に乏しく、わけがわからず、ひがみ根性多く、大悟洒脱の趣は、毫も之を求むべからず。男のかはより云へば、共に談ずるに足らざるもの、比々皆然り。元來知識は學問のみにて得らるべきものに非ず。平生圖書堆裏に埋るゝ衒學先生よりも多年世の中の酸いも辛いも嘗めつくしたる市井の老侠客や田舍の老農の中の或る者が、反てわけがわかり居り、悟をひらき居るもの也。學問より得たる知識は、經驗より得たる知識の確實なるに若かず。日本女子の知德をすゝめ、地位を進め、女子としての天分を完うせしめむには、學問の教育を盛にするのみにて滿足すべきに非ず。女子社交の道をひらかざるべからず。何事も其緒につくまでは、弊害あるを免れざるもの也。女子の社交をひらくにつけては、はじめの程は、幾多の犠牲者あるを免れざるべし。然る後に始めて其正路に就くを得べし。小の虫を殺して、大の虫をたすく、吾人は多少の犠牲者の爲めに、女子の社交を躊躇すべきものに非ずと信ずる也。

社會に於ける女子

●女子の世にあるは、單に子孫繁榮の具なるのみにあらざるべし。また花の顔、月の眉、社會の装飾たるのみにもあらざるべし。男女はその體格の異なるが如く其性情も亦相異なれり。男の男らしからざるは、わさびの辛からざるが如く、女の女らしからざるは、砂糖の甘からざるが如し。男女相待ちて、社會は始めて相調和す。男の意氣の豪なる處、そこに幾多の活事業あり。女の情のやさしき處、そこに幾多の物のあはれを現出す。男は働くが主也。時に猛烈に過ぎ、殘酷に過ぐるとあり。女は和らぐるが主也。常に慈悲の涙なかるべからず。浮世社交場裡、男のみにては、餘りに殺風景也。やさしき女性なかるべからず。日を男性とすれば月は女性也。明快なる晝間は、男の社會也、優婉なる夜間は、女の社會也。頭腦のはたらき、手先のはたらき、もしくは體のはたらき等、働に於て、藝能に於て女子は到底男子に若かず。女子は其情に富み、同情にとみ、優にやさしき處に、其特長を見る。また其存在の意味をも見る也。

奥村房子

山里はとなりといへど程とほし
岡のあなたの森かげにして

いつはりも飾もいらぬ山里に
わらやつくりて住むか樂しさ

大澤園子

固りなく花ちりしより自つから
心しつけきはるの暮かな

手折つる昔ゆかしきふるさとの
やへ山吹は今さかりなり

印東益子

まゝことの遊ひにむかし手折つる
山吹のみは猶のこりけり

おそ吹のさくらも今はちり初めぬ
いよいよ春はくれて行らし

河邊とし子

野となれと今も吹けりふるさとの
むかしの庭の山吹のはな

小雨ふる小田の小川になく蛙
なきて惜しめと春の暮行

木のまよりかすかに見ゆる螢火は
たか世をすてし住家なるらん

史傳

小宰相局

文學士　中内蝶二

富貴は浮べる雲の如く、榮華はうたかたの泡に似たり。清水寺の鐘の聲、地主權現の花の色、いづれか常住をしめさむ。されば、こゝに平家の一門、保元平治の戰に、源氏の流を堰きてより、累葉枝をつらねて大内山に紅の雲をたなびかし、臺階槐門にかしづきて、朝に官たるもの六十餘人、采邑三十餘州に跨がりて、綺羅堂上に充ち、詩酒の花の下には、春の風を紫撻の袂に匂はし、仙宮の秋の月には、絲竹の御遊にのみ陪して、二十餘年の榮華の夢をたどりけむも、壽永の秋風肌寒く、覺めては槿花一日の盛よりもはかなしや、昨日は東關の麓に轡を並べて十萬餘騎、今日は西海の波の上に纜を解きて七千餘人、よる邊渚に舟をとゞめかねて、四國、筑紫の磯に漂ひけるほど、一時勢を挽回して、山陽南海の諸國を討ち從へ、一の谷に城を構へて、こゝを先途と防ぎ戰ひしかど、九郎判官が奇計によりて、鵯越の間道より攻め入られ、散々に討ち破られて、名將多くは之に死にぬ。須磨の浦風に苔の花を散らしゝ無官の大夫、生田の森の下露と消えし知章など、あはれはいとも多かる中に、わけて哀れをとゞめしは、越前三位通盛が愛妾、小宰相局が上にこそ。

小宰相局は刑部卿藤原憲賢の女にて、上西門院の女房なりき。年なほ若かりしかど、才色ふたつながら世にならびなく、美人の譽禁中に高かりしかば、これを聞き、これを見たる公達ども、いづれも心を懸けぬものはあらざりけり。

頃は治承四年の春も半ば、上西門院は梅の盛を御覽ぜられんとて、北野の宮に御幸ありけるに、其時左衛門佐にて御供に侍りし平通盛、はからずも女院の御車より續いて出でたる局が姿を見そめてより、忘れんとし

て忘られず、燃え立つ戀の炎に心も焦れて、包みかねたる思ひのたけを、乳母の女房に打ち出でゝはかりけるに、女房驚きて、そは思ひの外のことなり、かの局は、女院の御覺えめでたくて、片時も御前を立ち離させ給はぬものをと答へければ、通盛は嘆息して、言よる術なしとあらば是非もなし、せめては、深くも思ひつめたる我が心を、雁のたよりに傳へてよと、書きて送りたるその歌、

吹き送る風のたよりに見てしより
　雲間の月にものおもふかな

局は年もやう／＼三五の春淺く、ものゝ哀れはまだ知りそめぬ身の、わけても心行ひきよらなる方なれば、思ひかけなく此歌を寄せられて、いと淺ましくも、また心憂き事に思ひて、返りごとさへしたまはざりき。通盛も、雲間の月の、たゞ仰ぎ見るのみにて、かなはぬ戀とは知りつゝも、なほ煩惱のきづな斷ちがたく、筆の命毛つくまでもと、書きて送りし玉章の數は幾十通にあまりけむ、かくて三年がほど焦れ慕ひしかど、たゞ一言の返りごとさへあらざりけり。

通盛は餘りにつれなきさきの心を怨みつゝ、最早再び思ふまじと、今をかぎりの文をしたゝめて、局が方へ遣はしけるに、あやにくに取り傳へける乳母の女房在らざりしかば、使は空しく歸りける道にて、あたかも局の御所へ參らむとするに逢ひぬ。その儘に過ごさむも本意なければ、持ちける文を車の簾の中に投げ入れて走せ去りぬ。局は何心なく手に取りて見るに、通盛よりの文なりしかば、よその見る目も淺ましやと、大路に棄てむとは思ひしかど、それも流石に憚りあれば、後にて如何にもせむと、袴の腰にはさみたるまゝ御前に出で、事に紛れて不圖忘れけるほどに、いつとなく其文を落してけり。

局は血眼になりて、あたりを尋ねもとめけれども、絶えて見えざるも道理なれや、落ちたるは不幸にも女院の御前にて、女院は何人の落せしぞとは定かに知りたまはねど、そと拾ひ取りて人知れず御衣の袂に隱させたまひ、後にて女房達を召し集め、斯かる珍らしきもの

をこそ求めたれ、主は誰ぞと仰せられけるに、女房達何れも知らずと答へける中に、局はたゞ一人言葉もなくて面を紅らめ居たりぬ。

女院は、かねてより通盛の局を慕へることを、ほのかに聴かせたまひしかば、局が顔の景色を見るより、忽ちそれと心づかせたまひしかど、わざと然あらぬ躰にて文を開かせたまへば、焚きこめたる妓爐の香さとかをりて、水莖の跡もいとゆかしく、餘りに人の心強さも、今はなかく嬉しくてなど、細々と書きたる末に一首の歌あり、

我戀は細谷川の丸木橋
踏みかへされて濡るゝ袖かな

かばかり切なる心の裡を、女院もいと憐れがらせたまひ、小野小町のためしもあるものを、あまりに人の難面きは、なかく仇となるものぞかし。今は一ことの返り言を、深き情に報はでやはとのたまひつゝ自から御硯引き寄せたまひて、

たゞたのめ細谷川の丸木橋
ふみかへしては落つる習ひぞ

かく御返事遊ばしつゝ、局に説きて、御媒とならせたまひしかば、局も今は否み難くて、仰せのまにく通盛が方へ靡きてけり。



さても三年越焦れし戀の、所詮かなはぬことゝあきらめ居しを、思ひがけなく女院の御恩にて、成就したる通盛の喜びは如何ばかりぞや。局とて、もとより通盛を憎しとは思はねど、貴き御方に宮仕へする身の、私の戀路に迷うては、君に對して不忠となるのみか、女の道にも缺くる次第なればこそ、固く行を正しうして難面くはもてなしけれ、一たび君の御媒によりて、嫁ぎたる良人をいかてか嫌ふべき、仙宮の玉妃天地を兼ねて契りけむ、深

き志もゆかしくて、夫婦の情交日にましてこまやかにぞなりまさりける。

さばれ、花開いて風雨の怨みあり。富貴の露の樂しき夢も、浮世の浪に破られて、相生の松、千代の榮えを見ること能はざりしぞ是非もなき。壽永の秋の初めより、源氏の旗色勢よく、さしも盛なりし平家の運命やうやく傾き、遂には一門都を落ちて、西海の波上に漂ふに至りしより、局は夫通盛に從ひて、八重の潮路にさすらひけるが、一の谷の合戰、味形の敗北となりて、討ち洩らされし人々、何れも船に乘りて屋島の磯に退かむとするに、局は夫の姿見えねば、如何したまひけむと案じ煩へる折柄、戰塲より走せ歸りし通盛が侍、局が船に參りて涙ながらに申しけるは、通盛卿には、今日の戰に手痛く働かせたまひし後、湊川の下にて、遂に討死を遂げたまひぬとありしかば、かねて期したることながら、また今更のやうに思はれて、局は言葉もなくて泣きくづをれぬ。

花の都を後に見て、浪の浮き寢の憂き月日を送りしも、いとしき夫の爲めなればこそ。今其人に先きだゝれて、存命へしとて何かせむ、日々に傾く運命の、何れは遁れぬ道なるに、はかなき餘命を貪ればとて、それも昔の人のみ戀しくて、思ひの數はまさるとも、慰むことはよしあらじ。夫婦の契は偕老同穴とやら聞くものを、暫しだに、後に殘りて憂き目を見むより、亡き人の後を追うて、同じ道に赴かむこそなか〳〵に嬉しけれと、局は其夜船の中の寢しづまりたる頃を窺ひ、舷に忍び出て、渺々たる蒼海原、何れを西ともわかねども、月の入るさの山の端を、そなたの空とばかり伏し拜みて、念佛百遍ばかり唱へつゝ、南無や西方極樂世界、大慈大悲の彌陀如來、本願過たず、別れし夫と一佛淨土の蓮葉に導きたまへといひもあへず、さと身を躍らすれば、姿は海に消えて、殘るは空しき水煙、あはれ年まだ十九の花の盛を傷ましや、芳魂去つて復びかへらず。たゞ群千鳥の鳴き騷ぐのみ。

（をはり）

故中島湘煙女史の生涯（上）

報知新聞記者　羽仁もと子

去年の晩春大磯王城山の麓に於て逝去せられた故男爵中島信行氏の夫人俊子の君は湘煙女史と號して殆と凡ての人に知られて居ります、けれども その高名なのは主に中年時代の湘煙女史で、その一代を通じて變化多かりし境遇と共に、推移し來りし性行と人物に就て知る人は稀れてあらうと思ひます、修養の道程にある我等の爲に、眞に興味ある事柄でありまする故、先づその幼時よりはじめて女史の一代を寫さうと存じまする、ソシテ殊に女史の幼時に於て注目すべき事柄は、その母君の感化の力であらうかと存じます。

●その幼時（活ける家庭教育）



◎竹香と號する湘煙女史の母君は、七十歳の高齢で今もなほ大磯なる、女史が紀念の閑居に風月を友として居られます、頗る禪味あるまた慈悲心に富んだお方で、妻として、主婦として、母として若き頃より殆んど欠點のない婦人であつたと申す事です。

◎湘煙女史は幼い時から、種々の場合に人に勝れた天性を現はして居られましたゆゑ、父君も母君も非常なる望を以て愛育されました、然れども愛に溺るゝ事は子供の爲によくありませぬ故、その教育法は寧ろ嚴重でありました。

◎殊に父君は女史の至つて幼い頃から、讀書や習字の日課を與へて（勿論女史自ら好んで居られたからですが）ドンナ事があつたと云つても決して日課を欠く事を許されませんでした、親しき人などが「お可哀相に」と申せば「ナニ馬鹿で長命をするよりは賢うして早う

死んでも構ひませぬ」と一躰お世辭のない方でにべもなく云はれたと云ふ事です、幼き子供に書物など敎ゆる害は、今では誰でも申す事であります故、私とてよき事とは存じませぬが、唯可愛いお子にソンナに嚴しくなさつて迄も、立派な婦人にし樣とお思ひになつたのは、親たる者の學ぶべき事と存じます、湘煙女史は斯う云ふ間に育てられたと云ふ事も記臆すべき事柄です。

◎女史の鄕里は京都でありました故、衣裳やお化粧に氣を附けるのは土地の習慣でもありましたろうが、殊に女史の母君は嗜みのよい又潔癖の方でありまして、女史の極く〱幼い頃から、毎朝々々脣に紅〻さしておやりになつて『御本を讀むのは大事ないが、お饒舌をすると直に此紅が剝ちて仕舞つて汚なうなるから』と敎へになり、夫とはなしに寡言の德と美の重んずべき事とをお知らせになりましたゆゑ、女史は他人の怪しむまで子供の時から至つて無口に生ひ立ちました。

◎斯う申すと定めて驚く方もありませう、何ぜなれば女史は二十年前に於て、婦人の雄辯家として知られて居りましたゆゑ、然れども私供は時々言葉の多い人に筋道たつた談話が出來ず、沈默の人に却て驚くべき能辯の技倆を見出す事がありまする、女史も慥にその一人でありましたので、婦人は年を寄るほど口丈は達者になるとか申しますが、女史は晩年に於ても寡言の方でした、そして其談話は他人をして傾聽さする一種の魔力を持つて居ました、故後藤伯がゞ『岸田(女史の本性)は顏よりも聲が奇麗だ』と仰有つたさうで、眞に美音のお方でした、容貌の美に就てもまた澤山の方の知つて居らるゝ通りです。

◎女史はまた非常に潔癖なお方で、五才頃までは決して地べたを歩きなさらなんだと云ふ事です、私は敢て殆ど神經的にまで極端な潔癖を宜いとは思つて居りませぬが、兎に角奇麗好きは人間の美德かと存じます、女史の潔癖は生れながらでもありませうが、また母君の躾から得られた所も多い樣です、私はいつか女史の母君と散歩して居りましたとき、或家に子供のおしめと

尿のかけてある蒲團とが干してありました、母君は『あなたなぞもその中お子を持たれるのぢやが、子供は寢るときと起るときには、屹度尿をさしてやるもの丶、夜中にも二度程は毎晩同じ時刻に目を覺して、氣を附けてやりさへすれば、滅多におしめすら汚さぬものです、蒲團を汚されるなんぞは、全く母親の惡いので‥‥俊子の二つの時に温泉に連れて行つて三週ばかり泊つて居た事がありました、同行のお人が此お子さんは不思議なお子だおしめを汚さんと云つてであつたが、母親の躾一つです、始終濕つたおしめに包まれて育つた子供はどうも出世をせぬ樣ぢや』賢き母親は幼時に於て子供一代の幸福の基礎を据え、不注意な母親は子供の身に附いて居る幸の運命までも毎日々々奪ひつ丶ある樣なものです、湘煙女史の潔僻は唯に外界のもの斗ではなく、その心に於ても何よりも潔白を



愛しソシテ女史自らも非常に純潔なお方であつて、却てその爲に世の純潔でない人々より或場合には疑はれる程てした、此樣な美談も矢張母君の心掛と實行とより出て居ると思ひます。

◎女史はまた子供の時より大層同情に富んだお方でまた非常に早熟の方でありました故、萬事に氣の附く事大人も及ばぬ程てした、八つの時には已に道學先生のお家に通つて四書五經を習つて居られましたと、先生のお家に若先生と云つて時々代稽古をする方は餘り賢い方でなかつた樣て、なさぬ中の大先生の奥さんに隨分ぶあしらひをされておいでになりました、女史は氣の毒て堪まらなかつたと見えまして、それとはなしに、或日母君に『若先生を一日家に呼んで上げて下さいませんか』と云はれました故母君は快よく承知して、頓てその日になりますと種々のお重詰を

手づからおつくりになりました。八才の女史は其中のお煑しめに氣を注けまして『かあ様は毎度何でも奇麗におつくりになりますけれど今日のお煑しめは格別です』と一つは母君の勞を謝する心でありましたろう、母君は『汝にも分りましたか、此もみな汝が可愛からで……お煮しめでもザク〳〵切にしてあつたなら先生が斯うぞんざいな母親の子供なら私がいくら骨折つて敎へてやつても望がないとお思ひになるだらうと思ふからぢや』と云はれた事もありますさうで、左樣までも周到に母親の責任を盡くされたかと云ふ事は別として、湘烟女史の文字に繪畫にその他萬事に實に器用でありましたのは、母君の萬事に就て日頃粗末な仕打をなさらなかつた德の故かと存じます。

〇また女史は十一の時に自分よりは餘程年上の某令孃と共に、外國敎師の許に英語の稽古に通はれました、敎師には日本婦人の細君もありましたのに、令孃は何う云ふ心得違ひか一方ならず敎師を慕つて居る樣て、用事を作つては何時でも後に居殘るのです、或日敎師の細君は俊子さんを陰に呼んで、夫とはなしに令孃の樣子を尋ね、俊子さんは何も存じませぬと答へたときに、涙ぐんで居りました、女史の同情と俠氣とは其時堪え難くなりました、別れる時は去りげなく立ち去りましたが、翌日よりは令孃の歸るまで自分も歸らずにジットして居りました、令孃は戀ゆへに優しき心も鬼になつてか俊子さんに辛くした事は一通ではありませんでした、然れども一月ほど辛捧して居ります中に敎師の方でも考へましたか成るべく親しまぬ樣に致しました、彼是する間に令孃は或知名の方の緣談に應じて嫁いられましたから、令孃の名譽も敎師一家の平和も遂に全うする事が出來ましたので、細君は十一の少女の前に涙を流して感謝なされたといふです、元の令孃後の某夫人も程經ては心私かに萬斛の感謝をば捧げられたてありませう、女史はかゝる事をば何十年の後までも決して口外なされぬ事てありましたが、晩年永き間の病牀に母君一人を友とせらるゝ徒然に、折々微笑つゝ漏らされた事柄です、私も今までは此事を筆にも口

にもいたしませんのでありました。

◎幼き湘烟女史は大抵察する事が出來ました、次には中年とその晩年に於ける湘烟女史を寫さうと思ひます、その修養の工夫と長所また短所、若き婦人に幾多興味ある好思料かと存じます。

（未完）

歴史上に散見せる日本女子（三）

鹽井ふく子



忘らるゝ身をば思はず誓ひてし
　人の命のをしくもあるかな

右近が歌にて、かつて、互みに心變らじ、もし心變らば神罰あたりて命をとり玉へと神かけて誓ひたるに、男の心がはりして、あだし人にちぎりて、右近を忘れたれば、忘られし己が身のくやしきよりは、約を違へて、神罰を蒙らん男の命のをしくもあるかなといへるにて、女はもと至情を以て男を戀ふ、故に恨みずして、かへつて、其の男の命全からん事を祈るなり。

かやうなる至情を以て、君にも親にも夫にも、はた事にも接しぬれば、日本國婦人は、人の命を奉じて、必ずよくその命をはたしたり。

かけまくもかしこけれど、天照大御神、汝命、天をしらせとの父命の命を奉じさせ玉ひて、今に御光りの絕えぬを初め奉りて、かの天尊降臨の祈り、汝は手弱女なれとも心をゝしく、かんばせも殊の外威あり、いむかふ神に面がつ神なり、汝先き立ちて下るべしと天照御神の仰せあるや、宇受賣の命は直ちに命を奉じ、一騎まづ之が先導をなしたり。また景行天皇の御女倭姫命は、天皇の命を奉じて、はじめて齋宮にたゝせ玉ひ、誠によくいつき玉ひて、かりにも神前をけがし玉はず、其の他代々の齋宮、齋院、みな御身いさぎ

よく、行ひ正しく、重き任をよくはたさせ玉ひけるも偏へに至情を以て命を奉じ玉へばにこそ。

凡そものゝ上手と云ふも、才いみじきと云ふも、もとは至情を以て物に接し、業をつとめたればにや、世に清少納言を才いみじきものとす、誠に才もいみじ、いみじけれど、ひとり才のいみじきのみにあらず、至情いみじきものなりと我れは思ふなり。さるは十二月十日あまりのほどに、雪いと高うふりたるを、女房どもなどして、ものゝふたにいれつゝ、いと多くおくを、同じくは庭に誠の山をつくらせんとて、さては、殿守司、侍などあまた召してつくらせ玉ひ、ろくなどとらせて、さて此の雪の山いつまてあらんなど人々語りあひけるに、清少納言はむ月の十五日まて侍りなんと申すを、中々にさはあらんと后の宮にも仰せ玉ひ、女房どもは、みな、年の内つでもりまてもあらじと申すに、清少納言も心の中にはあまり遠く申してけるかな、つひたちなどにも申すべかりしものをと心には思へど、もと意志つよき清少納言、一度云ひ出てし事、よしや違はゞ違はんとも、あとには引かぬ氣に、否、必ずむ月の十五日までは候ふべしとて、ひとり強ひて云ひはりけるが、また十二月の廿日のほどに、雨はふりたり、さばかり泣く心地やしけん。されども消ゆべくもなかりき。夕べ毎にうち守るに、少しづゝ消えゆく如くなるに、いとゞ心もとなくて、白山の觀音これ消えさせ玉ふなと祈りけるもおかしからずや。さるほどに雪山は消えもせて、年はあらたまりぬ。つひたちの日、雪また多くふりつもりたるに、さては白山の觀音の御利益にや、うれしくもふりつむ雪かな、ふれ〳〵となほも心に祈りけるに、これはあいなし、初めのをばおきて、今のをはかきすてよと后の宮の仰せに、憎くや殿守司かしこみて、後のをかき拂ひたり。春も四日をかさねぬれど、雪の山はまことに越のにやありけん、消えもせであるに、不思議にもかちにけるかな、いかて十五日まちつけんとねんずるに、何の十五日まであらんや、七日までえすぐさんやと云ふ、しばしのほどもくやしさよ、とするほどに、后の宮俄かに内へ入らせ玉ひ、少納言も從ひまつる事になりぬれ

は、雪山の心にかゝりて立ちもかねぬるを、后の宮も人もいかで十五日まであらんなど云ふ。少納言はいよいよをしくて、こもりと云ふものゝ築地のほどに居たるを呼びよせて、此の雪の山、いみじく守りて童などにふみちらさせこぼたせで、十五日までよく〳〵守り侍らはせば、其の日にいみじきろく玉はらん、かへす〴〵も守りてよなど、くれ〴〵聞えて、さて七日のほどに出るもうしろめだく、十日の日に人をして見せにやりしに、なほ五六尺ありと聞く、うれしう思ふに、十三日の夜、雨いみじくふりぬ、之れにて消えぬらん、今一日をまちつけてもふれかし、憎くき雨かな、白山の観音何とて守らせ玉はぬと、よるも起き居てなげけば、聞く人、物狂るほしと笑ふ。さて、あくる日をまちかねて人をやりて見すれば、わらうどばかりになりて侍りと聞くに、いみじううれしくて、いつしかあすにならば、いととう歌よみて物に入れてまゐらせんのと、其の夜もねぶらず、朝まだきに折りびつもたせて、きたなき所はかき拂ひて、これに白からん所を多く入れて來と云ひ遣はしげるに、使かへりてはやく失せたりと云ふ。



少納言は今やもてかへる、歌おかしうよみそへて人にも語り傳へさせんとまちつけてありしに、こはあさましや、さりても、昨日さばかりありしものを、夜のまに消えはつる事の不思議さよ、誰れか憎くがりてとりすてしにはあらずやと泣かんばかりになげき云ひをるを、内より仰せ言ありて、少納言よ、雪は今日まであリつやとの玉はす、如何に口惜しかりけん、さりても、年の内にもと云ひしほどの雪、昨日の夕べまでも侍りつるを、夜のまに消えしいぶかしさ、人の憎くがりてとりすて侍るにやとおしはからると啓し、のちの

ちも其の事のあまりに殘念なるに、上への御前などにも此の事を申してはなげきけるに、天皇も皇后もいみじう笑はせ玉ひて、さやうに深く思ひつるものを、たがへたれば罪得らん。まことはあまりに云ひあてし事のをかしさに、十四日の夕さり、侍してとりに遣はし、翁のいみじう手をすりてなげきけるを、仰せ言ぞ、少納言の使來らんも、とりすてしとゆめ云ひそとて、雪の山かき拂はせけるが、まだ高くてなんありしとの玉はれしに、さればよと思ふもうれしかりしならん。天皇もいみじう感じさせ玉ひ、日來はなべての人と思ひつるが、これにぞあやしく思ふとの玉はせけるとかや。さばかりの少納言、その御言葉のいかばかり身にしみけんと思ふも涙ぐまるゝばかりなり。かやうのはかなき事にも、かやうの心づくし、さて、君を思ひ、父を思ひし赤心も思ひくまれて、元輔のあとゝ思へば、なましなる歌をよまざりしもめでたく、皇后かくれさせ玉ひて後、貧屋に閑居したりしもなつかしく、さばかり才いみじく、心

にぎはしかりし人の、閑居の後歌をよまず、文をつゝざりしも、君がよを去り、時を失ひしをなげきし偏心も見え、殊に駿馬の骨を買はずやあると殿上人を罵りしも、俗人を憤りし怒氣、赤心にもれしにやと思ふに、なつかしくも、また心地よくも思はるゝなり。

またよに俳句を以て聞えたる加賀千代、これまた決して輕薄なる性にあらず、そのはじめて廬元に敎へを受けんとするや、時鳥の題を與へられしに、沈吟寸時、一句をよみ出てけるに、あまりにすぐれて初心の口吟とも覺えざるに、千代子の句にあらずと疑ひて、うけひかざるに、千代はそのまゝうち捨てゝ爭はず、今一句よみ出でしかど、廬元耳も傾けず、また一句よみ出てゝ今度はと吟ずれば、こは、如何に、廬元は何時しか打ち眠りて、いびきの聲高く答ふるのみ。あまりの人の行ひなれど、千代子は憤りもせず、なほ如何にもしてよき句を得んものと、夜の更け行くも知らず、一心に考へ居りけるほどに、朝日子いつしか窓高う上ぼり上光りに、廬元

はじめて目さめ、千代子のあるにおどろき、未だ其處に居りてか、夜もあけにけると問ひけるに、千代子は思はずも一句

ほとゝぎす〳〵とてあけにけり

と答へけるに、廬元枕を叩きて、感嘆措かず、いみじくもよまれたりとて、遂に子弟の契りを結びたりと云ふ。

またある時、「なほ七度の別れなるらん」と云ふに、上の句をつくる事ありしに、流石の千代子も、七度八度考ふれど、考へつかず、いと口惜しく あけくれ思ひめぐらしけるが、思ひつかれて、ふとまどろみけるに、八重櫻の花の一片、ひら〳〵と風に吹きたるに、千代思はずも

一重づゝ風の吹きしく八重櫻

と云ふ句を得て、うれしく飛び上れば、ふと夢はさめにけり。あはれ夢にさる秀句を得たるも、一心こりしほど知られていとめでたし。



後鳥羽院に仕へし女に、宮内卿と云へるは、村上の御門の御後に俊房の左の大臣と聞えし人の御末なれば、はやうは貴人なれど、つかさあさくて、うちつゞき四位ばかりにて失せにし人の子なるが、まだいと若くて、歌に志いとあつかりしが、千五百番の歌合せせさせ玉ふ折り、院の上の玉ふやう、此度はみな世にゆりたるふるき道のものども なり、宮内卿はまだしかるべけれども、けしうはあらずと見ゆればなん、かまへてまろが面おこすばかりよき歌つかうまつれと仰せらるゝに、面うちあかめて涙ぐみけり。



靑山有雪（興風會兼題）

淺緑かさなる山のおくなから
霞をもるゝ雪も有けり　德大寺實則

朝毎に山のみとりは添ひゆけと
猶むら消に殘る雪かな　蜂須賀茂韶

みよしのゝ靑根か峯も名のみにて
今朝白雪に埋れにけり　久我建通

冬枯もしらぬ常盤の山松の
梢にも今朝積る白雪　鍋島榮子

つくはねや葉山しけ山くまとりて
見ゆるは雪の積るなりけり　諏訪忠元

山のはの松の緑は猶見えて
梢はかりに積る雪かな　長谷信成

浮雲はあとなく晴れて遠山の
高ねに積るけさの白雪　柳原愛子

大空の緑の末に晴渡る
松山しろく雪ふりにける　小池道子

峰に今朝雪のつもりて常よりも
緑さやかに見ゆる山哉　南郷柳子

見渡しの山の檜原も松原も
緑またらに降れる雪哉　西三條實義

はこ根山茂れる松の木のまより
さやかに見ゆるふしの白雪　北郷久政

松はかり茂りあひたる山のはに
今朝初雪の積りける哉　田中瀧子

遠山の緑のまゆは細けれと
かゝりし雪のいちしろき哉　荻原殷雄

神山の宮居に茂る榊葉に
ふりかゝりたる雪の白ゆふ　東儀季熙

空の色をへたてゝけさは遠山の
高根はかりに積る白雪　芝葛鎭

音羽山松の葉こしの白雪は
木の間の瀧の心地こそすれ　小出粲

池上鶴（蓬萊園發會）

かひなれし池のみきはのまなつるは
ことしも千代のかけうつすらん　久我建通

ときはなる松もうつれる池水の
うへにたちまふたつのむら鳥　嵯峨實愛

まひあそふ雲井の鶴のかけみえて
千代をよせくる池のさゝ浪　蜂須賀茂韶

このそのゝ池にあそへるあしたつは
ぬしをいはひてきたるなるらん　鍋島直大

あしたつも心ゆたかにあそふなり
池のみきはに千代をかさねて　津輕承昭

庭の池のこゝろもふかくすみなれて
千年をちきる友つるのこゑ　松浦詮

いけ水にかけをうつしてこの園に
いくよなれけん鶴の毛衣　園基祥

ひろ庭の池の洲になくあしたつの
ねもあたらしくあくる年哉　長岡護美

ところえてたつもすむらん水清き
蓬か園のいけのみきはに　前田利嗣

この園の池のほとりにすむたつの
君をことほくこゑそのとけき　水野忠敬

なかしまのいはほに鶴もあそひけり
池のこゝろものとかなる日は　大田原一清

いへの名の松かけしめてすむたつの
ちよの姿もうつる池哉　渡邊清

ちとせをもなほあかすとやあしたつは
とこよの園の池にすむらん　小畠美稻

かめのすむ池のみきはの松の上に
ちとせをよはふたつかねそする　長谷信成

とことはにすむ池水はちとせへむ
たつのかけみる鏡なりけり　井上正直

このやとの池のみきはにたちなれて
ちよゝひかはすあしたつの聲　藤枝雅之

ひなつるの數そふ池はとしことに
ちとせのかけもすみまさりけり　金子有鄰

すみなれし池のみきはのあしたつは
君と千代へん心なるらむ　小原[illegible]

しづかなる池のみきはに君か代の
ちよをことほくたつかねそする　松浦益子

あしたつもこゝろやすけに遊ふなり
浪もさわかぬ池のみきはに　同　閑子

春の歌十首　伯爵　東久世通禧

早咲のうめのはつ花にほひけり
下葉もいまだ殘る木ずゑに

昨日けふわかくめぐみてかへるでの
わかめうるほし春雨のふる

ふき拂ふあらしにちらぬ白雲は
松の木間のさくらなりけり

大井川ふねさしのぼせ清たきの
春しづかなる花ざかり見ん

春の夜は木の下闇もなかりけり
雪かとまがふ花のさかりに

小車をいづこによせん都路は
こゝもかしこも花陰にして

麥畑ははや夕づきになりはてゝ
そらに雲雀の聲ぞのこれる

しめやかに春雨ふりぬ旅やかた
かすみ汲みつゝ一日暮さん

あしび咲く野邊の細道分ゆけば
霞のおくにきゞすなくなり

庭の面のちらぬ櫻もちりそめて
今朝も昨日の心地こそすれ

旅の歌十首　小池道子

里人の知らぬところも見つる哉
たびの心のゆくにまかせて

たひ衣たちやすらへば故郷の
空ばかりこそ返り見らるれ

うきこともかたみに語り慰めて
　旅は友こそうれしかりけれ
雲ゆきはよしと聞しを旅ねする
　山べは雨にまたなりにけり
旅にいでゝ思ひしりけり打日さす
　都のうちのすみやすき世を
天さかる鄙の長路はともし火の
　見えての後もはるけかりけり
故里にかへりし夢はさめはてゝ
　しらぬ軒端に松かぜぞふく
ゆけど〳〵おなじ篠原小松原
　いづくに宿る家はあるらむ
山路のみたどりしうさも忘られぬ
　うら珍らしき浦のけしきに
めづらしき海山みれば家人に
　語らまほしくまづ思ふかな

春の歌十首

佐々木信綱

君がゑみし彼日彼時大宮の
　花の木陰の今も見ゆるかな
わらぶきを今年しかへて嫁とりし
　堤のいへに桃さきにけり
一年のたのしきときに一とせの
　花のおほきみほゝゑみ給ふ
樂堂のものゝ音たえて人ちりて
　ひろき芝生に蝶ひとつ飛ぶ
一つ〳〵思ひ出おほき垣根みち
　むかしながらに桃の花さく
學舍のしるしの旗も霞むなり
　鈴菜さく野の春のゆふぐれ
いさらこの裏町通りあさゆけば
　杉の垣根に梅のはなちる
栃栗毛の車きしりて朱雀路の
　あしたのどかに燕とぶなり
青柳の木かげにたちて見送りし
　すがたも見えずはるの霞に

石に座して昔をかたる旅びとゝとの
　菅笠のうへにつばき花ちる

梅 (竹柏園歌會兼題)

折る人もをしめる人も佇みぬ
　梅のはなさく一つ家のかど　久我建通

長閑なるあしたの風に咲にけり
　南の軒のうめのはつはな　東久世通禧

雪とのみ見紛ふまでに咲にけり
　片やまさとの梅のはなその　津輕承昭

都ひと來ても見よかし山さとは
　世に似ぬ梅の花もありけり　諏訪忠元

南さす梅の小えたはさきみちて
　北の木末もゑみそめにけり　太田原一清

樂しさは日毎にましぬ梅その丶
　きのふの莟けさのはつはな　千家尊福

湘南に寒さをさけてかへり來ぬ
　大臣のいへの梅さきにけり　木下利玄

夕月夜さむき御壺のはなかげに
　梅ヶ枝うたふ公達やたれ　小出粲

梅さきて空にもかすむ月の瀬の
　里なつかしき頃は來にけり　三輪義治

賤か屋の垣根のもとゆ庭の面に
　咲つゞきけり梅のひとむら　三浦守治

かた枝は土につくまで朽かゝる
　老木の梅も花になりにけり　[illegible]忠雄

花ひとつ二つとさかぬ軒の梅は
　老木なからも春をしるらむ　小原[illegible]之

いさきよき心を花にあらはして
　姿をゝしくかをるうめかな　相澤求

春さむみ外出をいとふ老の身の
　友としめつる軒のうめか枝　矢田香圃

みとりはの鳥の叫にゆめさめぬ
　羅敷の神女契はかなや　上眞行

さきかけて咲出る梅は進みゆく
　みよの心にかなふなりけり　大野[illegible]

和田の山高根に雪は見ゆれとも
ふもとの園の梅さかりなり　井上公三

武夫のをりしゑひらの梅かえは
大和こゝろの姿なるらむ　東郷矢一

手折り來てさし挿みたる花瓶の
老木の梅にあさ日さすなり　永田芳次郎

春をわさみ木下川堤さむけれと
ふかくそにほふ梅のした風　土田道一

さく梅の梢もみえぬ木したやみ
そても袂も香ににほふなり　大田原清治

心あるひなの友よりおこせけり
文につゝみし梅のひとはな　細川玄重

家居あれは梅林あり家居あれば
梅はやしあり山を背にして　山崎房吉

片かはの氷はとけしみそかはの
めくる垣内に梅の香そする　石川季遠

したり枝にうす紅のはなさけは
くちたる梅も若かへりけり　祐乘坊弘郎

縣の長はめましゝかと捧けさりし
村長の門のうめさきにけり　澤　六

國の司三たひたつねて過しとふ
隱者のいほの梅のはなさく　竹榮俊恣

梅さきぬわか裏山のうめさきぬ
君しとひこは道しるへせむ　渡邊久園

情こめて友かおくりし紅梅の
花はにほへり文机のうへに　遠藤千浪

山をめくる萱葺の村むらなへて
さきたる梅の花おほきなり　石村千亦

馬にのりて野路の梅をる韓人の
ふりわけ髮の花ちりかゝる　横山碩

二百階石段のほる神やしろ
のほれはさける紅梅のはな　關屋祐之

たち並ふ園生の梅のさきかけて
いつれか早く咲はしむらむ　髙木敬二

去年の火事に燒にし家の梅枯て
今年も花のさかんともせす　龜山新一

繪筆手に山道傳ひそゝろゆけは
　翠のねすなり梅さけるやと　金井宣章

梅咲きぬ春風ふきぬうくひすの
　初音はいつか鳴んとすらむ　東條正一

畑中にゐみはしめたる梅のはな
　主じを知らは一枝こはまし　多喜槐三郎

幹くちし庭のおいきのしたり梅
　したれ亂れて花さきにほふ　新井千湧

あゝ君に昔のなさけ今もあらは
　人にやるへき白梅ならす　辰馬鶴呂

松の戸をあけて眺むる梅のはな
　花の香さむし山のしたいほ　池田宗鶴

今年はと危ふみたりし老のうめ
　おもひの外に花さきにけり　樋口寅二郎

人の世と神のみ代との別れ路の
　しるべにさけり白梅のはな　加藤常鶴

家もりの翁わらうつ日あたりの
　あたり長閑に梅さきにけり　栗田土雄

我妹子と別をしみてつみとりし
　梅の一ひらふみよりおちぬ　北條數馬

山寺のとしふりし梅さかりにて
　鐘樓のうへに月淡くてる　松守久雄

白梅のおい木に近きまとあけて
　白髮のおきな八雲琴ひく　相馬御風

實にならは又こゝかしと里人の
　かたる山路の梅のしたかけ　井上喜信

野も山も梅の盛となりにけり
　みすみの袖や香に匂ふらむ　茨木昭一

すりなかす墨の香ならて窓近く
　にほふや庭のうめのはつ花　増山三鶴子

うなゐ子か急しく我にしらせ皃
　鉢のうめかえ花のさきぬと　大河内園子

池の上にちりうく梅の花ひらを
　餌とや見るらん鯉の群くる　檸山常子

春あさみ巣こもりしたる鶯も
　まつさく梅に夢さますらむ　兒玉千代子

なきわことと去年は訪來し木下川の
　老木のうめの今さかりなり　松井とも子

北向のうめのしこ枝さきにけり
　きりのこされて賣殘されて　宮本より江

祖父君のよに植なへし梅はやし
　はるくる毎に惡をそおもふ　大竹以勢子

ありし世に好みて愛し人ならむ
　おくつきのあたり梅數多あり　松浦島子

しきみうるみ寺の門の小さき家の
　みなみの軒に梅のはなさく　淺井畝子

けふあすはまた早けれと師の君に
　折りてさゝくる軒の梅かえ　堀孝子

風寒みちりくる花を袖にうけて
　梅の木陰にうなゐ子あそふ　堀越科子

み社に筆たてまつり梅たちて
　手ならひそめし昔ゆかしも　大村八代子

そゝろにも筆執て見るおした哉
　紅梅にほふひんかしのまと　長谷川柳子

一つ樹に一つつほみの梅なから
　おくれ先たつ宿世ありけり　久保花子

初手に友とあそひしうふすなの
　むかしの梅は今かさくらむ　中村文子

はつ午の祭にきほふもりかけの
　稻荷のみまへ梅さきにほふ　有賀はる子

月さむく梅か香かをる畑みちを
　折梅さけてゆく法師かな　市田とよ子

ゆけと〳〵梅盛なりいつこにも
　春のいたらぬ里やなからん　木山娃子

垣結しあるしはうせて里の子の
　かさしとなりぬ紅梅の花　長谷部和子

幼兒の抱かれなから手をのへて
　一花つみぬ紅梅のはな　關屋愛子

玉ほこの道のかたへの梅のはな
　しはし旅人の心ねきちらふ　四方畝子

紙のへて寫し見んかな文机の
　かさしの梅のあまりに淸き　金井繁子

貴家の庭せまふして紅梅の
　主まち顔にほころひにけり　田中近子

汝か友の庭の紅梅はなさきぬ
　いさ鶯におひにとひこよ　原田のふ子

春の日を背中におひて物ぬへる
　をうなか宿の梅さかりなり　岩本芙玖子

一村の春の日みちてうめさけり
　かしこの軒もこゝの川へも　岡田文子

我宿の一木の梅のはなの香に
　忍ひこそやれ月の瀨のやま　鈴木安子

月の瀨の道の行てのさとつゝき
　匂ひゆかしく梅か香そする　池谷久子

梅の花うつし植えしより都なる
　友もよひけりこの山さとに　池谷朝子

山もとに家ゐしをれは峰にをに
　さきつゝく梅を我物にみる　稻垣安子

峯の八峯里の七里さきつゝく
　梅のなかゆく谷かはのみつ　佐々木信綱

吹雪集

宮澤すみれ

玉鱗縹渺として我が前溪を埋みぬ、四隣寂々何等の聲なく、何等の訴へなし、この時に當り想なからめや感なからめや、即ち筆を執り紙にむかふ、而かも硯の水こほりてすれども〱いろうすし、温かき生息を與ふるも猶解けず、爐に火を投じて漸く水に復するを得たり、我が心つめたうして、小さき〱硯を恣になし能はざりしか、はたまた一片の火、なみならぬ魔力を備へしにや否や、けふのそゞろごと、題して吹雪集といふ、蓋し所以なきにしもあらず。

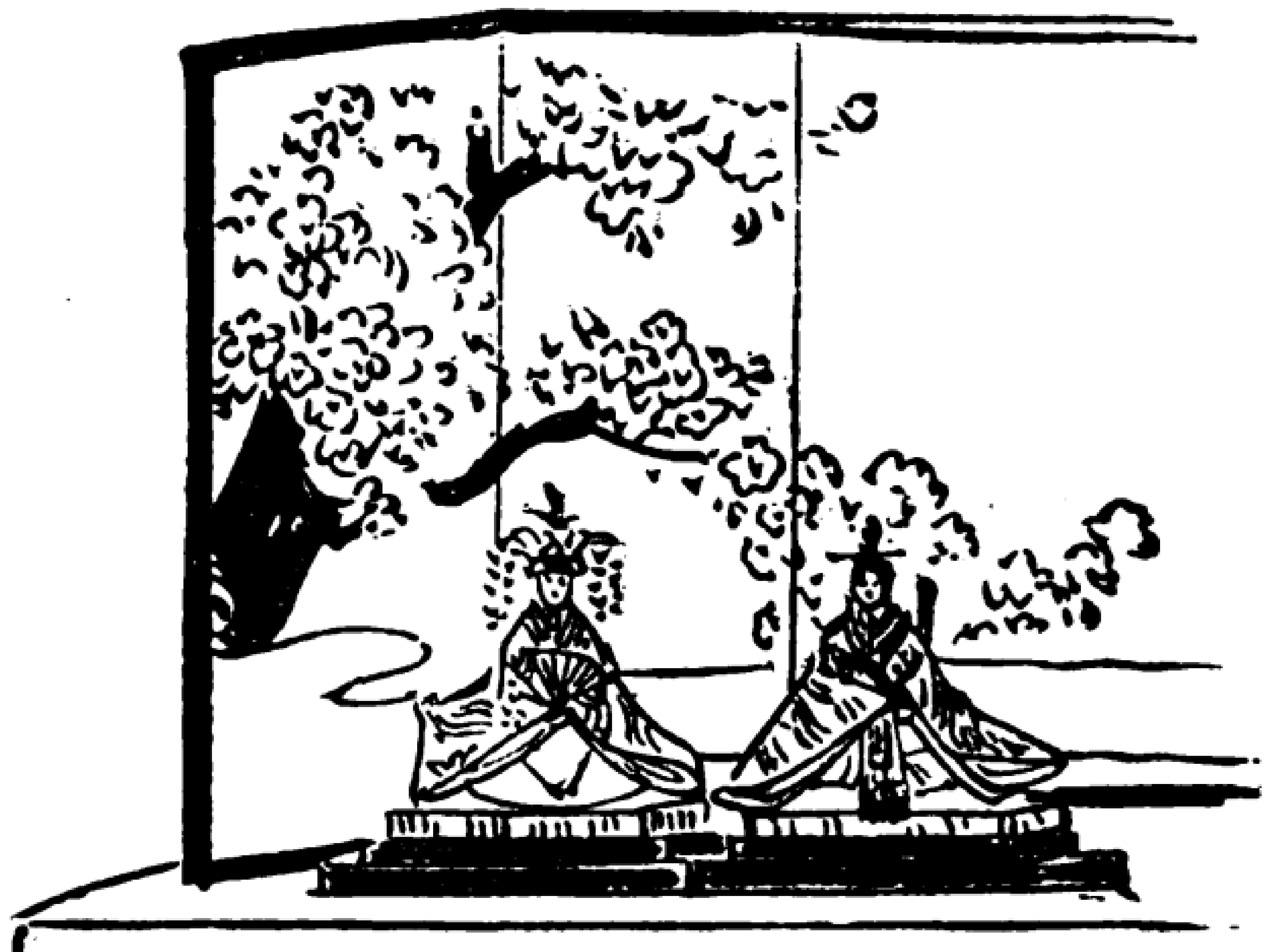
◎詩人と其姉妹

詩人と其妻、人皆説く、近くは星巖に於ける紅蘭、中島信行男に於ける湘煙女史の如し セレーの妻某子また文筆勝れたりときく、夫が伊太利の海に溺死するの不幸に遇ひ、夫人悲歎やるかたなく、涙に筆を染めて一篇の書なりしといふ、新誌傳へて「詩を解するの賢夫人花の如きあり」といへるは、藤村氏をことほぎし文字なるらん、今の世、むかしの世、高き詩人には必ず詩を

解するの妻侍るあるべし、さくならく、ウチーズウチーに深き同情を表はし、そが詩を尤も能く聽き、尤も能く味ひ、尤も能くよろこびたるは、其夫人に非ずして姉妹某孃なりしと、うらやましきはレーキスクール(湖水派)の詩仙なり、彼百の屬の中に立ち、この好讀者を得たる、而かも血を分けつる妹ならんとは、嘗て星野天知氏が一妹にゆふ子孃あるをきゝぬ、尤も詩腸に富めりといへり、孃今猶健全なるや否や、文界この人の消息を傳へず、況んや多讀ならざるの我、知るによしなけれど、むかし〳〵其名と其筆と其おもかげを見たるの我、追想禁する能はざるなり。

◎やよひ日記

我に一女あり、やよひと稱す、この子三つの折、「やよひ日記」といへるを編みてかいつけおきぬ、志賀先生の



「鈴江日記」の如き花々しき事なし、もとより山家のわびずまゐ、罪なうして配所の月のそれいふもをこがましけれど、まことは寂しき〳〵北信の奥に、この子がゆくへをいのれる母、折にふれ時に従ひての日記は、母にとりて唯一の樂なり、其一節に曰く「四月三日、母ちやん御病氣よろし、叔母ちやんにおんぶして、御堂へ行く、(御堂とは善光寺の事なり)、母ちやんも御一所なり、本堂へまだ着かぬ時から、私、手を合はせて、マンマンマン〳〵と拜がみしものから、母ちやん驚いて、何事のおはしますかは知らねどもの句、おもひいだしゝと仰せられ、何等の教理に關せず人間には、宗教心のあるものと、叔母ちやんにかたられぬ、それから城山館へ上りて、大廣間の美くしい大きな〳〵ランプを見、私また手を合せて拜がみしところ、母ちやんは私を

お志かりなされしが又、叔母樣に向ふて、人は皆美の前にひざまづくもの、ヤアちやん無心で合掌せしは、無理ならぬ事と仰せられぬ」云々と、蓋し昨春病を得て、長野病院に通ひし當時の事共なり、宗敎心、美術心、小さき三才の娘に敎へられて、母隨喜の涙にむせびけり、爾後世人の迷信を笑はず、美人を罵らず、母これより稍高尚なるを得たり、蓋し負ふた子に敎へられて淺瀨を渡りしものゝ類か。

◎雪の日

雪の日、琴をきゝておのれが罪を悔いしもの、そは故一葉女史の作にあり、女史崇拜家、是等の文字を能く記憶すべし、我もまた能く記臆するの一人なれど、今わがいふはそれに非ずして、雪枯木にかゝれるの趣味をとかんとするなり、人何ぞ無情なる甚しきや、松柏の操を稱へて、いまだ枯木の操をとかず、彼は「冬」にせまられて其美を捨て、其粧をすてしもの、きかずや昔、嵯峨野の奥のいたましき女性等を、彼等は淸盛が「色慾」に咀はれて、みどりの黑髮をたちしものなり、錦の衣を更へしものなり、何ぞ枯木のあはれと相似たる事の近き、而かも彼等、朝夕念佛を稱ふるも猶、深き〳〵心の底には情火のひそまてやは、滿山の枯木、一點の笑みなく一點のみどりなし、操なしといへる世人、見給へ此の枯木が根には、燃ゆるばかりの情あり、ライフありて、再び「春」のなさけに遇ひ、葉を生じ花を生ずるに非ずや、雪降る日のかへさ、山のもとをすぎて、おもふこゝろをかいつけつ。

◎とりかへばや

今は昔、やむてとなき家に御同胞二人おはしぬ、一人は姫君なれども雄々しうおはして弓矢をこのみ給ひ、一人は若君なれども、優さしうおはして、つゝましげなる御さま、父君に見ゆるも猶恥ぢ入り給ふといふ物語あり、とりかへばやと父なる人仰せられしも理なきにあらず、まことに讀みもてゆけば、異樣の感にうたれて、淺間しとおもふことのみなり、而かもこは唯一編のローマンスに止まるものならんや、滔々たる天下、異の男子異の女子幾人かある、其妻に唯々諾々の歐米人、と

りかへばやの第一なり、女の如き男、男の如き女、聖者らしき僞善者、皆名目をとりかへばや、然れども世は毫も知らざるもの丶如し、ひとり春の花、秋の紅葉、自然は能く其の時にかなひて世をうつくしうす、たれか春に楓をおもひ、秋に櫻をおもふものあらんや、我眞の女、眞の男たらん事をつとめて、かの若君姫君の變性くりかへさゞらんを、世人に祈ることとふかし。

◎葬送の禮

途上富豪の葬式に遇ふ、美をつくしたる棺、うつくしき造花、ましてそを送れるはいづれも紳士貴女の車に乗れるなり、棺の主の幸運たりし事おもひやられて頓みに涙もいでず、あはれなるは無名の徒、いとすくなき人におくられて死出の旅にむかふにぞありける、むかし露國皇帝が一兵卒の棺にともなひゆき給ひしてふは事實なるや將たいたづらなる詩歌なるやは知らねど、大なる御位と大なる威嚴をも顧みず、死の傍らに侍り給ひしは優ならずや、寒夜御ころもをぬぎて、民のくるしみを御



身自ら味ひ給ひし我が朝のみかどの御心と東西好一對のありがたき事にこそ、かぎりなくいみじきは山家の風俗なり、我にアービングが筆あらばルーラルフーネラルを畫きいだして都人士の一顧を乞はんに、鈍し拙なし、この筆やこの筆や、我去年の霜月眞友ひとりをうしなひぬ、而かもこの人の死や、廣き世界、かしこき世界に對して、何の意味もなく、何の關係もなけれど、"Oh the differenu to me" 彼女の葬式は幽かなる永別のしるしなりき、世に知られず、人に知られず、靜かに墓へゆきし彼女、我は「ルーセー」の詩をくりかへしまたくりかへして、彼女の爲めにうたはれしにはあらずやとおもひぬ、而かれども彼女の名はお京、ルーセーとにはあらざりき。

◎京子に最後のわかれをつぐ

卿が此の世の愛着より脱して、人々の涙いまだ乾かぬを、タイムは刻一刻と歩を進めて、けふなん七七のいとなみをなすの日となる、きくならく魂今や軒端を離れ

て、永久の世にゆくべしと、因ていさこの撫辭をつらね、限りなきの別を告げんとす．卿この世にいとうつくしう生れぬ、而かも躰纎弱、小を以て美の最上となしたる納言の理想よりいはゞ、卿はたしかにいじみき姿なりし、卿の幼時は知らず、卿を始めて見しは六年の前なり、其夫に對するや極めて濃情、寧ろ身命をなげうちての愛なりき、不幸にして懐姙數度、しかも愛兒を暗より暗にうつして慈母と呼ばるゝに至らず、卿が一生涙に過半をすごしゝといふも過言に非らざるべし、卿濃情の人たりしを以て屢々いふべからざるの苦惱を感ず、深き愛の中には嫉妬あり、卿は卿が熱情の爲に悶え、濃情の爲に悲しみたるを我知る、卿は能く其夫に事へ又能く近隣を愛せり、卿すこぶる多辯又多能、嘗て我其外交家の術あるをいひ、卿が東都上流の家に生れざりしをうらめり、其婉麗と其辯舌、優に外交家妻君の資格をそなへたり、卿英に佛にはた米に、公使が夫人としてあらば措々の讃辭を得つらんを、卿は北信の山家なる一農夫の妻、其婉麗と其辯舌、人の賞讃を得るにかたかりし。

卿嘗て他人の子を預かりて、乳を與ふ、所謂里親の地位に立てり、卿この子に對するの情いと深く、生みの子すら猶及ばずと人さゝやけり、一朝不幸にして此の子病を得、ながきく　ねむりに就く、卿天地に哭慟し、食を絶つ事數日、つめたき死のむくろにくりかへしたるキッス、人は稱して狂へりといふ、まことに卿は狂ひの人たりし。

卿不幸にして産の氣つきて、俄かなる病發し、遂に不歸の人となる、我また臨終の枕邊にありて、うつくしき卿がおもわの次第に蒼白なるを見、其紅唇の次第にいろなきを見、其双眼の次第に沈みゆくを見て、死てふものゝ殘酷なるに泣く、きのふ迄の濃情はたいづくにや、其多辯遂に永久の沈默となりぬ、卿が生命をさゝげたるの人、卿がいつくしみ愛したる弟妹、皆死のみまへにふして泣けり、卿哭慟の聲をきゝしや否や、天其日初雪をくだし、けふまた七七の法事の雪ことに深し、卿この暖かなりしホームを離れて、天上へのぼりゆき給ふか、淺

間しや人間、今去りゆく卿が魂魄を觀る能はず、最後のわかれをこゝに告げて再會の日を約す、蓋しこの日や我等肉をはなるゝの期たり、今暫らく世にとゞまりて、卿が處世と苦惱をくりかへさん、九品蓮臺の上々ならずとも、卿夫れ我等が爲めに座をゑらびおきたまへや、あなかしこ。

涙の花

鈴木げん子

何れの國の昔にや有けん中らひ極めて濃やかなる妹脊ありけり晝はひねもす相共になりわひを勵み夕暮かけて玉手とりかひつゝ野もせ山かげを散歩するをもて上なき樂しみとしけり一歳の春の夕暮長閑けき風に櫻麻の衣の袖なびけつゝ福ひなりしこし方扨は望み多き行末を語り合ひつゝ來るともなく山の尾上に上り來にけり唯見る遠方海の波に舂く夕つく日のきらびやかなるに釣舟の三々五々家路に急ぐか木の葉の浮びたらん樣に趣深く四面谷かげは菫の花



すみれ蓮花草なんとうつくしふ咲みちて畫にも及ばぬ四方の景色にしばしは諸共に恍として我を忘れて眺め入けんやがて夫はそこなる谷間を指ざしつゝ見給へ彼傘草生ひ繁れるかげに清水の流れに縫はれてあるかなきかに咲にし花を薄紫のなよやかなる形は螢草にも似たる哉いた〳〵しくもやさしくも君が姿にさてそのままぞ如何にもして取てましといひければ嬉しくも仰せ給ふもの哉いざといひ樣身をおどらして谷かげに下り立ちついとをしといひしはかなき草そこはかと摘集めて再びもとの處に上り行かんとしてすがりし蔦の如何にしけんふッと切れてよろめくまゝに傍へに尖りし岩角に身を投げて倒れんとする一刹那摘みにし花束高く捧げてフォーゲットミーナットと絶叫しぬ夫の悲歎や如何ありけん春ごとに咲出る其花の色香はかはらねど去りにし人は歸らざりけりかたみ草とは蓋し之なり

同じ春野に匂ひ出る花といふ花の中に山吹こそ又なく哀なれ

大和の國に住ひける男ふり分け髮の妻をめとりてまだ幾日ならぬに任に都に上らざるべからずかたみに袖をしぼりつゝいひ交す事とも盡せぬ中にしばしが程忍び給へやがて人して迎へ參らせん忘れても御身一人のからだと思ひ輕しみておろそかにはなしそ我身戀しと思ひなば上る朝日に心を開け我もまた傾く月に思ひをのべん海山遠く隔つとも誠ばかりはなどねもころに語らひて別れし程はこま〴〵の音つれもありけりさて後は打も絶てそよとの風のたよりさへ聞えず空のいろのみ眺め明しながめ暮して涙の中に早くも一年とはなりぬ遠かりぬる程思ひは日々にますものを忘れつらんか否歟はた病の床にやはふし給ふあるは恐ろ敷禍のふりかゝりて思ひ續くれど一度のたよりも心に任せぬにや有らんなどはかなき事のみくり返し思ひ詫びて果ては身もやせ心もいらちて見るかげもなうおとろへにけり今はと我身勵まし立てゝ思ひやるも遥けき都さして旅立ちぬ夫を戀ふる一念に千艱萬酸を凌ぎつゝ數多の日を經て漸うにたどり着しは名にのみ聞し夫が住居今更に我身の顧みられて衿引正し門のほとりにさしのぞけば美々しく裝へる人の妻めける女のかきすゑたる鋲打の乘物にのりて供數多召具し何處へかは出行かんとする處也けりけをされて物もいひ得ずそが出行後ろを見送りつゝ又恐る〳〵おとなへば婢めくもの出來りてけふは殿には山狩にとて朝早くやかたを出て給ひ内君はおこともいま見つる如くそをよそ乍ら見はやとて出立ち給へり何處よりかはたより來しぞ夕暮にまたこそとあざける如くいひてつと入りぬ心得ぬふしの多ければ門ちがひにもやと見上ぐれば夢にも現にも露忘れぬ戀しき人の名筆太にかゝげてあり扨こそな故こそありけれ増す花の匂へる庭に何を樂しみてか見苦しふ散り殘るべきはりつめし氣も挫けて夢心地に歩み出てつなくなく遥かに見渡せば彼處に山川の清き流れあり身を棄つる水は古さとにも有けるをと今更に歎たれて幸なき身の終焉きたなきも一しほ身にくし誰に見せんとてか書

き殘さん言葉もわらじ怨めしきは我身なりけり唯明暮又逢ふ迄のかたみにと肌身離さゞりし是や此夫が好みのくちなしの衣すり衣同じ流れに沈めんもいとをし何にがなと見まはせば傍への岸に青く〳〵と葉のみ繁れる一本の若木の枝に涙にそぼつ上衣ぬきかけて水音高く沈みぬ

夕暮に家に歸りし夫はかくと聞くや足も空に河原にあさり來ぬ見覺えある衣は河風にさとなびきて浪の音のみ空しく高し

千度百度憐び歎けども返らぬ人のかへるよしなし夫もまた同じき底の水くづとなりぬ

此木にかかりし衣も色やがて其花と化して悲しき色に咲しかどつひに一つだに實を結ばざりしとかや



齊管妾晴（漢文和譯）

中島眞子

寗戚といふ。かしこき人。齊の桓公の。明らけくおはすよし聞傳へ。ま見へまく祈りしが。さるつてなければ。しばし身をやつして。人にやとはれ。小車を挽て。御城の東の門近うやどりぬ。公の外に出給ふ折ふし。高らかにうたうたふ聲の。いみじう物悲しかりしかば。あやしみ給ひて。宰相なる管仲におふせて。とはせ給ふに。寗戚ほかの詞はなうて。浩々たる白水とのみなんとなへける。管仲其心を得知らねば。答へ申さんすべなさに。五日迄家にたれこめて。思ひはづらひぬ。妾の晴といへるが。ひそかに胸をいため。けふ幾日。上にもまうで給はず。いといたう御心惱ませ給ふ御氣色なるが。御國の御爲にか。あるは。御みづからの御事を。はからせ給ふにやと。すゝみ聞ゆ。うるさく覺

べて。にがくしげに。いましらが知る事に非ずと言へば。ほゝ笑て。いと餘りすがくしうおはしますかな。老たるをおいたりとせざれ。賤をいやしとせざれ。若きをわかしとせざれ。弱きをよわしとせざれてふ。ことぐさありと承るをと。氣はひにくからず。さしいらへぬ。いかなる事と問ふ。そのかみ太公望はまれなる齢七十の頃ほひは。朝歌の市に牛をほふりて。はかなきなりはひし侍りしが。妻こもる八十にては。かけまくもかしこき。帝の師とあふがれ。百年近きつくも髪。九十にて。斉に封ぜられしとかや。斯るためしを考ふれば。春の日影に解けやらぬ。頭の雪のふりにたる翁とて。思ひすつべきに侍らず。伊尹は有莘氏の勝臣なりしかど。湯の御代には。三公とやらん。貴き位になりのぼりて。天の下をまつりごち。波風おだしかりしとぞ。さればいやしきものをも。ひたふるに。いやしむべきならじ。睪子は。五ッの兒ながら。大禹のいさをゝたすけ奉り。駃騠といふよき馬は生れ出て。七日にて。いと大きく。走るはざも。母なる駒にまさるとかいふを見れば。いとけなきをも。弱かるべきものをも。あなづるべきに侍らじ。さは侍らずや。管仲にはかに。席をすべりて。かしこまり。我まことにあやまちぬとて。つぶさに事の由を物語れば。晴打笑ひ。其人いさゝめに。思ひの程を告げ參らせしを。尙さとらせ給はぬにや。古の白水の詩の心はかくなん侍り

木隠れて音も聞えぬらもれ水
　清き流を汲む人もがな

ことぐには侍らず。我御國に。つかへ申さく。ねぎ侍るにこそと聞ゆ。管仲こよなう打悅び。かくと聞し參らしに。公も嬉しとおぼしめし。ものいみ五日計して。禮を正しく寗子を見給ひ。さるべくやおぼしけん。宰相にすゑ給ひしかば。國の内平らけく治りしとぞ。

君が世の倩くすみしは木隠れの
　泉を汲しいさをなりけり

木がくれの水の心をくみしより
　波立ぬ代となりにけるかな

をり／＼ぐさ

●幼き友

池田愛子

友のもとにかへし文かゝむとて、机に向ふ折から、足音高く走りきしは、ことし三つになり給ふ、をさなき隣の君なり。母君の浅草に詣で給ひしつとにとて、此人形を給へるが、今そなたの祖母君の、我によく似かよひて、愛らしとの給ひつるよと、嬉しげに打笑ふ顔の美くしき。およすけ給はゞ、行かふ人の思はず返り見すらむと、我もほゝゑまれぬ。いだきませる人形は、いだきませる君に、おなじ髪のさまにて、口もとには、ゑみたゝへて、何をかとはゞ答へなむかと、あやしまるゝばかりらうたし。この衣は我のながら、母君の着ませしまゝにあたへつ。又人形の名は花子の君とよぶなりなど、まはり得ぬ舌に、かつ／＼語ります。菓子まゐらすれば、先かの物いはで、いつもうちゑめる花子の君の、むすびし唇に菓子の半をわりてあてがひ、軈て又おのが口にいれつゝ、うまし／＼と花子の君もたうべぬといひて、又人形の口のあたりに、おのが耳をあてがひ、二ッ三ッうなづきつゝ、姉君よ、花子の君のさゆほしとのたまふよと、ほゝゑみ給ふ。一日のうちに幾度となくとひきまして、同じ事を繰返し／＼物語り給ふが、我の文かける折などは、何をか語りますと知りつゝ、筆に心とられて、答へのしぶれる事もあり。さる折はつと立ちて、祖母君の方に走りゆき、我さまをねつゝ告しらするとか、暑き日に幼なき君の、まつはり給ふはうるさしなど、なれたるまゝにこらす折もあなれど、又二日三日とひきまさねば、何となう心にかゝり



て、物たらぬやうおぼゆるも、深きえにしにやあらむ。

◉墓まうで

けふは父君に別れまつりてより、三とせ過ぎし日なり。母君と共に御寺に物しつゝ、やがて父君の御墓を、をろがみまつらむとて行く。そこゝはを草ふかう、わけがたかるに、こなたに一筋の道あればそこより行く。其わたりいさゝかの塵もなく、草さへ皆刈つくしたり。樒の葉をさゝげなどしつゝ、母のうしろべに有て、ひざまづきしに、あやしくもはふり落る、泪の露のとゞめがたくて、人の見とがめやせんと、かつはやさしけれどかひなし。母君も、目にこそは露はもち給はね、御心のうちには、同じなげきにかぎられ給ふらむと、思ひやりまつるだに、おのれの心ははりさけぬべし。御堂にのぼれは、やがて鐘の音のひゞける中より、静によみいでし御經の聲、尊としとも尊とし。つゝしみきくうちにも、なき父の事のみ、胸にうかみつゝ、せめて今までも世におはしまさばなど、思ふ折しも、ふと耳に入たるは、「凡はかなきものはこの世の始中終、まぼろしの如くなる一期なり。さればいまだ萬歳の人身をうけたりといふ事をきかず。一生過安し。今にいたりて、たれかもゝとせの形體を保つべきや」と、よみます御聲なり。げに〳〵今更に歎き悲しむともかひなき事よと、静に思ひかへしつゝ、うらみ多きかたし秋の風に、ふき送られて、わがやにぞむかふ。

◉無心

幼なかりし折、ともに人形もちて遊びし友の、それにもまして愛らしき和子、つれたちつゝ來ましぬ。籠に菓子いれて参らすれば、いそがはしげに、はた足のはこびあぶなげに、こゝかしこかけめぐりつゝ、我部屋のうちにいりて、かたへにすゑ有し姿見の前にたちて、同じ姿のうつれるを、同じ人の外にありとや見ましけん、手まねぎしつゝほゝゑめるさま、らうたしともらうたし。やがて母君のひざによりて、かしらさげつゝ手重ねなどし給ふを、母君は、いな今一つゐやし給へ。はたよきふり事どもして、小さきをば君に見せたまはゞ、此乳まゐらせんとのたまふ。詞のまゝにうちゑみつゝ、小さき手をうちふります。すぐれてよき汝の衣は、いづくぞといへば、袖のぼたんの赤きを指さして示す

學藝

春の天然

女子高等師範教授　藤堂梅軒

人も我れも、否、動物も植物も、只た寒に鎖された此の冬。しかも幾百の健兒を埋沒した吹雪の冬……ア、思ふだにゾッとする荒寥酸鼻の嚴冬も、いつの間にか過ぎ越して、ハヤ山色水面に春心催す期節とはなつた。

春心催すとは、何んなことであらうか。今假りに、東京の上野の山、不忍の池を、我れ等の頭に浮べて見よ、否、どこの山も、どこの水も、讀む人の思ひ〳〵に任かせるとしよう。先づ山の色に、何となく活動して來たような觀がある。別段に綠の色が新しくなつたでもなければ、紅の色が鮮かになつたでもない、しかし一種名狀の出來ない色が動かんとしつゝあるのである。何故に其のような色がするか。それは千樹萬草の新芽が、待ちに待つた暖光の餘澤を受けて、次第に冬の厚衣を脫ぎ去るからである。總体、冬の寒さを通して來る芽には、幾重にも厚い葉を被つて、それが魚の鱗のように重なり合つて居る、だからこれを鱗葉といひます。鱗葉は通常の葉とは違つて、多くは茶色をして乾いて、屢〳〵其の面に軟かな細毛を被つて居るから、透かして見ると銀色のようである。こんなに細毛のあるのは、即ち冬の寒さを防ぐためであり、又其れが乾いて居るのは、寒さのために、凍傷を起させない用意である。つばきややなぎの芽を見れば、其の鱗葉が著しくて、白い美しい毛を被つて居るのが認められる。

それから、其の新芽は植物によりて、着所を異にして居る。さくらの枝を見ると、其の一番先きにあるのと、側の方にあるのと二樣ある。其のように先きにあるのを、頂芽といひ、側にあるのを腋芽といふ。腋芽といふは、元の葉柄の腋に生じて居るといふ意味て、今は其の葉

が落ちて見えなくても、其の痕跡は確かに認められる。そこでうめの如き枝には、頂芽を見ることはない、チヨツト頂芽らしいものがあつても、眞にそれてはなくて、矢張り腋芽である。だからうめの枝は、さくらのとは違つて眞直にはならない。うめの枝振りが、拮据と屈曲して居るは、其の譯である。

總べて、右にいふような芽は、通常、花か、若しくは枝葉の嫩い小幹を包んで居るものである。試みに其の芽を摘み取つて、これを小刀で以て、半分に縦に切り開いて御覧。一は愛らしい花の瓣や蕊などが潜んて居り、他の一は極めて短く縮まつてある枝に、青白い小さな葉が、少きは二三枚、多きは五六枚も重なつて附着いて居る。そこで其の芽が花のてあるか、そうてないかを、知り分けるには、其の外形を見てすることが出來る。即ち花の芽は、一般に圓形に膨れて居るが、葉の芽は、多少尖つて居る。前の圖にあるつばきの枝を見るに、其の頂芽と第一の腋芽になつて居るのが即ち葉の芽で、其の他は花の芽である。又同圖のうめさくらの枝の最下の腋芽も葉の芽である。

此の頃になれば、うめの花の芽は、最早、其處此處に綻んで、芳しい香と、鮮かな色とを以て、人の目を惹きつゝあるのが多い。風流なる士女、打ち揃つて一日半日の閑を花の詠めに消するは勿論であるが、猶、人間の風流を辨へない樵夫や畑婆さへも、曳き行く馬の背、若しくは脊負ふ草籠にまで、一枝を手挾んで漫ろ歩くのがある。菅公の歌に、

　こちふかば香ひをこせよ梅の花
　　あるじなしとて春なわすれぞ

此の歌を讀みて、誰れ人か涙を催さぬものがあらう。心の清い此の菅公に、今や西方へ哀れ旅立たんとする際、たとへ寓意とはいふものゝ、痛く愛で惜しまれたうめ其の物の譽れは亦どれ程であらうぞ。

うめは斯くまでに果報ものであるが、しかし、うめ自らに於ては人間に斯ほどに賞愛せらるゝを目的としては居ないのである。といへば誰れも訝しいと思ふであらうが、あまり人間に愛さるゝがために、室咲や盆栽にし

て座敷に置かれるから、肝腎の實が結らない、それて子孫を繁すことも充分に出來なくなる。して見れば人間に賞愛せられるのは、實は有り難迷惑であらうと思ふ。

本當に有り難いとする所は蝶や虻などに、目を惹かれることであらう。實に蝶や虻などの昆虫は、常に花の蜜を尋ねて、知らず識らず、其の花粉を他の花へ運んで都合よく實の結ぶように働くのである。それて、―うめは出來るだけ、色を鮮かに、香を芳しくするのである。此處に一つ注意すべきことが



上野不忍池 春

ある、それは香の芳しいものは、只た白梅に限つて、紅梅にはそのようなことのないといふ事である。何故そうてあらうか。色の紅く美しいものは、晝の間に昆虫の目を惹くことが充分である。然るに白い花は、それほどに昆虫の目を悅ばすことが無いから、其の代り香を出來るだけ芳しくする必要がある。猶、白い花は、主に夜の間に、昆虫を引き寄せようとして、暗黒の中にも幾分か其の所在を明かにし更に其の著しい香で以て愈〻昆虫に注意されようとするのである。此の理は、獨り

うめばかりに限らない、植物の諸花一般に通ずることとである。現に、夏になると、夕景から咲き出す月見草やまつよひぐさが皆、淡黄色の花であるのが目に止まるであらう。又薔薇の花を見るに、彼の芳香の著しいものは、白花であつて、紅花にはそれほどでないことは、誰れも心附くところであらう。

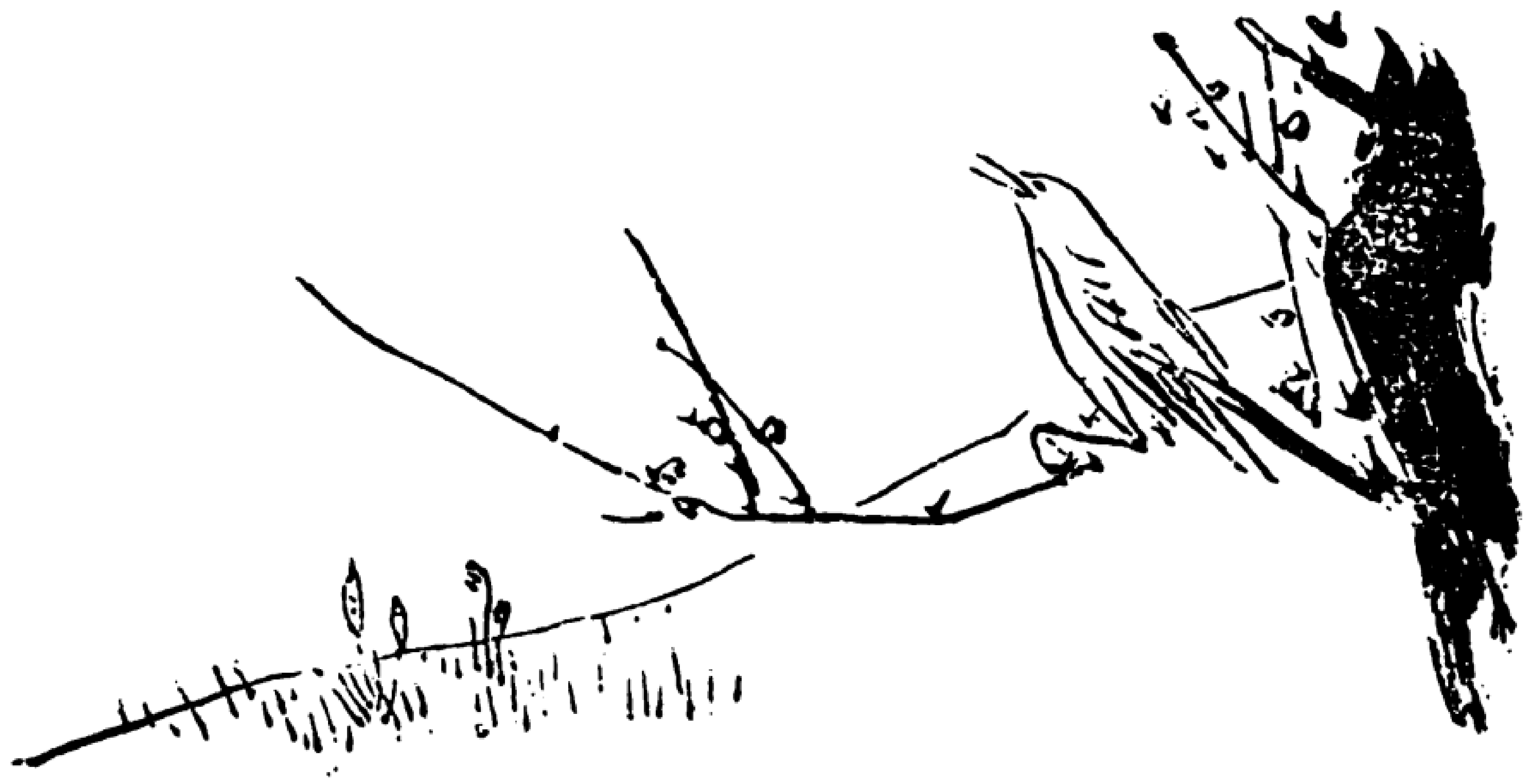
さて此のように、春の景色立つ頃になると、第一にホーホケキヨーの音が、谷の奥底から村里へ、村里から市街へと次第々々に程近く響きわたる。何でも鶯といふもののは、冬の寒さを、深山の谷底で、凌いで、漸くうめの綻びかゝる頃から此の世へ、現はれて來る。うめに鶯とは人の語にも、又歌にも書にも表はされるところであるが、何も鶯は、うめの樹に止まるに限つたことはない。うめの咲き出づる頃が、丁度彼れの、始めて深山から人家に近づいて來て、我々の耳を鼓つからである。時さへ次第に暖かになれば、竹藪にも鳴く、又松林にも囀ることは、敢て珍らしくもない。

此のように鶯までが、法華經を誦して來るようになれば、春の催しは段々と進んで來たもので、我々は堤防の上を詠めれば、土の筆とも記さるゝつくしが、幾百幾千となく頭を立て揃へるを見られるし、又山手の日當たり善き芝生を見渡せば、渦巻ける掌のようなわらびが、我れ先きと爭つて、人の摘まんことを待ちつゝあるようだ。

そこで此のつくしに就いては、特別に此處に話し置くべきことがある。なるほど、つくしとは土筆と書くが、いかにも筆のような頭をして居る。全體、これは何物であるうか、植物には相違ないが、たゞの植物ではない。我々が野遊をして、手に手にこれを摘み取つて歸つて、隨分これを煮て、珍味とはするが、さて其れが如何なる植物であるかを、審にせんては不都合であらう。これはすぎなといつて、今暫くすると、其の場所に、一面に生へ茂るすぎのような、又まつのような形して居る植物の種子ともいふべきものを製造する器官である。試みにつくしを取つて、盆のようなものゝ面を打つて御覽、乾度緑い粉が振り落ちるのを見るであらう。これが即

ちすぎなの種子ともいふべきもので、尋常の種子よりも甚だ小くて、それが一々胞になつて居るから、特別にこれを胞子といふのである。

さて此の胞子が、つくしの何處に生ずるかといふに、其の頭に穂を成して居る小さな龜甲形のようなものを一つ摘み離して御覽。(前圖の枠の中にある(イ)其の内面には、數個の長形の小嚢があつて、其の中に胞子が出來るのである。今其の粉のような胞子を、少しばかり硝子板の上に載せて、虫眼鏡で透して見ると、一つ



づゝ四本の細い紐のようなものを開いて居る(ハ)。そして今之れに息を吹き掛けて更らに虫眼鏡で見ようならば、ピチ／＼撥ねて、その紐のようなものを卷付けてしまう。(ロ)の圖は、それの一個を大きく表したのである。

其の胞子が地に落ちれば、それですぎなが生ずる筈であるに、實はそうでなくて、丸で風變りの少さな植物となるのである。大さ二三分もありて、薄扁い姿で、これに髭のような極細い根のある緑色の躰である。(ニ)これは、雄蕊のような道具ばかり生ずるものと、雌蕊のよ

うな道具のみを生ずるものとの區別がある。それで此の雄の道具から出たものが、雌の道具に這入つて、愈々卵がこゝに宿るのである。その卵が、其の道具の中で成長して、始めてそれがすぎなとなるのである。

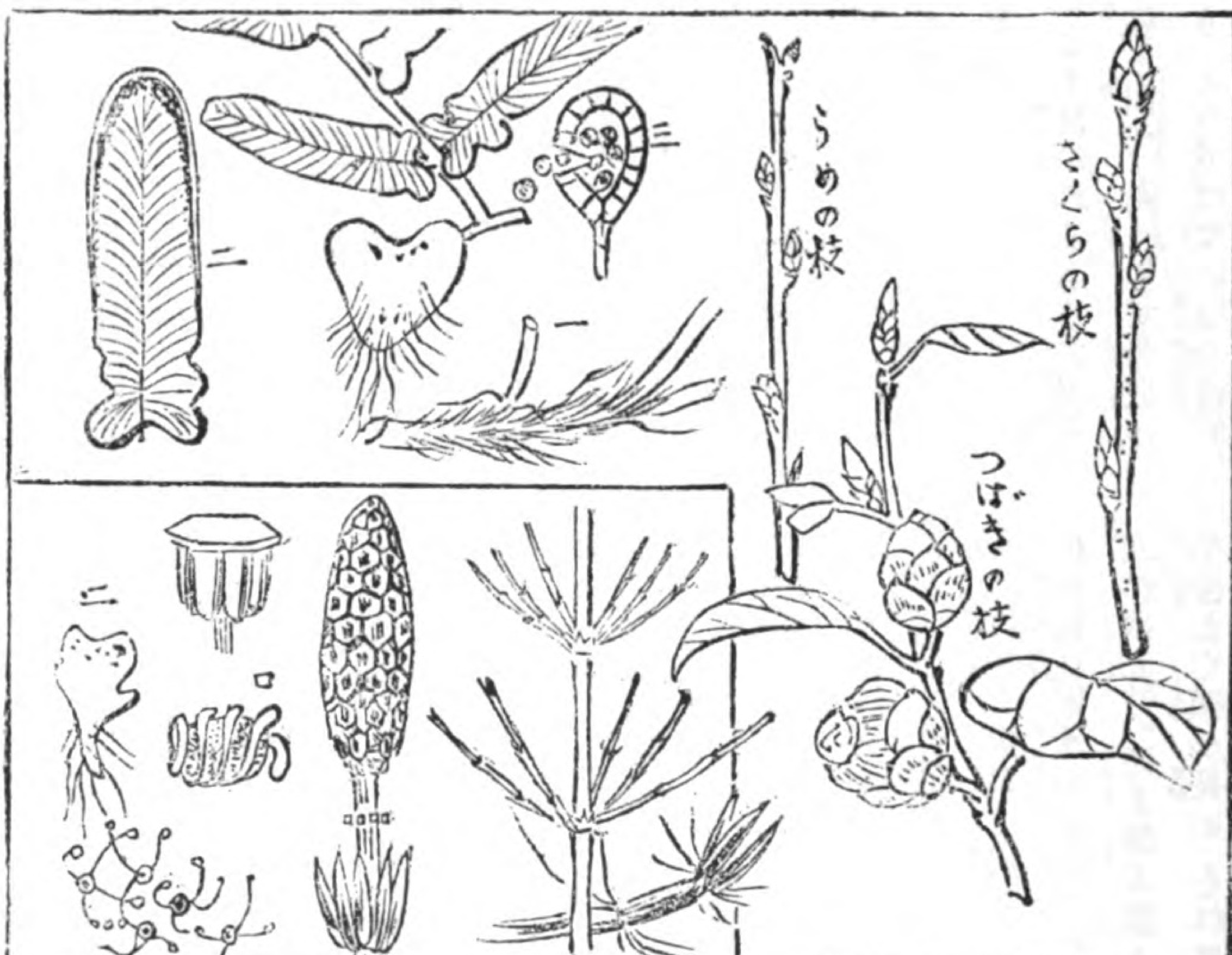
すぎなの生ずるは、實に盛に蔓るもので、農夫が畑に出來るすぎなを、煩いとして驅り除けては居るが、どうもそれが胞子からばかり生ずるのではない。それは更に去年の舊い地下の莖が殘つて、それからドシ／＼新芽を吹き出すからである。春の初につくしの出るのも、即ち亦此の舊莖からするのである。實にすぎなの葉ばかりを、いくら摘き去つても、決して効力のないは、その莖が地中に遺つて居るからである。其の地中の莖は長くて、往々一二丈に達するものがあるほどである。我々が其のつくしを採つて慰みとして居るが、農家では畑地の害草として持て餘して居るので、これが蔓つて居つては、作物の成長を妨害するばかりである。

こゝに注意し置くべきことは、すぎなの葉といつたは、決して葉ではない。否、葉は實は極小い褐色の鱗形で、綠い葉のように見えて居るものの節にあるのである。そうして其の長い綠いのは、即ち枝や莖であつて、これが通常の葉の役目をして居るのである。つくしになつて見ると、莖が稍々太くあつて、葉は褐色の乾いたものが幾つか莖を圍んで、俗にいふつくしのはかまとなつて居る。

此の次はわらびに就いて一言話さう。これも大躰、すぎなと同じもので、胞子を以て子孫を次いで行くものである。さりながら、其の葉は全く異つて、尋常の形をして、それが一本の大きな葉柄に、鳥の羽狀に附着いて居る。そうして矢張り其の莖は地中に潛んで、それから新しく葉の芽を吹き出すので、我々が遊山にわらび摘みをするのは、即ち此の新芽である。奇妙にも其の新芽がいつも渦卷に卷きついて居るのである。地中の莖には多くの毛があつて、其の毛は即ち元來葉の變形したものである(前圖(一))

それから今其のわらびの葉一枚を取つて、其の裏面をしらべて御覽、其の緣の少しく折れ込んで居る處に、無

数の褐色の粉が見える。それが胞子を包んで居る嚢である。(二)(三)チヨツトそれを、虫眼鏡の下に當てゝ、覗いて視るがよい。丸て匙のような形をして、それに黄色の鉢巻のようなものが圍んで居る、それが強く引きつけるから、横に裂けて中の胞子が振り落ちることが出來る。其の胞子が地に落ちれば、亦すぎなのように、小な扁い姿の植物となるので、これに雌と雄との道具が出來て、雌の道具の中で宿つた卵が成長して、始めてこゝに、わらびとなるのである。



わらびといへば、ぜんまいもしのぶも又正月の飾りに用ふるうらじろなども同じ類で、ぜんまいの胞子は特別の枝に集まつて生じ、しのぶうらじろは葉の裏に虫の卵のようにポツ／＼と散布して居るのである。これ等を併せて羊歯の類といふすぎなも亦此の類に屬するのである。一般に羊歯の類は下等の植物で、うめさくらまつなどのように大きなものはない。但し小笠原島臺灣又は熱帶地方へ行くと随分に大きなものがある、高さは二丈程もあつて莖の太さは一尺以上の周りがあ

る。こんなものは、それを羊齒木といひます。今我々が重寶して居る石炭は、大昔しの羊齒木が、地に埋れて炭化したのである。

以上は先づ此頃の山林陸地の景に就いて大略を話したのであるが、今水上に首を回してながめんに。先づ水の面が何となく暖かであることが感ぜられる。その故でか、水邊の柳が段々と淺い綠の色を染めて、中々の景色を添へるのである。柳には元來雄花を生ずるのと、雌花を生ずるのとが、別々の木であるといふことは、昨年の三月に此の誌上で述べたから、こゝには省いて置く。

此のように水面が暖かなるに連れて、水禽が段々と旅立ちて往く。そこでかもやかりのような鳥が今まで東京よりも南の國へも行つて居つたが、此の頃では北の方へ歸りがけの所で、東京などでは、不忍の池や、宮城の御堀などに盛んに遊んで居る。

總躰、水禽は其の姿が水面によく泳がれるように出來て居るもので、第一胸が甚く張り出て そうして舟底のような形をして居る。胸ばかり、そうではない腹全躰が舟の底のようであるから、彼れは容易に浮んで居ることが出來る。毎もかもや、あひるなどが、水面に居る所を御覽。それほどに、足を藻掻かなくても、平氣に水面に浮んで居るは即ちこれがためである。それから愈々進行しようとする塲合には、專ら其の足を使ふ、其の足には、前の三本の趾の間に、濶い蹼があつて、それで以て水を搔くのである。其のとき、足を前に突き出すには趾を閉ぢて、水の抵抗を受けないようにし、後へ向はせるときには、充分に、これを擴げるのである。

次に水禽の足が、餘り後の方に偏つてあるのを注意なさい、これにも理由がある。舟底のような腹が、水に浮んで居るときに、丁度足が後の方にあるから、舟の櫓のような具合になる、舟の櫓は、一つは舟を進める櫂ともなり、一つは舟の向きを變へる舵ともなるので、旁々兩方の作用を兼ねて居る。右に述べた理由で以て、水禽は自由自在に水面を泳ぐが、魚や泥の中の蠕虫などを食ふには、其の頭を深く竄り込むのである。そのときには都合よく頸が長い、それに嘴が扁くて箆のような形を

して居るから、泥の中を探るに便利がよく、且つ其の緣が多少軟いから、餌に觸れたや否やを感覺することが出來る。かもなどは、餌を泥のまゝ、口の中に入れれば、次に口を閉ぢたまゝ、泥水だけを外へはみ出すことが出來る、それは嘴の內緣に齒のような刻があるからである。

一躰、水禽が常に水面にはかり浸つて居つて、しかもそれが多く冬の寒い所であるに、何とも冷さを感じないは、どうした譯であらうか。それは躰全面に、厚い羽毛が密に茂つて、全く水や



氣候の寒さを、防ぐことの出來るからである。水の上に居つて、一向に其の羽毛が濡れることがないほどでそれは彼れの尾羽の下に、脂の出る所があつて、間さへあれば、彼れは嘴を以て、其の脂を身躰全面に塗り付けて居る。かもあひるなどが、水面や陸上に居つて、頭を後尾の間に、さし入れて居ることの屢々あるは、即ち脂を取つて居るのである何でも羽毛に脂が付いて居れば水彈がするし、又それで空氣が毛の間に包まれてをれて冷い水が直接に躰面に觸れることがない。

かもには多くの種類があつて、まがも夏がも小がもよしがもともゑがもをながかもひどりがもなどがあつて、此の頭最も多く見るのはまがもである。まがもは一名あをくびともいつて、雄は頗る美しくて、頭と頸とは濃い緑色である。雌は全躰褐色で、黒い斑があるだけである。あひるは元來かもから變つて來たもので、文字では往々家鴨又は家鳧と書く。

かりはかもよりもズツト大きくて、頭と頸と脊とは褐色である。我々はかりと一様に見なして居るものに、ひしくひといふものがある、かりよりも稍々大きくて、全身灰褐色をして、常に菱の實を尋ねて食べる。かりは列をなして飛んで行くが、ひしくひは正しく三角形に列びて、(前圖にある)其の中の雄が、いつも先導の役を取つて、三角の頭に居る。それか疲れると、列の後へ下つて、更に次の雄が之れに代はるのである。

これて春の自然の話を一先づ切り上げて次の月に其の○中を、更に其の次の月に下○を繰り返さうと思ふ。いよいよ進んで春の自然には未だ〱面白い話がある。後々が楽しみてある。兎に角我々は、こゝに、春の自然として、氣候が段々春めいたからして、山の色が何となく揺き始じめ、それは色々の木草が芽を出すといひ、中にもうめの花が時を得顔に咲き、つくしやわらびの摘み草に好期節であり、水面は漸く暖い催しがあつて、水禽の旅行が始まりつゝあることを長たらしく述べたのである。

水戸の觀梅（歴史地理）

文學士　喜田貞吉

水戸の常磐公園は、もと水戸徳川家の遊園を、其まゝ公園に取りなしたるものにて、舊名を偕樂園と云ふ。其地一堆の丘陵により、北に千波湖を望み、極めて風趣に富めるが中にも、園内數千の梅樹、ひとしく花を開くころの趣は、また格別にて、芳香を慕うて集まる人々、引きも切らぬ有様なり。されば、日本鐵道會社にては、毎年好季を擇んで觀梅列車を發し、都人士をこの樂境に導

くの催あり。今年も定めて、この企はあるならん。我等は今こゝに、讀者諸氏に向つて、この觀梅列車を利用して、一日の淸遊を、この園に試みん事を勸告す。園の風趣と、梅花の美と、共に我等の拙なき筆を以て、こゝに表はすべきにあらざるなり。

園の風趣と梅花の美とは、之を諸氏が自ら見る所に委ねて、我等は別にこゝに諸氏に紹介せんとするものあり。何ぞや。山容の秀麗富士にも比すべき、筑波根之なり。

筑波根の峯より落つるみなの川、戀ぞ積りて淵となりぬる」といふ、陽成院の御製は、苟も歌骨牌を手にしたる事ある程のものは、何人も承知する所ならん。而も其の筑波根に就ては、未だ知らざる人もあらん。よしや其の筑波根の、山其のものは之を知るも、筑波根に關する面白き由來に就ては、未だ知らさる人も多くこれあらん。暫く之に就て說く所あらしめよ。

汽車上野驛を發して、常磐線により進み行かば、先づ荒川を越え、次に中川を越え、江戸川を越え、利根川を越えなどしつゝ、進むうちに、左の窓より望めば、前方にあたりて、二つの峯の並び立てる、其容の極めて秀麗なる山あるを見ん。これ即ちこゝに說かんとする筑波根なり。筑波山なり。

筑波山は其高さ僅かに三千百餘尺、富士山に比しては僅に四分の一にも足らねば、固より高きを稱するに足らざれども、平野の間に聳ゆるが故に、殊に人目を引くものあり、古より夙に人口に膾炙し、殊に其頂上の二峯に分れたるもの、偶以て男體女體の見立てを成さしめ其間に得も言はれぬ趣を生じたり。

筑波の名の最も古く見ゆるは、日本武尊が蝦夷御征伐の御道すがらなるべし。尊遠く陸奥にまで進みて、首尾よく蝦夷を征服し給ひての御歸り途に、此山のほとりをも過ぎさせ給ひけん、甲斐の酒折宮に於ての仰せに、

新治筑波を過ぎて幾夜か寐つる

とありければ、燭を秉れる老翁取りあへず、

かゝなへて夜には九夜、日には十日を

と答へたりとの事、古傳あり。「かゝなへて」とは、指を

折り數へて見ればとの事なるべし。これは日本武尊が新治筑波の邊を過ぎてから、今夜で幾夜目だとの御尋ねに對して、指折り數へて見れば、丁度今夜で十日九夜になりますると、答へたる迄にて、一向格別の事はなけれども、之が我國にては、連歌の初めと云ふ事にてとかく筑波は歌に縁深きものとなれり。

又其峯の二ッに分れたるを男神女神と見立てたるより此山の神、男女の間を取り持つとの心にや、後の世の歌にも、戀歌に取りなして、筑波根を詠み込めるもの多く殊にいにしへは、男女此山に集りて遊樂し、歌垣を催ふして、夫婦の縁を定むるの慣習もあり、筑波の神の許し給ふ事とて、其間頗る弊風もありし由、萬葉集の歌にも見えたり。今も尙、此山に上りて、其頂の男體女體相分るゝ所、所謂御幸原に至らば、數軒の茶店ありて、田樂、餅等を商ふに、其餅を夫婦和合の餅などゝ唱へ、殊に名物とするは、固より後世の附會なるべけれど、其由來なきにしもあらざるべく、馬鹿氣たるながらも趣あり。但、山腹なる筑波町に、娼樓軒を並べて、行人の袖を引くもの、之も筑波の神の許し給ふ事かは知らねど、之は極めて淺間し。

筑波町は、筑波山の半腹にありて、街道筋にもあらねば誠に片よりたる山間の僻村なれども、筑波の神ゐるが爲に、人々險しき遠き道を苦ともせず。こゝに來るもの多く、人家軒を連ね、繁華の衢を成せり。筑波のこの繁華は、むかしも今に變らざりしにや、之につきて面白き傳へあり。奈良の朝のはじめ、和銅の比に出來たる常陸風土記に曰く、「むかし祖神の尊、其子の諸神の所を巡行して、駿河國富士の岳に至り、日暮れたれば宿りを求めしに、恰も富士の神は、新穀を祝ひて、物忌み中なりしかば、其よしを告げて之を謝絶したり。祖神の尊恨み罵りて曰く、汝は汝の親の宿るを欲せず、汝の山は夏冬とも、雪降り霜置きて、冷寒しきりに襲ひて、人も登らず、飲食を奠るものも無かるべしと。かくて次に筑波の岳に至りしに、筑波の神曰く、今夜は新穀を祝へども、謹んで尊旨を奉ぜんと。よりて大に之を饗應したり。玆に於て祖神の尊大に喜び歌うて曰く、愛らしき哉我

が子、巍き哉神の宮、天地と齊しく日月と同じく、人民集まり喜び、飲食豊かに、代々絶ゆる事なく、日々に彌榮えて、千秋萬歳、遊樂窮らじと。是を以て、富士の岳は常に雪降りて登るを得ざるに引きかへ、筑波の岳は、人々往き集ひ、歌ひ舞ひ、飲み食ひする事、今に至るまで絶えざるなり」と。こは一のお伽噺の類たるに過ぎざれども、之を以て、富士筑波と並べ稱し、又筑波が、奈良の朝のはじめに於て、すでに遠き前より、男女遊樂の地たりし事を知るを得るなり。

男女筑波に集まりて、遊樂するは、主として歌垣の樂を成せしものなり。歌垣とは古代に行はれし一の娯樂の方法にて、恰も後世の盆踊の如く、男女打ち交り、互に歌をよみ交はして、其思ひを述ぶるなり。今日にても、僻村には之に似たる風習の殘れるものなきにあらず。之を筑波にては、「歌かゞひ」と云へり。歌かゞひは、歌かけあひの語の約まれるものにして、歌を甲乙かけあひに詠み出づるの義ならんかと云ふ、さもあるべし。而して歌がきは、畢竟歌かゞひの、語の約まれる者に外ならず。

之も奈良の朝の比の歌集なる、萬葉集に、高橋連蟲麻呂といふ人が、筑波のかゞひの時に詠みし歌を載す。其歌は、

鷲の住む、筑波の山のもはき津の、其津の上に率ひて乙女をとこの行きつどひ、かゞふかゞひに、人妻に我も交らん、我妻に人も言問へ、此山を領く神の、はじめより禁めぬ業ぞ、今日のみは、目苦しもな見そ、言も咎むな。

反歌　男の神に雲立ちのぼり、時雨降り、
濡れ通るとも、我れ歸らめや

此歌の意は、鷲の住む(枕詞)様な險しいこの筑波山の、もはき津(地名)といふ所の上に、男女相集つて、歌かゞひを成すに當つては、人の妻に我も交つて遊ばん、我妻に人がもの言ふもよし、そんな事は、此山の神がはじめから禁じない所なり、今日ばかりは、隨分見苦しくとも見るなかれ、言咎めも成す勿れ、その義なり。又其反歌は、男の神即ち男躰山の頂きに雲が立ち上つて、時雨が降つ

て來て、着物が濡れて通る樣に成つても、此面白き遊びを催いて、我歸らうや、歸りはしない、との意なるべし。常陸風土記に、其の歌垣の狀を述べたり。曰く、「夫れ筑波の岳は、高く雲に秀でゝ、最頂の西峯嶮嶇なり、之を雄神といふ云云。阪より東の諸國。(即ち坂東諸國)の男女、春は花咲ける時、秋は葉の黄る時、相携へて集まり、飲食を齎して攀ち上り、遊樂す。詠める歌甚多し、戯するに遑あらず。俗諺に曰く、筑波根の會に、娉財を得ざるものは、兒女とせず」と。

斯の如く由緒ある山なれば、旅の人も、此地を過ぐれば必ず此山へは、登つて見たるものと見えたり之に關する歌の、萬葉集に見えたる歌二つばかり、左に掲げん。此歌によりて、山の樣子も、古人の之に對する感情も、推しはからるゝなり。

檢税使大伴卿、筑波山に登る時の歌

衣手の(枕詞)常陸の國の、二ツ並み(山の形によれる枕詞)、筑波の山を、見まく欲り、君來ませりと、熱けきに、汗かき嘆き木の根執り、嘯き登り(嶮岨な上る狀)尾の上を、君に見すれば男の神も、許し給ひ、女の神も、幸はひ給ひて、時となく雲居雨降る筑波根を、清に照らして、訝りし、國のまほらを、審かに、示し給へば、嬉しみと、紐の緒解きて、家の如、解けてぞ遊ぶ、打ち靡く春見ましゆは(春見んよりは)夏草の繁くはあれど、今日の樂しさ。

反歌　今日の日に、いかゞ及ばん筑波根に、
むかしの人の來けん其の日も。

筑波山に登る歌

草まくら(枕詞)旅の憂を慰むる、事もあらんと、筑波根に登りて見れば、尾花散る雫(地名)の田居(田舍)に、雁も寒く來鳴きぬ、新治の鳥羽(地名)の淡海も、秋風に白波立ちぬ、筑波根の善けくを見れば、長きけに、思ひ積み來し、憂は止みぬ。

反歌　筑波根の、裾わの田居に秋田刈る、
妹がり遣らん、紅葉手折らな。

前の歌は夏の景なり、後の歌は秋の景なり。夏にも秋にもよき筑波根の山の景色、見るべきなり。

筑波根の頂上に登れば、東南西の三方、限りなき八州の

平野を見下ろして、西に鬼怒川、小貝川の流れ、白き布を引けるが如く、東南には霞が浦の水、漫々として白帆の浮める佳景繪の如く、更に東北を望めば、葺山、足尾山、加波山、雨引山より、難台山、愛宕山等の連山、盡く眼下に並びて、さながら盆景の山を見るが如し。古人が高山に登りて國見すとは、誠にかゝる好景を云ふものならん。むかし丹比眞人國人、こゝに國見して詠める歌あり。曰く、

鷄が鳴く(枕詞)東の國に、高山は澤にあれども、二た神の尊き神の、並み立ちの、見が欲し山と、神代より人の云ひつぎ、國見する、筑波の山を、冬ごもり、時じく時と(時節ならずとて)見ずて往なば、益して戀しみ、雪消せる山道すらを、なづみ(ぐず〳〵)ぞ我が來し。

反歌　筑波根を、他所(に)のみ見つゝ、在りかねて、
雪消のみちを、なづみけるかも。

此歌はまた冬のさまを詠めるなり。(冬日雪消の道をわけ上りし熱心家、むかしもありしなり。

筑波根の頂上、岩石崔嵬として、僅に鐵階を攀ぢ、鐵鎖にすがりて、始めて登るを得るが如き嶮岨あり、或は大黒岩と云ひ、或は胎内潜と云ひ、或は弁慶七戻りの岩と號するが如き、危岩怪石の峙つもの亦少しとせず。されどむかしは、かゝる物凄き山の絶頂に夜を更かして、月の入るを惜しみし歌人もありて、

天の原、雲なきよひにぬば玉の
夜わたる月の入らまく惜しも

の歌を萬葉集に傳へたり。今は山階宮殿下の御思召を以て、此の頂上に觀測所を設けられ、夜な〳〵天躰の觀測に從事せしめらるゝ御心、尊きかな。

觀梅列車の窓より首を出して仰ぎ見る筑波山は、たゞ山容の秀麗なるあるのみ。この秀麗なる山が この興味ある故事を有するを知つて、之を望めば、たゞに其山容の秀麗なるを心に感ずるのみならず、更に一層の趣味を覺ゆるものあらん。若し足親しく其地を踏んで、こゝに故人の詩懐を追想せんには、興遂に盡くる事なかるべし。

殊に筑波山に關する感想は、水戸の觀梅に伴つて、一層

の深きものありて存す。何ぞや。水戸の常磐公園は、幕末の偉人、水戸烈公齊昭卿のはじめて拓かれたる所、而して、園内には烈公書の偕樂園の碑あり、園の東には、烈公を光圀に合祀せる、別格官幣社常磐神社のあるありて、園に遊ぶもの、必ずまづ烈公の偉功を回想せずんばあらざるなり。烈公幕末國歩艱難の際に處して、攘夷の方針を執り、勤王の大義を奬勵せしかば、人心之が爲に鼓舞せられて、維新の大業遂に之より起れり。而も公は中道に薨じて、畢生の間其大志を遂ぐる事能はざりしかば、武田耕雲齋、藤田小四郎等、有志の義徒起つて公の遺志を繼ぎ、其議當時の藩に容れられずして遂に旗をこの筑波山に擧げたり。機熟せず、時至らず、不幸にして局を全滅に終りしと雖、其忠志は朝廷の嘉する所となりて、追賞の恩命あり、明治二年に齊昭先づ從一位を贈られ明治二十四年に至りて、耕雲齋は正四位、小四郎は從四位を贈られ、其他の義徒またそれ〳〵に贈位の恩典に浴したり。水戸に遊び、筑波に登り、彼れを思ひ之を思はゞ、水戸と筑波と、豈に特殊の關係なしとせんや。公園の梅花、香氣の馥郁たるものは、忠魂の萬世に香ばしきなり。筑波の絶頂、巖石の崔嵬たるものは、義心の巖として動かざるなり。觀梅の列車筑波の山下を過ぐ。山を望んで感深からざらんや、山に登つて感深からざらんや。

筑波山に登らんには、東京上野驛より、水戸行(常磐線)の汽車に乘り、土浦驛にて下車すべし。土浦より筑波町まて約五里、其間人車を通ずべく、山麓なる北條町までは乘合馬車もあり。歩して行かんには、行く〳〵道筋の名蹟を探るも妙なり。藤澤には藤原藤房卿の遺蹟と稱する所もあり。小田には南北朝の比著名なりし、小田治久の城址もあり。其他、路傍に古墳の塚の累々たる所もあれば、之に登りて、名の知れざる古代の偉人の眠れるを弔ふも可ならん。北條町、筑波町には可なりの旅宿もあれば、之に一泊せんには婦人の足にても、登山は敢て難からざるなり。筑波町に筑波神社ありて、神社より左方へ上らば、みなの川と稱する溪流を越えて、御幸原に出で、之より先づ男體山に上るべし、右すれば、先づ女體

山に出て、之より先づ男体山へ廻るべし。二路何れを擇ぶも可なり。山上の光景、登らざるものには語り難し。登山なるかな、登山なるかな。（完）

風のはなし

女子高等師範教授　岡田みつ子

▲風といふものは、中々愛嬌者であります。尤この間内の雪もよひの北風などは、あまり感心もしませんが、鶯の聲と一所に、何處からともなく梅が香を送つて來たり、柳の糸をもつれさせたり、落花紛々の風情を見せたりするところは、誠に床しい。ことに栗や團栗を落して子供を嬉しがらせ、松に音づれて、颯々たる樂を奏でるなんていふのに至つては、倘更愛らしい。

しかし悪戯の方からいふと、これまたなか〳〵烈しくあります。町中を吹きめぐつては、容赦もなく、砂を揚げたり、窓をガタツカせたり、帽子をさらつたり、裾をあふらせたりするし、野に出れば出るで、行儀よくしてゐる樹をゆすぶつて見たり、川邊のおとなしい葦を泣かせたり、始末にいけないやうな事をします。

▲こんなに、ある時は愛嬌ものになつたり、また或る時は意地わるだつたりするのは、何故でせう。風の神の御機嫌次第で、いろ〳〵になるのでありませうか。昔の畫などにある風の神といふのは、恐ろしい鬼見たやうな顔をして、終始風袋を荷うてゐるやうな者ですから、或は御機嫌のわるい時には、ひどい風を吹かせたりするかも知れませんが、今時の風の神、そんな厄介なものではありません。誰でも知つてゐて、しかし誰も目に見たものはないのです。皆様の家で寒い時には、室内に盛に火をお焚きでありませう。その時には、風の神も、風袋も、そこに來て居ます。何處にといふと、試に障子をすこし開けて、火のともつてゐる蠟燭を、敷居の所へおいてご覧なされ。蠟燭の火は室内の方へ傾くし、其れから又火を鴨居の邊へもつてゆくと、火は室外に傾きます。之は室内の空氣が、熱をうけて膨脹して、空中へ昇つて鴨居の方から出てゆくから、室内の下の方には、空氣が

少なくなつて、室外から新しい冷たい空氣が、入つて來るのです。

之が即ち二種の風で一方は、室内から室外へむかつてゆく暖かい空氣の流れ、他の一方は、その反對に、室外から室内に入つてくる、冷たい空氣の流れなのですで、この風の出來たのは、室内と室外との温度の、ちがうところから出來たのだから、この温度の差が、風の神、即ち風の



作り手ともいふべきので、その風となる材料は、何處にも無い事のない空氣であるから、袋も何もいつたものではありません。

室内の温度が、高くなればなるほど、室内の空氣の上昇する事が多く且つ早くなるから、從うて、室外から入つてくる空氣の流動も、ます〱迅速になつて、ひどい風を生ずるやうになります。ごく、おだやかな風も、暴い風

も、皆この關係から出來るのであります。

▲毎日の天氣豫報を見ると、今日は北の風とあると、明日は西の風といふやうに、風には一寸とも規律がなく、何時でも、吹きたい方躰に吹くかとも、思はれますが、實はさうでもありません。

前節で申した事を、もつと舞臺を擴げて、地球として考へて見ると、風の方向にきまりがあるといふ事が分つて來ます。そも〳〵地球の南と北との兩極は、誠に寒冷で、赤道の近傍は甚だ暑い事は、とくに御存じの通りです。だから、赤道近傍の空氣は、溫度が甚だ高くて、膨脹しては常に上昇しつゝあります。之と反對で、兩極地方の空氣は、溫度が低くて、常に收縮してゐます。

そこで、赤道附近の空氣は、ドン〳〵上昇して仕舞うから、下方に稀薄な部が出來ます。それを寒冷な地方の空氣が、南と北とから來てうめると、又赤道附近から上昇した空氣も、上つたぎりにならないで、地球の引力に引張られて、南北に分れて、一方は北極へむけ、一方は南極にむけてゆくやうになります。だから、風の製造場は



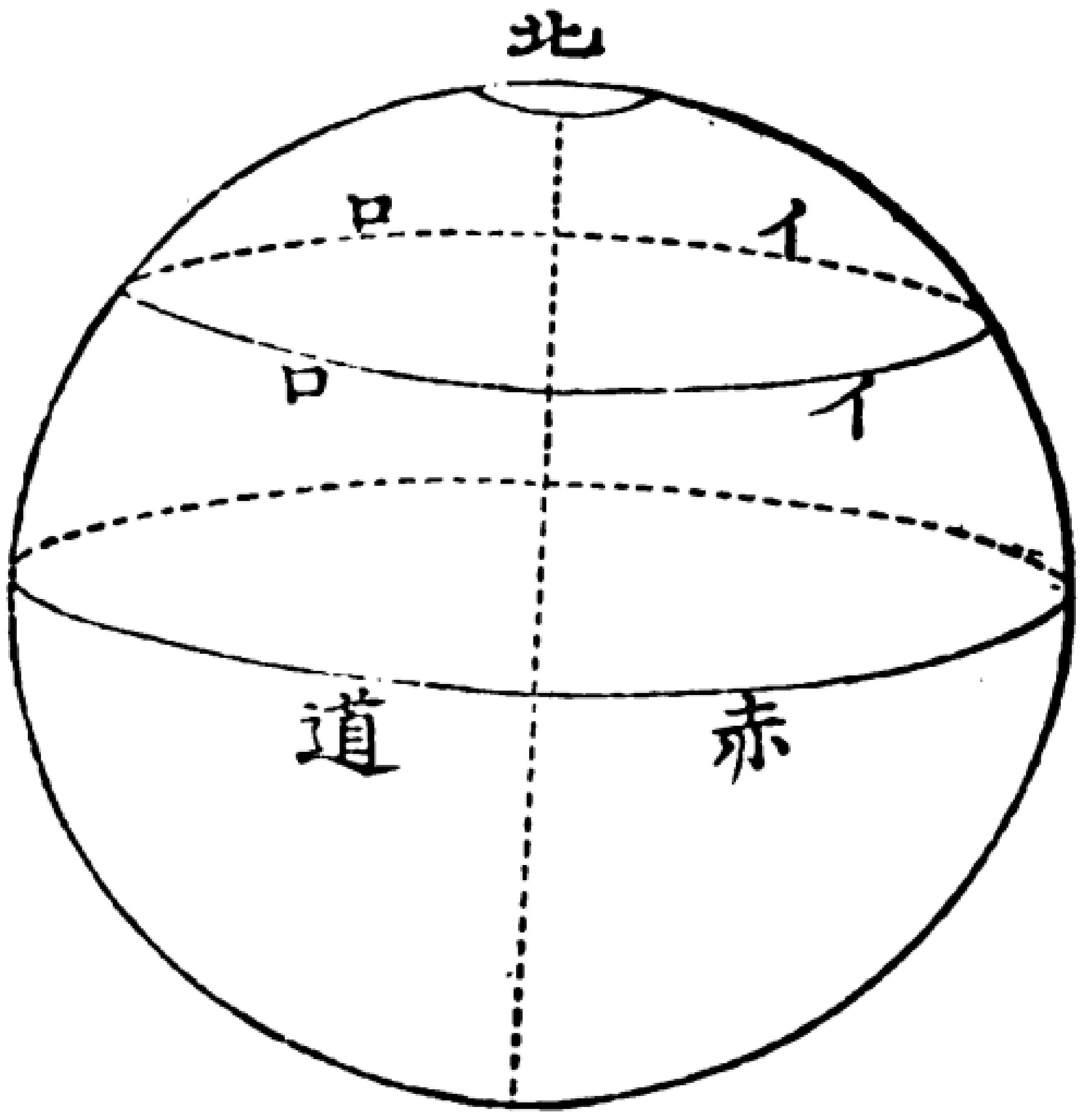
いつも赤道附近の熱いところなので、こゝで南と北へむかうて吹く風が出來、從うて極からは、赤道へ向うて吹く風が出來るのであります。

之で見ると、地球上の風の方向といふものは、南から來るか、北から來るか、即ち正北か正南の二方向よりないのです。

しかし、尙この上に考へなければならない事があります。それは、地球は常に動いてゐるものであるといふ事です。之を土臺において、風の向を考へなければ、實際とはあはなくなります。やゝ混雜するやうな氣味になるが、辛抱してお讀みを願ひたいものです。

地球は、一晝夜即ち廿四時間に、西から東へ一轉回するのですから、地球の赤道の部の太さが、二萬五千「マイル」あるとすれば、その各部分は、一時間には、二萬五千

「マイル」の二十四分の一、即ち千「サイル」以上の速度で走つてゐるのです。赤道邊の地面が、それだけの速度で走ると、その邊を取りまいてゐる空氣も、やはり同じ速度で、飛んでゆきます。(丁度、鐵道馬車にのつてゐると、自分の身躰も、馬車と同じ速度で、動いてゐるやうに)ところが、御承知の通り、地球は極に近づくに從うて、その緯線の大きさが減るから、たとへば「イロ」の線の長さが、赤道の長さの半分だとすると、この「イロ」といふ處だつて、やはり同じ二十四時間に、一回轉するのですから、その走る速度は、赤道の部分の、走る速度の半分でよい譯てせう。そこで、今赤道の方から



例へば北極の方へ、向いて吹いて來る風は、眞北を向いて來る積りでも、赤道邊の、東へ〱と行く、すばらしい速力をもつたまゝて、吹いて來るから、如何しても下の地面よりは、早く東の方へ行く勘定で、北を指して行きながら、東の方へそれて行くやうになります。故に、實際は、眞北でなく、東北に向うて吹いてゐます。之と同樣に、赤道から南極に向う風は、東南に向うて吹いて行く事になります。

然らば極に近い方から、赤道の方に向うて吹くのは、どうかといふに、こちらの部分は、自轉の速度がおそいから、その邊の空氣も、やはり東に行く傾きが少なくて、赤道に向うて來る。すると赤道附近は、トツトと東へ回つて行くから、いつも引き殘さるゝ氣味になつて、之もやツぱり北半球では、北西に向うて來る事になり、南半球では、南西に向うて來るのです。それにしても、地球上の風は、大躰きまつた方向がある事が知れませう。

▲けれども、大躰だけからなので、地球上どうもかも、

之に從うてゐはしません。海や、陸や、夜や、晝の工合で、地方地方に種々の風があります。

▲夏になつて、人が海邊に暑さを避けるのは、海邊が涼しいからであります。何故涼しいかといふと、晝の間は海の方から、涼しい風が吹いて來、夜になつて、陸から海に向うて涼しい風が吹くのによります。この海から吹く風を、海風、陸から吹くのを、陸風といひます。かく夜と晝とで、まるで反對の風の吹く譯は、晝の間大陽が海と陸とを照らす時分に、陸の方が海よりも早く暖かになるので、陸の空氣までも溫度が上つて、例によつて上昇しますから、その空處を充たすために、海の方から比較的冷たい風が吹いて來るので、朝の十時ごろから、午後六時ごろまで續きます。それから、夜になると、陸も海も晝間うけた熱を放出するのであるが、陸の方が、海よりも早く熱を失ふので、海の方が溫度が高くなつて、今度は、陸の方から風がゆくのです。之は夜から明方まで續きます。

▲暴風　我國で暴風の一番多くあるは、九月です。米が穰々と出來かゝる時分に、一陣の暴風が吹き渡つて、農夫の長い間の辛勞を、あはれ一朝にして水泡に歸せしむる事は、屢々ある事で、我が國民が、毎年之がために心痛もし、損失もする事は夥多しいものです。一旦、暴風といふ名がつくと、その凄しい勢は、誠に想像も及ばぬ程で、この魔力の下には、如何なるものも、叶はないやうに見えます。我國にしても、いつも暴風のあるたびに、人畜の死傷をはじめ、船舶の流失、家屋の破潰など、無い事はありません。ことに甚しいのになると、今より三十五年前、西印度諸島のうちの、ある島にあつた暴風の如きは、石の大塊をもち上げて、往來を吹きまはり、家の屋根をソックリめくつたり、或は家ごとさらつたりした程で、僅に四時間の間に、七十五艘の船を破損せしめ、百十餘艘を行衛も知らず押し流し、數千の人を宿無にし、七八百萬圓の富を失はしめたとあります。かくなつては、風も文明と平和の破壞者であります。

▲かやうに偉大の力を、暴風が揮うのは、その吹く速力の恐ろしい程早いのにあるので、一時間に三十五マイ

ル(十四里から、最甚しいのは、一時間に百マイル(四十里)以上にも及ぶので、一分時には九町から、廿七町位進むのです。汽車の進みが一時間に三十「マイル」として、之とかれとを、比較して見ると、そのひどい勢なのは分ります。

▲しかし、人間を困らせるといふ點をさておいて考へれば、この天然の魔力が、際涯もない大海原に吹き荒れる樣は、何ともいはれない立派な觀物たるに相違ありません。山や河の狹くるしい場所



を離れて、漫々たる海洋に跳り出ては、今こそといはぬばかりに、吼りつゝ、叫びつ、狂ひつ、怒りつして、數百里に渉る大波を苦もなく卷き起し、今は空を掠める山を作り、次は地底に達く谷を現す。と見るまに、其の樣は一變して、その山もあらず、その谷もあらず、殘るものは、たゞわきかへつてゐる水ばかりとなる。實に奇態百出、變幻きはまりのないその水の色、その波の形を見、惡鬼羅刹のおめき叫ぶに似た、水と風との怒號の聲を聞い

ては、力の弱い人間は、何とも知れぬ一種の恐ろしいやうな感情に打たれるでせう。

▲かゝる暴風の起りはといふと、たとへば、海水の温度が高くて、水蒸氣の盛に出來る時分に、どうかして溫度が急に上ることがあると、その邊の空氣が急遽に膨脹して、急に上昇するやうになります。すると、その空氣は、澤山水蒸氣を含んでゐるから、空中はるかに上るとその水蒸氣は冷されて、水にかはり、大雨となつて落ちます。

ところで、水蒸氣が冷えて、雨や雪になる時には、いつでも多量の熱を放つものであるから、此の熱が、またまたあたりの空氣を膨脹させて、いよ／＼上昇させるやうになります。そこで、その下部に甚しい空虛が出來るから、外圍の空氣はこの缺を補ふために、烈しい運動をおこして、暴風となるのであります。

▲暴風には、二つの運動があります。一は、空虛になつた場所を、ふさげるために來る急激な空氣の渦巻く運動で、今一は、その暴風の中心自身の進行する運動です

第一の運動は、折々大風の吹く日などに、家の隅や町の角で、小旋風が出來る時に、木の葉や、塵が渦をまきながら、風の中心に向うて上昇する工合と同じ事です。

▲我が國へ來る暴風は、いつも「フヒリピン」群島の東の海中から起つて、そこから九州へ來て、日本海へぬけるのもあり、南海岸の方から本土をぬけてゆくのもありますが、皆北東の方向に向うてゆきます。

▲風が、人類の役に立つ事を擧げて見ると、

一、空氣は、運動するから、ある處では酸素が多すぎ、ある處では炭素が多すぎるといふやうな不都合を防いでゐます。

二、植物が、地球上に分布するのに、風の力による事が澤山あります。植物の種子は、風に乘つて、數千里をへだてた他の場所にいつて、そこで、繁殖する例は少なくありません。

三、風がなかつたらば、海洋から上つた水蒸氣は、雨となつて、再び元の場所にのみ落つるでせうが、風があるために、方々にはこばれて、雨となり、雪となつて、

地を湿潤ほし、大小の河流の源を作りてゐます。
四、温暖な所から吹いて來る風は、その通る場所の氣候を暖にしますし、寒冷な場所から來る風は、氣候を寒冷ならしめます。

（完）

石油のはなし

松琴女史

燃料は其形態の上から三種に區別せられます固躰燃料液躰燃料及氣躰燃料の別で、固躰燃料は跡に灰が殘りますが液、氣躰兩燃料には灰が殘らぬと、其熱度が高いのとで、今日の工業上必要なものであります。液躰燃料は主として石油で、之は燃料としてのみならず照光用として吾人が日常用ふるものでありますれば、之を知りますのも決して無益の事ではありませぬ。

（一）原料　石油即ち吾人の用ふる燈油はペトロリユムと稱する原油より精製せらるゝものでありまして、此原油は世界各地に產出します、有名な所は北米合衆國のペンシルハニア州、露西亞のコーカサスを最とします、我國では越後、信濃、遠江に出ます、越後では古來から產出しました者と見へまして、七不思議の一に算へられて居ります、今日では越後を第一として、長岡附近には原油採集場多く、彼の米國のスタンダード、藏王、淺野の如きは採油者の主なるものです。

（二）採集法　讀者の中には本郷の帝國大學の構内にある高い櫓を御覧になりました方がありませう、是は深き井戸を掘る爲に立てられたのでありますが、石油の採集にも之と同一の仕掛を用ひます。

先つ石油の出ると見當の附いた地へ、此樣な櫓を建てゝ、鐵の錐で、地面に孔を穿ちます、櫓は錐を上下するに必要なので、又適當な深さに孔が出來ると周りから土砂が崩れこまぬ爲めに、鐵管を打込みます、此管の內へ錐を入れて、又掘りかへして石油層に達する迄、晝となく夜となく仕事を致します。

錐が石油層に達しますと、石油は地表に吹き出ます、其い層に當りますと、石油は噴出して櫓の頂上迄吹き上

りますが、日を經るに從て低くなり、遂には孔より溢れ出る位となり、最後にはポンプの力で汲み上げる迄になります、かくして採集したる原油は、大きな樋に入れるか、又は鐵管を通じて精製所に送ります。

(三)成分　原油は其色一般に暗褐色で不快な臭氣を放ち、新に汲み出したものは多量の瓦斯を含める爲めに薄くありますが、地下よりも低壓力なる地表に出ますと、瓦斯を放ち漸々濃くなり、液躰と固躰の混合物として殘ります。

原油の成分は内に數多の炭水化合物を含み、メセーン系列、アセチリーン系列、エシリン化合物並に放香性炭化水素化合物を含み、是等化合物の割合は原油の產地によりて大差があります、魯西亞の原油にはメセーン系列の化合物少なく、合衆國產の物には多き等なり、又何れにしても窒素、酸素、硫黄化合物の少量を含むて居ります、此原油は直ちに點燈用には供せられぬかと申しますと、前述の氣躰が蒸發して空氣と混じ、爆發し易き瓦斯が出來ますし、又油が濃き爲に心に粘着して、油を吸上げず、如何にしても一遍精製の必要があります。

(四)精製　原油を分餾法と云ふ方法にかけます、分餾法と申しますと精製せんとする原油を釜に入れ、空氣との交通を絶ちて熱し、攝氏百五十度迄の溫度に止め、此間に蒸發して出る者を冷やして、一處に集め、次に溫度を漸々高めて三百度迄にし、此間に蒸發し來るものを集めかへ、蒸發の溫度の差によりて分類する方法であります。此方法で原油を三種に分餾します、

一、揮發油　百五十度迄
二、燈油　百五十度より三百度迄
三、殘滓

是で大別は出來ましたが、再び是を精製せねばなりませぬ。

揮發油は之を五箇に分餾致します。

(イ)ペトロリユム　イーサー　蒸餾點四十度より七十度迄

之は樹脂、ゴム、油を溶かすに用ひ又局所の魔睡、起冷劑として用ふ

（ロ）ガソリン　仝　七十度より八十度迄

酸類より油質物を去り又は木材より樹脂を去るに用ふ

揮發燈用にも用ひらる、

（ハ）Cペトロリユムナプサ　仝　八十度より百度迄

油抜き揮發燈用に供す、

（ニ）Bペトロリユムナフサ　仝　八十度より百度迄

揮發燈用、繪畫、假漆を溶かすに松根油に代用す

（ホ）Aペトロリユムナフサ　仝　百二十度より百五十度迄

之は器械の洗滌用又は假漆を稀くするに用ふ

殘滓は再び之を分餾して重油及びコークスとす

重油は之を比重にて分ち

（甲）器械油　〇、七四四六より〇、八五八八に至る

（乙）石蠟油　〇、八五八八より〇、九五九九に至る

蒸餾釜中に殘りたるコークスは燃料として用ひます、

燈油の處分は如何と云ふに此物の性質を調べて見ると比重は〇、七五三より〇、八六四の間に位し此中には尚數多の不純物を含み、點火する時には煤油を擧げて焚え一種の惡臭を放つを以て尚一回精製せねばなりませぬ。

燈油は先づ硫酸を以て洗ふ時は不純物中のタール様物質、芳香性炭水化合物は除去せらるゝも、石炭酸及他の有機酸には硫酸には變化を受けない、又先に加へた硫酸が殘るから更に水を加へて洗つた後、苛性曹達を加へて洗ひ、更に水で洗ひ、水分を去る、之で精製法を畢るのです。

（完）

正覺坊の話（科學）

水産講習所技師理學士　吉岡哲太郎

蒼海の廣き、水産動物の數ある中に就て趣味の多きは正覺坊に如くものなし、農商務技師吉岡理學士の綠蠵龜の話は曩に時事新報へ掲げられしが、科學上有益の談なれば茲に其全文を載錄す

◉形狀と性質

綠蠵龜は俗稱正覺坊と名けて多く小笠原附近の海中に生息し其大さ疊半疊敷以上に達するものあり體重は

平均三十貫内外にして最大なるものは四十貫目餘に及ぶ背甲は帶綠色を普通とすれども時には赤褐色を帶び淡黄色に斑文を有するものあり腹甲は黄色にして斑紋なく甲板は十三枚邊緣は二十五枚より成り雄龜は體軀稍小にして背殼少しく長く且著しく隆起し尾も亦長大なり雌龜は背殼縦横の長さ略ぼ同一にして尾は短し總て背殼は石灰質の厚き堅硬なる甲よりなり腹殼は薄き柔軟なる甲より成る又背腹兩甲の内部には灰綠色の脂肪を多量に包藏す性質甚だ遲鈍優柔にして同族相食む如きことなく時々水面に睡りて四肢を延し頭を水中に垂れ背甲を水面に露はして靜止す漁船之に近寄るも覺らさるなり交尾期は三四月にして其交尾するや雄龜は前肢を雌龜の肩端にかけ背上に乘る而して交尾時間は非常に長きものにして二週間乃至七八週間に亘るものあり産卵期は五六月にして夜半人靜りたる時海邊の砂地に匍上り前肢を以て徑約一尺五寸深さ約二尺内外の大穴を穿ちて此に放卵し放卵終れば四肢を以て土砂を其上に蔽ひ腹部にて壓し附け勉めて埋卵の痕跡を止めず然れども其爬行せし通路に肢跡を印するを以て容易に其産卵所を發見するを得べし放卵は一回に限らず一度放卵して後時日を經過し孕卵成熟すれば又放卵す一回に放産する卵數亦た一定せずして七八十乃至百二三十箇とす放卵後五十日乃至七十日を經れば卵は日熱に爆せられて自然に孵化し背殼の大さ縦徑一寸三分横徑一寸一分程の龜となる但し其甲暗黒色にして大龜の如く硬堅ならず且つ腹部には臍緒の痕跡を存すといふ斯くて孵化せるものは産穴より地上に匍出て直に海洋の方向を取て匍去るべし若し人ありて之を他の方面に向くるも再び海洋を指して匍行くなり左れど遠く游出するにはあらずして暫く沿海に生息するを常とす正覺坊の食物は海藻を主とすれども獨り兒龜は動物を食とするものゝ如し又酒類を嗜み死に垂とするものも容易に酒三四合を傾け飮し同時に活氣を復すといふ

◎捕獲の方法

正覺坊を捕獲する方法に數種あり其普通なるものは左の如し

(一)種龜を使ふ法　雌龜を捕へ其前肢の一に二十尋程の丈夫なる綱を結び其一端に五貫目位の石を緊結して海岸を距る五六町の、深さ廿尋以内の處に放ちて游泳せしむれば雄龜來て交尾すべし因て静に船を乗りつけ釣を雄龜の肩端に打込み船舷に引寄せて迅速に其前肢の一に綱を結着け船内へ引き擧ぐ而して此種龜は甲殼美麗にして光澤あり汚穢物の附着せざる所謂別品を可とすといふ

(二)交尾中捕獲法　海中に緑蠵龜の交尾するを認むれば其後方より船を進め先づ雌龜を捕へ次に雄龜を捕獲す總て交尾中彼等は微細の音響に驚かず感覺を失へるが如く又雌龜を捕ふるも雄龜は容易に逃逸せざるを以て捕獲最も容易なり

(三)上陸龜捕獲法　産卵期に際し夜半海濱に上陸するを覗ひ其臀部を抱き仰向けに覆して捕獲す

(四)浮游龜捕獲法　浮游せる龜を認むる時は櫂音を發せず水面を亂さず静に船を進めて近寄り長さ三間幅一寸程の銛を以て刺し捕獲す若し又水中に潜り入る時は熟達せる漁者は再び浮き上る場所を略ぼ推知して豫め船を其所に進め其浮上るを待て再び刺すなり

又水泳に達せるものは百尋程の細綱を附せる銛を携へ水中に潜入して之を刺す斯くて船内にあるものは其綱の一端を取て龜の進退に伴ひ綱を伸縮し其疲勞するを待て引寄せて捕獲す總て緑蠵龜は長く水中に止まるを得ず十五分乃至三十分毎に水面に浮上り呼吸するを要するを以て長く水中に逐ひ廻せば呼吸切迫して其游泳自在ならざるに至るべし又緑蠵龜捕獲の漁船はカヌーと稱する丸木形のものなり

◉効用と滋養分

正覺坊は効用多きものにして全身不用の箇處なし背甲よりはパラフ鼈甲を得腹甲よりは本鼈甲の内張となすべき材料を得べし又在小笠原島の外國人は此龜の脂肪をスープとなし珍重し又油を搾りて食用或は燈火用に供し往々稻田の驅蟲油に用ふる處もあり甲に熱湯を灌ぎ所謂鼈甲を剝採したる跡の殼を煮ればゼラチン又

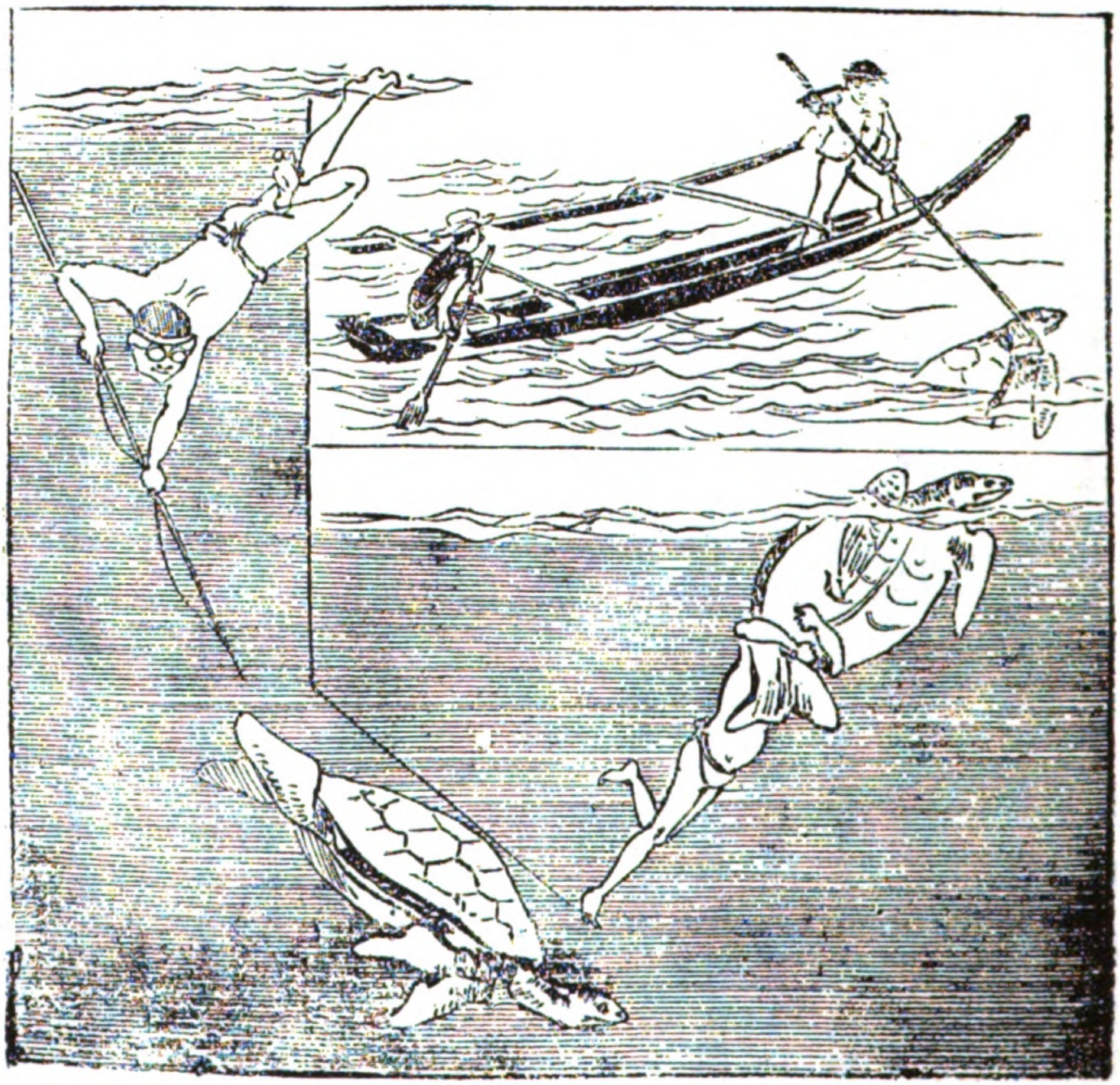
け膠を得べし其殘滓は燐酸及び石灰質にして肥料に適し又骨炭となすを得べし又其肉は鮮紅色にして脂肪分なき牛肉の如く其味較や淡泊なり左れば特種の滋養分ありと稱し珍重するものあれども他の獸肉と異なる所を見ず其肉の成分左の如し

水分	八〇、二三六二
蛋白質	一八、〇九九〇
脂肪分	〇、五二六四
灰分	一、一三八二
計	一〇〇、〇〇〇〇

之を他の肉類に比すれば左の如し

	水分	蛋白質	脂肪分	水化炭素	灰分
綠蠵龜肉	八〇、二	一八、一	〇、五	未定	一、一
牛肉	七六、七	二〇、〇	一、五	〇、六	一、二
小牛肉	七五、六	一九、四	二、九	〇、八	一、三
豚肉	七二、六	一九、九	六、二	〇、六	一、一
馬肉	七四、三	二一、六	二、五	〇、六	一、〇
鷄肉	七〇、八	二二、七	四、一	一、三	一、一

龜肉は脂肪處々に集合して一樣ならず專



ら甲下に多く集まりゐるを以て他の肉類に比すれば較や脂肪に缺く所あり故に之をスープとなせば臭氣なき淡泊なる上品のものを得べし又大和煮とせるものは其味特に佳美にして其罐詰をば多く同島より他へ輸出す又水煮とせるものあり

膓及び食道管は其色白色其味佳良にして特に珍重せらる其成分は肉と大差なし

水分	八三、七五六八
蛋白質	一五、〇三六六
脂肪	〇、二四四九
灰分	〇、九五二四
計	一〇〇、〇〇〇〇

四肢の肉も他の肉と同じく食料に供すれども其味較や劣れり血液は肺病其他虚弱のものは多く之を生のまゝ飲用す淡紅色にして實に美麗のものなり少しく空氣に曝らし置けば忽ち凝結して紅羊羹の如く其成分は

水分	八八、三〇一八
蛋白質	一〇、八七八二
脂肪	〇、〇一四四
灰分	〇、八〇五六
計	一〇〇、〇〇〇〇

是れ食料の外に砂糖の澄清、魚仔の餌料、肥料等に使用するを得べし

右の如く龜は牛と同じく全身殆ど廢棄すべき所なく吾人に益する少なしとせず今其各部の割合を見るに概ね左の如し

全體重量卅貫三百八十匁の龜よりは

精肉	六貫三百匁
血液	三貫七百匁
和甲	二百 六匁
和甲を剝離して殘りたる甲	五 貫 匁

而して是等は皆夫々に用途あるなり

本文は曩に小笠原島に在りたる多川水産局技手より聞きたる事と余の實驗せる所とを併せ記せるものなり

植物小話

木村小舟

時は彌生の末つ方、空いとよく晴れて、吹く風もなく

遠山のかすみよ、夫れか彼岸さくらの、人まち顔して、咲きそめたるも嬉しく、ごゝの小道になまめかしく、うなだれ勝ちなるつぼすみれ、折りふし飛び行く胡蝶の羽風に、散りこぼるゝ薫香を踏みつゝ、つみ草に餘念なき、姉妹の令嬢あり。

蝶は、妹のかざせるリボンに戯れて、こゝを去り敢えず、花は、姉のたづさえし小籠に盛られて、いと嬉し氣なり、やゝありて二人は、小高き岳の上にのぼり來りしが、こゝは眺望も殊によく、所謂、千里鶯ないて緑紅に映ずる景色も、手に取る如く、双眼に入りきたるなり。



いざやしばし憩ひてんと、二人は、若草のしとねに坐をば占めつ、花かごには、絹傘めて日蓋をしつ、やがて紫メレンスに包まれし、重詰をひらきて、母君が心づくしの、口取を賞しけり。

しばしの間も可愛きは、今し方摘み入れにし、春草のかずかずなりとて、すみれ なずな、たんぽゝ、つくしなど、一々とり出して、妹は此上なく、喜こび居たりしが、やがて姉なる人は、春草の生涯に就きて、しばし妹に、かたりきかせたり。

いでや御邊と共に、春の野に摘みたりし、數の草花をとりしらべて、學びの道の栞ともなさば、此上なく面白

きことなるべし、されば御邊は、しばし我生徒となり給へ、妾は又教師となりて遊ばん。

○緑葉色素の事

▲此の白き小さき花をつけたるを、薺と云ふ、俗にペン〳〵草とも云ふて、古來春の七草によみ入れたり葉莖には、みじかき細毛の密生するを見る、これ思ふに恐くは、この草の花實を、小虫などの這ひ上りて、食はんことを恐れて、ふせぐ爲なるべし。すべて草木の葉は、皆一様に、みどり色を呈する所以のものは、その組織中に葉緑素と稱する、色素を貯ふるが故なり、植物は此處にて、炭酸瓦斯を分解して、たゞ炭素のみを止めて、己の營養となし、不用なる酸素をば、躰外に捨て去るものなり。

▲酸素は又、動物の血液を、清淨ならしむるものなれば酸素なければ、動物は寸時も、生を保つことを得ざる、眞に重寶なる元素と云ふべし。

▲人若し、朝早く起き出でゝ、翠したゝらんばかりなる樹陰草間を徘徊すれば、得も云はれぬ一道の清氣、我が身邊を襲ひ來つて、心神の爽快を感ずる所以のものは、一に純粹なる、酸素の多量なるに依るもの也。彼の病人の部屋に、盆栽をおくときは、自ら清氣滿ちて、病人は常に、清潔なる酸素を吸收するのみならず、自己が吐きし、炭酸瓦斯は、盆栽に吸入せられ、彼も又、自然に生〳〵として、層一層うるはしき觀を加ふべし、されば庭園などに、多種の樹木を植ゆるは、啻に風色を佳絶ならしむるのみならず、室内には絶えず、清爽なる空氣を供給して、衛生上に少なからぬ、貢献をなす物と云ふて可なり。

▲之に反して、彼の植物の營養となるべき、炭酸瓦斯は動物體に取つては、非常に有害のものなり、かつて山寺にて、多くの老人ども、寒念佛して、通夜申さんと、堂中の小窓なども、固く密閉して、山より吹き下ろす寒氣をふせぎ、内には盛に炭火をおこして、室外の寒さも知らぬ顔して、暖をとりけり。

▲然るに室内の空氣は、肝腎なる酸素をば、烈しき炭火と人の肺臓にて、消費しつくされたれども、室内の小窓

など、總べて閉されたれば、室外の新鮮なる空氣は、少しも入り來らぬのみか、室内には人と炭火とにて、醸造されたる、惡しき炭酸瓦斯の充滿したれば、さらでだにか弱き人間の、いかでか生を保つを得べき、盛なる炭火まづ酸素の供給をかきて消滅し、次て人々の玉の緒も、斷絕せしとなん。

▲彼の青き、すべての葉は、かくの如く、人間の生活上、缺くべからざる、大切なる酸素を、製出するものなれば若し世界が、一朝、目に青の見るべき物なき事となれば各動物は、是非とも自滅せざるべからざるなり。さて之よりは、この可愛らしき、薺の花を、吟味すべし。

●花冠の事

▲この白き花びらの下に、青くして小さき、四つの葉の如き、もの有るを見ん。こは此の花が、未だ幼くして、小さき蕾なりし頃、冷たき雪霜、あらき雨風にだに當てじとて、三冬の永き月日の其間、いとも大切に、守り守りしものにて、萼とは云ふなり。

▲その萼の、たゞ一ひらをば、萼片と稱す、されば此の薺の萼は、四つの萼片が、相集りて成りたる事を、知るべし。次には矢張、同じく四つの、花びらをば、しらべて見ん。

▲此の白き、四つの花びらを、花冠と云ふ、花冠は、永く萼にて包まれ居たりしが、今日うらゝかなる、春光にもよほされて、心地よく開きしものなり。又、花冠の一片をば、花瓣と云ふ、薺の花冠は、四個の花瓣よりなり、形十文字に似たれば、之を十字形と云ふ。

▲十字科に屬するものは、皆無毒のものばかりなれば、食膳に上すもの多し、油菜、わさび、甘藍、辛子菜、すゞしろなど、すべて夫れなり。すでに、花の萼と花冠とは常にその色彩の異なるを知りたり。即ち花冠には、紫、赤、黄、白など、種々花に依りて、特色を有すれども、萼のみは、大抵は一定の綠色を呈して、よく夫れと見分くることを得べし。

▲されどこゝにをかしきは、百合や、かきつばたの如き類のものなり。それは萼も花冠も、同じ色彩を呈して、何れが何なるや、ほとんど其けじめなきものなり。さる

は、之を一々、蕚と分ち花冠と云はず、たゞ二者總稱して、單に花蓋と云ふべし、蓋し花蓋は、蕚花冠の並稱なり。さて四個の花瓣をば、一々丁寧に拔きとりて、その趾を見れば（増大鏡を要す）、いとあざやかなる、緑色もて染められたる、二つの球の如き、形したるもの有るを見ん。

▲これぞ彼の、蝶や蜂の、とく見いだして、花蜜を求むる處にて、彼の花の甘き液汁は、この袋にみたされ居るものなり、これを名づけて蜜槽と稱す。

▲蝶や蜂の眼球は、複眼とて、數千の小さき目を、一所に集めたるものなれば、他のものよりも、いち早くかゝる小さき物迄も、見出すことを得るものなりと云ふ。

▲すでに、蕚と花冠とを、取り去りたる蕪の花には、もはや、六本の糸の如きもの、やゝ太き瓶子の如き形したるものを、眞中にとりかこみて立てる樣、さながら彼の幼な兒の爲なる、閉んだ開いた、の如き、觀あるべし。此の細き、六本の糸の如きものは、雄蕋にして、やゝ太き一本は、即ち雌蕋なり。されば、今はまづ外側なる、雄蕋より見はじむ事とせん。六本の雄蕋中、内にたてる四本は、少しく長く、外なる二本は、やゝみじかし。

▲されど何れも皆、一樣にその頭には、黄色き葯と云へる袋を帶ぶべし、この袋の中には、花粉と稱する、極めて細かなる、黄色き粉をつゝみたり。

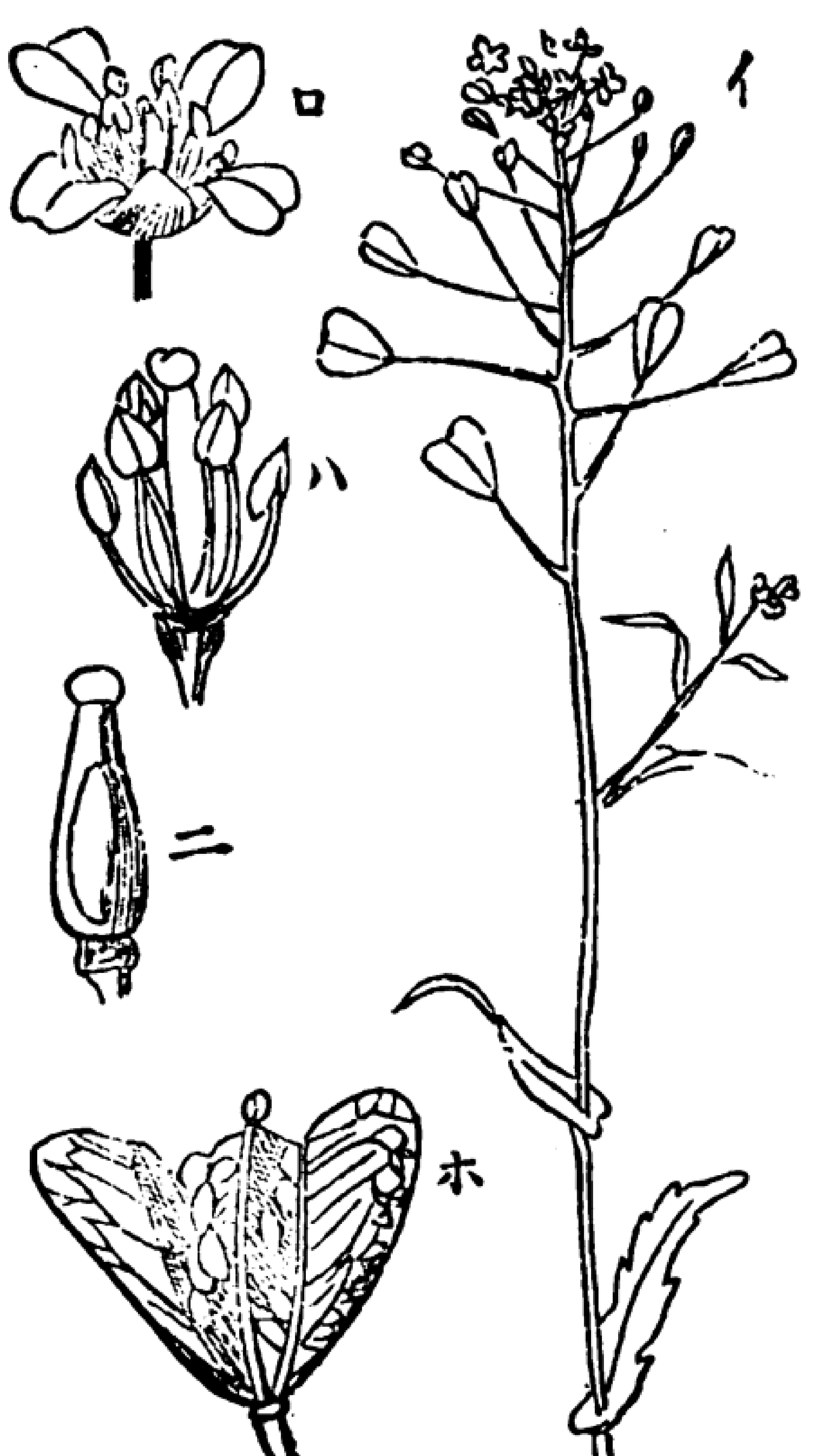
▲花のまさかりなる頃、葯はその眞中の線より、兩方に裂解して、中なる花粉を散ずるなり。又、葯の下部の、細き糸の如き處、全体を稱して、花糸と云ふ、故に雄蕋なるものは、花糸と葯とより成りたることを知るべし。既にして六本の雄蕋を拔きとれば、今は一本の太き瓶子の如き形したる、雌蕋のたゞ一人殘りて、乾然として、立てるを見るべし。

▲雌蕋の頭を柱頭と云ひ、其の下部の、いたく膨脹したる處をば、子房と稱す、柱頭と子房との中間の、やゝ細き處は花柱と云ふなり。さて、柱頭には、雄蕋なる葯より來りし、花粉をうけ、これを子房に送りて、こゝにて首尾よく結實するものなり。今、雌蕋をも又、その基部より取り去るときは、殘れるは花のすゑ置かれし、臺の

如きものを見るならん、之を花托となん云ふ。花托の下部の、花を抜き出せし柄をば、花梗と稱するなり。かく説き來らば、最早や一輪の花も、我が手の中に止どまるものとては、何物もあることとなし、されば今度は、やゝ下方に有つて、既に數日の前に於いて、開花し、新に實を結びたるものに就きて少しく説くところ有るべし。

▲こゝに至つて、彼の花梗は、その花の時代よりも、いちじるしく、延長して以て、相互に結實に差支なき様に至りしことを心得べし。

▲すべて下方より、順次、上方に咲き上るべき類の花を稱して、無限花序の花と云ふ。さて今よく熟りし一個の、果實をとり來つて、之を驗せんに、その形狀、恰も三味線の撥の如き觀あるべし、これやがて、この草の、ペン〳〵草てふ俗稱の起りし處ならん。ペン〳〵とは、三味線の音調を、幼兒が形容せしものなりと信ず。



●果實の事

▲凡そ植物の果實も、又其の形狀、性質等によりて、種々に分類せられたり。えんどうの如き、莢あり、草合歡の如く、節々のある、節莢あり、核果とて、固き核もて包まれたる、梅、桃の如きもあり、或は又瘦果とて、枯れ〳〵になりて、一見種子の如き狀を呈する翁草、紫蘇などの如きもの有りて、見來らば その差別や千萬種に渉りて、いともわづらはしければ、一々述べつくし難し。

▲さらば薺の果實は如何にと云ふに、之も又よく成熟するときは、枯れ〳〵になるものなれども、短角と云ふ種類に屬せり。

▲油菜すゞしろ等の果實を、長角と云ふに對しての短角なり、長角や短角や、共に例の十字科植物に見るところにして、短角はやがて、薺の特有なり。

▲かくして其の果實は、充分成熟すれば、自ら裂開して小さき多くの種子を、土中に散布す、種子は風雨の作用に依り、或は深く土中に入り、又は遠く移轉して、安全なる地を求め、秋にいたりて再び幼芽を出し、翌春又開花するなり。いざや、再び前にたち歸りて、葉の形狀をは、しらべて見ん。

◉葉の形狀

▲すべて葉には、葉身とて、扁平なる部分と、葉柄と稱する、團扇の柄の如き處と、托葉なる二枚の小葉が、葉柄の莖に附着する處にあるを見るべし。

▲かくの如く、三つの機關を供へたるをば、完全葉と稱することを得れども、しかも多くの植物は、その一部或は二部を欠きたるもの、頗る多きを見るなり。

▲薺の如きは、殊に甚だしくて、たゞ僅に葉身を有するのみにて、直に莖に附着したり、されど茲に猶おかしきものは、オーストラリヤ洲に産する、アカシアと云ふ木にて、これはたゞ、葉柄のみにてなれりと云ふ、これらの奇妙なる、くさ〴〵のものがたりは、又よき機會を見て、詳しく説きさとかす日あるべし。

◉根の狀態

▲次には又、根のことを少し語らんに、凡そ根は葉と共に、植物の營養をつかさどれり。されど葉は、前にもかたりしごとく、空氣中より炭素などを採れども、根は土中より、多くの養分を吸收し、加之、荒き雨風にも倒されざる樣、かたく保ち支ふる功を有す。ことに又、冬期にありては、幾分の營養分を、こゝに含蓄して、以て來ん春の發育に資するものなり。

その種類の如きも、又多種なれども、總じて一年根二年根、及び多年根の稱を以て、之を分てり、即ち一年根とは、一冬期を生存する能はざるものにして、稲その他夏草の類なり、又二年根とは、一冬期を越して翌春までも生存するものにして、薺の如きは之に屬せり、今多年根と稱するは、よく多冬期を生存して、枯死することな

き根にして、すべての樹木及び宿根草即ち之なり。
▲根の形狀に就て分たば、先づ鬚根及び、肥根の二となすを得べし。
▲鬚根とは、やせたる細き根にして、稻麥などの類にして又、肥根とは、こえたる太き根にして、蕪の根は肥根の中紡錘根と云へるに屬せり。
▲あゝ花より實、葉より根と、順次かたり來らば、最早や一本の蕪も、我手に餘す處更になし、さるにても蒲公英や土筆や、更に面白くも又、異りたる節少なからざれども、そは又歸りて後のことにせん、日も早や傾きて西山に近く、春草も又眠につくべく、蝶や鳥はいつしか花の林の床に歸れり、父まちまさん、母も又、首さしのべて、今日の野歸りの、いと久しくなりぬるを、待ちわび給ふらん、いざや洋傘をとぢ、花籠をたづさえ、急ぎ歸らん家路の方に。

（圖解）(イ)蕪（ロ)蕪の花の放大圖、(ハ)蕪の雄蕋と雌蕋、(ニ)閉花後の雌蕋、(ホ)蕪の果實を開きて種子を示す圖。

（完）

食物のはなし（家政）

若溪女史

●營養關係

飲食は身體の營養に缺ぐべからざるものにして實に衞生上大切なる關係を有するものなり、されば家政を主宰するものは、又常に其撰定、調理の方法等に最も能く注意爲すべく其日常用ふる所の飲食物は第一滋養分に富み新鮮にして消化し易きものを撰び、且つ其味を美にして以て人身の營養となすべきは勿論なり、されどもこれも亦各自の貧富貴賤によりて、其生活の度に伴はしむべきは、政家學上、また必須のことなれば、よくそれらの點にも注意してなるべく費用を節減し、普通のものにても其調理法の宜きが爲に衞生にも適し味ひも美ならしむべきを要す。
食物の味ひ佳きは、あながち、高價の品のみに限るべからず、譬へ高價の品なりとも、其調理の方法、宜きを得されば、其原質の價格をも、損ずべし、これに反して、調

理の方法、宜しければ、佳品ならざるも、亦其味ひの佳なるを覺ゆるものなり、故に鹽醬の鹽梅、羹炙の適度を得る時は麁食菜羹も、却て、佳味を覺ゆるものと知るべし。

人の身體に滋養となるべきは飮食品は種々ありと雖も其原質を大別すれば三種なり、一は含窒素物即ち專ら蛋白質物にして、肉類の纎維、鳥卵の蛋白、乳汁の乾酪素、及び豆類なり、其二は無窒素物即ち專ら澱粉質にして、米、麥、菜蔬等の澱粉を始めとして動物の脂肪果實の糖類の如きものなり、其三は石灰質即ち常用の食鹽、動植物等の、食品中に含有する、燐酸塩、石灰鹽、苦土鹽の類にして、是等は、食品燃燒の際、殘留する所の灰なり、此各種の滋養品は、身體精神の作用を保持する基礎にして、其第一の含窒素物は人身の組織となるを以て其必要なるは云ふまでもなく燃燒質にして人身中の薪炭の如く、專ら體溫を發生し、人身活動の燃料物となるべく、而して第三は專ら骨格の構成を掌るものなり、此三種を適度に併せ食して始めて身體の營養を取るべきなり。

◉飮食物の種類

以上は唯滋養品の原質に就て一定の理論を說きしものなるが更らに之れを實際に徵する時は飮食の種類は千種萬狀にして日常需用する品に就ていふも其幾十種といふを知るべからず、今便宜上之れを左の五種に分類し、其中主要なる食品の性狀及滋養の如何を示せば。

（第一）　飮料水
（第二）　動物性食品（重に蛋白質）
（第三）　植物性食品（重に澱粉質）
（第四）　嗜好品
（第五）　香味品

◉飮料水

日常吾人が需用する飮料水に三種あり、井水、泉水、河水とす、衞生上飮料水として適當なるは專ら井水及び泉水なり、而して其性質は無色透明無臭なるを要す、井水及び泉水は鑛物成分及び炭酸に富み、有機質を含有すること少きを以て、其味淸凉爽快にして最も飮料

水に適合せるものなり、通常は煮沸せずして用ふれども夏季にありて往々病原をなす所の諸種の有毒質殊に黴菌とを混有するを以て必ず一回煮沸したるものを用ゆるをよしとす、若し巳むを得ずして河水を用ひんと欲せば濾水器を以て不潔物を除きたる後必ず之れを煮沸するを要す、赤痢、虎列拉、腸窒扶斯の如き傳染病は多く水に由りて感染するものと知るべし。

水を多量に飲用するときは啻に發汗利尿するのみならず消化を害するとあり、盛夏の候冷水を多く飲用すれば腸胃加答兒を起し嘔吐下痢等を來すとあり故に氷水の如きは成る可く用ひさるを可とす、又不潔水は一層甚だしきものなれば最も注意すべし、

▲清淨の水の得難き土地にては漉して後用ふべし、之れを漉すに最も簡易なる方法あり、先づ桶の側面に戽口をつけ、水を流し出す所とし、其裏面に海綿を挾み、桶の下底には木炭末を置き、中部に、細砂を置き、又上部に砂石を置き、其上には平板を架し、四方より、水の洩ると無きやうに、密接せしめ、而して、其中央に小孔を穿ちて、其所に海綿を挾み、其上より水を注ぐなり然する時は海綿、砂石、細砂、木炭末の數層を經過し、漸く淨清の水となりて、戽口より、出づるなり、斯くすれば、時々海面を洗ふのみにて、別に手數を勞する事なく殆んど清貝の水を得べし、總じて、水には、肉眼にては見分け難き、微細の有機物の混れるものなれば、雪水、河水を用ふるにも、なるべく煮て飲料とするをよしとす

◉動物性食品

之れに屬するものは乳汁、鳥卵、及び獸、鳥、魚肉類等なり

(乳汁)牛、馬、羊、鹿等哺乳動物の乳汁は凡へて食料に適合するものなれども主として使用するは牛乳なり、牛乳は身躰の發育に必要なる各成分を含有せる完全なる滋養品にして蛋白質脂肪及糖といへる必要なる成分を含有す、其性狀は青白色を帶び不透明液にして其味及び固有の臭氣を有するものなり

(鳥卵)は蛋白質と云へる多量の成形成分を含有する滋養品なり中にも鷄卵を第一として廣く食用に供す故

殻の際卵黄崩れて流動するもの或は惡臭あるものは食すべからず、生卵又は半熟となしたるものは最も消化良しと雖も煮て硬結したるものは消化良からず、故に病人には前者を用ゆるを可とす、然れども健康者に向ては調理法の如何に關せず滋養の効著明なりと知るべし。

卵の陳るきは甚だ害あり能く驗せざるべからず、若し之れを試みんと欲せば、水凡一合に食鹽二食匕を加へ其中に卵を投ずべし、鮮しきは、水底に沈み、次は水中に漂ひ、陳きは水面に浮ぶものと知るべし。

(肉類) 肉類は蛋白質及び脂肪に富める善良なる成形的滋養品にして主として獸肉鳥肉魚肉及貝類を食料とす、動物の種類は其の調理法により良不良あり、概して幼動物の肉は老動物の肉より柔軟にして消化し易く牛、豚其他野獸の肉は赤色にして幼羊類、鳥類中白色なる肉に比すれば消化良しからず、されど大抵の魚肉は他の獸鳥肉に比して消化宜しとす、總て肉類は動物屠殺後多時間を經て柔軟となりたるものは食するに最も適當なる時機なり、然れども夏季にありては腐敗し易きを以て可成新鮮なるものを撰ばざるべからず、生肉は薄く切りて刺身となしたるものは消化最も良しく、滋養の効亦著し、然れども暑中は可るべく生肉を避けざるべからず、又牛、豚、鮭及鱒等は絛蟲病等の原因となる恐れあるを以て生肉を食すべからず、すべて肉類は煮沸するに當て强熱に過ぐるときは肉質硬固となり消化宜しからず、初めに熱水に投じ火力を減じて少時間煮沸したるもの或は蒸肉となしたるものを以て最も佳良なりとす。尤も是等は料理法の範圍なれば詳しくは述べず。

▲魚類は其滋養概して獸鳥の肉に及ばずと雖も消化し易きとは獸肉等にまさるをもつて甚だ營養に益あり、然れども鮭鱒などの肉にはまゝ寄生蟲のあるあり、若し過ちて之れを食すれば、腸中に入りて、蕃殖することあり、故に右に屬する魚類の鱠はなるべくは食す可からず、又蟹鰕の如き、食傷し易きものは、暑氣甚だしき節などには食せざるにしかず、况て河豚の如き、激毒あ

るものは如何なる場合と雖も決して、食す可らず、

▲魚肉を撰ぶには其眼と腮とを見るべし、眼膜水晶の如く、腮肉濃紅色にして鱗子の固く着けるものは鮮しきなり、眼膜白色を帯び、腮肉褐色にして鱗子の脱落するものは鮮魚にあらず、又大魚にして全身を見る能はざるものは其肉片の色を見るべし、鮮かにして、光澤あるものは良肉なり、光澤なく、月の如き水分子の浮びたるは、殆んど腐敗に近きものなり、魚肉は殊に腐敗し易きものなれば例へ鮮魚なりとも其調理に時間を多く費す時は暑氣の頃などは其煮終る迄に腐敗することありよく注意すべきなり

▲肉汁(ソップ)を製するには細挫したる肉を冷水中に數時間浸し後之れを凡そ一時間煮沸し布にて濾過すべし肉汁は滋養の効比較的に少きものなれども與奮の作用を致すものなり。

▲貯肉法は肉汁中に入れたる肉を攝氏百度以上に蒸熱して之れを固く封鎖し、空氣の竄入を防ぐを要す、所謂罐詰なるものは即ち是れなり、其他乾燥法、鹽藏法等あり、而して腐敗したる肉類中には恐るべき毒質を有するを以て之れを用ゐざるを可とす殊に夏季には最も注意すべし。

▲貝類は牡蠣を除くの外は皆不消化性のものにして往々中毒すべきものなり殊に病人には不適當なるは勿論にしと其他老人小兒及び胃弱の人は食せざるを良とす

(次號完結)

裁縫實習

女子職業學校教員　金子錫子述

前號に引續き西洋形小兒前掛のお話申さん、次に(ア)と(イ)との二つの圖の(ほ)の所を合せて左右裏表とも縫ひ合せまして、(ア)の(と)と(イ)の(へ)との所を表裏合せて左右ともぬひます、次は後の切の脊になる所をぬひます、(裏表とも合せまして、)次に(ウ)の切の前後の切を(は)の所を合せて縫ひます、(この所がもし切のかきめでありましたら袋縫ひに致します、)次に裾が

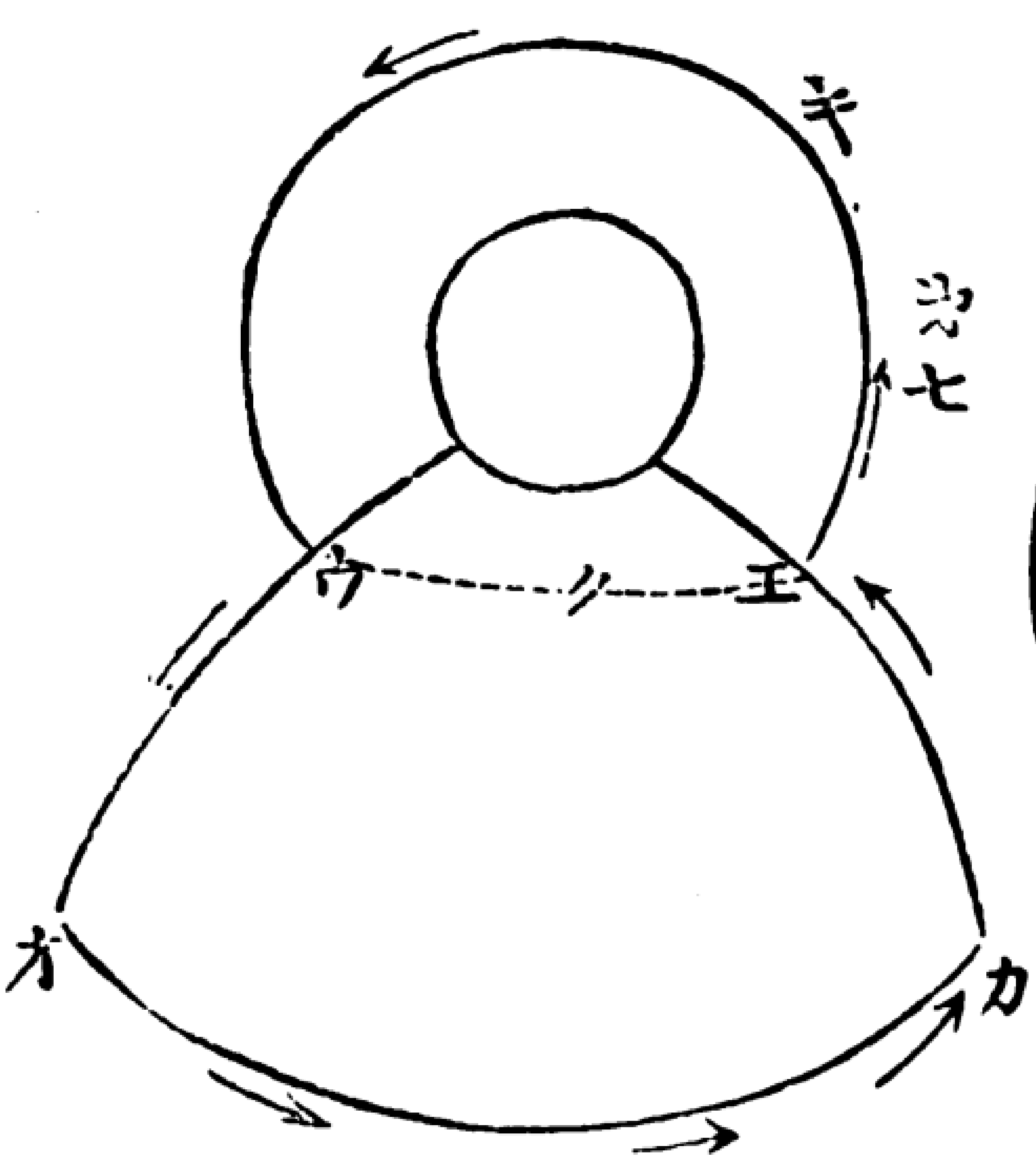
け之は一寸に折りまして、又其さきを一分五厘位折り込みましてマツリます、それだから裾がけの巾が八分五厘位になります、次は袴でございます、こゝは裏表の切を中に折りこみまして、其上を本返し(前返し縫ひのときに申しました通りに)に致してとめます 次に(エ)の切をとりまして、(ろ)の中央と(ア)(イ)の合せめの(ほ)の所とに針をうちてよく合せまして、(エ)の切を縮めて(ア)(イ)の切の(ち)の角までにとゞく丈に致し一針ぬきに返し針にて縫ひつけます、まづこゝで全體出來上りましたから、次には上まへに上と中央と下(イ)の切の下)と(ウ)の切に二所穴をあけて穴かゞりを致します、下まへはボタンをつけます、これで仕立あがりました、(ウ)の切がもし長くありましたら、二段か三段ばかり、あげを致してきせますと、このあげが自然飾の樣になりまして、見た所もよろしうござります。

(以上は前號に挿入せる説明圖を參照せよ)此の次にはやはり

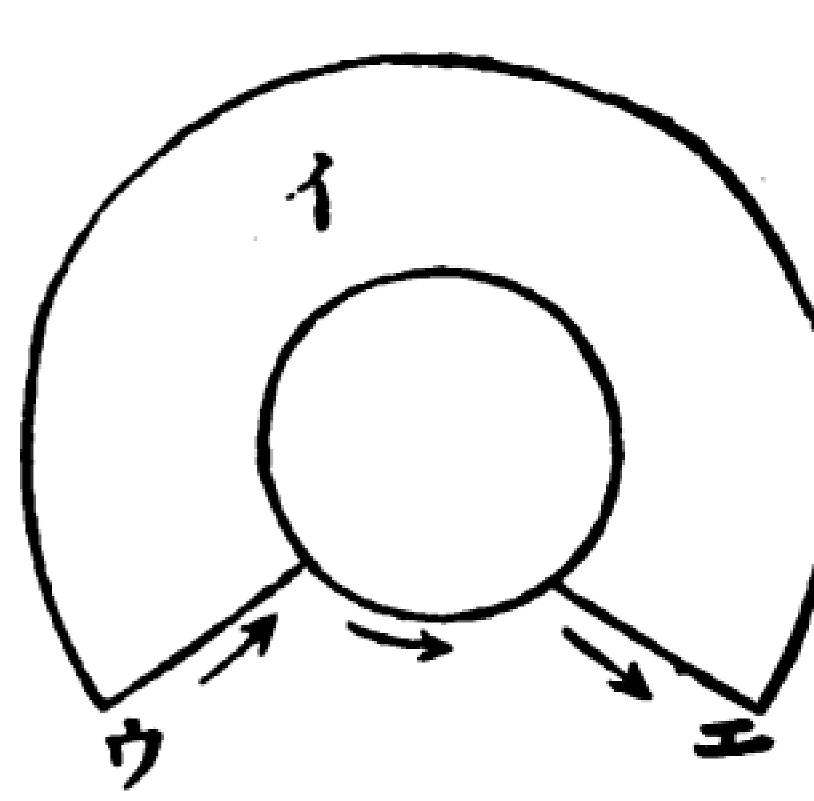
▲小兒用西洋前かけ

を申しませう、これは七八歳位の小兒用の前かけでございます、用布は大概三尺二三寸位で、この小兒前掛はキヤラコをつかひます、キヤラコも白無地よりは更紗形のあるのを多く用ゐます、それ故巾はおよそ一ヤール鯨尺の二尺四寸位でございます、さてこの裁方は第八圖の通りに致しますので、最初に巾のまゝ一尺四寸五分(あ)の切をとります、次には三寸巾、長さ一尺七寸の竪切(い)を二本とります 次に(う)の切これは(エ)の所を二寸八分、(オ)の所を一寸五分といたし、(カ)の斜の所に八寸位の間を丸みをつけて切りとるのでございます、次に(き)の切巾一寸二分長さ一尺四寸五分の切をとり、次に(く)をとります、此切の寸法を申せば(ケ)の巾五寸五分、(コ)四寸、(サ)の丈五寸八分、(シ)三寸九分、(ス)の巾一寸三分といたします、猶此(く)の切は、裏に白のキヤラコを同樣の形にきりましてつけるのでござります、次に巾二寸二分、丈八寸五分の切(セ)二枚をとります、これ丈けて切は裁ち終りましたが、また他にリボン、レース、縫ヒトリテップ、ユンブロイダ等の内適宜の飾を用ゐます、縫ひますには(あ)の

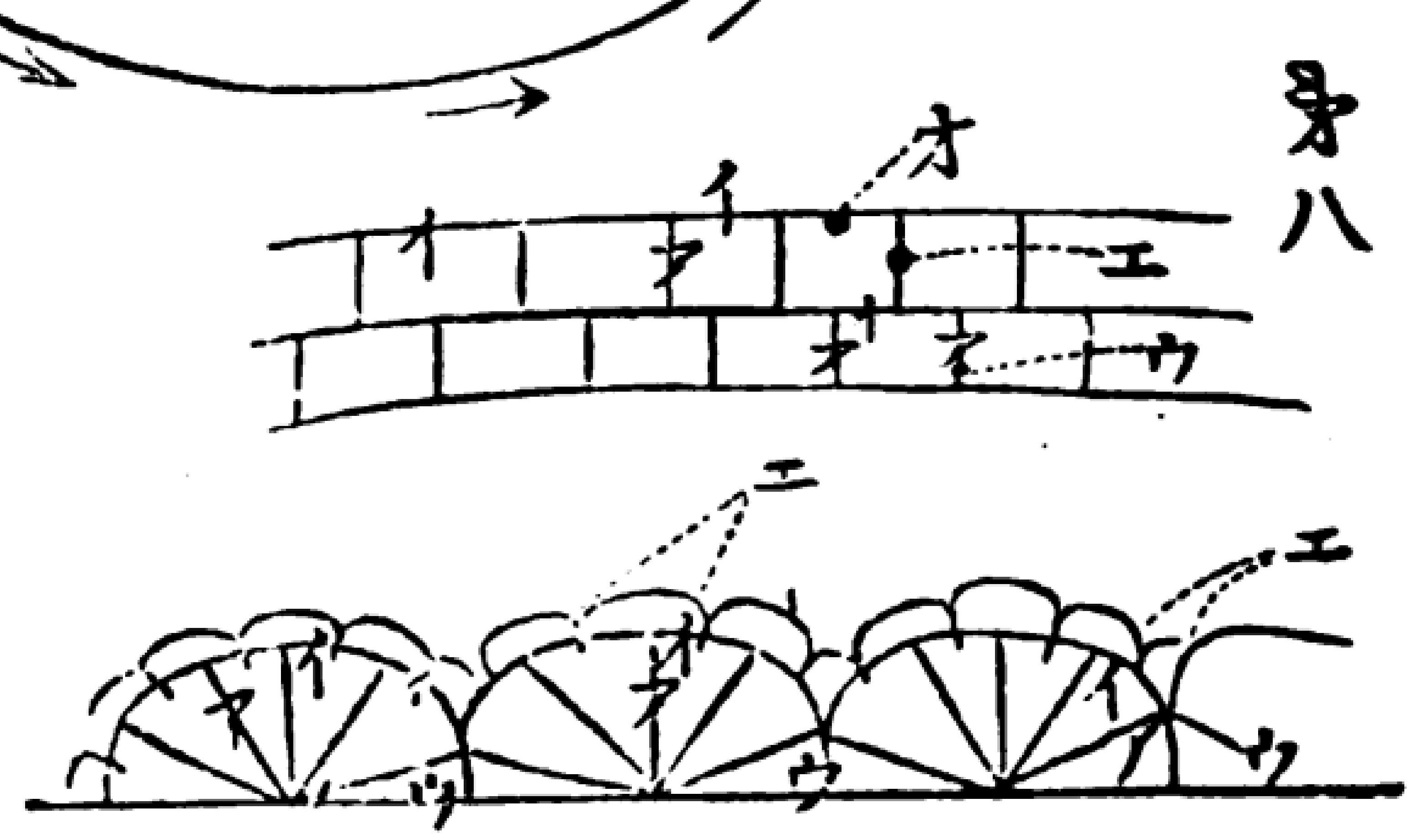
切をとりて裾かけを致します、裾かけは一寸位に裏に折りまして、其上を二分ほど内に折ります、それ故この巾は八分位になります、この裾がけはマツります、次に其裾かけの上二三分ツヽミまして適宜に二三段アゲを致します、次に上になる方(裾がけを致しました所の反對の場所)の兩端を一寸五分位づゝ殘しまして、三度小針に縫ひます(これはギヤダになる所でございます)次に(う)をとりまして(タ)の端より(カ)の斜の所及(エ)の側(ソ)の角に至るまで、なるべく端を細く三つ折に致しまし



第七



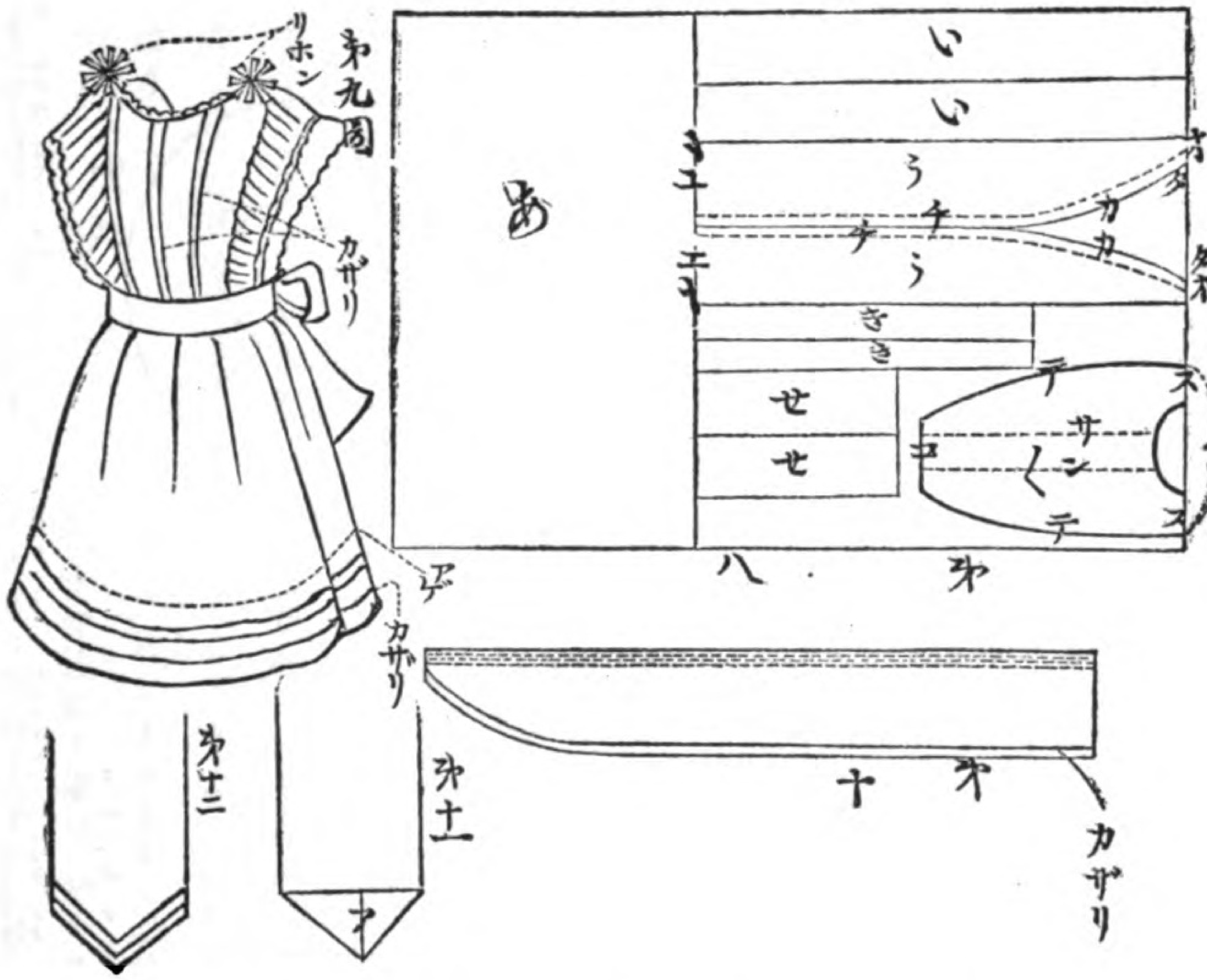
第六



第八

てマツります、二枚ともこの樣にして(チ)の間三分位離して、點線の如く飾をつけます、この飾はヌヒトリテツプを用ゐます、飾はなるべく前掛地の摸樣の色合によく似合ふものにして、あまりとびはなれた色のものは用ゐぬ方がよろしくあります、次に(う)の切を第十圖の通りに(ア)の所を三通り小針にぬひます、次に(い)の切をとりまして、第十一圖の通に致しますこれは(い)の切を竪に二つに折りまして、其端を縫ひて開きますので、此圖は裏の所を示しましたのでございます、即ち(ア)の

所が(い)の切の端をぬひましたところでございます、次に兩方のふちを細く三つ折りに致しましてマツります、次に第十圖の三角のさきの表の方に端より三分位はなれた所に飾をつけます、この飾も前につけました飾と同樣のものを用ゐます、丁度第十一圖の樣になります、次に(く)の切をとりまして、表裏の切を合せて(ツ)のくびの所を縫ひまして、縫ひこみに切り込みを入れてつれぬ樣に致し引かへします、次に(せ)の切をとりまして、



たてに二つに折り其山を(く)の切の表裏合せた其合せ目につけ針をうちまして、(ス)の所を裏表別々に縫ひます、それ故(せ)の切の折目が背の方にむきて、かきめが手の方に向きますのでござります、次に此縫ひ込みを兩方に割ります、次に(う)の切をとりまして、三本通り小針に縫ております方を(く)の切(テ)の方に縫ひ合せます、此縫ひ合せますときは(く)の切の肩の所(ス)より(う)の切が四寸程後の方に出る樣にいたし、又此切の

細き方が後につき、廣き方が前につく樣にして、(く)の切の(ス)の所に待針をうちまして、前の方即ち胸の方猶委しく申しますれば、(く)の切の(テ)の所は(う)の切を、この(テ)の裏表の切にてはさみて縫ひ、後の方は(せ)の切にてはさみて縫ひ、左右ともこの樣に、してつけるのでございます、(此ときは(う)の切が長くおりますから前に三本小針て縫ひ置きました所にて縮めて丈を合せますのでございます、第九圖は出來上りでございます、

(つゞく)

編物實習

女子職業學校教員　豊原繁尾子　述

⦿たれ帽子

此編み方も種類が澤山ありますがこゝでは長編と笹編みとて致します帽子に就て御話し致しませう、(長編笹編みばかりではなく自然他の編み方も交りますが、主にこの二つを用ゐて出來上るのであるから右樣申上たのです、)たれ帽子にとりかゝります前に編み方(長編み笹編みに就て)の御話をして置いた方がわかり易いからこゝて一寸申しませう、長編みは前涎掛のときに申ました通りヘークルに糸をかけそのまゝ下の目をすくひ糸を引出しましてヘークルにかゝりております糸を二本一度に引出し又其次の糸をも一度に引拔きます笹編みこれも編みつけるものかもはや出來て居りますか若しくは初めてなれば鎖編をつくりますとか致しまして、この笹編みを編つけてまゐるものとを置きまして、それより始め鎖編三つを致しヘークルにかゝりてあります糸を少し長く引き出しまして、鎖の三つの目を一つ二つと順々にヘークルを入れては、糸をすくひ出しましてヘークルにかけ、次は初に出來てをる(今笹編みをつけるまでに編み上げてまゐりました目、もしくは鎖り編みの目)目を順に一つ二つと一つつゝヘークルを入れては糸をかけて引出します、それ故ヘークルにかゝりて居る糸が都合五つになります、それを一度に糸を引出し猶今一度糸を引出しますこれて笹編み

一つが出來ました、次のを編みますには其前に編み終りになつた糸を少し長く引くと前に引出した目は小くなる、それに又、、、、へーケルを入れて糸を出して、、、、へーケルにかけ直後即ち向ふに浮いてをる長糸に、、、、へーケルを入れて糸を出してかけ次は下の目(できてをる目)を一つ二つと順に、、、、へーケルを入れては糸を引出してかけます、その、、、、へーケルにかゝりました糸が五つとなるからそれを一度に糸を拔て直に又糸をかけて次を拔き出します、この樣にしてまゐる編みかたが笹編みと申すのです。

扨此二つの編方を主として二才位の(たれ帽子も之を用ゐる小兒の年齡によりまして亦種々編み方の大小もあります、)女兒の用ゐるものを作りませう、初めに鎖を五つ編みまして始めの目に、、、、へーケルを入れ糸を拔き出しまして、丸き輪をつくり、次にその所より鎖編み三つを編みて此度は丸くなつた輪の中より糸を引出して長編みを二十個編みます、(丁度誕掛けの六角形の眞中をこしらへました樣に致します、)その編み終りの（二十めの末は）始めの長編みの目に、、、、へーケルを入れて直に糸を引出します、それより又鎖三つ編みまして笹編みを一つ編みます、(前に申しました通りに)次の笹編みは前申した通りに今、、、、へーケルにかゝりて居ります糸を少し長く引出しまして直く其のもとに、、、、へーケルを入れて糸を引出し、次は向ふに浮てある長き糸より糸を引出して、、、、へーケルにかけ）こゝまでは前に御話し致しました通り）次は前の笹編みの末の目の所に又、、、、へーケルを入れて糸を引出し次は下の目）即ち長編みの上の目に）、、、、へーケルを入れて糸を出し都合、、、、へーケルにかゝる糸が五つになりまして之を一度に糸を拔きてまゐります、此二度目の笹編みは前申したと少々ちがひますが之は目を增すために致したのでございます、其次は並に笹編みを一つ編み又次の一つは前の樣に目を增して編みます、斯樣に一つ置きに目を增して一回致します、末は此笹編みの初めに鎖編みと三つ編でありますす其處を前後の目を一つに通して、、、、へーケルを入れて一度に糸を引出します、

か樣致しませんと茲にをかしな目が出ます、次の側は又初に三つ鎖編みを致し笹編みの大なる目の向ふ側の糸を取て二つ長編みを入れ次は小なる目を二本(前後になりて居る鎖の樣な編み目)一度に取まして一つ長編みを入るといふ工合にして目を增て一回致します、又次の側は笹編みを一つ置きに殖して、長編、笹編と互違に目數を增しながら都合七回いたし長編みにて終ります、それより此周圍の三分の一位を殘して、笹編みを編み又其次に長編を編み都合十度編みます、此十回編みまする所は一側毎に糸を切りまして編みます、左樣致ませんと編方の裏表混し合て變なものになります。

畫學の心得

武村千佐子

前回に六法の内なる氣運生動及骨法用筆といふ事を述べましたが、偖骨法の筆使ひと墨使ひの事は前に概略を申しましたが、骨法と申す事につきては未た申ませぬ故、夫を簡畧に申しまするど、骨法とは畫の骨かき則ち輪廓のことにて御在ります、是にて繪畫の大體が備るもので御在りますれば、此骨法用筆にはよほど意を用ひて研究致さねばならぬので御在ります、譬へて申さば、骨法は宛も家屋の素建の樣なるもので、此家屋に襖やら障子やら疊などが、附屬して人の住む家となるので、此襖や障子の樣なものは、丁度墨の濃墨或は彩色といふべきものに當ります、故に此家屋の木材は勿論のこと、建築も堅牢に且工みに造られ、そして間取り及び襖障子等の建具も、是に對して釣合よきものが用ひられてこそ、初めて壯麗なる完全の家屋となるので御在ります、是に反して材木も粗末なる上に、建方もよからぬ家に疊建具のみ立派にても不釣合にして完全なる家屋とは申されません、是は丁度骨法の未熟なるものに彩色、渲染等をたくみに致して、其筆跡の拙なきを蔽ふと同一なる事でありますれば、繪畫には此骨法用筆といふ事を、何より大切と考へ能く筆の圓熟を謀らねばなりませぬ。

(の)

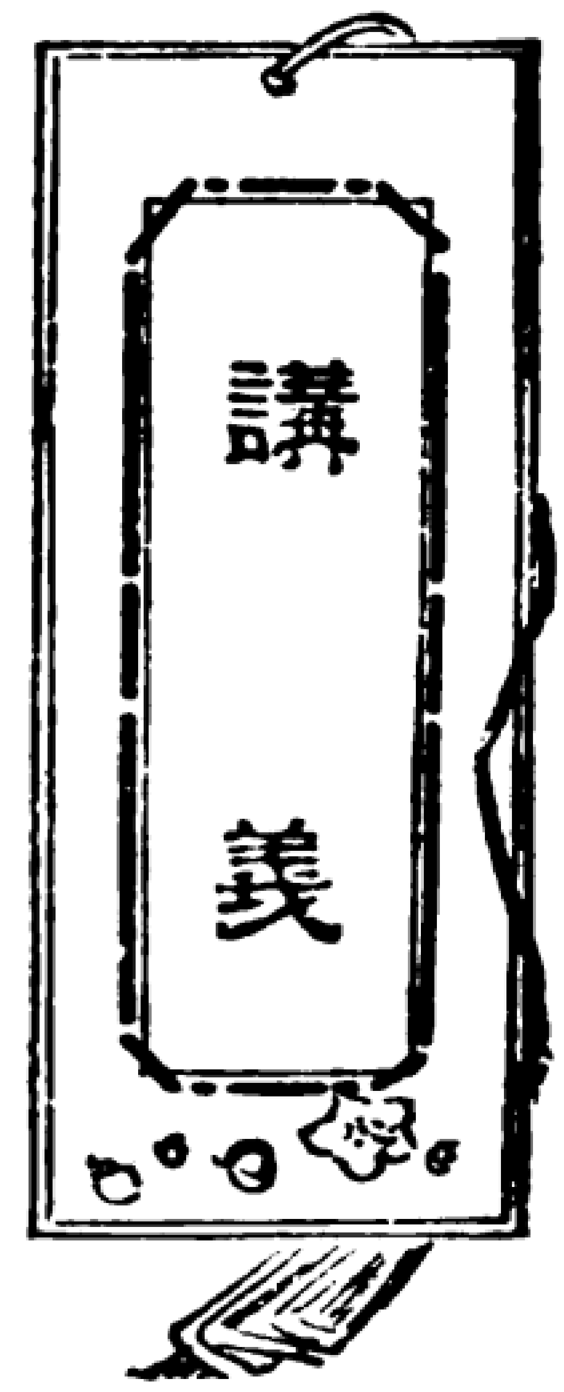
圖案 刺繡用

曲水





武村耕靄女史案



國文學講義（枕草紙）

鳥

文學士 尾上柴舟

ことどころの物なれど、鸚鵡いとあはれなり。人のいふらむことをまねぶらむよ。郭公。くひな。しぎ。みこどり。ひわ。ひたき。

○ことどころ、異處なり。乃ち、此處にては、外國の意なり。鸚鵡は、熱帶國の産にして、わが國に棲まぬものなれば、かくは、いふなり。○鸚鵡 皆人、知りたる鳥なれば云はず。ことに、諸孃の中には、養ひ馴らしたまふもあらむ。○人のいふらむことをまねぶらむよ。こは、鸚鵡の、人の語を眞似るよし、聞きたることなどのあれば、かく、想像にいへるなり。○郭公。背黑く、腹白し。夏の初めに鳴きて、飛びわたる鳥なり。奈良朝頃より、この鳥を詠める歌、甚だ多く、殊に、平安朝に至りては、歌人は、尤も、之を賞て、はやし、夏の景物として、必ず、之を歌ふことゝなれり。○水鷄。狀すこしく、鷄に似たる水鳥なるより、かくはいふなり。夏の夜、澤邊などに居て啼く、聲人の戸を叩くが如し。されば、平安朝よりは、夏のものとして、人の來りて、戸を叩くによせて、多く、歌に詠めり。○鴫。嘴形、水鷄の如く、また、鴇にも似たるところあり。嘴長く、全身、青みたり。秋の頃、澤田などにて啼く。これも、鴫の羽搔を數ふなど、平安朝にては、秋のものとして歌題に入れたり。○みこどり、鵐なり。翼に黑き斑あり。目の周りに、白き輪あり。大さ雀ほどなりといふ。鵐字を分ちて、巫鳥としたるなり。俗にいふに、むく鳥のことゝいふは、蓋し、誤ならむか。○ひわ。ひたき。鶸は、形、雀よりも小さく、色青く、黃ばめり。頭、翅のあたりには、黑きところもあり。鶲は、大きさ、鵐ばかり、頭は、灰色背は、薄黑し。ふるくより、歌にもよめり。

○大意。鳥には、愛らしく、をかしきもの數多あれども、其中、外國のものにて、我國には棲まぬものなれども、鸚鵡は、いと哀れなるものなり。鳥ながら、人の言ふ語を擬びなどする、といふも、他鳥に異なりて、いと哀れなるなり。郭公も、水鷄も、また、鴫も、みこどりも、ひわも、ひたきも、みな、とりどりに、をかしくあはれなり。

○何となけれど、書きさしたる筆つき、いと面白し。普通ならば、鸚鵡は、異處のものなれども、人といふことなどまねびて、いとあはれなり。郭公、鴫、ひわ、たき、などもまたをかしく、あはれなるものなり。など、長々と、書きつくべきを、句を前後し、語を省略して、感動の詞などを加へて、語勢を強めたる、決して、尋常の筆にあらじ。

山鳥は友を戀ひて鳴くに、鏡を見せたれば、なぐさむらむ、いとあはれなり。谷へだてたるほどなど、いと心ぐるし。

○山鳥。形、雉子に似て、美しき鳥なり。尾は、それよりも長し。山鳥の尾のしだり尾の永々し夜、など、ふるくより詠めり。動物園のみか、剝製となりて、諸處にあれば、何人も、熟知したまふなるべし。○友を戀ひて鳴くに、鏡を見せたれば云々。こは、むかし、支那にて、山鳥を、帝に奉りしに、更に鳴かず。ある妃、これは、友を戀ひて、鳴ぬにやあらむとて、これに、鏡を示したれば、喜びたるけしきにて、尾を廣げて鳴き出でたり、といふ故事によりて、書けるならむ。此文、鳴くに、とあれば、猶他の故事にか、とも思へど、古來、皆、此くの如く、解き來り、又、他に、それと覺しき事もなければ、今も猶、これに從ひて、改めず。○谷へだてたる程など。山鳥は、ふるくより、雌雄、岑を隔てゝ寢る、といひ慣はして、歌にも多くよめり。されば、こゝにも、山鳥といふより、この事を思ひ出でゝかくいふなり。

○山鳥は、昔、友を戀ひて鳴くことありしに、鏡を見せたれば、おのが影を、友か、と思ひて、思ひ慰みた

り、といふなど、いと哀れなることなり。夜に入れは、雌雄、一處に居らで、山の岑を隔てゝ、打ち眠る、といふことなるが、其夜の程などおもふに、いと心苦しう覺ゆ。○鳥の上まで、身に引き較べて、思ひやり深きは、女なればなり。

鶴は、こちたきさまなれども、なく聲、雲ゐまで聞ゆらむ、いとめでたし。頭あかき雀。いかるがのをどり。たくみどり。

○こちたきさま。こちたきは、言痛きなり。言葉にていふも、痛きほどの意。此處にては、大層な、仰山な、ほどの意なり。鶴のさま、大層らしきをいふなり。○鳴く聲雲居まで聞ゆらむ。これ鶴の聲に明亮なるものなれば、天にも響く、といふなり。詩經に、鶴鳴二于九皐一、聲聞二于天一、とあるより來りしなり。○かしらあかき雀。朱雀なり。めでたきものにいへり。いかなるものにか。見ねば知らず。○いかるがのをどり。斑鳩は、大きさ、百舌鳥ばかり、全身灰色にて、嘴大きく、短かく、脚はあかし。をどり、雄の鳥なり。○たくみどり。巧鳥は雀に似て小く、嘴鋭きこと錐の如し。巣を作るに巧みにて、萱葦などの皮を取り、また、麻糸毛髮などを拾ひ來て、木の枝などにかけて、つくるといふ。

○鶴は、容躰大層なれども、その啼く聲の、空までも聞えわたる、といへば、いとめでたきものなり。頭赤き雀。斑鳩の雄鳥。巧鳥。いづれも、めでたき鳥なり。

○鶴は容儀、秀麗なりとて、何人も賞するものなるを、こちたきさま、と云ひ下したる、尤も面白し。かゝる微細なるところにも、記者の觀察の、他と異なれるを見るべし。

鷺は、いと見るめもみぐるし。まなこゐなども、うたて、よろづに、なつかしからねど、ゆるぎの森に、ひとりは寢じ、と爭ふらむこそをかしけれ。

○見るめも見ぐるし。鷺の有樣、鶴に似たるものな

らいと品下りたれば、見るも見惡し、といふなり。見ごめは、我見る眼なり。○まなこゐ。眼居にて、まなざしなり。目附きなり。○うたて。いやに、へんにほどの意。○よろづに、なづかしからねど。よろづに、は、すべて、なり。鷺の眼つき、すべて、殘るところなく、面白く思はれされどもの意なり。○ゆるぎの森。近江國、高島郡にある森にて、萬木と書く。○ひとりは寐じ。この句は、六帖にいでたる、「高島やゆるぎの森の鷺すらも獨はねじと爭ふものを、」の歌によりて書けるなり。

○鷺は、容貌品下りて、いと見にくきものなり。眼付きなども、險ありて凄まじく、いやに、すべて、慕はしく面白きさまならねど、古歌にある如く、近江の萬木森にて、獨は寐じ、とて爭ふらん そをおもへば、いとをかしく、趣きあることゝちもするなり。

○鷺の目附きを誣りたる妙なり。實に、柳のかげ、葦の間に佇みたる、殊に、詩趣あるもの なれども、其眼を見れば、怒りたる女の眼付覺えて、頓に、興の減するを感ず。鶴も、鷺も、同じく、其容貌にては貶しめながら、一は、聲にて褒め、一は、歌にて揚げたるなど、筆法の面白さ、注意すべきなり。

はこどり。水鳥は、鴛いとあはれなり。かたみにゐかはりて、羽の上の霜をはらふらむなどいとをかし。みやこどり。

○はこどり。容鳥におなじ。いかなる鳥にか、定かならず、美しき鳥の總名なり、などもいへり。六帖に、「深山木に夜は來て鳴くはこどりの明けばかへらむことをこそおもへ」などの歌により、聯想して、書けるならむか。○かたみに居かはりて羽の上の霜を掃ふらむ、は、鴛は雌雄中睦しきものなれば、寒き夜、互に居たはりて、翼に置く霜を掃ひ合ふものなり、といひ傳へたればいふなり。六帖にも「羽の上の霜うち掃ふ友をなみをしの獨ねするぞわびしき、」などいへり。○みやこどり。鷗の類なり。伊勢物語に「白き鳥の、嘴と、脚との赤き、鴫の大きさなる。」といへり。

○はこどりもまた趣味あり。水鳥の中にては、鴛いと

哀れなるものなり。雌雄の中睦しくて、寒き夜互に居處を換へて、翼におく霜を掃ひ合ふ、といふなどおもへば、いと、趣あるものなり。都鳥も、古くより、歌にも詠めれば、これ、また、をかしきものなり。
○水鳥の中、ことに、鴛をとりいだしたるは、その愛情の深き點にあり。今も、昔も、女子の同情は、常に、かゝる處にあるなるべし。

川千鳥は、友まとはすらむこそ。雁のこゑは、とほくきこえたる、あはれなり。鴨は、羽の霜うちはらふらむ、とおもふにをかし。

○川千鳥。川に居る千鳥なり。背と、翅とは黒くして、腹はしろき水鳥なり。○友まとはすらむこそは、千鳥の、友を迷はすらむなり。再言すれば、友に迷ひたらむなり。故意と、友を迷はして、逃げ廻るにあらず。そは、この文は、紀友則の「夕されば佐保の川邊の川霧に友まどはせる千鳥なくなり」によりてかけるものにて、この歌の意は「川霧の深き中に友を失ひてわびしげに千鳥のなく事よ」といふなればなり。こそ、は例の書きさしなり。いとあはれなり、などの詞を含めて解すべし。○鴨は、はねの霜うちはらふ。古くより、鴨の上毛におく霜の、などよめれば、かくはいふなり。
○川千鳥は、川霧などの深く立ち籠めたる中に、友を失ひて、わびしげに啼くらむこそ、いとあはれなるものなれ。雁の聲は、遠き雲井より、ほのかに聞えたる、もつとも哀れなり。近くては、騷々しきのみなり。鴨は、寒き夜、羽に置く霜を打ち掃ふならむ、と思ふにつけて、いと趣味あり。
○千鳥もさることなれども、雁の聲は、遠きがよし、といひたるは、實に然り。近ければ、彼の鵺の聲もかくや、と思ひいでらる。不忍のほとりにて、枯蓮の間に落つるを聞くごとに、此句を思ひいでざることあらず。鴨に、翼の霜をいへる、前の鴛と重なりて、面白からず。

漢文評釋

文學士　久保天隨

下岐蘇川記（上）（齋藤拙堂）

（作者小傳）齋藤正謙、字を有終といつて、拙堂は其號である。もと伊勢阿濃津の人であつて、初に津坂東陽などに就いて學び、後に昌平黌に入り、學成りて後、國に歸り、藩學有終館の督學となつた。この頃、賴山陽は京都に門戸を張つて居たが、拙堂は之と交り、文字の契、頗る淺らずといふべき程であつた。一體拙堂は、學者といふよりも、寧ろ文人といふべき側の人であつて、著述も中々多い。その重なのは、拙堂文集●拙堂文話●月瀨紀勝●拙堂紀行文詩●鐵研餘滴●海外異傳などである。かの梅花の勝地たる月瀨も、實は拙堂の文によりて初めて世に知られたのである。その死んだのは、慶應元年であつて、年は六十九であつた。門人ども數多くあつた中で、一廉の識見を備へて居たのが土井聱牙で、此人の著述にも取るべき者が多い。こゝに掲げた拙堂の紀行文は、大抵の漢文教科書に抄出してあるもので、是非知らなければならない程のものであるから、一通りの評釋を試むるに立ち至つた譯であります。

天保丁酉四月。余竣役。與兩藩士俱自江戶還。取路東山。舍輿步行。旁探名勝。五月四日。下十三嶺。晚宿伏見驛。連日崎嶇。經涉山間。頗疲。至奴輩把槍荷鎧者。痞痹不能起。且聞水路之勝熟矣。因謀賃舟下岐蘇川。至桑名殆二十里。不一日而達。乃召舟人戒之。

（訓讀）天保丁酉の四月余役を竣へて兩藩士と俱に江戶より路を東山に取り輿を舍てゝ步行し旁ら名勝を探る五月四日十三嶺を下り晚に伏見の驛に宿す、連日崎嶇山間を經涉して頗る疲る、奴輩槍を把り鎧を荷ふ者に至りては、痞痹起つ能はす、且水路の勝を聞いて熟せり、因て舟に賃して木蘇川を下らんと謀る桑名に至り殆んと二十里、一日にして達す、乃ち舟人を召して之を戒む

（字解）天保丁酉といふのは、其四年であつて、今を去ること、丁度七十年前である、○竣役、むかしの藩士

は、江戸詰といつて、交代の期を定め、江戸の藩邸に留まつて居たもので、これを此處には假りに役といつたのである。竣は終る。即ち江戸詰の任期が濟んだといふこと、○兩藩士は同藩の侍二人、○東山は東山道、即ち木曾街道、○舍輿歩行、輿に乘らずして、徒歩すること、○十三嶺は十三峠、峠は日本で拵へた俗字だから、漢文には用ひない、○伏見驛は、十三峠の下に在る一驛で、美濃の國の中である、○崎嶇、路の險しきに惱むこと、○經渉、經めぐり、且つ登り降りすること、○奴輩、召仕の下部ども、○把槍荷鎧、槍をかついだり、又は鎧櫃を脊負ふ。むかし士格以上の立派な侍の道中には、必ず此二つを缺かさない。中に鎧を持たないものは、ほんの見得ばかり粧ふ爲に、鎧櫃の中に釘や鍋釜の類を入れ、要もない重そうな物を、伴の下部に運ばしたといふ話も聞いて居る。但し拙堂ともあろう人には、眞逆そんな事も無かつただろう、○瘏痡、これは少しひねくつて、古い字面を使つて見たもので、その本は詩經周南卷耳の詩に出て居る。瘏は、馬病んで進む能はず、痡は、人病んで行く能はずといふことであるが、三字合せて疲勞甚しい事と見れば、十分である。大方足の裏へ豆でも踏み出したのであろう、○不レ能レ起、起き上るとも出來ぬまでに大弱りの體、○且聞二水路之勝一熟矣、その上、河舟の風景頗る優れて居るのを聞いたことも久しい前からであるといふ義、○舟レ賃は舟を雇ふこと、○岐蘇川、本當は木曾川と書くのだが、一寸洒落れて岐蘇の字を充てはめたので、今でも猶は殘つて居る漢學先生の癖である、○召二舟人一戒レ之、船頭を呼びつけて、用意して置けと命じたこと。

●●(文義)頃は天保四年四月——花のお江戸も春すぎて若葉の稍涼しげに、旅には持つて來いといふ時節——江戸詰の任期も目出たく濟んだから、同藩の侍二人と打ち連れ立ちて、故郷に向つて出發した。登る東海道は五十三次も、目馴れては面白くないといふ處から、木曾街道を取り、急がぬ旅のゆる〱と、輿にも乘らず、徒歩と出かけ、ところ〱傍路に逗入つ

て、名所古蹟など尋ねたものだから、大分暇がかゝつて、五月四日といふに、十三峠を越え、その晩には、美濃の國伏見の驛に泊つた。ところが、すでに數旬の間、日ごと險しき山道に行き惱み、木曾溪を越して來たものだから、自分も大分疲れたが、可愛想にも、槍を持ち鎧櫃を舁いだりする下部どもは、猶更甚しく、とても〳〵起き上れぬまでになつて仕舞つた。これで最早明日からは歩けぬといふのは、知れた事てある上に、河舟の面白い事を久しく聞いて居たから、これこそ幸の機會といふので、舟を雇ふて木曾川を下ることを相談した。こゝ伏見から桑名までは、殆んど二十里あるが、丸に一日かゝらないで行き得るとの事故、遂にそれと決し、船頭を呼び寄せ、用意をして置けと命令した。

(評論)この一段は、此遊を爲すに立ち至つた理由を述べたもので、且聞水路之勝熟矣の一句が、全篇の主眼であつて、以下數段の精彩も、實は此から出たものてある。はじめから水の事を言はずに、山道の險しいことに筆を着けたところが面白い。つまり、パノラマの樣なもので、初に一寸の間、暗い處を通るといふと、今度見るものが一層明かに見える。これが文家の一秘訣である。若し此文て、初めから木曾川の源は何處だなど、知れ切つた事を書き立てたなら、忽にして詩趣を減じ、折角の紀行文も、單なる地理書の一節に成つて仕舞つたのであろう。

翌日夙起。趨水濱求舟。舟人家在前岸樹林中。閉戸未起。阻以灘聲喧豗。累呼不達。唇焦舌燥。久之乃應。與其兒艤舟來迎。日巳加辰。乃發。舟狹長。薄板爲之。呼爲鵜飼。兒纔十三歲耳。父在舳。兒在艫。各持櫂。操縱甚習。灘急舟走。兩崖聳巘。一時皆搖。當前所見。倏忽在後。唯見岸行山走。而不覺舟移。

(訓讀)翌日夙に起き。水濱に趨きて舟を求む、舟人の家は前岸樹林の中に在り、戸を閉して未だ起きず、阻むに灘聲の喧豗を以てす、累ねて呼ぶも達せず、唇焦、舌燥すると之を久ふし乃はち應ず、其兒舟を艤ふて來り迎ふ、日巳に辰に加はる乃發す舟狹長、薄板之を爲くる、

呼んで鵜飼となす、兒僅かに十三歳のみ、父は舳に在り兒は艫に在りて各艫を持ちて操縦甚だ習ふ難急にして舟走る兩岸の巒巘一時皆な搖く、前に當つて見る所倐忽として後に在り、唯岸行山走を見る而して舟の移つるを覺へず

●●(字解)夙起、早う起きること、○趨、赴くと讀めども、走つ行くことゝなり、○阻、妨ぐ、若しくは邪魔すること、○灘聲、早瀬の音、灘は河中の急流、瀬となせるところをいふ。海に用ふべからず。遠州灘などいへるはそもそもの誤にして、元と漢字を碌々知らぬ者が、善い加減に充てはめしより起りし者と思はる。支那にも空舷灘などいふところあり、蜀中泯江の中にあるを見ても、灘の字の意義は分かることゝであるが、尚ほかゝる誤用の文字は、其類頗る多い、○喧豗、かまびすしきこと、豗、音はカイ、○累呼、續けざまに呼ばること、○唇焦舌燥、呼ぶことの甚しきを形容した辭○廼應、やつと返事をした、○艤舟、舟を整へて漕ぎ來る、○加辰今の午前八時ごろ、○鵜飼、鵜飼の舟に似て居るところから起つた名であらう、○舳、へさき、即ち船首、○艫とも、即ち船尾、○檝は楫○操縦甚習巧に使ひ分くるなり、○巒巘、ともに山。强いて差別をいへば、巒は孤立せる山、巘は絶壁をなせる山、○搖は動く○倐忽、たちまちと訓す、普通に云ふのよりは意味はるかに强し。

●●(文義)そこで、翌日の朝、待ち兼ねたといはねばかりに早く起き、河側に走つて行つて、舟をさがしたが、船頭の家は向ふ岸の林の中にあつて、まだ戸をしめて寐て居る樣であるから、聲を限りに呼んだけれども、河瀬の音の甚だやかましいのに妨げられて、いくら續けて喚いても、聞えない。やがて唇が焦げ舌が乾くほどに成つて、やつと返事をして、御約束の船頭は其兒と一處に、舟を整へて漕ぎ付け、先づ之に乘ることが出來た。そこで、舟の樣な如何と見めぐらせば、薄ッぺらな板でこしらへて、形は細長く名は鵜飼といふとのことである。船頭の兒といふのは十三歳であるが、親父と二人で、ちやんと場處を分ち定め、父

はへさき、兒はとも、いつれも櫂を持つて、その漕き出す按配は、中々眞似も出來ぬほど巧に熟練したものだ。さて河瀬が早いから、舟は忽ち走り出す。兩方の岸の山々が動き出す。今まで前にあつた山が、忽に後になる。唯だ岸が行き山の走るのを見るばかりで、舟の進み行くは覺えない、その早いことは、これで知れます。

●●（評論）舟に乘る前に、舟を呼ぶことを述べて、それが灘聲の爲に中々聞えなかつたといつたなどは、なか〳〵上手な處だ。こゝに、河の流の早いことが、初めて實際に寫し出されたから、讀者は思はず釣り込まれて、これから先、舟行の快はどうだろうと思ふ樣になる。なんでも染物に下染があると同じて、文章にも下染が肝心だ。それから、後は一通り舟の形、船頭二人操縱の巧なる有樣を述べ、灘急以下の六句は、この舟行見るところの大體を畫いたもので、作者は讀者の膽玉をひしき呉れむといふ意氣込てやつたことがあり〳〵と見える。これから以下は、岸行山走と舟移といふ二つの事を、細かに書き立てたもので、文脈の亂れないは言ふまでもなく、痒い處に手の屆くやうに出來て居るから、讀者は實際その場處に臨むやうな感が起る。こゝらの處から考へても、文章は書きなぐりには出來ないものだといふことが分ります。

歷代和歌評釋（三）（古今集の部）

文學士　鹽井雨江

君來ずば、ねやへも入らじ。こ紫
　わがもとゆひに霜はおくとも。

○これも、仝じ所にあり。讀人は仝じくわからず。

○ねや。我が寢間なり。○こ紫。濃き紫なり。紫の組糸にて、髮を結ひ居りたるなり。○もとゆひ。髻を結べる紐なり。もとゆひに霜かおいとは、我が頭髮に霜のおくをいひたるなり。

○一首の意は、君の來ずば、我れは決して寢間へは入らない。よしや、かく君を待ちて、外に立ち居りて、夜は

更け、我が頭髪に霜の深く置くとも、決して厭ひはせぬ我れはいつまでも、かうやつて君を待つて居ようといふ事なり。

〇我が頭髪にといふ事を、紫の我が元結にといひたる、大に面白し。霜はおくともといふに對して、一層其の情を強く深からしめたり。一首切なる愛情、誠に可憐なり。

形見こそ今はあだなれ。これなくば、
　忘るゝ時もあらましものを。

〇これも仝じ巻にあり。讀人は仝じくわからず。

〇形見。我が身の形と思ひて見てよとて、別るゝ人の遺したる物なり。〇あだ。敵といふやうなる意なり。〇これなく。ば此の形見が無くばといふ事なり。〇忘るゝ時も云々。其の人を忘るゝ時もあらうものをといふ事なり。

〇一首の意は、形見が、反つて、今は我が身の敵であるワイ。何故となれば、その形見のなくば、其の人の事を、少しは思ひわするゝ時もあるべきを、その形見のある爲めに、其の形見が、我が目につきて、反つて、一層我が思ひのたねとなりて、其の人を忘るゝ事が出來ぬ。されば、うれしかるべき人の形見は、反つて、今の我が身の敵なりといへるにて、形見の目につきて、人のなか〳〵に戀ひしく思はるゝより、この形見が敵であるよといへるなり。

〇形見が敵なりとは、愚痴に似たれど、なか〳〵に、人情のまことを言ひたりといふべし。愛情の極は、畢竟愚痴なり。愚痴こそは、愛情の極なれ。山上憶良が、筑前の任所にて、其の妻を亡くしたる時に、

くやしかも、かく知らませば、あをによし
　くぬちこと〴〵見せましものを。

「斯く早く死ぬる事と知つたならば、故郷の大和にありける程に、其の奈良の都の國中の名所などをも悉く見させて樂ませせんものなりしを、さる樂みもさせずして死なせたる事の殘念なるよ」といひたる、さても、心猛かるべき男子が、餘りに愚痴なりと笑ふ人もあらんが、この愚痴こそは、誠に愛情の極なれ。かゝる時に、この

愚痴なき者は、愛情の至らざる者なり。

目やあらぬ、春や昔の春ならぬ、
　我が身ひとつは、もとの身にして。

○これも、同じ巻にあり。在原の業平朝臣の歌なり。業平朝臣、一年、春の初めつ方、庭の梅の花ざかりなる頃、さる人のゆかしき宿に語らひよりて、睦じくちぎりかはしたる事ありしを、其の後、いかにしけむ、その人は、何處にか移り住みて、行方も知れず。その音づれも絶えてきこえずなりぬ。業平朝臣は、いと忘れ難く戀ひしくて、またの年の春、梅の花の盛りの頃、ありつる人の故宅にうかれ行きつ。立ちて見、居て見、見れど、ながむれど、人はあらず。宿は荒れはてて、去年に似るべくもあらず。昔にかはらぬ庭の梅、昔にかはらぬ軒の月、思ふに見るに、いとゞ昔のなつかしくて、徘徊去るに忍びず。廿日の夜の月の傾く頃までも、そのあばらに荒れたる故宅の椽にたゞずみて、去年の人を慕ひ、去年の事を忍び、戀ひしき悲しさに堪へずして、そゞろに詠みいでられし歌なり。

○月やあらぬ。今宵の月影は、昔のまゝの月影にあらずや、昔のまゝなりといふ事なり。○春や云々。春は昔のまゝの春にあらずや、昔のまゝの春なりといふ事なり。○もとの身にして。去年のまゝなる身にしてといふ事なり。

○一首の意は、今宵の月影は、昔のまゝの月影にあらずや、故宅の月影、今宵も去年のまゝの月影なり。春はいかに。昔のまゝの春にあらずや。梅の花盛りなる故宅の春げしき、誠に去年のまゝなり。さるに、去年語りもちぎりもしたる宿の主人はいかに。我が身ひとつのみは、去年のまゝの身なれども、其語りもちぎりもしたる人は、今日は此處に住まず。ゆかしかりし宿は、見しかげもなく荒れはてゝ、すべては、去年のやうにもあらぬよ。あはれ、悲しや、戀ひしやといふ事なり。

○「春や昔の春ならぬ」の昔」といふ詞によりて、はじめの「月やあらぬ」を、「月や昔の月ならぬ」の意にきかせ、「我が身一つは」といひて、人も宿も昔にかはりたるをきかせたるなど、誠に非凡なる手腕を見るべし。一首

の詞も調も、よく切によく強く言ひ得て、限りなき感情の、身にしみ〴〵としみ込みておぼゆるものあり。

○貫之が古今集の序文の中に、業平朝臣の歌は意あまりありて詞足らずと評したるより、この貫之の詞は、業平朝臣の歌の世評となりぬ。此の歌なども、其の「詞足らず」の評に引かるゝ歌なり。我れ思ふに、業平朝臣の歌、決して詞足らざるごとき難なし。この歌も然り。上の三句は、故宅の春色月影の、なつかしき去年に變はらぬを言ひ、下の二句は、我が身一つは變はらずして、ありつる人は去り、ありつる宿は荒れて、去年に變はりたる意を、言外にきかせたるにて、その意明なり。一首の詞づかひ、誠によく活き得たり。世のつねの歌人などの到底まねる能はざるなり。

世の中の人の心は花染めの
うつろひやすき色にぞありける

○これは、古今集の十五の卷にあり。作者はわからず。

○花染めの。花染めの如くといふ意なり。花染めとは露草の花にて染めたるをいふ。○うつろひやすき。色のさめ易く變はり易き意なり。人情の輕薄にして、さめ易きをいへるなり。○ありける。あるワイと嘆息したるなり。

○一首の意は、世の中の人の心は、さながら花染めの色の如くに、さめ易く變はり易きものであるワイといふ事にて、浮薄なる人情を慨嘆したる吟なり。

○人情の變はりやすきを、花染めの色にたとへて慨嘆したるまでにて、別にさして めづらしき意匠のあるにあらねど、なか〳〵に、すなほにおだやかに、人情の浮薄の實狀をとき得て感慨あはれにきこえたり。

秋風にあふたのみこそ悲しけれ
我が身空しくなりぬと思へば

○この歌も同集同所にあり。作者は小野の小町なり。

○秋風に。秋風の吹くにあたりてといふ意なり。○あふたのみ。我が思ふ人にあはんとのたのみなり。今は離れ居りても、いつかあふを得んとたのむ心なり。○

悲しけれ。けれは感動詞にて、悲しいワイといふなり。「あふたのみの悲しい」とは、いつか其の人にあはんとのみの、いとおぼつかなく、遂にたのみがたくおぼえて甚だ悲しくなるといふとなり。○我が身空しくなりぬと思へば。我が身のやがて死ぬるならんと思ふ故にといふ事なり。いつかあふべしと、心にたのみ居れど、其の人は我れを見すてゝ、今日までもあふを得ず、いと心細くかなしきに、今や秋風のさびしく吹く頃となりて、いよ〳〵淋しく悲しく、我が身も消えゆかん心もちもする故に、かく空しくならんと思へばといへるなり。なりぬはならんといふ未來の意なり。此のなりぬのぬは、過去のぬにあらずして、未來の意なり。後撰集に「さゝがにの空にすがける糸よりも心細しや絶えぬと思へば」とあるぬと同じ。どれも絶えんといふ意なり。一種の詞づかひなり。

○一首の意は、其の人にいつかあはんとの我が心だのみも、かひなくのみうち過ぎて、いと心細きに、今や淋しき秋風の身にしむ頃となりて、いよ〳〵淋しく心細く、やがて我が身も死ぬるばかりの心もちする故に、かくて遂に其の人にあふを得ずして終らむかと思へば、此の秋風に際して、我が心のたのみも遂にかひなからんと思はれて、いと心細く悲しいといへるなり。畢竟は、淋しき秋風の時にあたりて、いよ〳〵淋しく心細く、我が命もおぼつかなくおぼゆるより、其の人にあはんとの我が心だのみも、遂にかひなくて、かくあはずしらん事かと思ふ悲しさをいへるなり。遠鏡に本居翁は、此の歌を釋して、「秋の大風に遇ふ稻は氣の毒の物ぢや。百姓の賴みにして居る田が、さつぱり始舞に成る。私の中も、丁度ソンナ物で、人の秋風が吹きて、賴みに思ふた事が、皆ムダに成つたと思へば、悲しい」といはれたれど、此の歌は、さる「秋風に遇ふ田の實」などに寄せたる細工は無しと、我れは思ふなり。秋風にといへるは、今現に秋風の時にあたりたる意にて、「我が身空しくなりぬ」とは、我が身の命もおぼつかなき意なり。空しくは我が賴みの徒らになるといふ意にあらず、全く死ぬるといふ意なり。「あふたのみの悲しい」

とは、逢はんとの我が心だのみの、つひにかひなくて終らんと思ふ故に悲しくなる意なり。「我が身空しくなりぬと思へば」といふ句は、「我が身に空しくなりぬと思へば」といふやうに見る事は、決して其の語調よりかなはぬ事なり。必ず「我が身が空しくなる」と見ざるべからざる語調なり。此の歌は、我れを見すてたる薄情の人を、我れはなほ見すて難く、いつかあふ事をも得んと、心にたのみて、今日まで久しき月日を暮らしたれど、今や秋風の寂寥なる時にあたりて、思ひ細りて死ぬるばかりの心地もするより、我がたのみも遂にかひなくて、此のまゝにならんかとおぼえて悲しくてよめるなり。さやうに見てこそ、此の歌の情景は限りなくあはれにおぼゆべきなれ。翁の如く解きては、小細工に且つ平凡なる歌となりて、一種の感情は大に薄くなるべし。情深くやさしき小町が人物も見えて、あはれに悲しき歌にこそ。

明日知らぬ我が身と思へど暮れぬ間の
　今日は人こそかなしかりけれ

○これは、同集の十六の卷なる哀傷歌の部にあり。作者は紀の貫之にて、紀の友則の薨かりける時に詠るなり。

○明日知らぬ。我が身の命も、明日の程はわからぬといふ事なり。定めなき人の命、今日はありても、明日はわからぬ意にて言へるなり。○暮れぬ間。今日の未だ暮れぬ中なり。○人こそ。人の死んだのが悲しいワイといふ事なり。けれは感動詞なり。

○一首の意は、我が身の命も、明日の程はわからぬとは思へども、今日の未だ暮れずして、かく我が身の生存して居る中は、人の死にたるが悲しいワイといふ意にて、其の意は明なり。生はうれしく死は悲し。これ人の情なり。人生は既に無常のものとさとれども、生ある間は、この情は去り難し。人の死を聞きては、悲まさるを得ず。これ、人情のことわりなり。一首の着意、よく自然にして、情は去り難き人間のことわり、げにもつくし得て、面白し。後撰集の伊勢の歌に

程もなく誰れもおくれぬ世なれども
　とまるは行くを悲しとぞ見る

といふあり。つまりは同じ着想の歌なり。されど、調に於いて貫之の方やゝまされりといはんか。

敦公今朝なく聲におどろけば
　君に別れし時にぞありける

○これも同所にあり。作者も同じ。藤原のたかつね朝臣の死りての翌年の夏、郭公の鳴きけるをきゝてよめるなり。

○郭公、郭公の鳴く聲にと續くなり。○おどろけば。おどろくとは、ふと目のさめたる意なり。うつら〳〵として居る曉、時鳥の鳴く聲の強く耳に入りて、ふと目のさめたるなり。○君に別れし時。たかつね朝臣の死にたる時といへるなり。別れとは、こゝにては死別なり。○ありける。けるは例の感動詞なり。

○一首の意は、今朝郭公の鳴く聲の耳に入りて、ふと目がさめつ、思ひやれば、嗚呼、げに最早時鳥のなくをきけば、去年の夏君に別れたる時節であるワイといふ意にて、時鳥の鳴くにつけて、其の人の死にたる時節をも思ひいでゝ、其の人の戀ひしき心と、且つ、惜む心より未だ昨日の如くおぼゆるを、はやくも一年の遠き別れとなりたるに感動したるとの二意をこめたるなり。

○一首、よく實境にいてゝ、感情一層深きを得て、面白し。





三人姉妹

嵯峨のや主人

若我等人間の一生に過去現在未來の有らざりせば、此世は如何に寂しからんを、誰が分ちけん、過現未の三期永遠に打立てられて、我等の一生を飾る事の如何斗面白き事實なるよ、妾は今や十五歳の暮を送りて十六歳の春を迎へたるが、一日菫咲く野末の春を樂しみつゝ、流水の水草を洗ふてゆるやかに流れゆく野川の邊に出ぬ、春の風温に面を吹て、里の子の歌ふ鄙歌の節長ふ廣々としたる野末に響渡りて、彼方の空に消ゆく其調のやさしさ、唱歌謠ひて世を送りたるおさなかりし時代の忍ばれて、如何に妾の心は靜なる喜びの爲に波打けるよ、嗚呼思ひ出づれば如何に妾の越方は幸なりし歟、勿論天に在す神父の惠妾の上にあれば、越方の幸なりし如く、又今の幸なる如く、行末も又々幸なるべしと思へば、妾の過現未は、……猶今聞く鄙歌の春の山春の水に和して面白う聞ゆる如く、……相攜へて若やかなる春色の中に差別なき迄よく和合せるを覺えて、更に一層の樂しみにて滿さる

時に日は西の山の端に傾むきて、輝く其光は野川の面に落ち、一葉のすなどり船の靜に川を降りゆく影を照す、對岸の葦の葉晩風に戰て遙なる森蔭に夕日の花を散す美し

榎の大樹枝をさしかはして、若やかなる綠葉のひま洩るゝ夕日の影の、ちら〱と射す坂道を登りゆきけるに、丘上は廣々たる麥畑にして、彼方には村の教會堂の尖塔、謙遜なる農家の藁葺屋根など、清やかなる新樹の森を點綴して見ゆなり、風吹渡る毎にそよ〱と波打つ麥畑の寐床より、雲雀のふと飛立て雲井遙に鳴ゆきける、如何に其音色のやさしかりしよ、目もて雲雀を追つゝふと頭を回らして丘の一端を見ける時、其處に三人の娘の立たずむを見たり。其容貌の互に相似たる、姉妹にやあるらん、眉のけむり、口元の匂ひ、春の花よ

りも美しく、臈たけ品まさりたる姿は、此世の人とは見えぬ迄神々し、三人の中最も年上なるは、古たる樫の根方に腰打懸け、野の百合の花もて飾れる棺桶に凭かゝり居たるが、何事を歟思ひ悩めるもの丶如く、哀に打沈める風情なりき、中なるは薔薇の下なる草原にねころび、何の用意もなく無心で其香を楽むもの丶如くなりき、末なるは西に沈みゆく夕日の影をじつと斗眺め居たるが、其清しき眼ざしは天の星の來て宿れる歟とも疑がはれ、其夕日の光をあげたる面影は、天の使歟とも思はれたりき、妾は一目見て驚きぬ、傍へや行ん、後へや歸らん、如何にせばやと躊躇たり、此時中なる娘は靜なる春風の如く妾の傍に走り來つ、愛らしき友よ後へな歸りぞ。妾と共に來りてあの薔薇の元に息ひね、見ずや、あの花は御身の姿の如く美しくやさしきを、其香は御身の心の如く淸く目出度し、然り御身の生涯も又あの花に似たらずや、其淸影、其芳香、永遠に世に殘るべきなり

茲に於て妾は新なる友と手を携へて、彼方なる薔薇の下に走りゆけり、其時友は一輪の薔薇の花を摘取りて、御身の誕生日の祝ひにとて贈りぬ、芽出度き花よ、妾は之に接吻したり、此時年上の娘は、ふと頭を擧て粲じ貌に妾の方を顧りみたるが、其悲し氣に打沈める一瞥の下に、妾の心は何故ともなく憂と悲しみの爲に滿されたりき、されど妾は尙顏を反むけず、其憂はし氣に沈める貌を見詰る中、何故にやあらん、妾の心は怪しうも其傍に牽付らる丶如く覺えき、されと妾は敢て近付ず、敢て物言はず、尙中なる娘の傍に控へぬ、其時年上なる娘は寂し氣なる微笑もて莞爾と打笑みて いふ樣、愛らしき友よ、御身は妾等を知りたまはざるべし、妾等は三人の姉妹にて侍り、妾は名をば「過去」又は「越方」と云ひ、御身を此處へ誘へるは「現在」又は「今」といふ妹にて、彼方に座せるは「未來」又は「行末」とい ひ侍る、世の人は妾等を呼びて、「昨日、」「今日」「明日」とも又云ひ侍る、妾等は互に相愛し相慕ふて、暫時も傍を離れたる事なし、されば妾等の一人に愛らしき人は、又他の姉妹にも愛らしき人なり、妾等の一人に思はれざる人は、又他の姉妹にも思はる丶事なし、愛らしき友なる「與喜子」よ、御身は平和と幸福の爲めに生れたまひしなり、ユ＊

の神は今御身を命の道に守りたまへり、命の道に入る御身は、性質の花やかに白面かる妾の妹の「今」をのみ愛したまへ、彼女がやさしき微笑を含みて御身に與へられし其薔薇の花其を樂しみ持て彼女とのみ遊びたまへ、其花の美も、其花の香も、御身の心の清き間こそ、決して消失せる事はなかるべければ、されど御身妾の妹の「今日」と親しみ語らう間にも、又妾及び妾の妹なる「明日」の有る事を忘れたまひぞ、否常に心を傾むけて、妾等二人をも愛さばやとしたまへかし、何となれば御身今こそ斯く樂しくおはさめ、時ありて悲しき憂はしき事の身に生じて、現世の望みも胸に消果る事の有るべければ、さる時にこそ妾等二人との親しみが、必ず御身に要あるべきなれ、見よ現世の薔薇の花は、其陰に人を傷くるの刺なくては咲ぬものなるを

然り斯る時こそ我朋友よ、美しき、愛らしきやさしき我喜與子よ、花やかに面白き氣質の「明日」こそ、正しく御身の隱家なるらめ、見たまへ、彼女な御身の爲に壯嚴雄麗なる日の光の、花やかに輝く西の空を指し示しつゝ有るを、見たまへ、光明の燦爛たる夕日の光は、又朗かなる朝の光を記憶せしむるに足るを

愛らしき我友なる「喜與子」よ、御身心して世に罪つくるべき業を避け、やさしき妹の現在が御身に授けたる、其薔薇の花を愛いつくしみたまへよ、然らば御身は常に清らかに愉快なるべし、然る時更に靜なる冀望もて、遙かなる「未來」の方を望み見たまへ、愉快と冀望とは常に罪なき人のものなればなり、

されど我友よ、御身若薔薇の花の美しさに心を奪はれて欺られ、其陰に窈む刺の爲に胸を破らるゝ事の有なば、其時は靜に我妹の「明日」に向て友を求めたまへかし、彼女は喜んで御身の友となるべければ、而して彼女が御身の前に開展する美しき景色は、正しく御身の慰藉となるべきなり、されば大なる不幸の御身の上に落來りて、御身を導くべき遠き光なる「明日」の姿も見えず、「現世」も又愉快ならで、御身の四圍の全く暗うなる事の有なば、來れ、其時こそ我友よ、來れ我棺桶の邊に、「過去」は必ず御身を棄ざるべし、御身は「現在」に於て

欺れ失ひしもの丶代りに、此處に御身の「過去」が描き出す靜なる物思ひ、所謂悲哀の快歡なるものを得べければなり、來れ我友よ、罪なき心もて我薄暗き樫の木の下に來れ、御身は妾か棺桶の傍に於て、自づから慰藉を得べければなり、而して御身の妾と暫時語らふ間に於て、浮世の舞臺も又一回轉せざるべきやは、然り今迄「現在」を蔽ひ居たる悲哀の黒幕は落つべし、「現在」は笑貌を以て御身を迎ふべきなり、然る時輕快ある「明日」も又愉快と冀望とを以て御身の方に來るべきなり、嗚呼然れども我友よ、人生の花の谷間は、到底永遠の地には非ざるぞかし、御身の爲にも終に此花の谷間を棄つべきの時來るべきなり、其時は兄弟姉妹親しき朋友なるぞ、如何に歎き、如何に悲しみて、如何に一時も永く其期を延なんと祈るべき歟、されど無益なるべし、御身は愛らしき者、愛する者、あらゆる者を打棄て、遠き彼方へ行かざるべからず、

然り我友よ、其時御身の前に現はるゝ世界は如何なるものなるべき、新しき光明は來りて御身の行く道を照し、遙なる道の彼方の世界は、美しき光明にて滿さるべきなり、信仰、冀望、愛、審判、不朽、賞美、天の王國、……嗚呼「與喜子」よ、御身か現世の一生は、皆此瞬間の準備に過ず。……往ね我友、往ねかし我友よ、在天の神父は御身の爲めの保護者ぞかし、其存在を信じね、其賞美を信じぬ、幸福は罪なき人に離れざるの運命なれば、……嗚呼されど其は何の時なるべき、將何處にてなるべき、其は宇宙の秘密なり、大秘密なり、

斯言ひて彼女は默しぬ、折しも夕日西に沈みて、天も、水も、野も、岡も、皆一つらに闇ふなりぬ、同時に今迄傍に居たる三人の神女は、何處へや往きけん見えずなりぬ、四方を顧みれば天には野百合の花と薔薇の花の香薫じて、足の下には流水の音の潺湲として聞ゆるのみ、

死人の秘密

モウパッサン作
上村左川譯

何一つ難の打ちところのない一生を過した人のやう

に、彼女は更に苦痛もなく平穏の最後を終げた、今は寝床の上に仰向になり、眼は閉ぢ容穏かに長い白髪は死ぬる十分も前に更に化粧したかのやうに丁寧に整へられ、汎べて其蒼白い形相の、此世を去つたる今、いとも泰然として、いとも安静なる樣、此骸の中には優しい魂の宿つた事、此神聖なる老母は何の煩勞もなく世を送つた事、そもはた此操行堅固の婦人は何の懊惱もなく何の悔みもなく一生を畢つた事は確かに思ひ知れる程であつた。

臥床の側には跪いて、嚴毅方正の法官たる其息子と、宗門に歸依して法名をユーラリー尼と呼ばるゝ、娘のマルグエリツトとが取亂さんばかりに、悲歎にくれて居る、母は此二人の子に幼少の時から道徳の本文通りに躾け込み、宗教を説いては更に柔弱しいところなく、人の義務を敎へては一歩も斟酌讓歩するところがなかつた、息子は法官となつて手に國法の武器を持して、世の人の弱行過失に對して容赦なく制配すれば、娘は此冷酷なる一族の風に薫陶せられて德義の觀念は眞底に沁み徹り、飽く迄も男を嫌うて全く神の匹偶となつてしまつたのである。兩人共父親はろく／＼知らず、唯知つて居るのは、深しい仔細は聞かねど、其父親たる人は母を不幸ならしめたといふだけであつた、



尼は今下に垂れた母の後手を熱心に接吻した、臥床の側に置いてある大きな十字架の耶蘇の塑像のと仝樣象牙のやうな手、骸の向う側に在る後手は、彼の末期の悶搔と稱ふるそことなき運動で、皺みたる蒲團を猶も摑んで居るやうで、蒲團は其斷末間の運動の餘波として稍波立ちたる襞を存して居る、室の戸を二つ三つ輕く叩音に歔欷に俯伏して居た兩個の頭はあげられて、今しも食事を終つた僧は這入つて來た、今始まりかけた消化のために顏は赧く稍頰

が膨れて居る、前夜通夜した疲勞を引き立て、且は今夜も猶すべき通夜の力づけの爲めに珈琲へしたゝかブランヂーを割込んだので、彼は悲しげな貌……但しそれは人の死ぬるのを我世渡の料にして居る僧の身の只表面にのみ悲歎の顔色を見せながら、手で十字の形をして、例の職務的の態度で側に寄つて

『サア私もお側で御一緒に此悲しい時間を過しませう』

と云へば娘は急に起上つて

『それはありがたうはござりますが、實は兄と妾とだけで側に居たうござります、今がもう母の視收めですし、もう一度三人一緒に並んで居る氣になつて見たいです、もう一度何年も前のやうに、あの妾……妾……妾共はまだチヤンの嬰兒であつて、そして母……

……母が……母が………』

涙は瀧のやうに溢れ歔欷に肺が動いて娘の詞は末迄つゞかなかつた、僧は此時死人の床のよを思つて居たので前よりも嚴肅な色が見え、一寸點頭きながら『何うともあなた方の宜しいやうにいたしませう』と、それから再び下に跪いて又もや十字の形をし、祈禱をして起上りながら『あゝ〱神樣のやうな方であつた』と低聲で云ひ〱徐々と室を出てしまつた。

跡には死したる母と兩個の兒ばかり、隱してある時計が暗い隅の方でチツクチツクと規則だつた音をして、引開けてある窓からは枯草や樹木の穩やかな匂ひが弱い月光に伴なうて這入つて來る、外面の田には蟋蟀の處定めぬ鳴聲と、それから何かしらぬ夜食する昆虫の、球でも投げつけるやうに壁に衝當つてブーンブーンといふ聲の外には何の音も聞えない。此死人を圍繞した無限の平和と神聖の悲哀と靜肅の陰氣とは全く死骸から湧き出て外部の空中に蒸發して天然其物を打靜めるかのやうであつた。

それから法官は猶跪きながら頭を蒲團に押しつけ、蒲團も上被も貫くかのやうな、底から湧出る悲痛の聲て『阿母さん、阿母さん、阿母さん！』と叫べは、妹は又床板の上に俯伏し狂氣の如く額で床板を打ち軀を捻ち

廻して宛ながら癲癇病者を見る如く顫ひながら呻聲に『イエスよ、イエスよ、……阿母さん……イエス』斯くて両個は哀傷の颶風に吹きつけられ、咽喉が窒るやうな聲で呻るのみであつたか、漸次に此激情は罷んで前よりは較穏やかに泣き、丁度海上の暴風雨の過ぎた跡の雨模様のやうな塩梅、それから暫らくは二人は起上つて懐かしい亡骸の上を睇視めて居た、程なく追懐、懐かしき……今ては苦しき過去の追懐が、彼の忘れられて居た生前の小さな事々、身に馴れ親しみし瑣末の事々、實に今は亡き人を復活けるが如く思はしむる生前の事々と共に両人の心に浮んで來た、その折々の母の様子、詞づかひ、笑ひ聲の調子、現に見聞くやうに想ひ出され、幸福に平穏なる母が姿の又もや眼に見え、對話の時の母が癖の詞草は更なり、何か大切の事を云つて居る時拍子を取つて居るかのやうに母が特に癖であつた手つき迄現然と想起される、實に両個は今迄の愛は物の數でもなかつたかのやうに母を慕ふ念は殊に旺になり、失望の淵に沈みし今はじめて母を思ひしとの如何に深かつたかを知り又此後は如何に心細く思ふてあらふと云ふとを知つた。



両個が小供時代、今は過ぎ去つた。一生の殊に樂しい時代の間、両個の爲めには母は帆綱のやうて又敎導者であつた、我身を現世に結びあはせた索、人を創る肉躰、實に祖先と我等を繫ぎ合はせた綱であつた、両個はこれから寂寞で孤獨で、世の中で顛返つて見るものはもう更に無くなつてしまふのである、

軈て尼は兄に向ひ『ヂー、あなた、阿母さんは古い手紙を常々好く讀んでいらしたヂー、其手紙は悉皆あすこの阿母さんの抽斗にありますが、二人もあの手紙を出して來て今夜側で讀んだら阿母さんの一生が蘇生つて

來るやうな氣がしませう、そうしたら阿母さんが好くお話しなすつたお祖父さんやお祖母さんたちにも相識になるやうな心地がするじやありませんか、其古手紙は皆ありますから』

それから兩個は抽斗から十二三も黄金の小包を取出した、それ〳〵上を縛つて一つ〳〵重ねてある、臥床の上に此遺物を投げ出して、其中から『父』と云ふ字の書いてある包を抽出して封を開いて讀んで見た、此包の中に在るのは頗ぶる古びた紙で、彼の古い家の机に好くある前世紀の香のする手紙であつた、第一のは『我懷かしのもの』、次ぎのは『我美はしの娘』、それから又外のは『我親しき愛兒よ』、『我親しき娘よ』など〻記してあつた。

それから尼は突然と、其歴史とも見るべき、母の分の手紙を殘らず死人の前で高らかに讀み始めたので法官は耳を欹て〻聽きながら母の顏を倩々と瞬視めて居た、動かぬ死躰はさも幸福なるかの如く見受られた、

妹はふと讀み罷んで『この手紙は墓へ入れる方が好いでせう、これて死出裝束を拵らへて一緒に埋めませう子ー』



それから妹は上に何も書いてない別の封を取り出して一段調子高に讀み始めた、

『懷かしの君よ、卿を戀ふ情の切なさに心も狂ふ迄になり果て候、作日よりは卿の事を想出して心は苛責に逢ふ如く悶へ苦しみ居り候、我唇の上には卿の唇、我眼の下には卿の眼、我肌の下には卿の肌のあるやうに想ひ候、嗟戀し慕はし、卿は我を狂はしむるよ、我兩腕は開けり、全身唯卿を呼び卿を求むるより外の思は無之候、卿の接吻の味は今も我唇に存り居り候、』

法官はつと起上つて尼は讀むとを停めた、兄は件の手

紙を妹の手から捥ぎ取つて名前書を撿めたが、『君に焦るゝ』とある下に『ヘンリー』といふ名があるばかりで、外には何にも記してない、兩個の父の名はレーンであつたから、此手紙を母に贈つた人は父ではなかつた筈である。そこで法官は包の中を手早く探つて別のを抽出して讀むと、

『最早 卿の世話を受けずとも宜しく候……』と記してあつた、兄は起つた儘て今や刑の宣告をしつゝある法官の嚴肅なる態度て、平靜自若眠れるが如き死人の顏を睇視すると、尼は双方の眦に猶涙の滴を湛へた儘兄のせんやうを覗ひつゝ偶像の如くに突立つて居た、軈て法官は室を横ぎつて徐々と窓口に出かけて倩々と夜の景色を眺めた、元の座へ還つた時は妹は眼は乾いて猶下を視ながら床の側に立つて居た、兄け抽斗の方へ歩み寄つて今床板から拾ひあげた手紙を投げ込み、母の臥床の周りに幕を引いた、程なく催す曉の色に卓上の蠟燭の光の蒼白く見え初めた時、兄は其肱掛け椅子から立上り、巳に隔ての幕を引いて罪の宣告を下した母の方に別れの一瞥も與へず、詞穏やに

『サア妹、此間を退たう』

（完）

▲米國には大きな家族が段々少なくなる、五十年前一家の子女は平均四人であつたが、現今では二人餘であると云ふことだ、之は婦人教育の盛大なる結果て、婦人の智育を重ずる結果、體育が忽諸に附せられる、それて教育のある婦人は一人か二人の子を産むと其後は妻とし母とし役にたたなくなるからであると云ふこだ、果して然らば婦人教育も考へものてある

▲奈翁の皇后ジョセフインは非常に身邊を飾るが好きで、特に寶玉類を好んでおられたことは誰れても知つておるが、中にもデイアデムは大層な贅澤もので、時價二百五十一圓もするものだそうだ、此デイアデムは今は米國婦人ブラッドレー、マーテイン夫人の所有物になつておるそうだが、英國皇帝戴冠式にはマーテイン夫人之を飾つて列席するそうだ



顔を美しくする法

由分先生夜話
枯川生筆記

ヤア今晩は皆さんお揃ひで、木村の奥さん、半田の奥さんを始めとして、安子嬢、君子嬢、お蓮さん、お福さん、乃至はキイちやん、ハアちやんの面々、いづれもお化粧に御念が入つたと見えて誠にお奇麗な事て御座る。誠にお奇麗な事では御座るが、それを今一層いやが上にも奇麗にしてあげたいと存じて、拙者は今晩「顔を美しくする法」を御傳授いたす。

顔を美しくしようと思ふなら、先づお湯に行つて垢をおとす、糠袋でこする、鶯の糞でこする、奇麗水をぬる、白粉をぬる、紅をさす、サアもうそれて申分はない筈である。然るに、其ぬりあげた厚い白粉を透して邪見の相の現はれる事もあれば、其赤い〳〵唇に冷たい色のほの見える事もある。是は何としたら善からうか。そこで即ち拙者の傳授が必要と相成る。

鋏を以て巧みに紙を切れば、五辨整然たる眞白い梅の花の形は出來るが、それに馥郁たる香りを添へる事は決して出來ぬ。白粉と紅とばかりでは決して眞の美しい顔は出來ぬ。香水をふりかけて是て馥郁だなど〻思はゞ大きな間違ひ、馥郁とは心の匂ひである。心の匂ひがあればこそ會ふ人が喜び和ぐ。香水の匂ひが心の匂ひと一致すればこそ人もそれを床しがる。香水の匂ひばかりでは、人は鼻をつまんで逃げてしまふ。梅の香りは幹のシンから花に吹きいで、人の香りは心の奥から顔にあふれる。何と皆さんお氣がつきましたか、顔を美しくする法は心を美しくするより外にはないので御座る。

顔は即ち心の現はれて、目にも、眉にも、頬にも、額にも、唇にも、只ソヨリとする心のそよきが明かに現はれ

る。道をあるきかなら、向ふから來る婦人のみなりを見て、「あの人の肩かけと私のとは、色は同じだけれど品が違ふ、私のは本物のラッシ天だけれど、あの人のは何だか艶が惡いこと」などゝ心に愉快を感ずる時には、其顔には自慢らぬぼれと云ふ賤しい相が現はれて、折角の紅も白粉もメチヤ〳〵になつてしまふ。それから又あべこべに、「あゝアンナ丸帶がほしいこと、あの人なんぞ別品でもないのにアンナ善いのをさせるのは惜しい者だ、私にアンナ善いのをさせたらドンナに善く似合ふか知れやしない」などゝ羨む心が生ずる時には、其丸帶の主の顔より二段も三段も落ちるさもしい相が現はれて、折角持つて生れた美しさは忽ちに消えてしまふ。自慢顔、悋氣顔、妬み顔、羨み顔、腹立顔、不平顔、怨み顔、憎み顔、いづれも決して美人の相ではない。生來いかほどの美人でも、是等の相を現はす時には、二目と見られぬ心地がする。どうだ、皆さん、腹の立つ事があつたら直に鏡を御覧なさい、羨ましいと思ふ事があつたら直に鏡を御覧なさい、自慢があつたら、不平があつたら、怨みがあつたら、妬みがあつたら、いつでも直に鏡を御覧なさい。決して、決して、平生のような美しい顔は鏡の中に見られはせぬ。キット自分で自分に愛憎が盡きて、こんな見苦しい顔を人に見られて恥かしいと、少しは思ひあたるに違ひない。それが紅や白粉で塗りかくせるものか、試しだヤツテ御覧なさい。決して、決して、塗りかくせる者ではない。そこで是は惡かつた、顔を美しくしようと思ふなら心を美しくするより外はないと云ふ事が、心から底から覺れましよう。



餘り是は心學めいて、鳩翁道話のようだと皆さんお笑ひなさるか知らぬが、形よりは心、心を先にせねば形も

眞に整はぬと云ふのが拙者の講話の主意で、是から追々お話し致すのも皆其主意を押しひろげて參るつもり、それについては、婦人の第一の者と云はれる顔の事を先づ申しておきたいと存じて、それで今晩是だけのお話を致した次第、いづれ又來月今夜お目にかゝるで御坐いましよう。

家庭の風波

花舟生

左の一篇は、桑港のエキザミナー新聞記者ウイルコックス孃が、某女學雜誌にものしたるを譯出せしなり。以て米國夫婦間の有様を知るに足るべく、以て家庭の參考とすべし。

△妾は、妾の親しき某夫人より『……所夫は知り給うごと、我より十四歳の年上にして、徹頭徹尾事務的の人たるが。此頃我に向つて家事の不整頓を責め、文學書などは手にだもすべからすと宣言したり。今にして思へば、我と所夫とは總ての點に於て、感情を異にせるを覺りぬ。心なき草木も四時の花を開き、形なき風も自然の音樂を奏ずるに、人として詩歌吟詠の事なくてあるべしや。誠に所夫は、世界に仕事の外より何をも保たぬ無趣味の人なり。引きかえて我は、比較的に多くの審美心を有てり。されば二人の思ふ所爲す所、常に反對に出づるものから、一家の風波絶ゆる事なし……』云々の書を得たり。

△這は、幾多夫婦間に於ける不和の原因狀態を、具に發表せるものなり。公平に、然り忌憚なく謂はしむれば、夫婦とも斯る塲合人生の何ものたるを誤解せり。殊に妻の方に於て誤り多しとす、夫は餘りに實際的なれど、妻は餘りに感情的に流れぬ。前者は文學を遊惰の具とし、後者は是を實務よりも大切のものとなす。かゝる嗜好及び感情の衝突は、家庭間に屢次見る處なり。

△妾おもふに、妻の務の第一義は、其の所夫の幸福を増進するにあり。女たるもの假令如何なる才能天才を有すとも、一度嫁して人の妻となりたらむ上は、家庭と所夫の爲めに思ひを致し身を勞するところなかるべから

ず。文學も必要ならむ、音樂も善からむ、さわれ此等のものは、畢竟幸福なる家庭をつくらむがためのみ。

△實に某夫人の言ふ如く、心なき草木も花の衣を飾り、形なき風も微妙の音をかなづるなめれど、人間は斯る自然のものゝみにて滿足せざるや論なし――煙突の煙は絕えずして麵麭は三度の食事に備へらる――女設し家庭を忘れず所夫を忘れずは、風流最も必要なり、否、風流は妻たる者の務を敎ゆる指南者なり。極言すれば、眞に詩歌の眞味を知れる女は、必ずや家庭を調理するの才をもてる人なり。

△某夫人の所夫なる人設し不幸にして家貧しく、料理人奴婢なんど雇うを許るさゝらむには、夫人みづから庖丁を取らざるべからず、又箒を手にせざるべからず、いかなる詩歌が、斯る場合に斯る俗事を爲すべからずと敎ゆる歟。夫人は豈夫餓死に瀕しても尚ほピヤノを弾ずる程に、出世間的ならざるべし。然れば妻たる者の最大の務めは家庭のみ、其れの仕事に餘暇あらば、初めて文學を味ひ音樂を娯しむも可なり。



△更に一歩を進めて謂へば、假令所夫の家富み、多くの奴婢を雇へりとも、家內の支配人たる妻が總ての事を拋ちて、文學音樂に耽り、美術に全心を委ぬるは不可なり。女嫁して妻となれる以上は、右に所夫あり左に家庭あり、前には兩性が愛のかたまりの小供あるにあらずや。彼女の身躰は最早や渠女自身の所有ならずして、所夫及び子等のものなり。他に心を傾くるは、是れ精神的につまならぬ褄重ねしたらむと同じ。

△妻の心什麽に高尙なるも、夫の心什麽に卑俗なるも、妻たるものは滿幅の同情をさゝげて、夫を慰めざるべからず。男子は終日の業務に心身綿の如く疲れ、一日

の勞苦を忘れむが爲めに、家庭と稱せる妻の懐に眠るなり。さるを温き同情もて慰藉せざる者は、是れ自他を欺くに等し、何となれば、結婚とは斯る重き義務を妻に負はしむる誓ひなればなり。

△噫、妻なる人よ、男子が其國家と稱する大いなる家庭に最大義務を有する如く、女子は所夫を主長とせる小き家庭に最大義務を有するなり。凡ての文學藝術は、一國の文明を進めむ爲めに器具に過ぎざる如く、夫人の好む文學音樂は、一家庭の平和を保たむ爲めの器なり。國家は其の發達に妨害を與ふる學問を、法律道德にて禁じ得ると一般、所夫は其の家庭の平和をさまたぐる娛樂を禁じ得るなり。

△噫、所夫なる人よ、其の妻に向つて同情を要求すると共に、妻の嗜好に向つて同情すべし。妻にして能く家を治め、夫に事へ、兒女を養育するの道を盡さば、何の必要あつて渠女の娛樂を禁ぜんとするぞ。斯て双方より一歩づゝ讓り合ひ、互ひに相好むところに同情せば、如何なる場合に於ても、家庭に忌はしき風波の跡を絕たむなり。

（完）

棚橋絢子女史

苫米地日東

棚橋絢子女史は、名聲嘖々たる女子敎育家である、尊敬すべき精神的敎育家である。しかしそれよりは、女史が過去に於ける經歷は、其主義を實踐躬行したる歷史で、實に活きたる精神敎育を人に示すに足るものがある。いま後進女子の模範にもと思ひ、女史に付いて親しく其實歷の一班を聞くことを得たれば、左に之れを記して讀者の一讀を煩はそうと思ふのである。たゞ女史が慊讓なる特性は、十分に自己の美質を說き盡さゝるやの掛念あるを遺憾とするが、さりながら、女史が名譽ある實歷の要點をば、門弟の談話、及び記者の觀察に由つて、略ぼ之れを發揮し得たと信んずるのである、而して此の實歷談は、今の世の輕佻なる敎育者と、無氣力なる女子に對して、好箇の刺激的良藥であらうと思ふ。

◎女史は字を文遠、雅號を梅香と稱せしが、後ちに梅若

と改めた、大阪の人牛尾田庄右衛門の長女である、其の祖先は北畠氏に仕へたが、顯家戰死の後は、民伍に下りて、世々酒估を業として居つた、其の祖父蘭綾及び父庄右衛門は、共に越高洲の門人で、相應の學藝ある人であつたさうだ、

◎絢子は父祖の性を享けて、幼より中々悧巧の氣性を具えて居つた、六才の時、習字及び八算見一を授けられたるに、其の習練殆んと大人に異らなかつたために、人皆神童ととなへ居つたそうだ、八才にして音曲を習ひ、傍ら裁縫をも學んだ、十三才の時には、心學道話を聽き、孟子無名の指云々に至り、恬然として覺る所あり、それより心を潛めて典籍を講究した、されど當時京坂の俗、女子の讀書をするを疾む風があつた爲めに、父母は固く之れを禁じたが、數々請ふに及んで、僅かに大學の句讀を授け、且誓めて曰く、女子の書を讀む者往々驕慢にして人を凌ぐを疾む、汝能く愼み、人をして讀書生たるを知らしむる勿れと、女史因りて朝は未明に起き、夜は燈下に就いて、人知れずに、孜々として勉强したが、其功積りて零ぼ四書五經等を通讀し終つた、此に於いて讀書の素養は一通り之れを得たのである。

◎已にして以爲らく、余、家事を助くるの傍ら、幸ひに聖賢の遺訓一般を窺ふを得たれど、未だ獨力にて口を糊すべきの技能がない、古來の俚俗に、女子は三界に家なしと卑む所以の者は、一般女子に獨立生活を營むの資力なきに因ると、そこで力を專ら裁縫に用ゐて他日に備へ、又た自から其身一切の事を處理し、上は頭髮より下は布襪に至るまで、一も人の力を借ることがない、是に於て父母も之れを異とし、特に弟に從つて奥野小山の門に入ることを許した、また書道を三瓶信菴に學ばしめた、時に年僅かに十七才であつた。

◎曾々美濃の人、栁橋大作といふ者、其父の二本松藩倉邸の留守たるに從ひて大阪に來往し、彼の奥野小山と親密に交つた居つたが、大作名は嘉忠、字は伯賢、松村と號し、洛閩の學を好み、詩歌を嗜み、學問に篤實なる人なるも、不幸にして蚤歲眼疾に罹りたれば、私に良妻の典籍を代讀すべき者を索むる由を、小山が聞いて之

れを憐れみ、爲めに絢子を媒介した、絢子時に年十九なりしが、性來商業を厭ひ、士人の家に嫁して讀書の餘暇を得んと欲しければ、父母は少しく意見ありたれど、遂に結婚することとなつた。

◎女史が棚橋家へ嫁ぎて以來は、家政の困難と良人の失明の爲めに、一方ならぬ苦辛經營をせられた、嫁ぎてより三年計りは、琴瑟相和し、讀書筆硯の樂をも得たりしが、其後倉邸の廢絶の爲めに美濃に移住すること丶なつた、時に夫家數々世故を經て家道大いに衰へ、殆んど擔石の蓄も無しと云ふ有樣なりければ、女史は都會の富家に育つた身ながら、薪炊杵舂を勞とも思はず、傍ら句讀を地方の子弟に授け、以つて家政を維持し、又た失明の夫に讀書の樂を廢せしめなかつた。

○巳にして其の一男一女を擧げたる比、世は御一新の世變に際會し、夫家の二弟皆な志士の間に來往し、家產益々墜ちて頽た如何ともすべからざるに至り、家を提げて尾州高田村の親戚に寄寓し、幾くもなく居を同國一宮にトして、其美濃を去る時、人に托して餘す所の田宅を賣りしが、不幸にもそれが爲めに奪ひ取られ、嚢底復た一錢をも餘さず、そこて、女史其衣奩を鬻ぎて僅かに百餘金を得たれば、以つて不時の備へとなし、又た子弟の教授と、他人の衣裳裁縫とに由りて得る所を以て、一家數口を糊するの資として居つた、適々東光寺の住職某其狀を見て之れを憐れみ、人に告げて先きに失ふた金若干を返さしめた、女史大いに喜び、前の百金と合せて之れを某富商に托そうと思つたが、富商は他日累の及ばんことを恐るゝとて之れを受けないから、女史は益々發奮して、長子をば大阪の實母に托し、ひたすら家事の經營に勉められた、其後ち村內の子弟を集めて讀書を教へ、又た名古屋市下の小學校に教鞭を取りしも、その一宮に在ること前後六年ばかりは、最も貧困に迫まられた時であつて、勞役服せさる所なく、辛酸嘗めざる所なかりしも、女史は晏如として之れを堪え忍んで居つた、少暇ある每に、必ず其良人に侍讀し、一家の經營兒女の掬育、一も之れを親戚故舊に仰かず、其精勵勤勉に由りて、家計稍々支ふるを得るに至つた、其

後ち愛知縣の養成校を開き、小學教員の爲めに師範科の講習を行ふや、女史も與かりて業を卒へ、職を上町の桃夭女學校に奉ずることゝなつた。

○斯くする中に長子一郎も修學の年頃になりたれば、之れをして東都に遊學せしめんと欲したるも監督の托すべきなく、學資の給すべきなきを以て、其意を果たすことを得ずに居つたが、其知人なる伊澤修二氏(愛知師範學校長)が、一日女史に告げて曰く、今や官立の女子師範學校東京に創立せられんとし、女教員を四方に募り居れり、之れに應じては如何にやと、女史大いに喜びて之れに幹旋を托して間もなく、伊澤氏は任に東京に歸り、女史の事を小杉女子師範學校長に告げたれば、小杉氏則ち書を愛知縣知事に致して、女史を招聘したき旨を陳じたるも、縣令謝して遣らず、次いて吉川泰次郎氏(愛知英語學校長)も、亦た女史の爲めに縣令に說くに及んで、縣令も拒む能はず、明治八年十月を以つて、遂に女史の職を解き東上を許した。

◎女史則ち家を提げて先づ大阪に至り、其末女をば生家の妹に托し、其餘の家族と共に東京に來住し、同年十一月拜せられて師範學校の訓導となつたが、僅か六閲月にして、また福澤諭吉翁の周旋に由りて、小笠原女公子を其家塾に延くの約を爲し、職を辭して三田に卜居した、公子並に福澤小幡諸氏の女兒を敎養するもの二年、故ありて出でゝ學習院の敎官となりしが、三年餘にして之れを辭し、復た其家塾に在りて、富貴の女子共に讀書裁縫等を敎授し居つた。

○此頃長子一郎氏、大學を卒業して文學士となり、豫備門及東京府中學に奉職することゝなりたれば、此に於いて始めて家計の憂ひがなくなつたが、女史は、幼より勞苦に慣れて安逸を喜ばねば、二十年に富田村田諸氏と計りて、金聲小學校を芝公園に起し、其家の女子を集めて敎育の責に任じ、傍ら成立學舍女子部脩身科の担當敎員たりしが、子息一郎氏の郁文館を駒込に開くに及び、資力支へざるを以て、金聲小學校をば閉ぢた、成立學舍長中原貞七氏の東京を去るや、同校女子部を改稱して成立女學校となし、任に其校長に就き專ら其維

持發達に盡力した、巳にして二十八年に女史乳癌病を患ひ、切解治療の餘、身心疲勞して劇務に堪えず、則ち校長を辭して靜養するもの一年、會々名古屋市に高等女學校設立せらるゝや、聘せられて其校長となりしも、拮据經營殆んと三年にして紛紜ありて之れを辭し、京阪地方を漫遊して東京に歸つた、間もなくして肺尖病に罹り、靜岡鎌倉の諸地に靜養して快癒した、一昨年の十二月、嫡男一郎氏、爲めに還暦の壽筵を駒込千駄木の有尾邸に開きしに、相會するもの故舊知友無量數百人、歌頌も亦數百を下らず、人以て榮とした、女史又た一男二女あり、長男は文學士の一郎氏にして、長女田豆江は嫁して夭し、次女下枝は工學士横河民輔に嫁す、各々成立する所あるのも、女史の訓育の然らしむことゝてあらう、嘉すべき事である。

○女史今年六十四歳なるも、躰力猶ほ健、能く敎育其他の事務に斡旋して居る、目下其關係せるものをあぐれば、愛敬女學校の校長にして、淑德女學校の脩身科擔當敎員を兼ね、傍ら婦人弘道會、大日本婦人敎育會、愛國東亞佛敎會女子部、東西本願寺の婦人會、福田會女子部等にして、女史は之れが爲めに、熱心に周旋の勞を執られ居るが、豁達の氣才あるにあらずんば能はぬことだ。

○以上記する所によつて、女史のいかなる經歴を有する人物なるかを明かにしたと思ふが、サテ女史の人物を概括的に批評するてはないが、之れを紹介的に述べて見ようならば、女史は精神敎育を主義とする人である、女史を敎育するには、最も重んずべきは德育である、といふことを信ずる人である、平たく言へば、女子は精神さへ確固てさへあれば、如何なる事があつても大丈夫なものであると言ふのてある、是れは即ち女史が年來實行しつゝある意志で、否寧ろ其頭腦に有する所の理想である、だから實際に女子を敎養するに當つても、第一に德育を以てし、精神的修養に勉めしめて、學問技藝の如きは寧ろ第二に置き、言はゞ一朝困難に逢うた時の用意として、之れを授くるに過ぎないといふのが其の敎育方針である、換言すれば、彼れとても決して學

藝を輕視するのではないが、ドウも女史には德育の方が重いと言ふのは、彼れが多年の經驗上實際に感んじた所らしい、而して能く考へて見れば、之れは穩當に近い意見ではなからうか、しかしよい意見を述べる人は世間にも多くあるが、サテ其意見を實行するに當りては薄弱なるのみならず、甚だしきは忠實なるべき教育者の本務を忘れ、自らは之れを行はずして、人をして之を行はしめんとするものあるは、慨くべき事である、然るに女史の如きは然らず、彼れが幼少より今日に至るまでの經歷は、その主義を實踐したるものであつて、活きたる精神的教育を人に示めすものである、即ち其困窮なる境遇を轉じて、家政を確立し、失明の夫を扶け子女を教養したるが如き、婦人として已に立派なるものである、尋常婦女子の及ぶ所でない、それは實歷談を玩味通讀せば分ることである、されば、彼れは空論家にあらずして實行家である、彼れは普通の教育家にあらずして、尙ぶべき主義を有する教育家である、否教育家よりも、寧ろ名譽ある摸範的の人物である、尙ほ記者は女史の教育意見に付きて聞き得たるものあれど、紙面の餘白に乏しき爲め之れを他日に讓る。

名家談叢

雛のはなし

（淸水晴風氏）

●雛の二大別　昔から雛には二つの別がありまして、今日の內裏雛、王妃雛、親王雛と立雛即ち紙雛とは、全く性質の異なつたもので、第一種に屬する內裏、王妃親王等の雛は、大なる物を小さい雛形に作つたので、此の雛の名が起つた譯で御座います、何故と申しますに、昔の上つ方の人等は下等社會の情に通じない所から、種々の調度の雛形を作つて、女子教育に使つたもので平素は子供等の玩具でありましたのを、何時しか三月に飾るとになつたので御座い升。

●雛の變化　是は大方德川氏に至つて定められたや

うに思はれますが、其の以前にも飾つたやうであるけれども、然し次第に華美に流れ、大御所樣の時代には最も華美を盡した極てありました。そこで、此う云ふ塩梅に益々華美に流れては、之が爲めに身代を棒に振る人もあらうと、水野越前守が此の雛の製造法に制限を立てた爲めに、雛が小さくなつてしまひました。其の小さくなつた極點には、雛が一寸足らずになりましたが、此の小さい雛を作るのに、其の頃下谷池の端に住居をして居りました、七澤屋傳助と申す人は名人でありまして、今日でも小さい雛が出ますれば、骨董屋仲間で七澤屋と申します位。

●雛の飾方　此の七澤屋雛の揃つたものをお部屋雛と申します、何となれば昔奥女中などは、此の雛をお部屋の中へ飾りて樂んだもので、此の名が起つたものでせう。尤も前に述べました内裏、王妃、親王雛は、昔からありましたもので、何時是が始つたものやら、精しい事は記臆して居りませんが、元祿年間山田外記、野々口立圃などの作つた人形は、雛人形と申す一種の風俗人形で御座います、そして元祿頃の飾方は、今日のやうに、五人ばやしもなく、また一段飾であつて今日のやうに、二段にも三段にも飾立たものではなく、至つて御粗末な飾方で、椀數、壽、餌櫃に甘酒をつけた位なもので、今日のやうに種々の飾付に華美を盡したものではありませんでした。

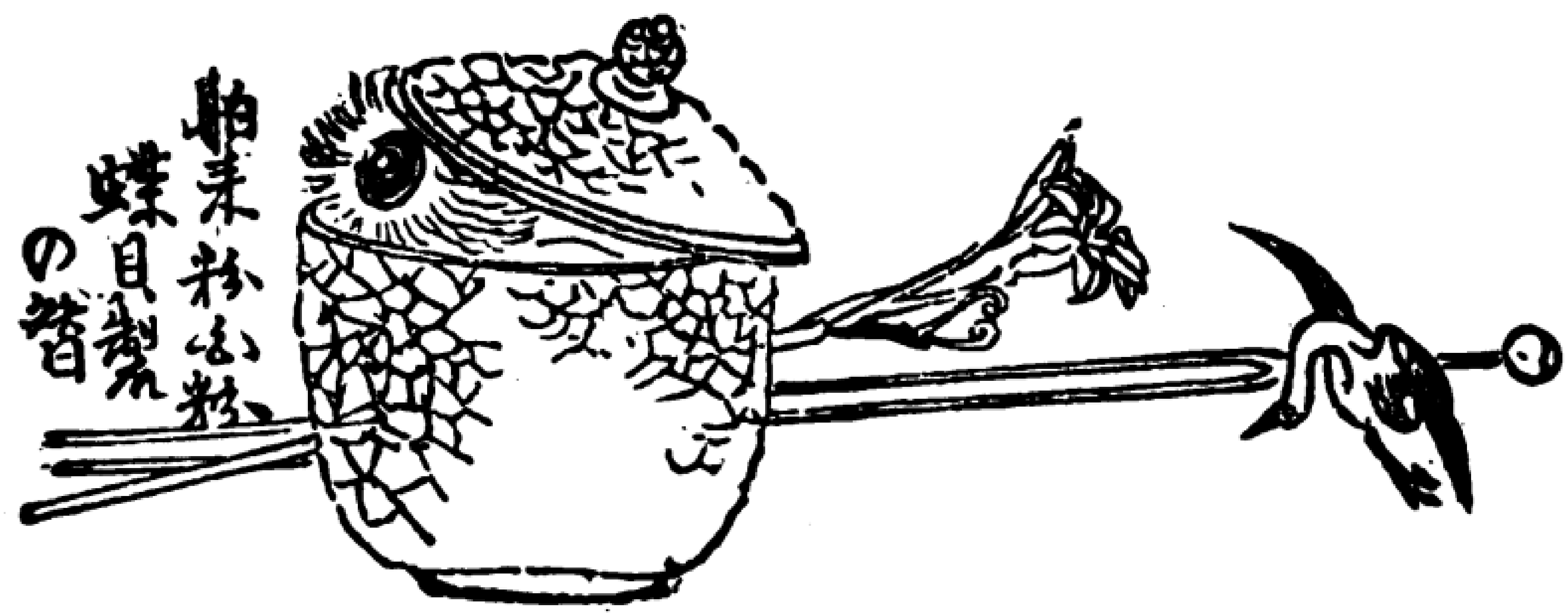
●五人囃　此の五人囃と申しますは、享保以來の者で御座いまして、之は雛に對して饗應する樂人なので御座います。て是が古來より極つた作法でもないから五人囃に武樂其の他の物を用ゐても、決して差支はないやうに思はれます。

●雛の起源　雛の起源に關してはいろ／＼の說が御座いまして、何が尤も精確であるか判然致しません、けれども先づ源氏物語などに散見する、雛に關する話は實に近いものと思はれます。

●深草、吉野雛　雛の製造方や、其の種類に關しては、其の國、其の時代、其の人情、其の風俗等に依つていろ／＼種類がありまして、地方々々に就て調べて見

ましてもなか／＼數の多いことゝ思はれますが、中にも深草雛、吉野雛などは、或は神樣の神體であらうと云ふ說も御座います。あるが中には互に束帶して、男女抱き合つて居る雛もありまして、之れを引き離して見まするとと裸體になつて居るのも御座いますで、大方之れが神體をかた取つたものであらうと云ふ說ですが、竹內久一氏の話に依りますと此の雛に類する神があるさうで御座います。

●小米雛　又た紀州加多の浦の淡島樣より小米雛の守を出しますが、これは米粒位に紙を丸めて頭を作つたもので、小米雛の名か起つたものでせうが、其の包み紙に記してありし由來に依りますと、昔神功皇后が三韓征伐をなされた時に、凱旋の紀念として納められたものが源始であると、書いてありますけれども、然し之れは餘り信を措くに足らない說と思はれます。



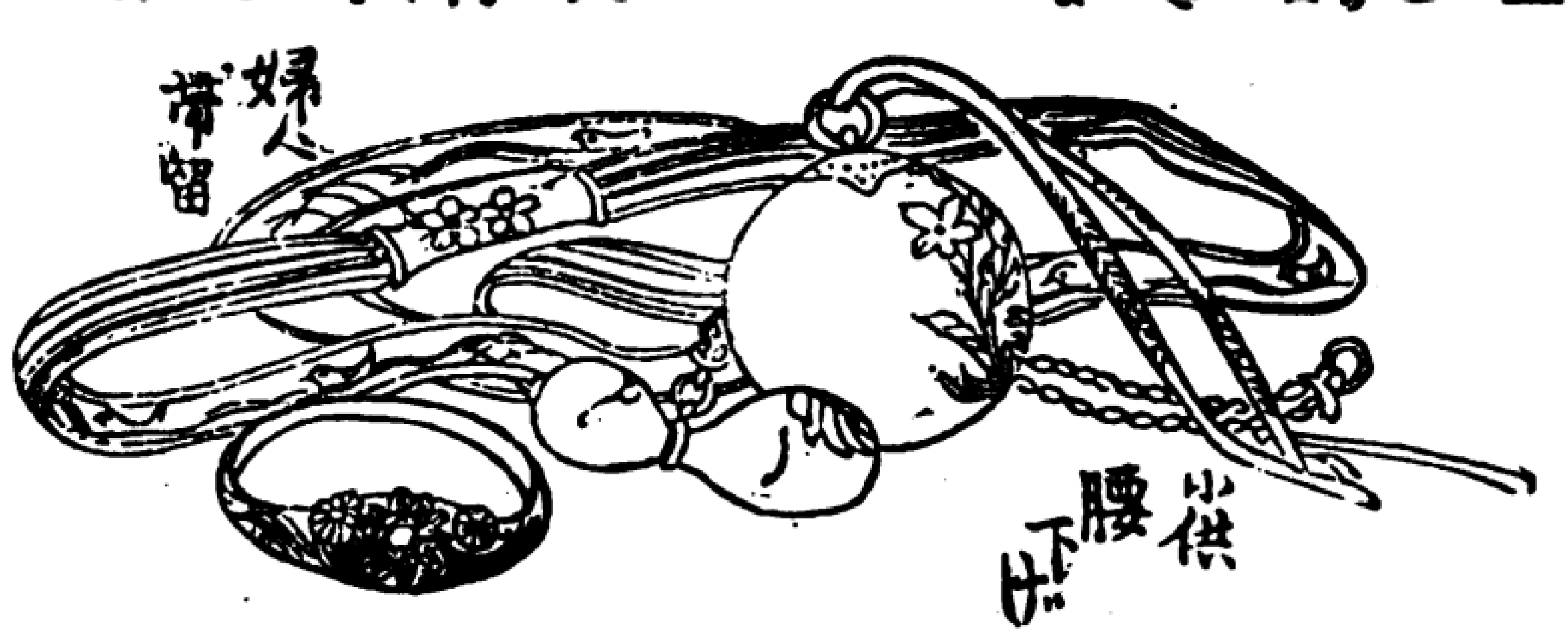
●罌子雛　之は後の雛とも申しまして、秋になると參州あたりでは、竹の筒へ雛草にて髮を結ひ、紙の着物を着せ、小供の遊び事の一つにして置きましたものを、之れを矢張何時となく變じて、三月に飾るやうになつたので御座います。

●薩摩雛　地方の中で、先づ一番雛の種類の澤山ある所は、薩摩の國で御座いませう、何故かう薩摩に種類が多いかと申しますに、昔薩摩の人は殿樣より雛を拜領したもので其の雛が拜領する人の身分に從つて、雛に種々の差等がありましたので。此く種類が澤山あるので御座います、又た薩摩には妙な習慣がありまして、昔、身分のある人の娘どもは、金助毬と申す毬を橫柄に、市中を賣つて歩きますると、市中の者は此の金助毬を買つていくつともなく、之れを幕張の中に下けるので御座いますが、之れに依て見ましても、地方々々を調べて見ましたなら雛の種類は澤山あるとと思はれる

小兒と服裝（ベルツ博士）

●上下通し　大人の婦人の服裝は今後二三年の間に洋服等に變へられ樣とも思はれませず、また强て望む所でもありませぬ、私は今日主に女兒の衣服に就て申上る積りです、幼き日本の女兒が彼の美しい襲ね衣服など着けまして遊んで居る所を見ますなら花に戯むるゝ蝶々かとも思はるゝ計ですが一度び衛生上から此衣服を考へて見ますなら誠に寒心に堪へません彼の上下打通しの長い重たい衣裳は天然に活動を好む所の子供の身體を束縛し如何計その發達を妨けるのでありませうか近來學校で男生徒に洋服を採用したる結果を見ましても私は是非女兒服の改良を望まねばなりません、長袖の害もまた同樣でありまする。

●筍的服裝　私の許に或日一人の母親さんが子供を連れて診察を乞ふ爲においでになりました其お子さんは呼吸の工合が惡いと云ふのです私の診察にかゝります爲に先づ其胸をくつろげやうと致しました所子供は恰度筍の樣に十一枚の衣服を纏ふて居りました、幼き子供は此樣な澤山の衣服に押しつけられて呼吸の妨けられぬ理由はありませうか私は實に度々重ね着或は帶紐の爲に縛られて胸廓を狹め次いで肺病になりました大勢の日本人を見て居ります。

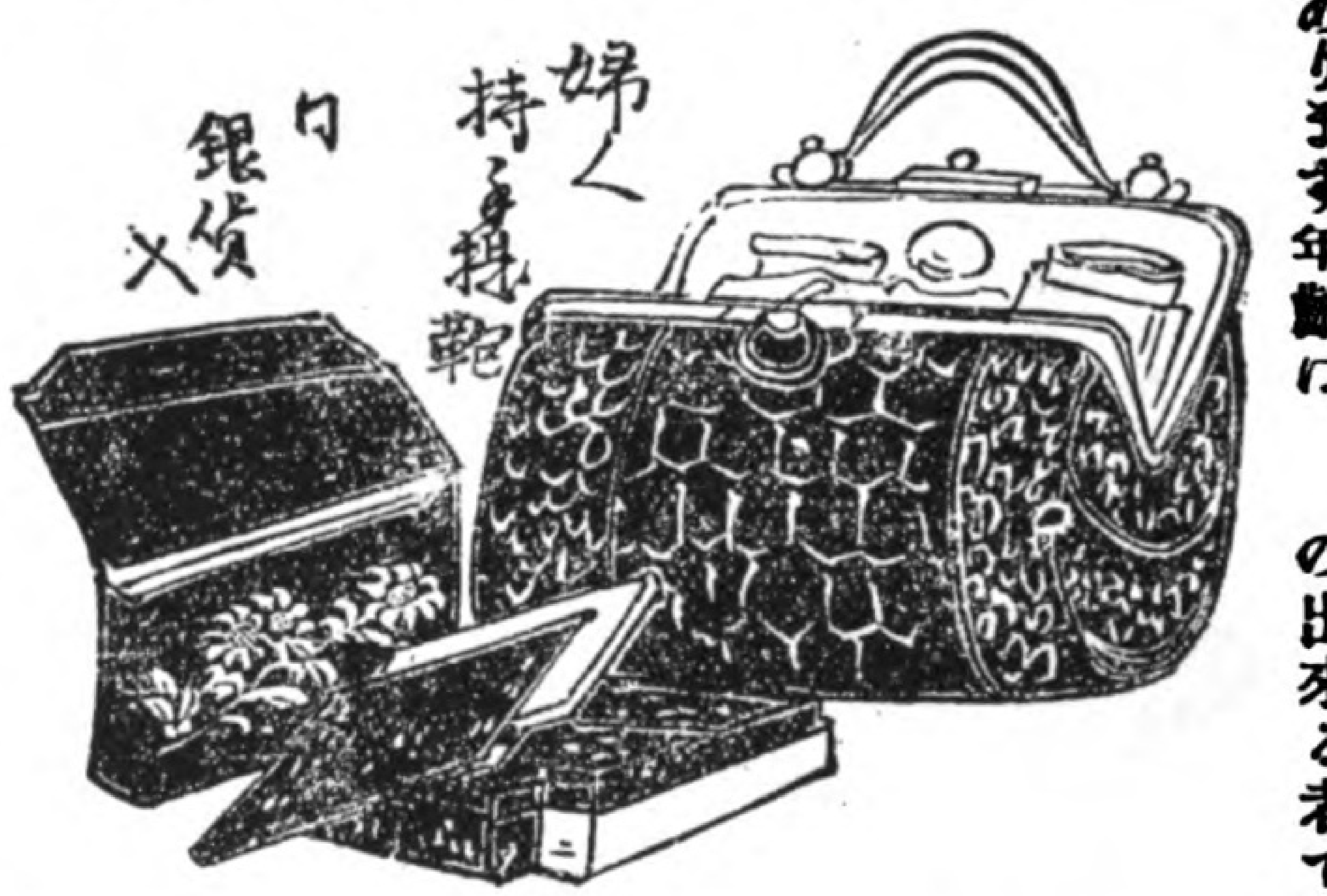


●帶紐のかずかず　日本の婦人は脚を動かすのが肝要であります腰の骨の上に恰度腰帶をしめて居ります端折と申す衣服の大きな餘分がその上に垂れて居て更に胸のあたりを縛りその上に帶をしめて帶上げを用ゐまたその上に布を結んで居ります盛服したる女兒達が竪矢の字を背負ふて兩の足を滑らせつゝ（腰の骨を縛つて居る爲に足をあげる譯にゆきません）打俯勝ちに歩んで居るのは實に已むを得ぬ所です。

●健脚の日本婦人　以上の有樣でありまするから上流の日本婦人は誠に足弱でありますが私は或時諸國參詣のお婆さん達と道連れになつた事がありますが年齡は何れも五十位でありますのに毎日八里位の道を平氣で歩いて安々と旅宿に着きその翌日もまたその次も殆んど疲れた樣子なんど見えませぬのです日本婦人は人種的に足弱ではありません貧しき爲に或は自分ゝ卑しき爲に澤山に衣服を重ねる事の出來ない婦人はその通に健脚ではありませぬか。

●上流婦人の骨格　序ながら上流婦人の骨格の弱いのは他にも原因があります即ち米を召し食がる事で米には骨を作るべき養分が乏しいのです下流の人は麥や豆、豆腐など多く用ゐます故其憂はありませぬ。

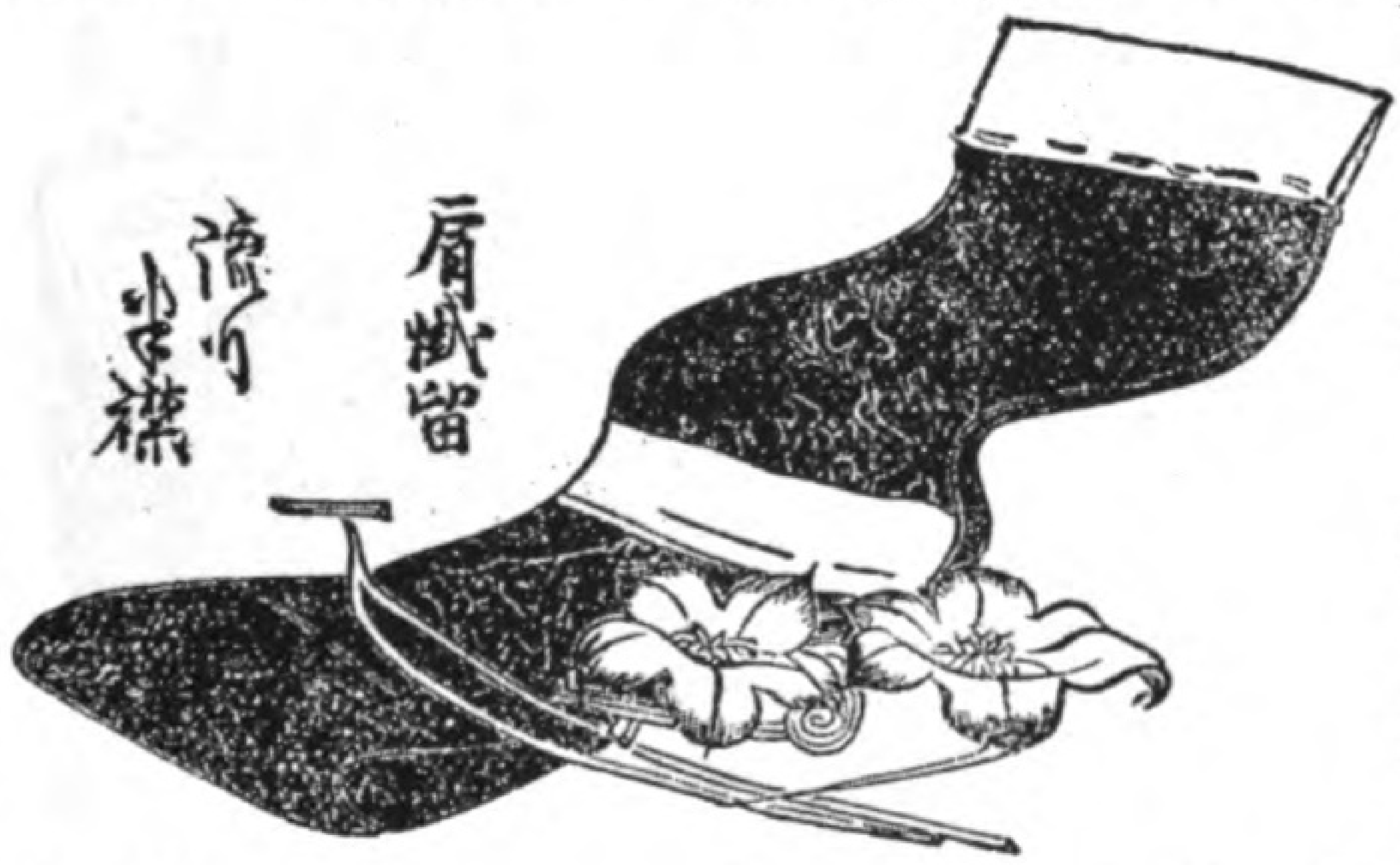
●足の改良　吾人の足は一躰なかだかに出來て居まして彈力を有つて居ります歩く時は先づ踵に力が入つて段々と指先に及ぶものであります故履物もまた屈伸の出來る者でなければなりませぬ斯う考へて見ますなら彼の硬き重き日本の下駄は何うしても吾人の足には適せぬのです△ソシテ拇指と他の四本の指の間に挿む鼻緒は下駄の中間に出來て居る是が一躰ならば右の下駄の鼻緒は少し左の方に左は少し右の方に片寄つて居なければならぬ筈です夫が然樣でありませぬ故足の中心を取ると云ふ必要上から勢ひ踵が内の方に曲がらねばなりませぬ△以上數々の理由に依つて日本婦人はその御手の奇麗なに似もつかず大層醜い足を持つてお居でゝす有躰に云へば足の改良は獨り支那婦人のみではなからうかと思はれます。



●靴の爪先　私は女學校から歸りがけの多くの女生徒に始終氣をつけて居ります所靴を用ゐて居らるゝ方

と下駄の方では大層足の運びが違ひます何卒可成皆さを靴をお用ゐになりまして活潑に歩いて頂きたい此所で御注意を申して置くのは靴をお穿きになりましたなら內の方に足を曲て歩きなさる事です△西洋の婦人は爪細の靴を用ゐる樣になつて居ますが大方人種の違ひからでありませう日本の方は西洋人とは手先足先の格好が餘程違つて居られます即ち日本の方は手て申しますなら紅さし指が人さし指より大抵長い西洋人は人さしの方が長いです足にしても日本の方は拇指の次よりも小指の前即ち四番目の指が長い夫れ故足先が廣いので西洋人は拇指の次よりもその次々と段々短くなります故足先が何うしても細いのです此事丈ても日本の方には先の廣い靴てなければなりませぬ。

●袴は何うか　近來袴が大層行はれて參りました誠に喜ぶべき事てあります然れども私は長い着物に袴を着ける今日の流義には餘り贊成が出來ませぬ何うぞ膝の上までの着物にして頂きたい孃さん方に暫くの間膝ぎりの着物をお着せになりますなら慥に二度と長い衣服を着る事をお嫌ひになりませう△夫れに矢張今の樣に袴の下に帶をしめて端折も出來て居ると云ふ風ですと腰のあたりが太くなつて餘程醜いかと思はれます。(右は博士が過日鍋島侯爵邸に開かれし月曜會の席上にて演へし處なり)



娯樂

摘みくさ

とし子

時候はおい〳〵と暖かくなつて來る天氣はよし、向島御殿山、あたりのつみ草はどうでせうかと聞いて見ると、廿一日の皇靈祭あたりは、恰度よからうとの事てございました、今は勿論よめ菜が主で上野田圃や新宿方面大森なんどは散歩がてらに

好い遊び場てせう、南郊にはポツ〳〵菜の花も咲いてまいりました、摘草の普通の種類を申せばこれは何方も御存じの嫁菜、たんぽゝ、野蒜に土筆、少し後れて餅草などてせう、扨野蒜は酢味噌、たんぽゝはおひたし、胡麻あえも鳥渡よいものです、土筆も矢張り同様なるが吸物にしてもよし、嫁菜はゆでゝ晒らして灰汁だしに氣をつけて細かく刻み焼鹽味を加へそれに蒸れ加減上々の御飯、お鉢にうつしながらに撒りまぜて食膳に上せばこれはまた異な風味のあるものです。



東京人はあまり食べない様ですが、春野にてると恰度水仙の小さい様な甘草といふ草があります、いつぞや船でお茶の水を下つた時、土堤に澤山この草が生えて居ましたから翌日お友達を誘つて摘に出かけた事がありましたが今年も大方出るでせう、奇麗で柔かで目にもうれしく口にも樂しい食物はこれでせう。

慥か土筆の前身であるすぎなと云ふのはその名の如くよく杉の葉に似て居る草です、ゆでゝ充分灰汁をだし、細かく刻み生醤油てから〳〵に煎り熱い御飯にかけて食べます。

田芹といふものは御存じの通

り流れの傍や池の邊りによく出るもので胡麻よごし、お浸しの外に白和にしてもよい、白和といふものは豆腐くさくない様、水つぽくない様にするのが肝要だそうです、

うこぎ　此れは刺のある灌木で早春芽を出したかと思ふとぜん〳〵に濃き綠りに紅葉形の可愛い葉になります、但し葉の緣にキザキザはなけれど其葉の餘りに延びない間に丁寧に摘み取つてザット茹て堅く絞つて燒味噌と一所に細かに刻み充分にまぜ合はして矢張御飯にかけて食べます、

ぼうふう（防風）　これは東京人では三杯酢や刺身のつまによくするものです、あの根の赤い、青く可愛らしい葉を持つて居る植物です、かの防風も矢張り海邊の砂の中に幽に葉だけを見せて居る、これをあさつて摘むの實に樂しいもの、砂糖酢につけて食べるに齒ざはりの好い味のよいソシテ香氣の極く高い、その代り澤山食べるとのぼせるもの、摘草の中ではこれらがまづ最上等のものでせう。

おゝばこ　その名は何だかいやに老人めきてゐますが此の草で打くと死んだ蛙が生きると云ふので子供は能々かへるを殺してこの草で以て撫る様にふつてやります、するとホツトにぴよこ〳〵生きかへる、猫とまたゝびよりはモット不思議でかへるとおばこは水と魚との交はりかも、

扨て摘み草も四國九州のごとき暖國となれば木の芽も花も早く出るわけですが山が南を向き海の暖かきを受けたる土地は格別て、そこらの摘草といへば主に川緣の土堤にあります、芹に三杯に嫁菜たんぽゝなどいろ〳〵様々で、茅花といふのは、花と云つてもまだ外皮を被つて居る、居るのを其儘て食べるので、どうかすれば場末の一文菓子屋で賣つて居る、是といふ味はないけれど唯柔かて食べると云ふだけ、別にまた甘芽と云つて茅の根を掘りに行くそれは大人よりはまた主に子供の樂しむものです、

花摘み　これは重に子供の樂しみて春野に出ては種々なものを取つて遊ぶその主なるものは、紫雲英紫白

青紅所々に蒲公英の黄をまぜて野邊一面毛氈を敷いた樣とは形容もあります、實に此の通りで、それが山家になりますとわらびがあり、子供等はそれを摘んで花魁や子供の姿を器用に作りて遊ぶので、男の子は能く虎杖をとりに行く、虎杖といふのは竹の樣な柔かなもので若芽の中に皮を剝いて鹽をつけて食る人もあるそうですが是は終日面白半分谷間などあさり廻つてやつと五六本得られると凱歌をあげて歸るのです、女の子が紫雲英を座敷一杯散かして祖母さんに小言を聞いたり、男の子が虎杖とりて散々衣服を破くなんどは珍らしくない事です、



才媛詞藻

和歌

文學士　大町桂月先生選評

曉雲（課題）

〔天〕　横濱市戸部町五丁目一五五　長谷川さく子

鈴鹿山いなゝきのぼる荷馱馬の
　こゑにわかるゝみねの横雲

荒山一夜、白雲描き得て清絕、歌に老いたるものといふべし（桂月）

〔地〕　府下北多摩郡東村山野口　吉川時子

柴の戸に我を殘して今日もまた
　うき世にいづるあかつきの雲

意はさまで清新ならねど、多少の飄逸の氣、言外に躍動す（桂月）

〔人〕　武陽青梅　小林やま子

まち佗びて名殘惜しくもかへる身の
　思ひや殘る曉のくも

心を殘して歸る身の、今一度とふりかへれば、白雲むなしく君が家を鎖しぬ、何等銷魂の光景ぞや（桂月）

秀逸

◉蕨、曉雲（混選）

まなびやのむかしのともしあひにけり早わらびあさるやましたの道　横濱　長谷川さく子

みち／＼に折りてし蕨つとにして夢もたのしき乳母が宿かな　信州　福島紋子

朝まだき檜原が奥の一村の夢を埋むる峯の横雲　大阪　小野まさ子

わけがたの雲ちぎれゆく野の末に馬子唄細き小松原かな　下野　しら露

脊の君のかしまたたます此あさけくものたちゐの心もとなき　鎌倉　蕨子

山鴉八重立つ雲にとび入りて名のれば明くるびむがしの空　越後　田中濱子

きゝすなく燒野の原に親といふがとりてよろこぶ初わらびかな　赤坂　谷やす子

思ひかけぬ蕨折とそなりにけるうかれて來つる野邊の遊び　鹿兒島　川添せい子

幼兒の手に似たるかな折らであらん半ば開きし野邊の早蕨　伊豆　鈴木まむ子

思ふとち打つれたちてこゝかしてあさるともなくつめるさわらび　靜岡　小野寺清子

にぎる手ににたりといひしさわらびのまたもえいでぬあてはなくして　本郷　石井てい子

岡のへに母をまたせてをとめ子かつみてはいそく野路のさわらひ　河内　大矢たれ子

君にとて折りし蕨ようまからずかうばしからぬ品にはあれど　山梨　紳奈なみ子

たびに行く我が脊送りて門に立ては曉くらし雲多くして　伊賀　服部かつ子

ともにつみし君はゐまさずはつわらびことしも萌えぬたれとつまばや　茨城　渡邊とみ子

佳調

◉曉雲

吹く風に世のはかなきを見するかなきえてあとなき曉の雲　信濃　小出ゆき子

◎曉雲

曉つきにあかき心の上にさへきよひの雲はある世なりけり　岩代　小泉時子

◎仝

いつしかに星はかくれて月は入りてわきたち出てぬ紫の雲　伊勢　細野幸子

◎仝

松か枝に沖の帆白う明けそめて濱をはなれしべに色の雲　甲府　奥山たきよ

◎仝

日の〳〵と花はしらみて山寺の鐘の音霞む横雲の空　麻布　松田實子

◎仝

朝の歌かなづる潮の聲の緒をかすめて沖に八雲たなびく　赤坂　兒島みれ子

◎仝

日の神のいてましちかしひんがしに五色のしものたなびさわたる　堺　山家ひろ子

◎仝

あさひこのいつればやかてきえにけりくしきあやしきみれのよこ雲　河内　河崎ひさへ

◎仝

たえまより月も漏れきてあけ鳥なくれたゆたふ浮雲のそら　越後　神戸辰子

◎仝

麗らかに匂ひほのめく朝ぼらけ雲紫の雄筑波の峰　下總　三田はや

◎仝

朝日影またゝれとも鳴く鳥の聲よりしらむあけかたの雲　水戸　山方とし子

◎仝

明星の影うすれ行曉の雲の姿の面白き哉　下總　土井ゆう子

◎仝

有明の月影淡き山の端に紫の雲の低くたな引　伊勢　西井清子

◎仝

あけぼのゝ色うろはしま富士かれのこゝろたかりなかゝる雲かな　名古屋　鷲尾米子

◎曉雲

朝はなたに明けて三井寺のがれの音ひくし朝雲のうち　下谷　白井すみ子

◎蕨

まつ妻をなぐさめんとてか栄の上に蕨をのせてかへる賤の男　近江　鳳島鶴え

◎仝

ふるさとに苞にせばや旅人のつみてはいそぐ野邊のさわらび　下谷　立花はる子

◎仝

山に日はよし暮ぬとも見捨てゝはかへられかたき初わらひかな　伊豫　田中賀子

◎仝

事て見れば年ふる鄕のわが住居築山の跡が蕨の生ふ　山口　竹代冬子

◎仝

栄みも袖にみちけりさわらひもこにみちにけり春の山ふみ　東京　關西みや子

◎仝

おくりくれしこのはつわらひ今宵煮てうばの心なゝぢはいてみん　新潟縣　和歌山はつ

◎仝

病みふせる母につとにと小女子がつみしさわらび袖にあまりて　淺草　武内はま子

◎仝

妹は理科の參考我は又母にすゝむるはらひ摘なり　仙臺　渡邊佐和子

◎仝

きゝむ鳴く燒野の蕨手折りつゝ今亡き母ぞ思ひ出にける　埼玉　石井ふみ子

◎仝

なりそへてかさゝぬ人そなかりける岡のゆくてのつゝしさわらひ　埼玉　淺野清子

◎仝

雉子鳴く燒野の原に早蕨の萠えいづる春になりにけるかな　京橋　須田かつ

◎蕨　長門　梅田染子
うくひすにさまたげられて今日もまた岡邊の蕨をりぞのこせる

◎仝　名古屋　伊藤かを子
大城のありしあたりは荒れに荒れて野となりし跡を蕨萌えけり

◎仝　群馬　新井まさ子
よしや身は蕨にうゑをしのぐともまがれるみちはわれふまめやは

◎仝　三重　濱口よしゑ
君や摘まん我や摘まんとたゆたへばかたみに滿たぬ蕨なりけり

◎仝　神戸　高井春江
いざけふも手折りてゆかん早蕨病ます母の好ますまゝ

◎仝　靜岡　井上よし子
ともすれば蝶の翅のおりそひていこはんとするもゆるわらびに

◎仝　群馬　蓮沼あさ子
伐りしあとに出しわらひを歸るさのつとにやすらん春のそま人

◎仝　栃木　神山竹子
山かげのこやのやけ跡あれはてゝ二もと三もと蕨生ひたつ

◎仝　鎌倉　蘆子
參ら數部の友に進めましなりしさわらひあつものにして

◎仝　東京　宇野よし子
野雲雀のなへれきゝつゝ妹よいざもろともに蕨つみなん

◎仝　横濱　戸倉のぶ子
よもすなく草なつかしみわけ行くは靈岡とからにもゆるさわらひ

◎仝　神戸　いほえ子
春の野の何のおもひのうちつけにこのさわらびとももえいてにけむ

◎仝　山梨　神奈なみ
とゞけ來しわらびのたけの揃へるに心づくしのほどもしられぬ

◎蕨　新潟　竹林かれ子
折得しはわつかなれとも初蕨珍らしければ祖母にさゝけん

◎仝　下野　神山富美子
川堤わらびさげゆくうなゐ子の家に母君まちますといふ

◎仝　栃木　神山竹子
風のために倒れにしてふ山里の伏屋のほとり蕨生ひにけり

◎仝　東京　葦谷女史
吉野山さくら狩りせし人ゝも折りそへ高しゆくはつわらびかな

◎仝　東京　賤の舍春子
姉君と富士の裾野のさわらびを手折りし頃の戀しきろかも

◎仝　和歌山　宮井よし子
墓原にもゆるわらびを誰人も手折らて長くのびにけるかな

◎仝　信州　小林ふで子
去歲燒けし君が屋敷は野となりてところ〳〵の蕨生ひぬる

◎仝　鳥取　尾崎なみ子
山寺の燒跡しげく草もえて折る人さなく蕨老ひにけり

◎仝　備前　重松竹子
うれしさもわらひもかこしあふれけりむかひの山の谷かけにして

◎仝　香川　合田きく子
えとしとゝもにちかひし早蕨も誰とか折らん君しなけれい

◎仝　栃木　田波ひで子
柚久のわすれやしけむ岩の上に若綠なる蕨一たば

◎仝　橫濱　宮木鶴子
里人の近道やせしこゝろなくふみならされけり山の早蕨

◎仝　　　　　　　　　下谷　外河花子
妹とさわらひおりて岡こえのみちかへりくれはきゝすなくなり
◎仝　　　　　　　　　横濱　宮木もと
山里をそゝろあるきの手すさひになるとあはれの初蕨かな
◎仝　　　　　　　　　近江　辻　とみ子
ひはりなくやけ野のわらひけふもまたなりにやゆかんかすみかくれり
◎仝　　　　　　　　　河内　河崎ひさへ
わらひめせとよふ子にとへはあしなえの母は去年より病みたまふといふ

新體詩

ゆかしき笛の主

東京　山田奐左雄

樫のもとに身を寄せて
　おぼろに霞む月影に
花と我身を地にうすく
　うつしてすさむ横笛の
糸より細き音には
　アポロの神のみとらしゝ
黄金の琴のひゞくごと
　若草もゆる春の野の
み熔にたかき草雲雀
　エデンの園のそれならぬ
つきぬ快樂を歌ふごと
　またある時は秋の野の
野分の風にふきあれし
　草葉にすだく虫の音か
絶え入る如くいと細く
　すみわたりたる音を聞けば
肌も寒き思あり
　嗚呼ゆかしさの笛の主
君よ理想の夢に醉ふ
　わかき血みつる乙女子は
君が妙なるしらべには
　いかでたゆべき其音には。

子守り兒

山口　山田仃子

あはれ愛らし子守り兒よ
　そなたは何故に文まなぶ
學びの舍に通はぬぞと
　問へば答もなく〱に
　　只さめ〲と袖しぼる
　　　あはれいとしの子守兒や
聞き給ひてや語らんに
　さても妾が六つの時
　　めてつ育くみ給ひてし
　　　我がたらちねはあら悲し
　　　　妾み殘して黄泉なる
　　　　　兄上の邊に行き給ふ

あゝ父上のありし日は
　あゝ母のましゝ日は
　　お孃さまよと乳母の手に
　　　何不自由とてはなかりしを
　　　　昨日にかはる今日のさま
　　　　　さてもはかなき我身哉
學びの道はたしめども
　教のわざは好めども
　　あゝ何とせん獨り身の
　　　あゝ如何せん捨小舟
　　　　一日のおくりも得がたきを
　　　　　末の行くえもさだめぬを
あはれこの書籍女子訓は
　母のかたみと給ひてし
　　吾が心の花なるに
　　　また一文字も覺えれば
　　　　草葉のかげのたらちねは
　　　　　悲しみそしりうらみてん
如何に貴頭よこの書籍の
　一文字さづけたまへやと
　　幼心のけなげにも
　　　兩手つかへてひれふしぬ
やよ子守見よ安まれよ
　如何で見捨てん孝子の鏡

雪中遭難大隊長を介抱せし奇特の兵士

小柳　上田數子

甲田颪は物凄く。　田茂木野の雪未だ深く。
氷の刄暴金の。　銃も凍らん大吹雪。
田代は何所玉鉾の。　道踏み迷ひ疲れては。
深き谿間に顛ぶあり。　雪に埋もれて死ぬるあり。
二百餘人の益荒男も。　殘るはいとど僅なり。
此時一人の兵卒が。　數日の食をとらぬ上。
手足は凍れ神疲れ。　我さへ危き身ながらも。
倒れし隊長を抱き守り。　五臟も凍る寒空に。
我が外套をば脱ぎ着せて。　隊は枕の吹雪中。
看護の甲斐の顯はれて。　隊長息を吹き返し。
水よ水よと呼びたれば。　彼は幾度か往き來つつ。
眞心込めし駒込の。　河の流を兩の手に。
掬ひ運めて隊長を。　思ふ心の殊勝さよ。
よし兩の手は凍傷に。　かゝりて切斷さるゝとも。
高き譽は後の世の。　武士の鑑となりにけり。

（註曰）　甲田山は行軍隊の向ひし高山、
田茂木野はその途中の高原、
田代は甲田山の麓にある目的地、
駒込川は高原の東を流るゝ。

三保の松原

するが　栗島竹里

見わたす限りはる〳〵と
清見の海に影うつす
濃紅の桃のはな〳〵
雲雀は空に歌ふなり、
學の窓の業終へて
しはし慰む術もやと
清見の海に棹さして
今しも來ぬる花の影、
染むるか如き花のいろ
置く白露に色まして
胡蝶の舞を待ち顔に
見る目まはゆきばかりなり、
心やさしき吾が妹が
かくもめでたき花なれば
折り盡らむと思へども
折りもしかれて吾がこゝろ。

鶴千秋の松のいろ
三保の松原春來れば
樹の間〳〵に咲きみちて

たのしき家に戀ふ身の
心がたりの友とゝも
彼方此方を經めぐりつ

畵くか如き枝のさま
朝日のかげに照りそひつ
千もとの色のさま〳〵に

今は門邊に待つならむ
春のしろに一枝を
花ぬすむ人にくむより

おなじ月影

雪川 木村花子

一

いく春秋の其むかし
　八洲の海をこき出で
萬里のはての唐ごろも
　きつゝ馴れにし故郷の
三笠の山を忍びつゝ
　ながめし月の影いかに

二

身は水屑とならばなれ
　心一つを筑紫がた
浪の音さゆる秋の夜に
　恩賜の御衣を爪さて
去年の今宵を忍びつゝ
　眺めし月の影いかに

三

夜はしみ〳〵と更け渡り
　空行く雁の音も寒し
おく霜白き陣營に
　矛を横たへ詩を賦して
そゞろ家郷をしのびつゝ
　眺めし月の影いかに

四

峰の嵐か松風か
　奏づる曲は想夫戀
心の緒(いと)も細り行く
　嵯峨野の奥の柴折戸に
大内山を忍びつゝ
　眺めし月の影いかに

はぢらひの曲

藤の花房

今朝あけ初めし前髪に　挿す花櫛や紅梅の
褚のまゝの胸ながら　あやしく燃ゆるおかしさや、

人にかれくて花陰に　小さき手鞠くゝりしを
白妙ならむ絲糸に　など交へけむ赤き糸、

庭の籬に身を寄せて　聲をひそめて姿が名よぶ
君が姿をかいま見て　踈なる鞠を落しける敟。

とはのれむり　　　　　　神山紅月

落葉を拾ふ蹊の女が　家路にあかし風ひとつ、
やがてはきゆるかげなれど　悲しむ勿れ乙女子よ。

その日その日のなりはひを　まさきくとげてかてたりて、
こゝろにかゝる雲もなく　夜毎のゆめのやすきかな。

たゞときのまの其れむり　刹那にさむる夢にだに、
さめぞと願ふたのしみを　見ずやとはまし乙女子よ。

あゝ其昔のてる夕べ　ましろに細き手をあげて、
乙女よいのれとことはの　眠りに醉よいざなへと。

君がべになすくちびるの　その紅のあせぬうち、
千草百草まきにほふ　そのに胡蝶のゆめ見ずや。

習慣

筑後　後藤ちと子

論語に性相近習相遠といへり實に人の性は一なれども善にならへは善となり惡にならへば惡となるされば同じく人ながら其習ふ處の道によりてあるはよき人となりて國家を益しあるは惡しき人となりて萬民を害るたとへば同じく米なれども水を入れて煮る時は飯となり粥となり炊きて醸す時は酒となり酢となり其飯となる時は人の命を繋ぎ酒となる時は人の心を亂すが如し。故に正しき人も糸竹の巷に住まは自ら惡心動き鮮める人も賢者の門に遊ばゞ自ら善心生ずべしされば市人に商賈の風あり村人に農家の風ありこれが爲に孟母は三たび家を遷し墨子は糸の黒きに染むを悲みき舜皐陶を舉けて野人も道に落ちたるを拾はす藤氏驕奢を極めて匹夫も身に綾羅を纏ふにいたりぬなべて大方の善惡はこの習によりて生するものぞかし。されど人の習によりて善にうつり惡に化するも始めは毫末の微より起ることゝに一萌蘖あり人これを害せされは棟梁の大材にいたるべしこゝに一蟻徑なり人これを顧みされは十里の長堤もくづるべし故に一毫の善も捨つべからず一毫の惡も取るべからず一日善を行へは福は未だ至らずとも禍自去り一日惡を行へは禍また至らずとも福自遠かるされは人は善く其始を愼み善を勉め惡に移らぬやう心がくべし故に仁賢なる人を求めて交れよ道自進むべし卑野なる者を友とすること勿れ德自損すべし。あはれ蓬のみだりかはしきも麻の中に生ふる時は正しく延ひ麻の直きも蓬の中に植えたらんには忽ちゆがむ人も其性始は相近きものなれども其習によりて終に善となり惡となるいと愼むべきなり

評　所謂村夫子の言として、稱許の價値有るのみ（日東）

文章

日々のつとめ（課題）

北信にて　富士子

（甲）

二月四日、暦にては立春なり、北信の空、春やいづこ、かなたの高き界き雲の上に其いろひそむらん、まして霞らしきもなく、雪あるのみ、雪あるのみ。朝より吹雪。けふも新聞にて青森第八聯隊二大隊の悲報をよむ、この雪を見るにつけ、風の烈しきをきくにつけ、いたましとおもふ事深し、無學なる里の女子共にかたりきかすれば、こゝよりまだ雪深き村のありやときく、井の蛙のたとへも古けれど、莊ぶが所謂北溟の鯤あるを知れるはいと稀なり、幸か不幸か文字なき女子、この惨事をよみてそゞろに文字を解するいよ〳〵かなしみをますの偽りならぬを知れり。鬼は外福は内なる豆ふるきれがひをかけて、こよひ都やにぎわふらん、こゝにてはこの習慣すたれてさすがに寂し。里の父上より御文ありぬ大厳なる友より楽書、又北海道の親しき方より細々の書つく第三女靜枝といへるを設けし由。宿の主人がもとより「紅薔薇」郵送せらる。夜直ちに一讀。やよひ霜やけいたしとて泣く事烈し。

同五日、雪晴、平和なる里居、のぼり給ふ御旭さすがに春とや、あたゝかき心地せらる、やよひは小さき兄のまねして「テンチテンノウアキノよノ……イホノ……ツユニヌレツヽ」と所々いふいとをかし。晝頃洗濯なしたる小さき襦袢、ものほし竿にこほりつきて、而かも其紅のいろ、白雪の上に點々たり、うつくしとおもひぬ、午後北澤氏へゆく、我が子と齢等しき娘子急にうせ給ひしをなぐさめんとてなり、祖母上母なる人、涙にむせびて我もまたいふころを知らざりき、死よ、汝いづこよりこの白雪を犯して來る、八甲田山下の惨、讀むに堪へず、こゝなる惨また語るに語なし。夜も晴、空のオリヨン いと明らかなり、「自然と人生」人よりあづまみあげとして貰ひたるをよむ、「地も天も漠然として融けんとす」の句、うらやまし、地も天も猶かたく〳〵秘密を守るこの里と其差如何、十時半就寝。

同六日、また吹雪、なさけある日を觀る能はず、炬燵に幼き等と昔噺をなす、桃太郎カチ〳〵山皆よろこぶ、兄妹一つの紙の上に怪しき畫をかく、守なる女に汽車の畫をかけよといへば車の輪三つ四つかきて示す、この女いまだ汽車をみし事なきものなり。勝手もとの器みな氷りてつるべの繩かたし。隣家に夜おまゐりあり、僧某の説教、鐘の音、念佛のこゑ、たふとくきこゆ。

同七日、上天氣、寒氣烈、木花といふもの咲く、嚴寒の朝に於ける化學上の作用なり、尤も美、滿山の枯木、一時に春のよそほひあり、路傍の雪かたく、兄妹橇に乘りて遊びにゆく、お晝頃迄歸らず、母ひとり机に向ふてしたむは何、惡詩か拙文か、これをば東都へおくらんとするなり、慢心なれや、文半ばにして來客あり、いづれも兵士凍死の惨事をいふ。近村火を失す、半鐘雪を破りて響きわたり、かなたの屋上黑煙すさまじ。夜屋あかし。兄妹は橇の疲れる能くねむれり。

八日、クラスレター福井より着、けふも晴、まちに待ちたる女學世界博文館より着、大町文學士が家庭時言いと味あり、再三よむ、「迎妻紀行」をものされしはこの君や、其折、やどやの欄干にむつきほし給ひしといふ末の娘様、ことしはいくつになり給ひしやなどおもふ、我も嘗て長途の旅にてこの經驗ありしもの、先生の名をきく毎にかの紀行を聯想す、異なるアソシエーションとながめ給ひそ、鳩山夫人の土産ばなしいま一きはとおもひしが。

九日、風邪の心地にて頭痛烈し、やよひ紅葉の如き手をいだして我がかしらをさする、女の子はませたものなり、其手よ其手よやがては母ならぬ人の頭をもむべきなり、腰をもさするべきなり、我に對する如くやさしかれすなほなれ、夜早くゐむる。

十日、大雪、日記帳より書きぬきて「日々のつとめ」てふ一文を草す、時正に午後四時半なり。

評　文才はあれど、濫作は上達を防ぐ、此文いつもより劣れるが如し。文中コレはといふ叙事なく、また紓情の見るべきものもなし、注意して精練を怠る莫れ、文章に忠實なるは上達の唯一方法也、（日東）

《乙》　仝題

横濱市北方町　吉川ちか

世に子供ほど罪なき無邪氣なるものはあるまじ、分きて四つ五つの頃の愛らしさは、惡たれ口も吐かず　慾とてもなく、兩頰に溢るゝ笑み鬼神も心動かすやう、滿目にみなぎる喜悦の狀は惡魔も服するやうにて、誰人も彼れが天眞爛熳たる姿を見ば、己れも一度は彼れが如くにてありたるかと疑ひを浮ぶるならむ、あゝ、幸多き悅多びき彼等が身の上かな、彼等は其時のこゝろもて行末永く生長したらんには、誰れか世を厭うと云ひ得べき、誰れが世渡りの難きを喞ち得べき、詐僞、殺害、貪慾、罵詈、爭鬪などの惡文字は遂に文典中には見出し得まじきに、世は詐りの風のみすさまじく、妖雲日月を蔽ふて滿界闇里の裡なるぞ哀しき至りなれ。

妾が家の隣に、鯉一と云ふ五歲ばかりの男の子あり、其薔薇のやうなる赤き頰、星の如き小さき眼、楓に似たる丸き手、其他鼻と云ひ口と云ひ何れも畫工をして垂涎せしむべきほど、美はしく愛らしくて、天使とは彼が如き者かと思ひ浮ばせるなり。我家とは庭つゞきにて、朝夕娣ちやん〳〵と恰も鈴をころがしたらん如き、清らかなる聲張りあげて呼ばりつゝ遊びにくるを常としゐたり。

今日は紀元節の大祭日なりければ、十一時頃より家にありて女學世界など讀みゐるうちに、娣ちやん〳〵の彼れの聲は常に變らず籬越しに聞えぬ、鯉ちやんお出てと云えば早や、轉がるやうに妾が机の傍に座り、さも冷めたそうなる楓の手を火鉢に翳して妾が顏を覗きちよと靨を見せ、ほく〳〵笑みを滿面にあらはし、やがて、くれないの唇動くよと見れば、娣ちやん遊ばう、と云ふ、それでは唱歌を唄ふて聞かして頂戴な、と云えばさも特意げに、ぞしだてあげたる桃太郎――と俄かに起き上りて覺束なげに手を擧け腰をまげ、彼が濁りなき聲もて唄ひ出てしに妾までも餘りの面白さに思はず共に唱ひ出てしが、襖越しに母君の笑ひ給ふを聞きぬ、

昨夜お湯で泣いたのは誰てしたらう」？、鯉ちやんは、小さき目を見張りて、さも氣まり惡るげに顏をそむけ、淋しきゑみをは頰のあたりに漏らし、あればよその子、と微かに云ひしが、彼れが胸中に宿とる眞の神は彼れをして、ほんとは……わたい、と前言を打ち消さしめぬ、あゝ好い子だこと、と珠のやうなる頭を撫てければ、喜び勇みて益々唄ひ狂し何時止むとも見えざりけり。

妾は常に鯉ちやんを見る度に斯く思ひぬ、彼れが如き邪なき心もて人に接し人を遇しなば如何に喜び多き身とならんにと、彼れが常に唄ふなる桃太郎の濁なき淸らかなる聲のひそみゐる胸中をもて浮世を渡らば如何に幸多き者とならんにも、妾は堅く定心しぬ、感謝す鯉ちやんよ！、汝も何れは社會に出てゝ浮世の塵にまみえん、されどもされども今の心を守りて失ひ給ひぞ。

評　文を稱する未だなれど、鯉ちやんといふ幼女を描ける節は、天眞

に近かくして、却て趣味深し。(日東)

【丙】　仝題

信州上水内郡榮村
大字住良木四八一　小林つね子

世に已れが頭の蠅を追ふべしと云ふ諺あり。庭の草取りをせざれども、天下の掃除するなど力味たて、家の事を忽せにして、社會の事にのみ奔走するも、餘り褒むべき事にあられども、さりとて人間の一生は唯金を儲けて甘きものを喰ひ、其の末は富豪家になりてめでたく隱居し了るにありと覺悟するも、又感服せざる僻說なり。

人間といふ者は不思議なるものにして、是非とも世間に何事をか爲して置かれば氣の濟まぬものと見え、孔夫子が『君子は世を沒る迄名の稱へられざるを惡む』と言ひたるは、强がち君子のみに限る譯に非ず、如何なる卑賤なる人にても、人間と生れたる一分には必ず世間に用をせれば濟まぬ樣に感ずるもの也。然るに意志の弱き人は斯樣に感じながら、一生碌々として草木と共に朽ち果つると思ふ故、自然情けなき心も起り、終には自暴自棄するに至りたがるもの也。如上の人の常の言ひ草を聞くに『世上に名を賣り出したる立派なる人物なれば、益々品行を愼しみ、行儀も能くし、成る可く世間の手本となる必要もあれ、我々の如き匹夫下郞は、田舍に生れて田舍に死し、一生草莽の中に朽ち果つべき者なれば、别段左樣なる心配にも及ぶまじ』と云ふを常とす。

一寸聞けば如何にも浮世を輕く悟りすましたる譯者の樣にきこゆれども、其の實是程の狂論は無からむ、斯かる言を吐く人達に誑んで愚言を呈すべし。抑も靴屋か其の靴を丁寧に造り、人の足の痛まぬ樣丈夫にして復た容易く破れぬ樣に、と骨を折る其の良實の心は、頓て其の靴を用ふる人の益を爲すが故に、是亦天下の益を爲すもの也。百姓が米麥を作る時に、肥料に念を入れ耕耘に意を用ゐ、實る時に斛を正直にし、成る可く買ふ人の爲めを計る時は、取りも直さず其米麥を購ふ人に益を爲すもの也。一軒の家を治め、子弟の行儀を正しくする時は、其行儀家庭(ホーム)は近所隣の手本となるが故に、是れつまり天下に善き風俗を榮むる源となるもの也。されば惡しき大臣となりて惡しき政をなさんよりは寧ろ善き百姓となりて善き穀を作る方が遙かに天下國家の利益を爲すものなり。否とよ、夫れこそ人たるべく此世に生れ出でたるに愧ぢざる者と云ふべく、又た造化の神の心にも適ひたるものならめ。

國會議員の政黨員のとて頻りに威張りちらしても、其の心天下の利益を思はず、手前勝手の我儘を恣にせむとするのみにては、善く其の職務に忠實なる『羅字のすげかへり』にも劣れりと謂ふべし。總べて志の持ち次第にて、如何なる身分の者も自ら其の天職なるを知らば、それ相應に世間の益をなすこと决して難きに非ず。まづ此所に親子の親しみ、夫婦の情愛、いと濃やかにして淡泊なる生涯に安んじ、平和は家にみちみちて天を尤めず人を怨みず、如意圓滿、ゆかしき茅屋の中にたのしく暮らす家庭ありと定めんに、斯かる家こそは則ち我國の風教を長へに維持すべき堅固なる土臺なり。

都は奢侈に長じ邪淫に流れ、政治家は利慾の奴隸となり、あらゆる人は黃金てふ濁酒に醉へる時に當り、淸貧を樂しみ、分限に安んじ、纔かの物を以て足れりとする梅花の操の如き淸き家庭あらば、是れ豈、世間の渾沌たる邪熱を拂ふべき一服神仙の淸涼劑に非ずや。あはれ惑へる大方の人々よ、能く〳〵此の邊の道理を攷へて其の天職たる『日々のつとめ』に怠るなくんば如何なる不倖不遇の運命に在る人と雖も尙ほ十分世間に功を立て永久に安心立命を得ぶべきとを知り得べきにあらずや。

評　是れ叙事に非ずして、一篇の叙情論文也、人間の職務を論じて、天職の尙ぶべきに說き及ぼし、又た職に高下なく、人間に高下あり

と解釋せり、正當なる人生觀といふべし、(日東)

仝題秀作

靜岡馬場町　角替ゆき子

こは、日記の一節也、拙なき文の、人に見すべきほどのものにあられど、おのが「日々のつとめ」のおとづれを洩らさんとて、之れを出だしぬ。

一月元日。　鶏は鳴きぬ、夜は明けぬ、年たちかへりて三十五年の春とはなりぬ、「今朝見れば山も霞みて久方の天の原より春は來にけり、」實にさなり、空は曇れども行きこう人の様めでたげなり、雑煮、めでたくもうれし。父上拜賀式にとて學校に行へ給ふ、友がきとひもすがら遊ぶ、

年賀狀出す、校長樣、すみ子樣、やえ子樣、……

二日。　年賀にとて仰を受けて行く、春とは云へど名のみにて、吹き來る風肌寒し、十二時掛川町を過ぎ、三時と覺し頃着く。母上の御在所なり、祖父君、叔父君、叔母上、皆笑まる、去る年の懷ひ出かたりて更けぬ、

三日。　祖父君とおものがたりす、十二時歸の途に就く、掛川にて畫先生を訪ひたてまつる、先生おもしろき人なり、不相變のお人なり、奥樣よきお人なり、黄昏れて家に就く、畫師寺崎先生に年賀す、

年の賀の文來る、新しき聲とや云はまし、ろく子樣、よし子樣、すみ子樣より‥‥

四日。　別に記事なし。

五日。　明日は家を立たんと思へば、何とはなしに心沈みに沈みぬ、夜更けまで眠らず、行末を辿りて。

六日。　風冷かなり、靜岡に歸らんとて家を出ず、母君よ、兄上よ、妹よ、故郷の山や川や、いざゝらば、父上居まさず。

畑之内より滊車、十二時と云ふに靜岡に就く、賤機山や、安倍川や、舊のまゝなり、車して宿に行く、門松の中を過ぐ、家内皆幸きかり、ろく子の君を訪ふ、御不在、けふ子の君を訪ふ、雜誌くりかへして物語す、

新年の雜誌＝文庫、小天地、國文學、アカツキ。

夜よしえの君がり歌かるた會あり、札よむ聲、さゝめきの聲、孰れ新しき年の聲ならぬはなし、百枚の歌留多は帶花と飛び、嬉しき春はせまき一室に集められつ。

七日。　七草の雜煮祝く、故郷を離れての地に、あゝ懷ひ出なからめや。淺間の社に遊ぶ、飛びかう鳩、狂ふ池の鯉、あゝ世は春なりけるよ。

新年の女學世界を見つ、去年のにましてうれし、下田先生の「家庭教育所見」殊にうれしく讀まれつ、「枯野の夕ぐれ」「戀しき君」の作者のなつかしや、

八日。　學校に始業式あり、年改まりて始めて學びの友垣にあひぬ、うれしきは友の間柄よ、

かへさ、練兵場に閲兵式あり、いさましくもおゝし。

九日。　授業始めなり、何となく心をちつかず。

十二日。　けふ子の君を訪ふ、不在の聲に心なく淺間に遊び、よしえ子に行く。

おしるこ祝く、うれし。

十四日。　よしえの君、いたつきにて病院の人となりぬと、うれたきは人の身よ、かなしきは病の身よ、若し世に神あり佛ありとせば、サタンの手より此君をかへしてよ。

十五日。新年の『明星』を見る、驚きしは晶子の君が與謝野を改姓せしことなり、嬉しきは「独中秘記」「火中書」などなり。（筆を擱く）

評　文は簡なれど、捨てがたき節あり、（日東）

神戸　いほえ子

我が母は五人の子女をもち給へり、二人の男兒は今當地の中學校に通ひ、幼き弟は尋常小學の四年生なり、妹は高等小學の二年生にて、我は家にありて覺束なげながら心のかぎり母上の手だすけせり、兒等何れも健かにて、殊に藥の味を未だよくも知らぬ者さへあるなれば、家の内つれに樂し、我家にて最も早起なるは母上なり、下女の起き出づるをまちとり起き給ひ、兒等を呼び起させ給ふ、朝餉すめば二人に辨當もたせて出しやりたまふ、幼き二人は學校の近ければ、雨天の日の外午餐には歸り來るが常なり、父上出勤せさせ給へば、我下女と共に座敷書齋など掃き清むるほとに、母上は其日の仕事を人々にわりあてたまふ、朝の程に我學の師のもとにゆき、歸りては母上の傍にて裁縫するに拙なけれど、なほねごろもに教へ給へば、先年某女學校を卒業してより、友のたれかれ裁縫所に通ひ給ふもあれど、我はさる事もせず、午餐は勢よく走り歸り來たる弟妹等と共にし、午後も亦裁縫などするに、夕方近くなれば夕餉の支度を指圖し給ひ、父上にまゐらすものは自ら調じたまふ事多し、我家もとより富餘ありとにはあられど、自ら立働き給はでもあるべききはなるに、母上は下女にたちまじりて洗濯も張物もし給ひ、日々の食膳に上るもの、一として御指圖によらざるものなし、夕食は父君の歸らせたまふがおそければ、日曜をのぞきては共にする事稀なるのみ口惜し、夜になれば弟二人は自ら明日の下調をなし、幼きものどもは我復習せさせ、嫁女には夢なる温習せさするに、母上は此頃もなほ淨瑠のもとにて、下と共に裁縫したまふが、折には聞きに來たまふ事あり、一日の内起き居て仕事したまはぬは此時ばかりなり、我もあとにて調べなどす、一日の事概れかくの如し、わが父母はわが子を愛し給ふのみならず、人の子をもまためで給へば、五人の子供の友達入りかはり立ちかはり遊びに來れど、常によろこび給ひ、日曜日には午餐さへ出しし世話したまふ、或知れる人の來て母上によくかくまで世話したまふものかな、うるさしなど思さずやと云ひし事ありしが、其折のたまひけるには、子供等外に出づれば如何なる人を友として、如何なる處に遊べるかは知りがたければ、いと心もとなし、我が目の前に居る程は心安ければ、少しの勞はいとはぬなりと答へ給ひき、さればわれ等の友には皆よき伯母様とよろこばれ給ふ、かく花をも紅葉をもよそにして、我等の事にのみかゝづらはり給へば、何の樂もなき樣に思はるゝに、また不平めきたる事は仰せられざりき、父上の常に少し外に出て見よとのたまへど、新年を除きては親しき家を時々訪ひ給ふのみなり、此度女學世界の文題日々の務とか聞けば、筆に任せてありの儘を記しぬ、餘りに古めかしく、且かたはら痛しと見給はむ君達もあるべけれど、かの今樣の學才もち給へる君の子の育て、夫につかへ給ふに比べては如何あらむを知らればこそ、かくはばからずものしたるなれ、

評　文詞は錬れされど、平快に書かれたり、又た記事中見るべき節なきにもあらず、（日東）

賞外雜文

●日々のつとめ　　隨中　菅野富士

今日も使して近き邊りに行きぬ、春深き頃の習ひとて梅の香床しく、す

ところに歩みのはか行かず、遠くあらぬ道に日の暮れて、邊り少しく暗かりけり、折から先きに人のけはひあり、はな打ちかむ見れば、なきて有ると覺ゆ、いで樣こそあらめと走りよりて見れば、年端も行かぬ少女なりけり、いろ〳〵になだめ歸る道すがらなれば、何矣れと無く尋ねとひしに、妾は某家にみつし仕る者にて侍り、今日主人の用にて隣村まで小走りに、走り行きて來れ、と命ぜられぬ、仰の儘に急きもて行く間に、大切の紙入を落し尋ね歸る道筋なり、あなたの見侍らざりしかと申すに、さればとよ妾町にて見ぬ、門脇樣へ屆ぐべき文の、おちちりてあるをとて、ある男の用たしたる樣にてありき、ときかせたりければ、少女喜びこおどりしつ、主の爲めに叱られ申さんよりは、何處へなりと逃げ申さんと、心を據へたれど、今迄の主をすてゝ立ち去るものあらめや、いな大切のみそのかきの手紙なるを、など種々に案じ、思はず涙にくれ申したりと語る、やかて少女はまた町の方へと小走りに走りぬ、

あはれ日毎の水仕事、能くも妾に似たる事哉、二年みとせ、はや年は積りて、暮れまた明け行けど、奉公のために身は忙はしき、故郷の老いたる母の唯一人今頃は如何に、暮し給ひつゝあらんか……いざかへりなん主人も待ちまさんに、

評　文は輕快なれど、雅俗語の調和を得ず、しかし其調和を得ぬは、此文のみにはあらじ、（日東）

●仝

米澤　馬場春子

東の空まだしらまで、曉告ぐる鳥さへ鳴かで、母君のみ夢のなほ温かげに見ゆる頃しも、起きそめぬるうれしさよ、臺所の釜の下もたきはてつ、座敷の掃除もいつしかはてし頃しも、あれ花子の君の書齋の窓に、箒の音の漸くに聞えそめしも心地よや、

母君の教も乞はてなりはてし料理の上、いくくもほめ給ふ父君の御首菜に、味なき朝餉も甘く食べうれしく終へて、校に昇るは、いつも八時の半すぎにや、

み裏深き師の君のかしこきみ教へ、へだてなき友垣とうれしくもうけたまはりつ、家路にいそぐは三時ばかり、居間に入れば、幼き弟の早や小机清めて待ち顏なる、いひしらず愛らしくて、暇こそとられ、先生ぶりての御講釋、あはれをかしやおもしろや、

やがてしげき臺所のポンプの音に、早や夕餉の仕度にやと、額にたすきとりつゝ行き過ぎぬ、其間にとて呼び出づる豆腐屋の例の聲さへ、我かんだせ今はや覺えしぞよ、あはれをかしき、水仕の業よ、いかで知らずてあるべきか、我先賢鷹山公の米澤なりしを忘れぬ限りは、あはれさるを出し車のそれならで、清らなる腕車に、うるはしきふり袖こぼして、通學し給ふ都の姫だちゆめにも此業しらずておはさむ、げにやさる姫達の我あやしきはした姿に接し給はゞ、涼しき御目にそもいかにうつるぞや、

あはれ、何かはいとふべき、かしく煙にかんばせのよしやあせても、とぐ鍋ずみによし汚れても、心の色のなほあせずは、汚れずば、しかも我日々のつとめ、水仕の業にてつくるにあらず、あるは學生となり、はた先生となりて、しかもはした女となる、實におもしろきつとめ哉、まして夜てふ我世界のあるものを、深夜靜に蔦はひかゝる書窓の下に、孤燈かゝげて、あるは昔のひじりに學び、あるは路上の友とかたらひ、はた居ながらに歌枕を百里にさぐり、英雄を千里にとぶらふ、拙なけれども文を作り、腰折れなれども歌をも詠む、あゝ一日の我つとめや、樂しともおもしろや、

評　文は平凡にして、聊も通常を免がれねども、結末の一段見るべし、(日東)

◉仝　播磨　秦　常子

お祖父樣の喜のお客があるからお晝御飯を差上る樣にと母上から言ひ附けられて其仕度をした、雞肉の叩きの吸物に、獨活とあいなめとの甘煮、それからオムレツとこう考へて、お祖父樣こんなものでは如何でございます、皆樣お齒が惡いのですからと申上たら、アヽヨシ〳〵と笑つて居らした、午後は隣家の七ツになる小女が町はお正月で賑かだから見に行きませうと誘ふので其處まで出掛けて見た都會を離れた地方ではまだ陰暦を用ゐて居るが此處も土地の人は今度お正月をするのである

昨日までは歳暮で、町の兩側に露店が出て居た帽子や、下駄や、石鹼や、羽織紐や、金物、世帶道具、一品拾錢の金指環や金鎖や、道も狹い程並べ立てゝ、荷車を曳く若い衆達も焦茶の米利堅帽を買つて居る、瀨戶物屋の前に立つて田舍の人が御燈の具を買ふのに、おかアン(母樣の事)替う數へて見しなと子供がいへは、母親はソーヤナ荒神サンの前に一つ太神宮サンの前に一つと今更勘定を初めた、百姓は十圓札や五圓札を出して買物をする、町の者は此金の落るのを待つて居るのである、

今日は其樣な店は一つもない、家々は表戶をおろして、人々が往來て遊んで居る、扇子を持つて門並みにお目出度うと云ふて行く人もある、馬に乘つて驅け廻るのもある、娘や子供達は、それ相應に着飾つて、近くの神社に參詣する、どの人も一年の仕事が濟んで、今日一日はヤレ〳〵と重荷を下した樣な樣子に見える、藝妓が五六人、去年のかと思はれる紋附きを着て、左褄を採つた下からは、緋の長襦袢のあはれに黑くなつたのを憶面なしに出して居るが、どんなにか惨い着物が着度いので有らうのにと憐れになつた、棒色の暖簾をさげた安料理屋の二階のガラス障子破れた內から、三味線が聞え出した、下を通る在所の若者達が羨しそうに見て行く、茶屋の二階の三味の音はさぞ今日のうろついて居る蒐共をすそふる事て有らう、小人閑居すれば不善を思ふ、向ふから男が三人に女が二人、珠數繋ぎに縛られて來た、大かた賭事でもしたので有らう、

彼や此やで賑かな中を、何寮も同じ海老茶袴に簡袖の女學生が、高曆の正月が何である、自分達は此樣に勉強して居るといふ樣な風で濶步して行く、我等も今こそ氣が附いて居るが、以前には此樣な時もあつたろうに、年寄達の服から見たら、さぞ面惡く思はれる事であろうと三輪田刀自の女學生離が丁度思ひ合はされた事である、

日々のつとめといふ類には叶はぬかもしれませぬが、今日見たり思ふたりした事のを有の儘に書いて見ればこうてす、(二月八日記)

評　流暢に書けたのはよろし、(日東)

◉仝　下野　神山富美子

三月二日、幸ひ日曜なれば巴波川の堤に櫻かりせむと、きのふ綾子の君としげ子の君と誓ひおきて、うれしさのあまりなか〳〵に眠られざりしが、しばしまどろみて目さむれば、あやしき音するに、窓の戶押あけ見ればあなうたて、春雨のしと〳〵降りしくならむとは、はりつめし氣も消おせて力なく、又もふすまひきかつぎつ、げによなとひよりの花曇、かゝる事もやと心にかゝりしなりしかども、いざゝらば散るまでも見じ山櫻花のざかりをおもかげにして、と古歌の心も忍ばれて、限りなう口惜くこそ、

つれ〳〵なるまゝ雜誌などよみ居るに、綾子の君としげ子の君うちつれ

て訪ひ給ひ、とも〳〵けふの恨めしかりり事を語り合ひ、はてはかゝたにてもと妹のなみをも交へて遊びつ、夜は歌一つ二つかきぬ、なみは母上にせがみて帶買ひ給はれといふ、昨夜もこれにて母上をこまらせたるなり。

三日、　きのふの雨あとなくはれて、朝日うらゝかに、のきばにむらがる雀の聲もいと愛らし、けふはお節句、女子のまつり、雛だして、床かざりてと、なみは母上をせきたてつ、學校より歸ればなみは遊びにゆきたりとて見えず、ひな美はしく六段にかざられて、餅酒などくさ〳〵へ供てありぬ、足の折れし手のかけたる古き姿のなどもあまた交りてあるよ、なみは綾子の君にいたゞきしとてかざしの見事なるを母上にほこりしが、今宵は忘れしならむ、帶のことはいはず。

四日、兄上朝まだきより起きいでゝ、辨當草鞋などゝうちさわぐ、聞けば唐澤山に趣かりすなるとぞ。學校にて來む十四日より大試驗を行ふべしと掲示されぬ、見る人ごとに今更の如く驚きたる様なり、夕くれ方庭などはき清むるに、牡丹のつぼみあまた綻びそめて、そがなかの一つこそあすの朝は必ず咲かむと思はれたり、夕げしける時兄上歸りましぬ、げに愉快なりきとよ、けふあす頃こそ見盛にて、この次の日曜にては少しく遲からむといふ、なみは又母上に帶をせまりて兄上に笑はれつ。

五日、　きのふの牡丹はたして美はしく咲きてありぬ、なみ折らまほしげなりしが、さすがにいひいださず、學校にて綾子の君圖畫かきおへぬとて見せられしが、げにいみじうもかゝれたりき、婦女世界四日おくれてけふ來りぬ、歌と文とを投ぜしなるが、やう〳〵歌のみいでたるいと〳〵口惜し、なみ遊びより歸り來りて、しげ子の君きのふより心地常ならずとて、うちふし給ひ居りぬといふ、げに學校にて見え給はざりしは理なりけるよ、なみの手をとりて見舞しに、思ひし程のいたずきにもあらで、胸おさまりぬ、

夜は綾子の君が家にて幻燈會の催しありしかども、かればしげ子の君來まさずて、物たらぬ心地せられし。

◉今

長野　平野なほし

妾は一人の弟こそあれ、一人の娘としてあまりに父母に愛せられぬ、幸か不幸か、十六歳迄飯炊ぐことも、物煮る業も更に〳〵手を下さしめず一に母のなし給ふ所、妾をいたはるにや、將た末熱そ思へるにや、十六歳の春、とある學校に入り、寄宿舍に飲食起臥して、十九歳の春卒業しぬ、後間もなく良縁ありて嫁ぎぬ、

笑ふ勿れ、飯炊ぐことを知らぬ身を、料理することを知らぬ身を、又笑ふ勿れ、貸家の札に眼をのみ注ぎたることを、某所に新世帶を持ちぬ、夫の君は官吏なり、自炊も一二年せらりしことありとかや、空家なるかな、空家なるかな、空家はかくまでに空なるものか、疊と戸障子の外一物もなし﹅さて何より求めむ、多くは役所の使丁に依賴して求めぬ、鍋皿鉢は更なり、彼所に至らせ、此所に行かしむ、げになかしきよ、終に手桶背負ひて、鐵瓶、摺粉木なぞ提げたることこそ笑ひの種なれ、

かくて一度食事は濟ましぬ、さて不足の器具のみぞ多き、求むるを打ち忘れては食事の度毎に思ひ出すぞいま〳〵しき、來客あればそれ取來よ、明くれば飯よ、暮るれば戸締よ、未だ婢さへなければ何くれとなく一身に負ふことの多さ、げに驚くべし、夜も新婚とて祝意を述ぶるものあれ又夫の君へは迎要とて、殊に出入のものいと繁にて、迎へては送り、送

りては理ふ、皆新ならざるはなし、
夫の君は云ひぬ、お前の料理よりわが料理こそ甘けれ、奥さん炊事は辭職せよなどたはぶれらるゝは耳いたく感じぬ、博文館の實用料理法、料理手引草など取りちらせば、これは〳〵いよ〳〵の御本職、さぞや立派の料理や出來ん、早や出勤時間なるよ、急げ〳〵などいはるゝは、今朝寢過ごして、板の間騷がしくて何の趣味なき獻立こそ、いとも〳〵恥づかしけれ、それ此時こそ罐詰なれとて、一時をよき程になしつれば、罐詰の不經濟なることは、月末の表にあらはに見ゆるこそ恥しけれ、
或る時人は訪ひ來ぬ、髮打ち亂して衣服など汚れたるをつけて、洗髮せむとしたる時なりき、人は云ひぬ、奥さんに一寸御目にかゝりたしと、妾はこれに答ふるに言なく、只苦笑しぬ、人悟れしにや許せかし、奥さんおりしか遂に顏は赤くなりぬ、此人こそわが夫の君と無二の親友にて夫は或る酒宴の席にて、興に乘じてわが醜婦を大に美貌に吹きなし、鼻鉢の肥滿せるを、やさしき姿といひなしたりとかや、後にはまゝてどつと笑ひぬ、彼の人の下婢と思ひしこそ道理なれ。
友はわれにすゝめぬ、堺枯川氏の家庭の新風味を一讀せよと、されども妾はいひぬ、皆が皆今は新風庭に感ぜらるゝぞかし、さはいへ、世の家庭がかくなるは缺點よ、これ〳〵は友白からすといへるを示して、教へられよといへるに、此友も未婚者なるこそをかしけれ。
戸籍も轉じぬ、姓も改まりぬ、いつも〳〵郵便の延着することそいぢらしけれ、誰を咎めむ、良緣ありてこそ姓も改まりしなれ、さりとて人毎に新婚の吹聽もなし難きものよ、

評　此の如きは、女子の書き振りもしては、ほめたものに非らじ。

●仝

近江　藤田達子

我家には三四年前まで召使ひの女のありしを、近頃物價騰貴して月々の費用も嵩み、又兄君の中學に入り玉ひしより、少からぬ學資をも要せしかば、父君母上と相計りて專ら儉約を旨とせられ、女工盛に行はれて奉公人の得難きを幸ひ、今は一人の少女だに用ゐぬ事とはなりぬ。
斯て是より下女が爲しゝわざは、全く母上の御身に集まりぬ、されど數々の辛苦を少しも厭ひ玉はで、慣れもせぬ仕事も能く之に耐へ玉ひ、こは家計の爲ぞかし、そは學資の基ゐぞかしと、何くれとなう心を勞し玉ひて、老の將に至らむとするをも忘れ玉ひぬ。
最とゞ甲斐なき己れも、雄々しき母上に勵まされて、聊かにても其勞を分たむものをと、過ぎつる頃より思ひ定めつ、其れより毎朝未明に起きて、母上が竈を焚き付け玉へば、おのれは水を汲み室内を掃ひ、やがて朝餉を終へて出校の用意をなしぬ、課業相果てゝ家に歸れば、或は來客に接し、或は米を炊き菜を煮るなど、交る〳〵母上と之を爲し、夜に入りて學科の復習と裁縫の稽古とを終へ、その後眠に就くを例と爲しき、この日々のつとめにより、火を焚きては顏の色も漸く黒み、水を汲みては兩の手も次第に赤みを帶びぬ、されど己れは深き窓にかしづかれ玉ふ令女を夢にも羨まず、却りて此等のつとめが善き運動となりて大は健康を助くるを喜ぶ者なり。まして他人交らずの團居の樂しさ、父上か「御身の家事をつとめて露懈り無きこそ殊勝なれ、斯ては氏神祭に善き帶をも求め得させでは叶ふまじ」など聞え玉ふに付け、最とゞ慈愛の身にしみて、その嬉しさや之を譬ふるに物無けむ、
おのれはこの日々の務めが經驗となりて、少しのわざりともな心得置き、この末一家を治めむ日に、大なる助けと成らむ事を願ふ者なり。

評　文は枯燥の嫌もあれど、其の心掛けは嘉すべし、正に是れ篤實な

る女子の言、（日東）

◉仝　　美濃　福田たまを

わらは、させる故ありてこゝにゐさうろたること三とせあまり、ふつゝかながらも心つくしのかひありて、めでらるゝこと一方ならじ、あゝさちなき身とはみゆれどさら〳〵心にたらはぬことなき。此頃國なる友のもとへたよりしたる、つとめのさまの一ふしを。

あさ六時床を出て、ひや水もてからだをこすること、こはかたみの言葉怠りなう仕り、身じまひ終へ、庭のそうじ甲斐〻〻しう、それより孃様と共に室毎の掃除をすまして朝飯（あさげ）す、これより八時まで孃様のさきしらべさらへなどはげませ給ふかたはらにて數學讀書をしらべ、學校に出で給ひ、旦那様やがて銀行に出でまします、それよりのちは專ら奥様の用向をきゝ、また裁縫のわざ一心にけいこす、奥様は此のみちにふかきたしなみましまし、心ばへいとやさしう心得のふし〳〵懇に授けたまふ、このあいだ、くりやにいでおさんを助け、調理の仕方などなれむと心掛くるに、ひたすらとゝめ給ひ、二日に一度、三かにふたゝびにてよからんなどの給へど、たしなみなればと雜誌新聞の料理獻立など、まのあたりこゝろむるに、いとたのしみのますもうれし、

孃様のかへりませば、つい近き師のもとへ茶花のけいこにともし、ぶしつけながら傍にお手引をうけ、かへりつくろふに思ひわぶる節の多くてたすかることのしげくなむ。夜はまた孃様のそばにはべり手習し、學校のはなしうけたまはり、雜誌新聞など見るをゆるさるゝぞ、こよなきたのしみなる。

日曜の午後はみなとも〳〵山に河にあくがれありき、花鳥に心をやり、野原に草つみて、ひばりきくなど、また一人とおぼゆ。

評　居候の境遇を寫さば、一きは面白からむも、此の文にては、還殺の消息を報ずるに足らず、（日東）

◉仝　　山口すみ子

如何なる野の末なりとも都のわづらはしきよりはと思ひて、此所靜なる霞浦の片ほとりに移り住みてよりは、ひろやかなる湖上の眺め、色樣々なる野山の景色、夕べの雲のたゞずまい、皆心ゆくばかりなるにつれ、日々のつとめもまた長閑に覺ゆるぞうれしき。

ほの〳〵とあけゆくあしたは、曉告ぐる諸鳥の囀りかはす聲に呼びさまされて伏床を出て、厨の内にはしたため相手に朝げの支度いそがしく、ねむたげなる弟妹等促したてゝは、登校の時間におくれさせまじと心せはしう支度とゝのひやれば、おとなしく食事終へて出行く後に、そこゝはき清め、いざとて母のみそばに布子つゞり衣縫ふは妾が日々の務めなり。

朝の事ども終れば今日の新聞打ひろげて讀みなどす、頃日は雪中行軍の慘死の摸樣などかき記されて、きく母讀む妾の袖もくちなんばかり、中々に人の事としもなど語りあふ。他家へ嫁き行くべき身は大方の事はえ知らではかなふまじと、いつもながらねむごろなる母の、女子と生れては何事にもつゝましく、かゝる事にはかくせよ、かゝる品はかく賣るものぞと教へ導き給ふに、夕げのみは日々はしたためわづらはず終へ、やがて樂しき夜物語に人も我もほゝえむなり。浮世にすさぶ仇浪を外なるおだやかなる家庭のうちには、花散らす風も吹き來ず、温けき光にてらされて、長閑に日を送るたのしさ。

山住の朝夕はいかに淋しうおはさむ、日々の務はいかなる事をなし給ふらんなど、都の友のまづとはせ給ふ言の葉なれど、春は霞をわけて燒の若草ふみしだき、花より花とあくがれゆき、胡蝶の夢のまどかなるをいの

りつ、西の空赤うかゝやき、遠山寺の入相の鐘かすかに響く頃は、朧の月の影ふみてあせ歌など口ずさむ。土もさけなん夏の日は、みどり涼しき青葉の蔭にまとゐして、雨後の空にぬれつゝなのる時鳥の初音をきゝつ、あるは親しき友垣と共に夕げはや物して霞浦に舟うかべ、晴れ渡りたる空のあなたよりさやかに昇る月影の、金波銀波の浪の上にうつる清景に心やるぞうれしけれ。秋たつ風の袂を吹きかへすは流石に心細からぬにしもあられど、花すゝき風にそよぎ尾花の袖もやさしう、龍田姫の心づくしの野山の錦のめでたさに、うき秋とかこつひまなく傾くまでの虫の音をめではやす。人目も草も枯れゆく冬のみは夜毎に嵐の音さわがしく、柴の戸とざしたれば怪しう人すまぬ里めきて、色も香もなき眺めなれど、うからまどゐして楽しき昔話に興を催し、埋火かきおこして見ぬ世の人を忍ひなどし、日々のつとめないそしみて、ひたすらに春をまつもいひしらずかし。

◉仝

大阪　小野まさ子

剃刀をあてた若尼の圓頂の樣に青い〳〵小松山が、恰度檜笠を伏せた樣に幾個ともなく並列であつて、其小松山の裾が村里なのである、其村端れの際立つて眞白く見えるのが、あれが村長樣の土藏で、其左手に小な草屋と細長い小屋とを見えるであろふ、其草屋が即我家で其細長い小屋は可憐なる亞米利加牛の寢所である、

東の空が白むで源正寺の曉鐘が鳴ると、われは是四頭の亞米利加牛と、まだ角の生てない小兒牛二頭を引率て、此面白い野原で遊ぶのである、詩集を讀だり麥笛を吹いたりして。

春は殊に面白い、青い麥や黄色な菜種の中から雲雀が立つて、高い〳〵野中の一本杉よりまだ高い大空に舞揚つて、其小さな姿もいつか霞に入つて了つて見えなくなる、が其ピイピイと云ふ聲計りは微かに天の一方に聞える、而して突然星が隕る如く疾く落ちて又相變らず麥畑の中で鳴くのである、而して此の麥畑の中を曲り〳〵つて縫ふて行く小川の兩岸は、それは〳〵眼の醒める樣な緋桃の花で、其花の枝には物音のせぬのに安心してチヽチヽと鶯が鳴いているが、ホイと傍の枝に遷つて極内密で恥かしそふに、ホーケキョと一聲鳴たが突然後の森から、あの無愛嬌な山鳥の一羽が飛び下りて而して例の太い聲でタアー〳〵と鳴き出したので、折角の鶯も逃げて了つた、而して此小川と云ふのは極めて淺く而して極めて清潔である、サラ〳〵と玉の樣な清水は白い砂の上を掃てゝ、其深さと云つたら雀の三里程で、山鳥が水に嘴を入れて其川底を啄ゐても、目までは濡れぬのである、正午になれば牛の脊の辨當取下して、此面白い野中の景色を眺めて而して此小川の清水を掬ひ上げて、野中の道のフワ〳〵とした青い若草に坐をしめて晝食を喫ふので、是が誠に樂みなのである、勿論野中の道であるから人通りもない、あつた處で草刈乙女か芋堀爺か學校戻りの小兒位なので、別段恥かしい事はないが、併し此學校戻りの男生に閉口てある、蜻蛉釣の竿で牧牛の尻を撻つたり、石塊を投げ付けたり種々悪戯をするが、女生の方は誠に優しいし、五六人美しひ聲張り上げて唱歌歌つて來たが、空然麥畑の中から牛が長い顏をヌッと突き出したので、一町程逃げ出したが、又以前の唱歌を繼續けて鎮守の森の方に隱れて了つた、其聲ばかり微かに殘して。

源正寺の塔の尖頭に夕日落ちかゝつて、野も山も森も薄黒く、塒を急ぐ追分節も、草刈乙女の笑ひ聲も、今は聞えずなつて、山烏の二三羽もはや彼方の森に落ちた、七頭の牛も我四邊に集合しつ、而して我家をさしてノソ〳〵と歩み出す、我は例の麥笛に黒髪の曲吹きつゝ其後に追従ふて行く、面白かつた春の日もゾップリと暮れて我家の窓にははや燈火の

影が洩れた。

評　面白くないでもないが、自然的のものにあらで、前人の作を模倣したものらしい、(日東)

●不幸なる友の許に

伯耆國東伯郡下中山村　草野愛子

打ちけぶり勝なるこの頃の空如何御覽ぜさせ給ふらん承らほしうこそ事々につけて御なつかしさのみまさりゆきみけしき伺はんにも御住ひの定かならず心にもあらで久しう音信を欠ぎ參らせしはまげて許させ給ひてよさてもそのかみ同じ學の窓を揃ひの徽章替して出入せし幸多き日は鴨の足の短くて露けき袂を分ちしよりは互になれし時よりも別れし後の戀しさと人の申されけるも誠にていと〳〵ありし昔の忍ばれてなん御有樣承るによすがなくてほいなく年月重ぬるうちふと或方より思ひよらざる御地に在すとられきゝあな嬉しと喜ぶ甲斐もなく〳〵にきけばきかぬぞいやまさる御上の御不幸巳が上のやうにおぼえ侍りけげに人生の榮枯は常なきも往し年の冬御母上樣の御他界今更夢現を辨へ申さず如何なる御病床に在せしか御前樣の御愁傷いかに又幼き妹の君は嘸かし夜々空しき褥に亡き母君を慕ひ歎き給ふらんと己が身に取り深くおしはかり參らす梢放れし葛かづはかゝるあはれの御上をいと〳〵悲しみ上ぐ給へや父君には世を早くし給ひ母君の御手一つに三人四人の御子を育み給ひしにその榮行く末をば見給はざるうちはや命數盡きて冥府の旅に身をかくさせられし御いたはしさよ世に果敢なきは人の命いかにか御細心う思召らんされどこゝには破鏡落花と偏へに諦らめさせ給へ萱の臺の御二方も後の御供養と幼き君の御教育とをのみのぞみまさんなほ御前樣には杖柱とも頼むべき兄君の御不自由の御身とならせられとしか御いたはしとも何とも聞え上ん言の葉なく心苦しき極みになん日頃御孝心あつく慈善を好み給ひて陰德多き御前樣にしていかなればかくは禍の集り來しにや定めて假なく思召らん一入戀しき御身上になり給ひし御心情深くおしはかり奉り袂のみぬれまさり侍りさあれ逆境は人を玉にすとか又一遍上人も降ればぬれぬるれば乾く世の中を雨とて厭ふ人ぞはかなきと云はるれば兎にも角にも弟の君の御出精を樂みまち給へやこはいさゝかなれど香奠として納めたまひてよ又この反物は倉吉飛白とてこの國の物產に侍れば同じ柄を心反求め一つは私一つは御前樣に參らす幸に御常着になし給はらば上なき仕合せにこそはや知らせ給ふべけれど同じ學の友なりし橘久代の君はこその葉月永井壽子の君は今霜月に何れも萱の宿へ書くも涙の種になん私はさして變もなく斯る片田舍に移住み母の手助をなし折々は望み果なき北海に壓事を忘れ居侍れば御心放し給ひてよ御前樣にはその後の御樣子委しうそへて未だ見知らぬ御地の有樣をも洩し給へやこの文の返しをば一日千秋の思に待奉るになんあはれ花の朝月の夕何事も夢の浮世と御心優に御身厭はせ給ひ後に殘られし方々の御力となり給はん事を偏に祈り奉る拙き筆は深くな咎め給ひそかしこ

●亡き友の遺族に贈る文

松江母衣町小川齋方　丸山登久子

けふ此頃は春雨の晴間もなく何となう哀れに覺え候折柄驚き入りたる御玉章に接し如何でか胸つぶれ候はざらむ兼て御病氣にて休校遊ばされ候ひしよりさしたる御容体とも存じ上げ申さず今日や伺はん明日や御見舞申上げむと存居候中圖らざる御訃音に接し實に驚き入り候古語にも金銀

珠玉の實も如何でか子實にはまさらむと承り居り候に今其悲境に沈み給へる御身の上何とも申上げやうもなく候殊に唯一人の御令孃にて未だ御齡の盛りにだも達し給はず普通の學校も今少しの處にて御卒業なされ更に進んで學問の蘊奥を究めむとせられし閨秀のかく夭折せられしを誰かは悲しみ申さゞらむ況して妾は取りわけ親しき中とて同じ道に志し同窓に學ひしものからいとゞ悲しく承れば御臨終まで親しまれし此身の斯迄御疎遠に過ごし徒に只一人勉學せしかと思へば無量の感慨胸に餘りて腸もちぎるゝ許りやる方もなく涙の止まる處を知らず候さるを御親父の御身の上御胸も裂け給ふらむと存上げ參らせ候昔より子を失ひて狂人となり或は緇流に身をやつせし者も數々あり候ひしによりても其悲の程は推し量られまつり候殊々御令孃樣に厚き御情を受けたる者校中にも少からず妾一身にとりては實に莫大の御情を蒙り居り候ものから妾は素より級中の者皆嘆き惜しみ參らせ候嘸御令閨樣はじめ皆々樣御悲嘆の御事と存じ上げ參らせ候かれこれ申上げむは如何しく候へ共何事も天命と御あきらめなされ此上は御跡皆樣方御節哀の程偏に願上げまつり候扨て此菓物失禮ながら御靈前へ御供へ申上度尙別封詩歌學友中より追悼の意として募集致し候間併せて御受け下され度候何れ參上色々御弔詞申上べく候へ共取敢へず右御弔ひまで涙の雫に筆ぬらしつゝ聞え上げ參らせ候かしこ

●山住ひの友の許に

久留米市苧扱川町一丁目裏三八〇番地内　飯田その子

年もはやたちかへり候へば、何となう春らしき心地にて、鶯の聲もまたれ候へども、荻の上風雲井の名殘りは消ゆべうも侍らず、梢の風まどの月、見るもの聞くものにつけ候て、まだ身を縮むばかりに候うへ、きのふの御寒さはまた一入にて、嘸し〳〵とうち詫びし、去年の冬にもいや増し候に、御許樣には何事をかおはし玉はむ。さりながら、御地は少しは御暖かに候へば、こきうすきの春霞の、朝な〳〵にしめこめ候はむは、さだめし、昨日今日の御けはひならむに、その霞の奥裏に、春ぞ來たると微笑むなる、紅また白の早咲きの梅見たまひしか。または、雲井も遙かに傳ふらむ、谷間の底に啼き渡る初音の鶯、いつよりか御朝いの枕を驚し侍りたる。さてはまたいつしか、下もえ出でし岡邊の若草を、御袖たまるばかりも摘みそめ給ひつや。誠に御あたりの御情しう存ぜられ候。されど、こゝもとの田舍都は、只、白砂のひえわたる松の浮洲のそれなられど、散りしく雪は櫻なたれにふりかへ候て、梢のあたり草葉のうへ、香もなく音もなく咲きそろふ程に候へば、空もいとゞ曇りがちにて、折り〳〵は、春めきたる御日の御顏を拜みまゐらす位に候。されば、巷の柳のうちけぶりゆかむほども、心もとなう見え候て、鶯の啼き音便りに笑みそめにし初梅探らむよすがなどは、夢つゆにも忍ぶまじき事に候。さればにやこゝには、樂しき春も寂しくて、人の心ものびらになきやう思はれ候まゝ、今ははやせんかたこれなく候て、山の端かゝる夕雲に、たゞ〳〵思ひを晴し參らせ候。その時の御あたりの御慕はしさ、譬へむとして物なき程に御座候。なほ〳〵御身御大切に入らせられ度くひとへに希ひあげ參らせ候。かしこ。

●武藏野の日の出

由井村　木橋雪子

鄙に住む身は、はづかしきもて樂しみてふとを得知らねど、晴れたる日の朝ほど興ふかきはなし。わけて日出の空はどうれしきはなし。妾が家、は、はてなき武藏野の西のはて、多摩の深山の麓に在れば、東の窓を開

く舞に居て海を眺むる心地せらるゝげに妾はこゝに見たる夜あけの樣を、都びとに物語るに、筆の描きをも恐れざるなり。

冬のいつなりしか、夜はやう／＼に明けんとして野面はまだ暗く山々は黑かりき。あゝ其の空はこれよりいかに變りゆくべきか。まづ希望の色は赤く野末にあらわれて、空を見めぐるにつれ七彩の虹を幅ひろくしたること、匂くさ／＼にかわりゆき、げに穏かなる樣は深き／＼春の海にも似て、麗はしき乙姫は、輝く黃金の御璧を羽白き鴎の子にひかしめて、出御あらせらるゝも近かるべし。覺めざるにや。鳥まだ鳴かず、野は動かず、あわれ地の萬象は默して空を仰ぎつゝ、深き希望を持ちて何をか待てり。妾も樂しき眉を振はしつゝ、如何なる神來の秘密が其の中に包まれ、いかに永劫なる眞理が其の奥に閉ざさるゝかと、しだ／＼瞳を放ち得ざりき。

斯くしてほんのりと赤く廣き空に、地軸より浮び出でゝ、ハッと紅に色つきたる雲こそ、嗚呼やがて眞晝の門を押し開く急使にして、人類に光榮ある歷史を持たしむる日帝の胸の前驅とや云ふべけれ。日は出でたるか。金光サッと一條二條、空遠く銀の如くにほのめきて、又縮まりぬ。折から低き山々のごと、廣野のはてを埋みて、今迄灰色なりし横雲の紫に變れば、稍地をはなれて幾條となく蜿蜒せる横雲も、赤濃き紫となりぬ日の出はいよいよ近しと思ぼゆ。金光まづ野末なる雲の切れ目より並射して、武藏野のはてよりはてを傳ひくる樣、凍れる池のものに、小石をまろばしたるやうに振るへて、靜かなるあめつちに何事をか囁くが如く次で、數千の光線觸として御空にのぼり、そのさまいたく鐵柱を燒いて打ち振ふとも見ゆれば、噴水に朱を交じへしにも似たり、あはれ飯炊ぐ火と云ふものは、こゝに摘みて人の世に植ゑし苗かとまで覺ほゑられ、引き放つ金矢にわが眼はまばゆく、光明の鞭にうたれて六合の夢はさめ、野の鳥の急ぎ集りて東に歌ひ行く樣など、冬ながらめづら／＼き爽を呼びぬ。

はや紅は野末の雲と上の雲との間なる空を占めて、次第に上なる雲の紫に及ぼすこと、恰も紙に朱のにじみ行くごとく、益々廣く、愈々濃く、遂に雲の匂は日の光にまして物凄く、いかめしく、そゞろにわが心を奪ひたれども、地の雲はもとのまゝなり。只み空なるのみいよ／＼麗はしく、たとへば羊の腸に血を灑いで引き並べ、眞綿をあけに染めて延べたるが如くなりき。しばし經て地なる横雲の中頃に金火は點ぜられたり。果して天つ日の來なるべきか紫に染めたる紙のはしに線香の火を植え、火口に火の移りしやうに、火光は次第に燃ゑひろがり、雲は金の覆輪とて飾られつ。日の神其の上にいと靜づやかに出御まし、恰も法皇が還幸のみくるまを、牝牛に牽かせて音もとゞろにきしり行くが如く、又春のうしほの沖べより湧き來るが如し。天女は彩雲のもすそを飜がへして、歡樂の舞に踏む足かろく、地の妾は若き思に胸けらぎ、刻一刻に增しくる輝きの裡に、いと深き慈愛とやさしき慰藉とを汲みたりき。仰ぎまつれば、春の香淺き手弱女の、まだうひ／＼しき御姿、何を恐れ耻づら給ひてか、頻りに心騒げる樣に振るへさせ給ふ。げにや此の御姿こそ、夜すがらあだ夢に迷ひ、罪と罰とに悶えし人の子に、清く新なるとこしはの命を與ふるもの。あゝ世に優しきは、靜かに夜のとばりを手繰り出てます、日の女神が、朝雲のきぬ着け給ひし御姿よ。あゝ彼の少女が高き香に醉ふ愛さへも、此の女神の瞳の輝より湧くとかや聞く。げに朝雲は女神の衣か、あるはそが乘ります駒か。其の麗はしき色よ、愛しきづらしき匂よ。さあれ横雲の餘りに猛けく厳かなるを思へば、さては優しき御神の警衛のつはものなりしか。朝な／＼幔幕の如くに延びて出てましを傳へ、騎兵の如くに走りいてゝ御幸を送り奉る。げる輝きのつ

よきは朝雲にこそ。見よ見よ、日の出でましたれば、雲のひとしほ紅み立てるを。上なる紅は更に幾條の金覆輪を添えて、たとへば鮮血淋漓たる數本の長劍を空に横へ、刃の上に金火引きたる樣とや云はまし。いまましや。わがやさ腕ははかにおどり、わが胸の氣はしきりに騒ぎて、妾にもし胡蝶の翅ありなば、彼の刃借りて女ながらも世の眠りを覺まさんに。されどまた神實の進みやう〳〵に迫りて、其の刃の彼方にみ姿のかくれし時、鮮血の匂ひは地の雲に落ちて、そを一としきり鮮かにし、上なるは只金の覆輪のみをのこし置きて、急に以前の紫に歸りぬ。然りそは燃ゆる春情の人さめて、冷えしむくろにたゞ香のなき理知の一片をのみ留めし如くに。

斯くて野面の雲は紅の増すにつれて金の線失せ、千々に移りかはる樣のおもしろさ云はん方なし。漸く日の御神はたなびきわたる幾重の横雲の狭き間に動きて、羞てさしのぞき給ふこと、恰も天女が小牖のかげにためらひて、外面の樣にいてかれつるやうに覺ほえられ、いとも氣高かりき。それも間あらせず、御神は然に明朝を命じ、給ひて、次第にそが光輝を奪ひ、御形は急に小さく、獨りはなれて進み給ふ。はや其の時、前のなよ〳〵しき御風情もなく、全く心のすはりたる正邪の審判官とこそなり給ひけれ。嗚呼鋭きみ光の力もて、石の上の霜を射たりし時、天地は悉くさめたるたりき。今日は復いかなる事の世にかあるべきを待ちわびられぬ

其時はや村里のかまどの烟、いとしづかになびきて、空寒きに鋤荷ひ行く男も見ゆる頃なりき都の朝はいかなりしか。

評　廣々たるむさし野に、さし出づる旭を眺めば、得も言はれぬ趣あるべし、作者は、之れを描かんとしたるは可けれど、文も想も粗雜にして、見るべきの節少なきを憾む(日東)

●春雨の一夜

上[illegible][illegible]香女史

今宵は父君は風引き給ひしとて、宵の程より臥床に入り給ひ、兄君は都に物して歸り給はず、獨り燈火の下に、物思ひに沈めば、板戸洩る梅が香たかく、軒端に雨滴の音淋し、夜もいつしか更けて燈火もほの暗うなりぬ、

傍には幼兒の獨りすや〳〵と夢路を辿れり、折り〳〵笑めるは如何なる事を夢むらむ世にも樂しきは心に思ふ事なき幼時なり、あゝ妾も再び幼時に返りたし、今日此頃のやうなる、思ふこと多き身は、殊更幼時の偲ばるゝ

嫂の君の不途せし風の心地にて打伏し給ひてより、早くもおこたり給へと祈りし甲斐もなく、再び歸らぬ悲しき旅路に出でませしよりは、跡に殘りし幼兒のまだ物心知らぬ身にも、妾を杖とも柱ともたのむなれ、叔母に當れる妾を未だ二つ兒の片言に、姉ちやんと呼ぶも愛らしきに、暫は片時も妾の側を離れず、夜も妾とならではいねず、思へば哀れに愛らしの幼兒なり、されど此の幼兒のあればこそ、時には悲しきこともあるなり、いとうらめしかりしは、さる祭の庭に、幼兒を負ふて物せし折なりき、口さがなきいづれの女にや二人連なりしが、其の年かさなるが妾を指さしておれはおのが子ならぬと云ひし時には、くやし涙の思はず湧きぬ、折りから太鼓の音に驚きし幼兒は、一聲姉ちやんと呼びしは、悲しき中にもうれしかりき、かの二人にも聞こえつらむと、

かゝる悲しきこともあるも、妾を慕ふ幼兒のあればなりいなさにあらず、

嫂の君の此の世を去り給ひしなればなり

されどこは忍べば忍ばるゝ悲しみなれど、忍ぶに堪へぬ悲しみは、學びの業を絶ちしなり、父君は年老ひ給ひ、兄君は家業に忙しき御身なり、

されば家の内のことは、妾の手一つに計らはればならず、爲めに學び舍通ひも成らぬなり、今にして學びの業捨つるは、彼の君に立てし誓ひを破るなり、段々はかくと、互の親々より云ひ交せし、彼の君と妾が中なり、今日しも届きし玉章にも、さぞや學びの道は上達し給ひしならむ、されど其の上ともいそしみ給へと記されき、若し妾のいまだにして、學業捨てぬと聞き給はゞ、いかに怒り給はむ、いかに歎き給はむ、

同じ小學の友にて、年も同じ十六なる彼のお豐さんには、今も書物小脇に抱へて日毎學び舍に通ひ玉ふなり、成績はいつも妾よりは下なりしが、今はさぞや上達し給ひしならむ、嫂の君、悲しき事のなかりしならば、彼の人と共に日々學びの道いそしむべきに、あゝうらめしきは嫂の君、悲しきは今日此頃の妾が境遇よと、そこに泣き伏せば、傍の幼兒は何夢みけむ、一聲高く姉ちやんと呼びぬ、驚きて面をあぐれば、すやすやと夢路を辿れり、妾は暫し幼兒の寢顔を眺めぬあゝ愛らしの幼兒よ、夢路にまでも妾を慕ふや、あゝ憐れの幼兒よ、

妾は今までの思ひはうせぬ、

あゝ嫂の君よ、幼兒のことは心にかけ給ふな、妾のかよわき身ながらもかの續く限り育てむに、たゞ願はくは此の幼兒の、病なくやすく\と生長せんことを、影身に添ふて守らせ給へ、

◉花見に友をさそふ文

長野　小林よしみ子

過ぎにし梅見の日には暮れなばなげのと存じながら門べに倚りて待つらん親の心に惑かされて本意なく立ちかへり候へ共今も魂は消へやらずありつる陰にとまり候とのみおぼえ申候さては打ちつゞく暖かさにちまたの糸柳もいつしか綠をそめなしもろ/\の公園には花の中にも花といふ

櫻もいつしか笑ひ初め早きは今を盛りとみてた競ひ候よし一日ぜひ櫻狩の御供いたしたく侍れど戀の上野名のみすみ田は賑はしきに過ぐべければ近きわたりにては小金井こそと思ひ侍れ西の京に程近きあらし山あるは名にしおふみよしのゝ如くにはありまじけれどちまたの塵をつゆしらぬいときよくしづけき地にしあればまたひとしほの風情ならんと存じ候ふまゝ明後日の日曜を幸ひ姉妹三人していてたち申すべく候お前様にももし御思召御座候はゞ御母上様へ御願ひ遊ばし御同道くださるまじくやもろともならんには道すがらはかなき草の葉をもつみかはしていかばかり興あることならんとそゞろに心浮きたちまゐらせ候御道連多き方ことに宜しく候へば妹子様にも御すゝめ遊ばし其日は飯田町の一番汽車にて御もよをしを如何に候ふや柳の糸のくりかへす御返しのほどひたすら御待申上まゐらせ候。あなかしこ

◉雪中行軍凍死者吉田春松の遺族に與ふる文

青森　ゐの子

餘寒烈敷時節御家内樣如何被遊候哉先日は御懇篤中再三推參仕却て御邪魔に相成謝上候偖先月廿七日安着の御報申上候儀何や角やと新所帶の立て初めに取紛れ打過候段御赦し被下度候當地に着きましは廿五日の暮方にて丁度新の節分の前日に候ひしも寒氣は仲々に嚴敷室内の爐にあたり居候ても背後は寒く炬燵などして貰ひ漸く寢入申候次に春松樣の御身の上に就ては其後暇あれば新聞に眼を曝し噂に耳を傾け候も遂不明とのみにて過來候所昨夕當店に參りし搜索人夫の話によれば五日(新の十二日)は晴天なりし故各隊總出にて搜索の結果鳴澤附近にて多數の屍を發見し内には興津大尉を介抱しつゝ凍死せる吉田とかいへる卒の如何にもいぢらしゝとて隊長が衆を呼び集めて其狀を見せたり云々との事に候ひ

しかば是ぞ宗春松様ならんと思ひ悲しさに突上げ申候其夜は明くるも遅し新聞を見候に乗せる敎春松様率主の難儀を拯ひ今者の今迄介抱し殊勝にも己の膝を枕に逝めたる儘同じく無惨の最後を遂げられ候様子等あり〱と記載有之候間懸御目候尤以前其筋より通報ありしなるべくも是にて先途も相分り御愁想ひ程察せられ何とも御慰めの辭變之候様の色を其位にして心なき樵夫に伐り採られたる若松の鑑に誠に悼歎存上候併又一死報君恩とは宗春松様常々口にせられし所に候へば些の遺憾なかるべく死者に對する聯隊の取扱も頗る鄭重に世の中も深く同情を寄し別けて陛下には痛く叡慮に被爲懸恩賜金もありたる程なれば眞の戰死に異ならず殊に實忠なる赤心の溢れて我隊長と死を共にしたる有様には見る者聞く者をして涙を揮はしめ雖有も其死状を撮影して軍隊に入るゝとの事なれば軍人の最大名譽と可申候遂の御最後に父母を顯はしたる上は御家族様方に於ても御諦めの上御追福奉祈候先は右迄あら〱かしこ。

●いつとせ

麹町　長田しげ子

昨日より小やみなく降りつゝきたる大雪も今宵はやうやうやみて満天を罩めたる密雲も千裂れ千裂れて遂には名殘なう晴れ渡り不動が岳の頂には涼らむばかりの月皓白う浮び出でゝ白皚々たる積雪にてりそひ軒近き櫻の梢も時ならぬ花を咲かせていぶせき妾が庭もいと美しう文窓の障子にうつる樹影明らかにしてかすかに聞こゆる犬の遠吠も物凄し

あゝ此の美しう靜かなる夜を戀ひゝき松子の君は今何處にか見給ふらむあゝ君松子の君よ風につけ雨につけ君が御上をのみ思ひ暮す妾をしらでかつれなさよ契りをきし歳もはや流水とともに過ぎ去りつるをいかにして降り來まさゞる君が行く旅路は山路か海か嶮しかりし姿にさへ御玉章も通はせ給はずさのみか君が御ありかさへ告げ給はざるこそ數ならぬ身にもいと口惜しう思ひ侍れ

* * * * * *

あゝ妾は斯の如き夜に對する毎にあやしき思ひは胸も塞がらむばかりになゝ來いいとしき君が御事のみ思ひ出でられしが今宵も亦此の美しう靜けきさまのいとゞ身にしみて君が御上妾が胸に浮び來り今更そを語り出ださむも涙の種なれど千々に亂るゝ胸の思ひを鎭め兼ねて先はかくなむ

松子の君の家は妾が宿よりさほどに距てざる所にて初めて君を知りしは妾が五歳の夏の頃なりき一日君が家のほとりにて摘み草してありけるが俄かに空曇りて雨降り來り恐ろしき鳴る神さえそへければ妾は逃れむこともかなはずたゞ泣きつゝ君が門の邊を過ぎけるに中よりやさしき君が母上いで來給ひ妾を中に連れ行きて菓子など與へいとねんごろにいたはりて雨やむを待ち妾が家に送り返へし給ひければ妾も母上も其の厚情を喜び翌日母上を君が御許に至りけるに君は其時椽端にて遊び居給ひけるが妾が來るを見て始めは耻じらひて言葉も出だし給はざりしが漸く馴れ睦みあひしが子供の事とて時としては言ひ爭ひすることあれど又其の翌日よりは常に變はりなう遊び戲れ春は花咲く園に籠に滿つるまで落花を拾ひ集め夏は小川に笹舟うけつらぬ螢を追ひめぐり秋は山邊に栗拾ひ家路もくらに遊び暮らし冬は爐火に向ふてあどけなき話のまとひも思へば中々にあだなりけりやうやう君も妾も七歳の春を迎へ共に程近き學の園に通ひそめ交情ますます切にして知らぬ間に幾多の歳月は流水と流れ去つて十四歳となり馴れにし學の園も全く終へぬ

忘れもせじ其の翌年の秋の中旬の頃なりき或夜君のいつににげなう更たけて訪づれ給ひ文讀むこともいと倦みたれば地藏堂のあたりにそゞろあるきせずやとのたまひければ妾も文机のひまもる月の清きにまかせて共にうちつれ靜けき寂の秋の最中にさまよひぬ地藏堂に至れば衣の袖は葉末における露に濡ほひ月ははや中空に昇り深々たる蟲の聲は草根に繁く小川にさゝらぐ水の音も幽かに聞えて女郎花の風になぶらるゝなどそゞろ秋の哀れも忍ばれにけり君と妾は破れたる椽に坐してさまざまの空想に滿ちたる胸の思ひをうちあけて話し暮せしが君が美しうやさしき御心は一しほ妾を動しぬ

それより日かずを經て君は風邪にかゝり給ひ養生をるをさ怠り給はざりしがいかにしけむ日毎に瘠せ細り給ひ遂に肺病と變じとても長からぬ命となり給ひぬ妾も心ならざれどもせんすべもなければ日々に音づれて日頃好み給ひし文など讀み聞け參らせしが君は常に妾は今死すとも亦五年を經たらむには再び此の世に廉れ來て君にまみえなむなどわけもなき事を口ずさみ給へりかくて其の十二月の十一日の朝なりけり昨日まではさほどならざりしが其の夜半より病とみにあらたまり給ひけり、とのことなれば妾は急きに急ぎて君が家に來て見ればあゝ哀れなるかな悲しい哉美しかりしつぼみの花もあたら一夜の嵐のふき散らす所となり君もはや此の世を去り給へるなり聞けば其の御臨終まで妾の名を呼び居給ひきと此處に至りて妾が胸は塞がりあゝ遲かりしと悔ゆれどもせんかたなく妾が訪づる毎に涙に浮べし御目も今はくぼみて固く閉じ給ひ清くやさしかりし御脣も色あせていたく御姿の變はり給へるに思はずわつと泣きふして天に嘆じ地に哭すれども君松子の君は歸り給はずたゞかきくらす妾が袖の露のみいやしげくして時しも颯と下す峰の嵐につれて散り來る枯葉は君がほゝのあたりをかすめて落ちぬそれより家路も夢の中にたどられて其の後は幻の如く日を暮らすのみなりき

あゝありし昔に歸らまほし共にむつびし岡の邊は昔に變られども共に戲れし小川と流れはつきせれどもあゝ睦ましかりし君は世にあらず山おろしはげしき不動が峰の叢路にいとも淋しくとこしへに眠りませる君よ流るゝ溪の水音は叫べども峰の松風は呼べども君が永劫の夢は覺めず

* * *

月はいつしか天に中ばし犬の聲も全くと絶えてたが里にうつらむ砧のひゞき聞え御空に鳴き行くかりがれは君が行衛を語るが如く不覺涙の一雫が妾が袖に散りかゝりてたゞ破窓のもとに五年の昔を追想すればあゝ夢にはあらざるか噫

女學世界定期增刊春の卷
第貳卷第四號
わか艸

（三月十五日發行）

●●若艸は女學世界第二卷才媛詞藻に春の卷として三月十五日の發行なり、時方に春季、窓外の梅花蕾を破ッて馨香一室に滿つるの好季節に會す、本誌の增刊は體裁高尚にして趣味の多饒を以て知らる、其の內容は例に依つて紙數二百八頁、中才媛の競爭になりたる△小說十五種▲國文二十五種▲和歌百五十首▲新體詩十五種▲消息文二十種▲普通文三十種、眞に是れ奇葩瑣章の博覽會たり、猶附錄として左記七編を收め、口繪として內外の人物風景の新鮮奇拔なるもの十二面を添ふ。

附錄

▲本朝生活の變遷　考古博士談　記者筆記
本朝古代より近世に至るまで民間生活の模樣を時代に區別して、陳述しなるもの一Ꮚ恰も無數の畫卷物を見るがことし。

▲軍艦初瀨拜觀の記　野中千代子
巾幗者流の丈夫を以て知られたる野中女史が、橫須賀軍港に帝國軍艦初瀨を訪ひ、親しく內部の構造を實見して詳密に記載したるもの、還般海城の面目描き得て餘蘊なし。

▲米國女學生の狀態　飯島立峰
北米スタンホード大學に在留する數年、親しく新世界の學校生活を經來りたる飯島學士の觀察談、還般の風俗の巨細を盡す。

▲泰西女文豪の面影　湘竹女史
佛國近世の女文豪マダムドスタエルが一生の經歷を叙したるもの、文章優美史傳の上乘也。

▲英國御伽話　長田蕙香
閨秀作家長田蕙香女史の小人國と題する御伽話、淡々たる趣味、兒童敎訓の好話料たり。

▲家庭と小禽　武田鶯塘
婦人に飼はるべき禽鳥中、優美にして愛すべき小禽十種を撰み、仔細に其の飼方を說きたるもの、家庭娛樂の案たるべし。

▲人情の解剖　鈴木まさ子
婦人に關する西洋賢哲の格言を土基として、世態人情の委曲を評隲したるもの、眞に是才媛殺人の好文字。

●懸賞和歌兼題

春雨、野遊　(四月分)〆切三月十五日

(天、地、人、の外秀逸十種を選び金壹圓以下の圖書切符を呈す)投稿は端書に限る

●懸賞文

學びの窓　四月分(〆切三月十五日)

日本婦人　五月分(〆切四月十五日)

(甲賞金參圓、乙賞貳圓丙賞壹圓圖書切符を呈す。二十四字詰三十行限)

題して日本婦人といふ、日本婦人の長所、日本婦人の短所、日本婦人の特色、日本婦人の理想、日本婦人の信仰、日本婦人の忍耐、日本婦人の家居、更に日本婦人の現在、日本婦人の過去、日本婦人の將來に就て各自の所感を記るされたし、文躰随意なるもなるべく冗語を避け簡單にして明亮なるを望む、

●才媛詞藻募集

◎國文◎普通文◎消息文◎新躰詩

(二十四字詰二十行限り)

秀逸十種を選び金壹圓以下の圖書切符を呈す、

●家庭小説懸賞募集

新しき家庭の讀物に適する純潔清健なる小説を募集す

▲家庭小説の投稿者は男女を論せず普く募集に應する事を得。

▲原稿は二十四字詰二百行限(投稿〆切四月三十日迄)投書の封筒に『家庭小説』と朱書すべし

▲家庭小説は甲乙の二種を選び當選の作は女學世界小説欄へ掲載す賞金左の如し但し原稿は凡て返戻せず

甲賞　金拾圓

乙賞　金五圓

投稿規程投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折(和歌は端書に限る)の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙捻にて綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界宛とせらるべし▲投書原稿は一切返却せず

雜報

◉日英同盟條約成る

今般日英二國の同盟條約が成立したのは、國家の爲め喜ぶべきものであると云ふ事は、何人も言ふ所であるが、既に其協約の成立は、英國にては一月三十日を以つて、我が日本にては二月十三日を以つて、各々政府より議會に發表せられ、新聞紙は之れを傳へて普く國民間に知れ渡つた今日なれば、今之れを詳しく述ぶる必要もあるまいが、一体此の協約は、日英二國に於ける好誼と、國民多年の輿望とに由つて、今時漸く成立するに至つたのである、此協約の主旨は、要するに東洋の平和を維持するを目的として、之れが爲めに、淸韓兩國の獨立を保障し、其領土を保全し、並に列國をして右二國における商工業等の利益の均等を得せしむるを計り、若し此の目的を達するを妨害せられ、戰爭の必要起りたる場合には、或は嚴正中立を守り、或は協同戰鬪をなすべしと云ふが如きものである、されば、此の協約たるや、平和同盟にして戰爭同盟にはあらねど、已むなき場合に限り、戰鬪同盟となりても、此協約の實効あらしむことを期する精神のものである、だから締約二國の利益は勿論、東洋平和のために結構なものである、たゞ此の結構なる協約をして、將來に實効あらしめむことを期するは、我が四千萬同胞が今より覺悟せねばならぬ事であらう、敢て政治的報道を爲すではないが、文明國の婦人たるものは、其いかなるものなるや位は、話しの種に知り置くの必要がないでもあるまい、

◉軍隊遭難彙事

靑森縣下に於ける軍隊遭難事件は未曾有の大慘事にして幾多の貔貅の生ながら雪中に埋りたる悲絶慘絶の實況は尋常筆紙に盡し難き次第なるが今和田聯隊副官の遭難實話並に三十聯隊の報告によれば人事天運の遭際豫想外の大難境にして天命免かれ難かりし所以の一班を知るに足るべし

▲行軍の目的　今回行軍の目的は靑森筒井村、聯隊所在地)を去る約七里田代に至るにありて其地勢は幸畑迄(靑森より一里)は平坦なれども幸畑より田茂木野は勾配百分の一の山路となり田茂木野村より田代迄は上り道となり雪中を冒して田茂木野より八甲田山の麓田代を越へて三本木の平野に出づるは作戰計畫上頗る有益の事に屬す蓋し一朝敵の聯隊〇〇を封鎖する時は〇〇聯隊は本街道より南部地方と連絡を通ずる能はざるを以て靑森より間道を經三本木の平野に出づるは最も必

要なるものなり而して山口大隊長は戰時編制の歩兵大隊を以て雪中を冒し如何にして三本木に出づるや又た雪中に於ける大小行李編制の事等を研究するの目的を以て雪中の行軍を企圖せられたり茲に於て豫備行軍として先づ積雪の模樣行路の難易を實驗せんため十八日神成大尉一中隊を編成し其の前頭には二十名のカンジキ隊（カンジキとは積雪を渉るため作りたる靴具の一種なり）を附して田茂木野附近まで進行せしに雪の深さ三尺乃至四尺位にして其日田代を越へ無事に田茂木野に出てたる旅客もあれば青森より田代に一泊して翌日引返すには非常の困難もなからんと判定して其旨大隊長に報告せしかば大隊長大に喜び愈々二十三日を以て進發することに決して行軍隊の編制をなしぬ

▲行軍隊の編制　行軍隊は第二大隊の古兵（二三年兵）を以て一個中隊を編成し中隊長には神成大尉、小隊長には井上、大橋、水野の各中尉鈴木少尉等隨行、特別隊として長期下士（伍長）三十餘名之れに加はり興津倉石の兩大尉、中野中尉、永井三等軍醫等研究のため特に行軍隊に隨屬せり而して行軍隊は糯米一人六合携帶行糧一日分罐詰肉等を用意し間食としては一人に就き餅六個づゝを携帶せしめ其他炊具及び雪を掃ふべき工具等を整へ燃料として炭四十五六貫、薪六十七八貫を用意し運搬卒をして橇にて曳かしめ尚ほ雪を踏固むるためカンジキ四十人分を用意せり

▲行軍隊の進發　一月二十三日午前六時行軍隊一行二百餘名營庭に集合の上演習地に向つて進發せり二十三日の天候は青森として比較的よき天候なりしかど雪は霏々として降りつゝありき、屯營より幸畑迄は人民常に往來して一筋道が通じ居り其處までは難なく進行せしかど幸畑より田茂木野迄はカンジキ隊を編成して三列にならひて進む其日の雪の深さは五六尺位にして行軍に困難なく一時間に一度休憩して田茂木野にて憩ひ夫れより一時間を經て火打山に掛りしに俄に峻坂となり輸送隊（六十人）は大に困難をなし全隊擧つて力を合せ山上（火打山）に橇を引上げぬ斯くて中食の命令下り糧食を喫す夫れより前進を續行せしに天候變じて雪は頻りに降りつのり風は烈しく吹きて輸送隊は困難をなし已を得ず橇を捨て各自に薪炭炊具等を背負ひて行軍を續行せり左れども風雪いよ〳〵激迅なるを以て大隊長は此地にて露營するの決心を爲し先づ設營隊を出して露營地を選擇せしめしが其内日沒となりたれども設營隊は歸り來らず呼べど叫べど應へばこそ全隊已を得ず其地に露營せり

▲露營の狀況　此夜の露營地は森林の間に位し雪の中には暖かき所にして露營地としては最適の地なりき元來田茂木野より田代に至るには森林と云ふものもなく其夜の露營地は道を誤て八甲田山の麓の方へ進みたることを後に至りて發見したりぬ其夜は火を焚かんにも風激しくして火がつかず炊事も出來ず幸ひに森林の事なれば其木を伐りて燃料に充てんとし兵士等は手袋を脱して伐りかゝりしに手痛みて背くなり忽ち凍傷を受け其の目的を達する能はずして已みぬ午前二時に至り炊事漸く成りて一行食事を取り其夜を徹しぬ

▲二十四日の情況　二十四日の午前四時一行は露營地を出發せり蓋し青森に向つて背進の目的なりき夜來の風雪は此時一層激烈となりて非常の大嵐となり面を向ふべくもあらず（二十四日の寒氣は未曾有にして青森測候所の報告に依れば北西の強風、天氣は雪、最高氣溫氷點下八度、最低氣溫氷點以下十二度なりき）一行は吹雪を冒して行軍を繼續し露營地より約二里半行進せしに前頭の兵士路を失して澤に下りたれば之れではならぬと再び上り來りしが足も凍へ手も凍へて非常の慘狀を極む日沒後尚ほ行進を續行せしに嵐は烈しく寒さは強く一歩も

進む能はず其處に露營をなしぬ此時大隊長は寒氣に凍へたる身の儘に火に當りては凍傷を起すの虞ひあれば火は一切焚くことを許さず足踏みをなして暖を取り終夜を此に徹せよとの嚴命に一同足踏をなして眠らず其夜を明せし此夜兵士の凍死するものありたりき

▲二十五日の情況　二十五日午前二時に露營地を出發したるに將校三名不足せるを發見したるが二十三日の露宿には一食丈を使用して殘餘あれども炊事の出來ざれば如何とも詮方なく二十四日の夜には携帶行糧（道明寺糒）を喰ふ午前二時に出發せし時には吹雪激烈にして積雪の量は加はり疲勞せしため行軍は思ふ樣に行かず吹雪のため道を失ひ背進して二十五日午前十時頃元の露營地に歸りぬ兵士は寒氣に襲はれしため遂に背囊を集めて暖を取りしが兵士等は此烟が上れば救援隊が見えて救るゝならんとの望を抱きしかど夫れも遂には空想となり了りぬ正午十二時其處を出發して青森に向けて行進せしに幸ひに前日打捨てたる橇を發見して前日の路なるを知り兵士等は疲勞を忘て進しに日沒となり尙後進を續る內又もや路を失ひて東南の方に折れ此處にて一夜を明かさんと露營の決心を爲し此處に一組彼處に一組を作りて露宿したりしこれぞ最後の露營にして最期の消息なりき

▲二十六日の情況　此時後藤伍長は殆んど昏睡に陷り翌朝夜の明けて夢醒め見れば已と共に眠りたるものは一人も見當らざりき此朝は幸ひ天氣も晴れたれば立つて見るに此所に一人彼處に二人或は十人一組となり或は五人一團となり四方を觀望して方向を極めんとするものゝ如くなりき斯くて青森に向け背進の途次神成大尉、鈴木少尉、及川伍長の同じく青森に向けて後進するに會したるが此時日も照り雪も小休みとなりしかど何樣飢と寒氣のため疲勞せしものから進退自由ならず丈餘の雪を掻き分け行くに雪中を泳ぐに異ならず其內夜となりたればイキナリ其處に露營したるが翌朝鈴木少尉は高い所に上つて地形を見て來るとて別れし儘歸り來らず間もなく及川伍長も仆れ介抱せしかど其甲斐なく殘念ながら戰友を捨て後進を續けぬ其前夜より神成大尉は後藤伍長に向ひ我等は身を犧して此方面に出てたれども最早一步も進み難し汝は身體丈夫なれば田茂木野に下りて村民を賴みて速に此事を報告せよと勵ます言葉は伍長の身にしみ〳〵と應へたれば今はとて大尉を捨て一足先へ雪中を泳いで進む內搜索隊のために救ひ出されぬ

以上は行軍隊が經過の一班にして困難の情況あり〳〵眼前に散らつくを覺ゆ

◉三十聯隊の報告

▲廿六日　此日午前八時三本木の宿舍地を發す宿舍は村長の厚意によりて安田たか、金崎勤五郎の二家にして清酒及菓子一折を贈くらる此朝寒暖計攝氏零下二度に降れり此日は增澤村に進むの目的なりき三本木に於ては軍馬補充部に至りて暫時の休憩を試みそれより進んで岩手山に上る積雪堆をなし斷崖堅氷を以て蔽はれ其狀恰かも大瀧を見るが如し一行此時紀念の撮影を試む福島大尉は氷柱の直のものを選んで杖に擬し一行と共にこれに加はる法奧澤の役場員小笠原耕一氏一行を迎へ共に山を下て國道に出て同村に出づ此處には同村小學校長鈴木敏吉氏他の職員と共に生徒を引率し一行を村端に出迎へつゝあり一行の至るを見るや「三十一聯隊萬歲」「探見隊萬歲」を三唱し尙大深內村と共同にて天狗烟草一箇所を贈り尙ほ午餐を喫せるの時清酒と吸物とを饗せらる暫らくにして又た行くこと半里深內小學校生徒は職員に引率せられて村端まで出迎へ「雪中行軍隊萬歲」を唱ふ尙ほ休憩所は同村の豪富なる小原金次郎方に休憩所を設けられ茶菓を饗せらる再び出發進んで增澤村に達したるに恰かも午後三時半此間は山脈に沿ひつゝあり

如來山の麓には炭燒場あり就て問へば一日七俵を燒くといふ此夜茲に舍營して俟待を受く此日晝は零下五度、夜は更らに七度に降る

▲廿七日　午後六時出發熊澤川に沿ふて進む積雪岸を壓して深さ殺尺一步を誤れば斷崖絕壁の間に隕落せんとす危險實に云ふべからずオナカダイ山に上る山の高さ千八百メートル上りて中腹に至るや大なる熊の足跡あり此日大吹雪一步を進めば跡忽ち雪の爲めに蔽はれて痕を留めず以て如何に此日の風雪甚だしきかを推すべし茲處を越て更らに小山澤山に出て田代に至つて宿舍すべき目的にて進行し一里前に至るの時日漸く沒して風雪又た加はる茲に於ても一同軍歌を合唱して勇を皷し更らに進み午後九時半に至るや殆んど咫尺を辨ぜず即ち止むなく二丈餘の雪穴を穿ち拾ひ集めたる松樹枝根を焚て露營す晚餐は携へある餅を以て空腹を充たし一夜を此穴に明かしぬ此の日の寒威朝は零下九度、晝は十二度、夜は十三度まで降下せり

▲廿八日　曉に至て四方を眺望すれば南方に小屋あるを發見したるを以て一同雀躍進んで此小屋に至り漸く暖を取り又も携ふる所の餅を取て朝餐に代へ尙も進んで八甲田山に登る上るに從ふて雪漸く薄く頂上に至れば雪殆どなし而かも一面凍りて滑べること甚しく步を運ぶに苦しむ溪谷に至ては三尺餘の積雪あるを見る然れとも風力猛烈殆んど人を飛ばす午餐は又た餅を以て之れに充つ山上を徘徊するや兵士の死屍二箇を發見せり嗚呼是れ何者ぞ或は云ふ自殺者ならんと誰か図らん是れ予等と同じく雪中行軍の途に上れる五聯隊の慘死者ならんとは然れども死屍は如何ともすべからず一行は幸畑に出つべき目的を以て進行したるも道を失して四方を徘徊し田代附近の樹木のある所に休憩し餅を以て晚餐に代ゆ此日三食餅のみを以てす夫れより進んで午前二時頃田茂木野に達し更に進んで二十九日午前七時一同無事青森に入る

●女子大學の昨今

昨年四月開校式を擧げたる日本女子大學は其後着々豫定の方針に向つて校務を擴張しつゝあるが今該校敎授の模樣に就て其の大要を記せば

●現在敎授中の學科

元來同校に於て敎授せる學科は家政學、國文學、英文學の三科に過ぎざれども設備は本科と研究科の二つに分ち本科には家政、文學、敎育、體育、美術、音樂、理化等の各部門を設けあり、目下敎授しつゝある家政部にては必修科目として倫理及社會學、心理及敎育、生理及衛生、經濟及法制、應用理化、家政及藝術、體操を修めしめ、又文學部にては國文學部、英文學部の二種に分ち必修科目として倫理及社會學、心理及敎育、美術史及哲學、歷史、體操を修めしむることゝなり、唯國文科に在ては此外に國文漢文を必修せしめ、英文科に在ては此外に英語國文を必修せしむるの異あるのみ、

●生徒の階級種類

生徒はいづれの部門もまだ初學年の者のみなれども今日の處總數二百七十人に達し家政科國文科ともに早くも開校前より滿員を告げ孰れも各八十五人を收容しつ

つあり現時授業中なる生徒の年齢はもとより同一ならざれど學科の程度が高きだけに十六七歲以下の者は一人もなく先づ十八九乃至二十歲位を中心として年長者に至ては三十五六に達する者もあり中には既に嫁して現に人の妻となり三人の小供を抱へながら身は本校の生徒として妙齡の處女と机を並べて日々修學に餘念なき者もあり扨此等の生徒は元と社會の如何なる階級種類に屬する者なるかといふにまづ今日概畧取調べたる所によれば現在生徒中十中の七人は地方豪家の子女にして概して中產以上の者多きがごとし而して其原籍は廣く全國に涉りて各地方より來學せるは本校の成功として最も喜ぶ所

◉給費生

學資は寄宿生に在て每月平均十圓より十四五圓位を要するは物價騰貴の今日に於て已むを得ざる所なるべし●今之を細別すれば授業料二圓五十錢敎場費五十錢寄宿費六圓五十錢都合九圓なるも國文學科に在りては書籍代として概算三圓乃至五圓を要し此外尙各自銘々必要に應じて多少の小使錢をも要するは無論のとなるが世には相當の素養もあり且つ修學に熱心なるも無資力なるが爲遺憾にも素志を貫くこと能はざるものなきにあらず本校にては此等の特志者に對し學力と人物を試驗したる上修學の便宜を得せしむる方法を立て是れ等は寄宿舍に入舍せしめて修學の餘暇に炊事其の他の雜事を手傳はしめ食費を免じて他の生徒同樣に實業せしむることゝなり居れり、固より一定の制限はあるべけれど本校は事情が許す限り給費生に對して便益なる方針を取り居れり、

◉家政科と國文科

家政學科中生徒の最も受業を喜ぶものは衞生學と、應用理化學及び生理學なりとか前者は日常の生活上最も卑近にして且つ實際に適切なる講話を敎授するものなれば生徒は覺えず釣込まれて却て時間の短きを怨める程なりといふ、生理學も亦極めて實際に就て敎授するの方針を執り其他應用理化學は專ら一家の主婦として必要なる家庭科學を實驗的に講話するものなれば理化學の思想に缺乏せる我日本の女生徒に取りては是亦頗る面白く受業せらるゝ由從來家庭の主婦として日本婦人の最も缺點とせる所は、一方に於て衞生、生理の觀念に乏しく他方に於ては簡易理化學の素養なきとにあるが、今本校に於て此傾向を見るは兎も角喜ぶべきことなり又國文科の生徒は科程が少々ひねくりたるだけ

ありて學科の趣味も自から家政科と同じからず國文學日本歴史、西洋歴史、哲學等さまざまなるが中にも哲學と歴史とは最も嗜好せらるゝの傾向あり

◉學事の成績

成瀬校長に代りて麻生學監が本校の教育方針並びに目下の成績に就て語る處あり曰く他の學校では教師の講話を生徒に筆記させて暗記させて居る所が多いようですが私共の考では生徒自身に研究させて、自習力を養ふ方に重きを置きたいのです就ては只だ書籍で教授するのみでなく總べて實際的、觀察的、自動的に生徒の腦髓を發達せしむる方針を取つて居りますそれには方法も種々あるのでしようが第一學科に趣味を感ぜしめると云ふことが必要である殊に本邦の婦女子は一般に科學を實際に應用の能力に乏しいからなるべく其力を養はせ總て生徒自身の腦髓から湧き出させて萬事を行ることゝなると生徒の方でも自働的になり自然に責任を重んずるといふ風になつて來て事を愼重にする樣になる又試驗の方法も之と關聯して居るは無論の事ですから成るべく此方法を完全ならしめる考へで目下研究中ですが至極結果はよろしいやうです云々夫て記者は

卒業生の方向に就て聞くに是れ元より將來に屬する事なれば今日より斷言する事能はざるも生徒の大部分はまづ善良なる家庭を組織するの目的たるべく又獨立して敎育に從事するものもあるべし但し家庭を組織して一家の主婦となりても社會の改良又は慈善事業等一般公共事業に盡力すべき決心なるは勿論なり

◉園藝、料理、體操、音樂

園藝は家庭の趣味婦人の事業として歐米諸國に於ては盛に奬勵せらるゝとなるが本校に於ても諸科の外別に園藝科を置き校内の庭園に於て花卉野菜の類を培養せしむ而して此の園藝の修學に就ては本校の創立委員たる大隈伯尤も盡力せられ數多の珍らしき花卉を寄贈して生徒が修學の栞に供されしと次に隨意科としての體操は本校の尤も意を用ゆる所なるが操法は種々ある由なるも重に佛式デルサートを採用し倘別に生徒の嗜好に隨つて弓、テニス等の設備もある由就中容儀體操の如きは本校の特殊の體操として知られぬ。又音樂にてはピヤノ、琴を用ゐ室内裝飾として生花の稽古もあり料理は寄宿舍に附屬して炊事場割烹場の設あり西洋料理、日本料理、折衷料理を敎授せり

●成女學校新築の趣旨

吉村寅太郎氏の主幹たる成女學校に於ては今回校舍新築の計畫を爲し普く江湖の有志者に向つて基本金の募集に着手し伊藤つね子以下四十五人の賛助員を以て左の如き趣旨書を配布せり

此のたび別紙趣旨書にあります通り成女學校の新築をなさりたいといふ御計畫がありますがもと此の學校の御趣旨は日に月に進んで行く時勢に適應してしかも日本婦人固有の精神を失はない立派な婦人をお出しになりたいと云ふ御考だそうですから私共も我國婦人界のために竊に喜んで居つた次第でありますそうして又校長吉村寅太郎氏をはじめ其の他是に御關係の方々も此の趣旨を貫かんとして熱心に薫陶に從事せらるゝ故生徒も日に増加しまして今では折角遠國から來られた篤學の人をも斷らなければならない樣な始末になつて居るさうであります其故是非新に校舍を建築して其等の學生を收容したいとの御考は至極結構な事と存じますから私共も及ばずながら皆さん方と御一緒に當つて此の擧を御助け申したいと考へます就きましては其方法も色々ありませうが私共は一口を金二十錢と定めて夫以上は皆さん方の御都合にまかせ一時にてもまたは月賦にても致して基金の幾分を補助したいと存じますどうか學校のためなり又我國婦人界のためなりに私共の微意をお酌み下さつて多少を問はず御賛助を願いたう存じます

又同校に於ては例により本月三日より料理法の春期講習會を開始せり略則左の如し

一本校は來三月五日より和洋料理法春期講習會を開く
一授業は毎週水曜土曜日曜(日本料理約二十回西洋料理約十回)とす
一講習料は日本料理二圓五十錢、西洋料理一圓五十錢、和洋兼習三圓五十錢とし別に料理費として授業の都度二十五錢内外の實費を納むべし
一講習志願者は來二月二十八日迄に族籍住所職業氏名年齡を記したる書面を持參すへし
一講習者の志望によりては禮法及會席をも授くることあるべし
一講習中時々適宜の時に於て食物攻瓦及家事經理に關する講話をなすへし
一講習終了後講習證書を授與す

●小鳥飼の娯樂

追々小鳥を樂しむ期節となりたれば本郷天神中坂下なる今村方にて啼物巢引物の内先年來盛んに流行し居るものゝ相場を聞くに啼物にては相變らず鶯が第一の流行次では駒鳥赤髯鳥等なり、相場は

△鶯　上等一羽百圓以上、中等三十圓より五十圓迄、通常三音揃ひ五圓より十圓までにて極安のものも一圓以上なり△駒鳥　は一圓五十錢以上△赤髯鳥　は二圓以上△野じな鳥　三十錢より六十錢まで△同鈴啼　上等三圓以上△頰白鳥　二十錢以上一圓まで

右は啼鳥中にて目下盛んに啼き居るものなり又巢引鳥にては金糸雀最も流行し相場は

△英國極徑毛一番ひ　十五圓以上三十五圓まで△米國種大物　三圓以上二十圓まで△和蘭種類　三圓以上五圓まで△普通物（舊來より日本

に在るもの）一圓以上
尙其他の巣引鳥にては
△文鳥雪白一番ひ　一圓五十錢以上△同通常物　八十錢より△十四松は一番ひ五六十錢△錦花鳥　八十錢△紅雀　八十錢△胡錦鳥　六圓以二十圓まで△大錦花鳥　七圓より△文錦鳥　二圓位
こはいづれも巣引物にて寒明けに巣箱へ放し子を取るものなるが金糸雀通常種、文鳥、十四松、錦花鳥の四種は我國より巣引の上盛んに外國へ輸出するもの、また美しき小鳥にて最近輸入に係る音呼種を記さば、五色セイガイ音呼、通常五色音呼、赤草音呼、黄草音呼、セキセイ音呼、本セイ音呼、小セイ音呼、黄帽子音呼等なりといふ

●私立銀行事務員養成所

神田裏猿樂町なる同所は實地應用の簿記計算事務を教授し追ては貯蓄銀行、保險會社、郵便爲換、貯金事務、等に從事せしむるを目的として設立せし同所は今回更に女子部を設け入學生三十名を募り來る四月一日より授業を開始する由。計算簿記の如きは女子の職業として將來有望のものなるべし。

●脊高男女の結婚

これは躰育萬能を夢みる人でもあらうか、チツと滑稽じみた話ではあるが、此程佛國のロウエンといふ所で、所謂適種生存の理法によつて人類をもつと脊の高いものとするといふ大層な計畫をする者があつて、世界中で脊の高い男女を募集した、所が其募りに應じて佛國の南方からノソ〳〵やつて來た男は、年齢が二十二で未だズン〳〵生長して居るといふ所だが、今でも身の丈九呎二吋あつて躰量が四百四十八斤、胸の圍りも九十八吋といふ大男であつた、ソレで此大男と連添はすことに極つた花嫁さんは、英國の生れで身の丈が八呎三吋といふ一對の大女であるとす。

●口繪解

▲潮田千勢子女史

熱心なる基督教信者にして夙に我が國社會風俗の紊亂せるを慨し、矢島楫子刀自と提携して婦人矯風會を興し、社會風俗の改善家庭の改良を圖らんと熱心奔走すること多年、近頃鑛毒問題の聲江湖を喧傳するや女史身を挺して被害民救卹に努め、被害民救濟婦人會なるものを組織し、普ねく全國各地へ向けて遊説し、寄附金を集めて被害民を救卹し窮民の幼兒を集めて養育保護す

る等社會的慈善事業に獻身せり、曩きには徳教信者より奥村女史を出し今又基督教より潮田女史を出す蓋し教界慈善家の二名物なり。

▲矢島楫子刀自

女史は熊本の人明治の初年東京に出て女子教育に從事し佐々木豊壽潮田千勢子諸子と圖つて婦人矯風會を組織し、專ら社會の改良に努め明治二十三年櫻井新榮の兩女學校合併して新たに明治學院の成るや女史は其の校長となり、爾來專ら女子教育家として一方に雄視せり。

▲北海道土人の生活

石狩アイノ土人の邑長家居の光景なり。圍爐裏の薪材は有名なる樺の木にしてアヤキナの稱する蓆様の敷物もて室内を修飾し、壁上の串に魚を蓄へて日常の食とす、鄙野の裡に質朴なる風俗愛すべき所あり。

▲備後國尾道港

山陽道の著名の市邑にして人口二萬二千餘、山を負ひ海に面し風景佳絶山陽鐵道沿道中屈指の佳所なり。

●私立修齊女學校の設立

本校は、小學校卒業程度の女子に適應せる技藝職業を教ゆるを目的とするものにして、其學科目は裁縫、刺繍、編物を主とし、外に修身、國語、作文、習字、算術、家政等なり、目下校舎は、日本橋蠣殻町三丁目十一番地(元商品取引所跡)に在り、現在生徒數は八十餘名にして、校模大ならずと雖も、頗る熱心を以て教育に從事するといふ、又た目今生徒缺くるありて、新たに入學生を募集する由、

●三輪田女學校の設立

這回創設せらるべき本校は、他の女學校の如く、女子に須要なる高等及び普通の學問技藝を授くるに在れど其設立者は、夙に女子教育家として有名なる、三輪田眞佐子女史にして、女史は多年數多の女生を膝下に集め、實地に教育したる經驗に基きて、特色ある校風を有せる女學校の必要を感じたれば、今回從來の家塾を擴張して、本校設立を企畫するに至れる由、設立豫算總額は金五萬圓の見込みにして、設立地、麴町區四番町四番地に定め、校舎の全部完成は來年四月なれども本年四月より假校舎に於て開校する由(本校規則は次號に紹介すべし)

女學世界第貳卷第四號記事要目

（四月五日發行）

每月一回五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢
內（定刊數……十二冊 / 增刊四回・三、六、九、十一月價格同一）	

郵稅	
一冊	二錢

廣告料

二十四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	四十三錢	三十五錢	三十錢
半頁卅二行	……	十三圓七十六錢	十一圓二十錢	九圓六十錢
一頁六十四行	割引三十三圓	割引二十七圓	割引二十二圓	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は總て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵劵代用は一割增にて五圓一錢の分に限る。
●總目錄御入用の方は二錢劵相添へ申込あれ。

明治三十五年三月五日發行（第貳卷第參號）

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍（東京市京橋區西紺屋町二十六七番地）

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

古來稀有茶道全書豫告

心月庵松浦伯爵題辭
半月庵石黑男爵序文
遮莫庵伊藤男爵序文
谷神庵岡崎淵沖翁著

各傳比較 點茶活法

新年一月出版

全四冊十三卷和裝上製 正價二圓五十錢 小包料八百匁

此書は篇を客法主法手前置合器物床飾露地茶室等に分ち附するに各傳々統の系統を掲ぐ首に斯道の總論を掲げ各編皆諸流の傳を列記し其異同と理義の所在を知らしむ初學の人は此書に依りて主客の作法を始め手前百變の基棚莊千化の起露他の繩張茶室の構造まで容易に獨習自得せらる故に師範の人の好參考書たるは素より何流何派に論なく必ず一本を座右に備置かざるべからざる古來稀有の全書なり

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

圍碁全書

全部十二冊

七段 小林鐵次郎先生遺稿
初段 小林健太郎先生編述

第七編 新刊

互先定石集 上

全一冊和裝正價拾五錢 郵稅四錢

既刊

第一編 圍碁初歩
第二編 圍碁入門
第三編 圍碁定石
第四編 圍碁詰方
第五編 圍碁布石法
第六編 古今名家打碁集

續刊

第八編 互先定石集(下)
第九編 互先定石集(中)
第十編 近古名人打碁集
第十一編 近世名人打碁集
第十二編 今代名人打碁集

各編一冊 正價金拾五錢 郵稅四錢宛

發兌元 博文館

(發付ゞ一)

少年讀本第四十七編 長谷川天溪君著 年方君書

塙檢校

全壹冊洋裝

正價金拾三錢　郵稅金四錢

貧里に生れて萬難に勝ち絶大の記憶力を以て古今の書册を胸底に納め『さて目ある人は不自由なものかな』と嘆ひし碩學者塙檢校か一生は正確なる批評法によりて畫き出されたり檢校の眞價未だ明かならず而して本書即ち其位地を定めて正鵠を失せざるなり

發兌元　東京本町　博文館

世界歷史譚第三十四編 法學士中大路正雄君著

査列斯大王

全壹冊洋裝

正價金拾三錢　郵稅金四錢

北歐の僻陬に起り而も十五歲の少年を以て瑞西の王冠を戴き露西亞丁抹波蘭土の三國同盟に對抗して能く之に克ち終に一時瑞典をして歐洲北方の强國たらしめたる不世出の英主チヤーレス大王の事蹟能く平易に叙し去て一讀靑年の英氣を勃發せしむ

發兌元　東京本町　博文館

（後付の二）

再版出

五版 平田勝馬君編 **黄海大海戰** 全壹册洋裝 正價金九拾錢 郵稅金貳拾錢

再版 工學士松尾鐵太郎君著 **機器設計 製圖學初步** 全壹册洋裝 正價金六拾錢 郵稅金四錢

再版 法學士添田敬一郎君著 **商法汎論** 全壹册洋裝 上製五十錢 郵稅十錢 並製卅五錢 郵稅八錢

三版 文學博士萩野由之君著 **日本歴史評林** 上卷洋裝 正價金七拾五錢 郵稅金貳拾錢

四版 文學士大町桂月君著 **學生訓** 全壹册洋裝 正價金二拾錢 郵稅金四錢

七版 博文館編輯局編 **住居と園藝** 全壹册洋裝 正價金二拾五錢 郵稅金六錢

九版 岸上操君編 **作文自在** 全壹册洋裝 正價金二十五錢 郵稅金六錢

八版 平田純一郎君編 **圍碁と將棋** 全壹册洋裝 正價金二十五錢 郵稅金六錢

九版 博文館編輯局編 **秘術傳法** 全壹册洋裝 正價金二十五錢 郵稅金六錢

七版 野口勝一君編 **畫法自在** 全壹册洋裝 正價金二拾五錢 郵稅金六錢

(後付の四)

發兌元 東京日本橋

求廣告

六版　博文館編輯局編　**易占及骨相法**　全壹册洋裝　正價金二十五錢　郵稅金六錢

四版　下田歌子女史著　**料理手引草**　全壹册洋裝　正價金三十錢　郵稅金八錢

再版　法學士永井惟直君著　**商工地理學**　全壹册洋裝　上製五十錢郵稅十錢　並製卅五錢郵稅八錢

六版　文學士螢江義丸君著　**倫理學**　全壹册洋裝　上製五十錢郵稅十錢　並製卅五錢郵稅八錢

再版　工學士蜂屋貞與君著　**應用化學**　全壹册洋裝　上製五十錢郵稅十錢　並製卅五錢郵稅八錢

四版　坪谷善四郎著　**通俗明治歷史**　全壹册洋裝　正價金二十五錢　郵稅金八錢

六版　高橋邦次郎君著　**通俗商業簿記**　全壹册洋裝　正價金二十五錢　郵稅金八錢

五版　石川辰之助君著　**通俗英語案内**　全壹册洋裝　正價金二十五錢　郵稅金八錢

落合直文小中村義象萩野由之三先生著　**日本文學全書**　一、二、三、九、二三、二四出來　正價一册金廿五錢　郵稅一册金三錢

十二版　落合直文小中村義象兩先生著　**花の白雲**　全壹册洋裝　正價金拾八錢　郵稅金四錢

十二版　落合直文小中村群象兩先生著　**卯花月夜**　全壹册洋裝　正價金十八錢　郵稅金四錢

區本町三丁目　博文館

（後付の五）

☞ # 再版出來

- 十二版　落合直文・小中村義象君著　**紅葉の錦**　全壹冊洋裝　正價金拾八錢　郵稅金四錢
- 八版　福羽逸人君著　**果樹栽培全書**　洋裝一、二出來　卷之一冊錢郵稅六錢　卷之二廿五錢郵稅六錢
- 三版　文學士久保天隨君釋述　**四書新釋大學**　全壹冊和裝　正價金拾五錢　郵稅金四錢
- 三版　坪谷善四郎君著　**演說討論軌範**　全壹冊洋裝　正價金三十五錢　郵稅金八錢
- 九版　福羽美靜先生述　**人事百話**　全壹冊洋裝　正價金二十錢　郵稅金四錢
- 十版　河村墨稼先生著　**十體千字文**　全壹冊洋裝　正價金二十錢　郵稅金四錢
- 九版　故中江兆民先生著　**一年有半**　全壹冊洋裝　正價金三拾五錢　郵稅金八錢
- 再版　博文館編輯局編　**文藝俱樂部**　第八卷第一號　正價金二十五錢　郵稅金二錢五厘
- 再版　博文館編輯局編　**少年世界**　第八卷第一號　正價金拾錢　郵稅金一錢五厘
- 再版　博文館編輯局編　**中學世界**　第五卷第一號　正價金二十錢　郵稅金二錢
- 十五版　故中江兆民先生著　**續一年有半**　全壹冊洋裝　正價金三十八錢　郵稅金八錢

發兌元　東京日本橋

(後付の六)

（後付の七）

（後付の八）

女學世界
毎月一回五日發行
第貳卷第參號
(明治三十五年三月五日發行)
(明治三十三年二月廿五日第三種郵便物認可)

(定價金貳拾錢)

東京秀英舍印刷